（財）八尾市文化財調査研究会報告 4

木の本遺跡

—八尾空港整備事業に伴う発掘調査—

1984年

（財）八尾市文化財調査研究会

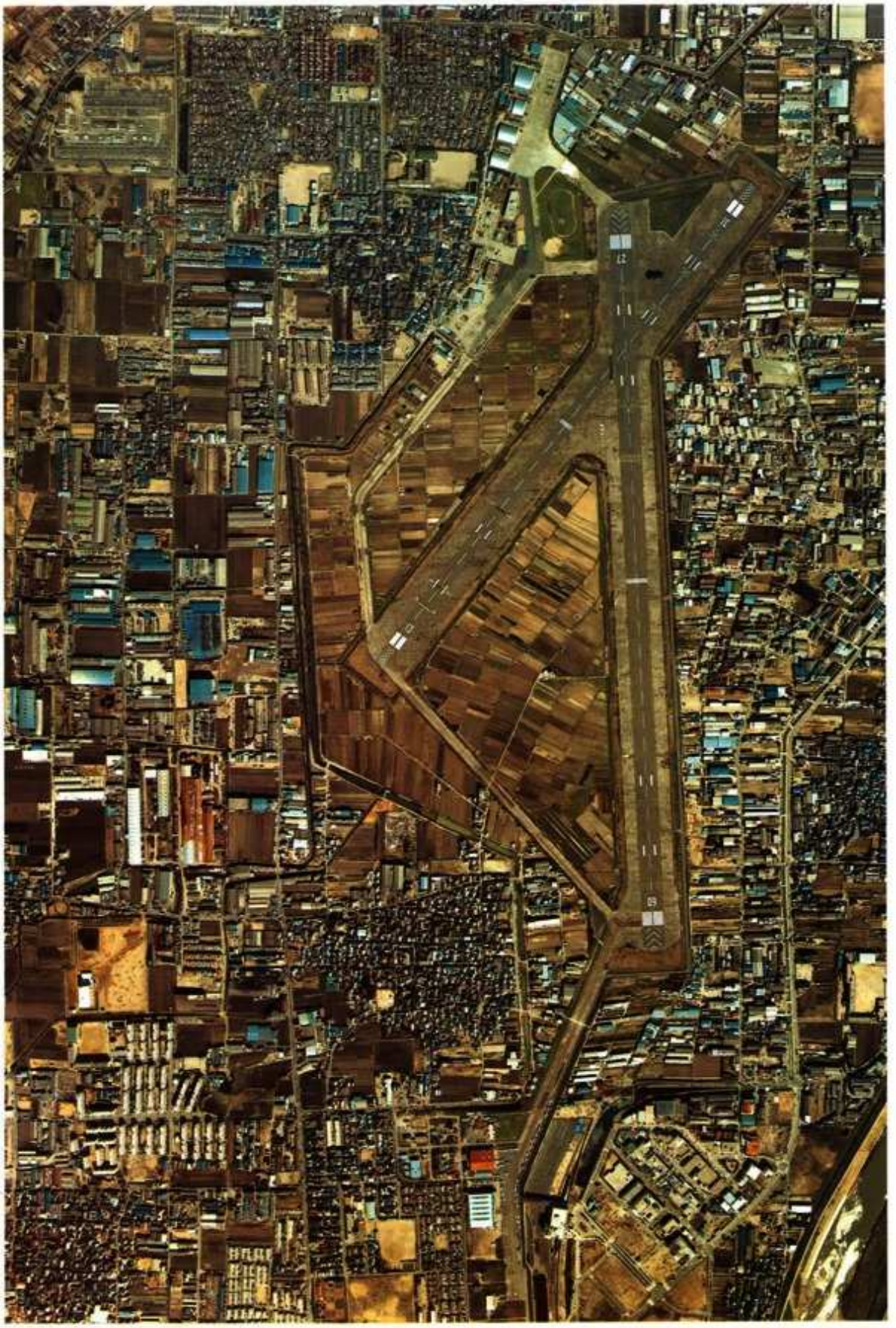
（財）八尾市文化財調査研究会報告 4

木の本遺跡

—八尾空港整備事業に伴う発掘調査—

1984年

（財）八尾市文化財調査研究会



調査地周辺航空写真

150

1389

墨書土器

序　　文

八尾市は古来より多くの人々が生活をして来た地域で、先人の残した生活の跡を偲ぶことの出来る遺構遺物は何事にもかえ難い遺産であり、後世に伝えるべき国民共有の貴重な財産であります。

今回、報告の運びとなりました木の本遺跡は本市南端に位置し、大和川に近接する八尾空港内敷地であります。八尾空港は昭和９年に阪神飛行学校として発足して以来、戦時中は軍事用飛行場として、戦後は米軍の接収、返還等々幾多の変遷を経て、今日に至ったのであります。

昭和56年５月八尾空港ターミナル地域整備計画が決定され、この事業の実施に当って八尾市教育委員会が同年10月より試掘調査を実施、引続いて財団法人八尾市文化財調査研究会に於て埋蔵文化財の分布状況を把握する目的で分布調査を実施したのであります。その結果、同年12月より本格的な発掘調査を実施、昭年59年３月経ての整備工事と共に調査も完了し、同空港西側にあった民間航空機等の事務所、格納庫等も整備区域内（通称三角地）に移転し、名実共に関西唯一の小型航空機の空港として装いも新たにしたのであります。

なお、この調査では、平安時代における数多くの遺構・遺物が検出されました。中でも注目すべきな志紀郡の条里に関する遺構を検出したことであります。このことは考古学を研究する上から大きな成果であったと思います。

何分にも今回の調査は、当調査研究会が発足して間もないこと、又調査期間が１年有半に及んだこと等で、関係機関との連絡調整等種々難問がありましたが、あくまで文化財保護という立場に立脚してその一つ一つが無事解決出来得ましたことは喜びに堪えません。

この間、運輸省第三港湾建設局、大阪航空局の各位をはじめ、大阪府ならびに八尾市教育委員会、更にはこの調査に関与下さいました関係各位に深甚なる感謝を申上げます。

この書が広く文化財保護にご活用いただければこの上もない幸せに存じます。今後共当調査研究会に対しまして尚一層のご指導とご協力をお願い申上げます。

昭和59年３月

財団法人　八尾市文化財調査研究会
理事長　山　脇　悦　司

例　　言

1．本書は、八尾市南木の本無番地に所在する八尾空港内において実施した八尾空港内整備事業に伴う木の本遺跡の分布調査及び昭和57年度発掘調査（以下発掘調査Ⅰと付称する）・昭和58年度発掘調査（以下発掘調査Ⅱと付称する）の概要報告である。

1．本書で報告する木の本遺跡の分布調査及び発掘調査Ⅰ・発掘調査Ⅱは、財団法人八尾市文化財調査研究会が運輸省第三港湾建設局の委託を受けて実施したものである。

1．本調査に要した費用75,162,436円は全て運輸省第三港湾建設局が負担した。

1．本調査の期間は、分布調査―昭和57年7月7日から昭和57年12月10日まで、発掘調査Ⅰ―昭和57年12月11日から昭和58年3月25日まで、発掘調査Ⅱ―昭和58年4月1日から昭和59年3月25日までである。なお、出土遺物の整理作業及び報文作成業務は、発掘調査Ⅱに併行して実施した。

1．本調査並びに本報告書に関係した者は下記のとおりである。

理事長	山脇悦司
事務局長	岡田繁春（昭和57年7月1日～同年8月31日）
	松井一雄（昭和57年9月1日～昭和58年6月30日）
	児玉生一（昭和58年7月1日以降）
事務員	森本よしの
	中谷暁子
調査員	原田昌則
	成海佳子
	西村公助
	米田敏幸　第7調査区担当

1．第10章花粉分析については、広島大学総合科学部　安田喜憲氏に依頼した。

1．本調査の参加諸氏は、穐山譲二・中尾裕・津田孝二・江崎正浩・菊田成・上村義浩・森山憲一・太田修司・前田芳嗣・石川雅朗・松野浩之・相松隆・田川一光・麻田優・萩原剛良・高山和浩・川崎常和・富田芳久（以上近畿大学考古学研究会）・笹井伸彦・橋本郁也・香林浩道・松永浩司・増井保彦・豆成哲一・西森忠幸・中川暁・松村一・南伸俊幸・松岡利行・山西嘉彦・岡順二・大地慶子・鳴村友子・大谷泉・村口美穂・木曽直美・横山妙子・川崎通子・難波和子・山口美津子で、他に八尾空港事務所の協力を得た。

1．本調査に関わる土木工事は、分布調査―㈱浅沼組、発掘調査Ⅰ―㈱鴻池組、発掘調査

Ⅱ－㈱鴻池組・前田建設工業㈱・日本国土開発㈱が請負った。

1．本書の執筆は主に原田が担当したが、第２章地理・歴史的環境は駒沢敦、第７章第２節１－２）から３第５調査区までは西村公助が分担し、原田・成海が補筆した。第８章出土遺物観察表は成海・大地、第９章まとめは原田・成海が共同で行った。

1．本書作成に関わる業務は、図面レイアウト－原田・成海、トレース－成海・大地、遺物写真撮影－原田が担当した。

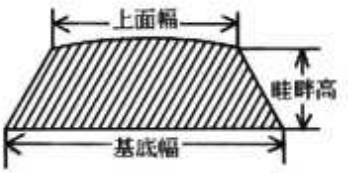
1．全体の編集構成は、原田・成海が共同で行った。

凡　　例

1．実測図の縮尺率は、遺構は１／80・１／100を基調とし、遺物は土器・瓦等は¼、その他の小さいものは½に統一した。

1．遺構実測図の方位は全て真北を示している。

1．条里遺構溝の断面図は、次のように区別した。近世条里遺構溝－▒　古代条里遺構溝－▒



1．水田畦畔の計測については右図を参考にされたい。

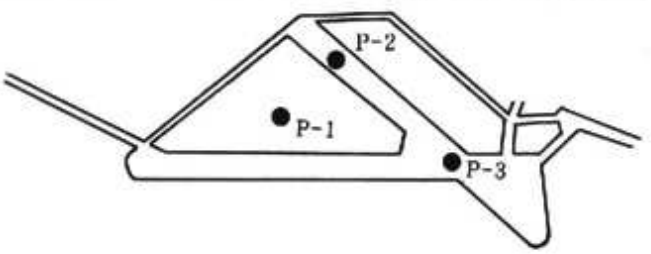
1．遺物番号は、分布調査・発掘調査Ⅰは１～227、発掘調査Ⅱは1001～1615で表わした。

1．遺物実測図は、断面の表示によって次のように分類した。弥生式土器・土師器・黒色土器・瓦器－白、須恵器・陶磁器－黒、瓦・土製品・木製品－斜線。なお、黒色土器については、炭素吸着部分を▒で表わした。

1．本書掲載の地図は、国土地理院発行の１／25000・八尾市発行の１／2500を使用した。

1．本書で用いた高さの基準は東京湾の平均海面で、ＴＰと略して記載した。

1．ボーリングデータは、三井共同建設コンサルタント㈱作成の八尾空港排水基本計画調査資料を使用した。なお、Ｐ１～Ｐ３と明示した地点は、下図を参考にされたい。



1．本調査に際しては、写真・実測図の他にカラースライドも多数作成している。市民の方々が、広く利用されることを希望する。

本 文 目 次

巻頭図版一　調査地周辺航空写真

巻頭図版二　墨書土器

序　文

例　言

凡　例

第1章　調査に至る経過…… 1

第2章　地理・歴史的環境…… 3

第3章　調査の目的…… 6

第4章　調査の概要…… 7

　第1節　調査方法…… 7

　第2節　地区割…… 8

　第3節　条里区画の復元…… 8

　第4節　条里遺構溝の記載方法…… 9

第5章　分布調査…… 10

　第1節　調査概要…… 10

　第2節　基本層序…… 11

　第3節　調査結果…… 13

　　1　第1トレンチ…… 13

　　2　第2トレンチ…… 19

　　3　第3トレンチ…… 20

4　第4トレンチ…… 23
5　第5トレンチ…… 25
6　第6トレンチ…… 29
7　第7トレンチ…… 29
第4節　条里遺構溝について…… 30
1　近世条里遺構溝…… 30
2　古代条里遺構溝…… 32

第6章　発掘調査Ⅰ（昭和57年度調査）…… 33
第1節　調査概要…… 33
第2節　全面発掘調査…… 35
1　第1調査区…… 35
2　第2調査区…… 35
第3節　部分発掘調査…… 39

第7章　発掘調査Ⅱ（昭和58年度調査）…… 42
第1節　調査概要…… 42
第2節　全面発掘調査…… 44
1　第3調査区…… 44
1）基本層序…… 44
2）検出遺構…… 45
2　第4調査区…… 49
1）検出遺構…… 49
3　第5調査区…… 49
1）検出遺構…… 51
4　第6調査区…… 51
1）基本層序…… 52
2）検出遺構…… 52
3）出土遺物…… 72
5　第7調査区…… 81
1）立会発掘調査…… 81
2）全面発掘調査…… 81

第3節　部分発掘調査…… 82

第8章　出土遺物観察表…… 85

第9章　まとめ…… 129

第1節　志紀郡の条里遺制について…… 129

1　志紀郡条里…… 129

2　近世条里遺構溝…… 131

3　河内平野特に志紀郡における条里制研究史…… 133

4　条里制下の水田遺構と埋没時期…… 135

第2節　水田遺構について…… 136

第3節　出土遺物について…… 137

1　ＳＥ　3出土の瓦器椀…… 138

2　和泉型瓦器椀（出現期）の製作技法…… 139

3　和泉型瓦器椀出現期における土器の器種構成…… 140

4　和泉型瓦器椀出現期における土器の様相変化…… 144

第10章　花粉分析…… 149

挿 図 目 次

第 1 図　調査地全景（西から）…… 2
第 2 図　遺跡分布図…… 5
第 3 図　調査風景…… 6
第 4 図　地区割模式図…… 8
第 5 図　地区割及び調査区設定図……（折込）8－9
第 6 図　条里区画復元模式図…… 9
第 7 図　基本層序模式図…… 11
第 8 図　ボーリングデータ…… 12
第 9 図　第1トレンチ条里遺構溝断面図…… 14
第 10 図　1T－2a・3a出土遺物実測図…… 15
第 11 図　1T－2b出土遺物実測図…… 16
第 12 図　暗渠状遺構…… 17
第 13 図　第1トレンチ包含層出土遺物実測図－1…… 17
第 14 図　第1トレンチ包含層出土遺物実測図－2…… 18
第 15 図　2T－2a出土遺物実測図…… 19
第 16 図　第2トレンチ条里遺構溝断面図…… 19
第 17 図　2T－1b出土遺物実測図…… 20
第 18 図　3T－1a出土遺物実測図…… 21
第 19 図　第3トレンチ包含層出土遺物実測図－1…… 21
第 20 図　第3トレンチ条里遺構溝断面図…… 21
第 21 図　第3トレンチ包含層出土遺物実測図－2…… 22
第 22 図　4T－2a出土遺物実測図…… 23
第 23 図　第4トレンチ条里遺構溝断面図…… 23
第 24 図　第4トレンチ包含層出土遺物実測図－1…… 24
第 25 図　第4トレンチ包含層出土遺物実測図－2…… 24
第 26 図　第5トレンチ条里遺構溝断面図…… 25
第 27 図　5T　1a杭列平断面図…… 26
第 28 図　5T－1a出土遺物実測図…… 26
第 29 図　第5トレンチ近世井戸平断面図…… 27

第 30 図　第5トレンチ包含層出土遺物実測図…… 28
第 31 図　第6トレンチ包含層出土遺物実測図…… 29
第 32 図　第7トレンチ条里遺構溝断面図…… 29
第 33 図　第7トレンチ包含層出土遺物実測図…… 30
第 34 図　第1調査区自然河道1平断面図…… 36
第 35 図　第2調査区自然河道2出土遺物実測図…… 37
第 36 図　第2調査区畦畔1平断面図…… 37
第 37 図　第2調査区自然河道2平断面図…… 38
第 38 図　第1調査区・第2調査区平面図……（折込）38　39
第 39 図　ポイント2古代条里遺構溝出土遺物実測図…… 39
第 40 図　部分発掘調査（ポイント1～5）条里遺構溝断面図……（折込）40—41
第 41 図　基本層序…… 44
第 42 図　第3調査区・第4調査区平面図……（折込）46—47
第 43 図　第3調査区自然河道3出土遺物実測図…… 47
第 44 図　第3調査区畦畔2～畦畔8断面図…… 48
第 45 図　第5調査区平断面図…… 50
第 46 図　第6調査区調査風景…… 52
第 47 図　第6調査区ＳＥ－1平断面図…… 52
第 48 図　第6調査区ＳＥ－2平断面図…… 53
第 49 図　第6調査区ＳＥ－1・ＳＥ－2出土遺物実測図…… 53
第 50 図　第6調査区ＳＥ－3出土遺物実測図－1…… 54
第 51 図　第6調査区ＳＥ－3・ＳＥ－4平断面図…… 54
第 52 図　第6調査区ＳＥ－3出土遺物実測図－2…… 55
第 53 図　第6調査区ＳＥ－3出土遺物実測図－3…… 56
第 54 図　第6調査区ＳＥ－4出土遺物実測図…… 57
第 55 図　第6調査区ＳＫ－1平断面図…… 58
第 56 図　第6調査区ＳＫ－1出土遺物実測図…… 58
第 57 図　第6調査区ＳＫ－2平断面図…… 58
第 58 図　第6調査区ＳＫ－5平断面図…… 59
第 59 図　第6調査区ＳＫ－5出土遺物実測図－1…… 60
第 60 図　第6調査区ＳＫ－5出土遺物実測図－2…… 61
第 61 図　第6調査区ＳＫ－5出土須恵器拓影…… 62

第 62 図　第6調査区ＳＫ－6・ＳＫ－7平断面図…… 63
第 63 図　第6調査区ＳＫ－6・ＳＫ－7出土遺物実測図…… 63
第 64 図　第6調査区ＳＤ－1・ＳＤ－3・ＳＤ　4出土遺物実測図…… 64
第 65 図　第6調査区ＳＤ－4平断面図…… 65
第 66 図　第6調査区ＳＤ　6平断面図…… 66
第 67 図　第6調査区ＳＤ－7平断面図…… 66
第 68 図　第6調査区ＳＤ　6出土遺物実測図…… 67
第 69 図　第6調査区ＳＤ－7出土遺物実測図…… 68
第 70 図　第6調査区ＳＤ－8平断面図…… 69
第 71 図　第6調査区ＳＤ－8出土遺物実測図…… 69
第 72 図　第6調査区ＳＤ－11平断面図…… 70
第 73 図　第6調査区ＳＤ　11出土遺物実測図－1…… 70
第 74 図　第6調査区ＳＤ－11出土遺物実測図－2…… 71
第 75 図　第6調査区ＳＰ　14・ＳＰ－7出土遺物実測図…… 72
第 76 図　第6調査区平面図……（折込）72—73
第 77 図　第6調査区包含層出土遺物実測図－1…… 73
第 78 図　第6調査区包含層出土遺物実測図－2…… 74
第 79 図　第6調査区包含層出土遺物実測図－3…… 75
第 80 図　第6調査区包含層出土遺物実測図－4…… 76
第 81 図　第6調査区包含層出土遺物実測図－5…… 77
第 82 図　第6調査区包含層出土遺物実測図－6…… 78
第 83 図　第6調査区包含層出土遺物実測図－7…… 79
第 84 図　第6調査区包含層出土遺物実測図－8…… 79
第 85 図　第6調査区包含層出土遺物実測図－9…… 80
第 86 図　第6調査区包含層出土遺物実測図－10…… 80
第 87 図　第6調査区包含層出土遺物実測図－11…… 81
第 88 図　第6調査区包含層出土遺物実測図－12…… 81
第 89 図　第7調査区平面図…… 83
第 90 図　部分発掘調査（ポイント6～11）条里遺構溝断面図……（折込）84—85
第 91 図　調査地周辺条里復元図……（折込）130—131
第 92 図　調査地周辺小字名復元図……（折込）132—133
第 93 図　ＳＥ－3出土瓦器椀口縁部形態別模式図…… 138

第 94 図　ＳＥ－３出土瓦器椀実測図…… 138
第 95 図　花粉分析試料採取地点・層序略図…… 149
第 96 図　グリーンランド北西部の氷床の酸素同位体比の分析結果（Lamb 1977）…… 150
第 97 図　中国と日本の歴史時代の気候変化（吉野1982）…… 151
第 98 図　木の本遺跡 point Ⅰの花粉ダイアグラム…… 152
第 99 図　木の本遺跡 point Ⅱの花粉ダイアグラム…… 153
第 100 図　木の本遺跡 point Ⅲの花粉ダイアグラム…… 154
第 101 図　西大井遺跡の花粉ダイアグラム（安田1982）…… 158
第 102 図　花粉顕微鏡写真 1…… 159
第 103 図　花粉顕微鏡写真 2…… 160
第 104 図　花粉顕微鏡写真 3…… 161
第 105 図　花粉顕微鏡写真 4…… 162
第 106 図　花粉顕微鏡写真 5…… 163
第 107 図　花粉・胞子・その他の遺体顕微鏡写真…… 164

表　目　次

第 1 表　分布調査トレンチの規模…… 10
第 2 表　条里遺構溝一覧表…… 31
第 3 表　発掘調査Ⅰ調査一覧表…… 34
第 4 表　発掘調査Ⅰ部分発掘調査条里遺構溝一覧表…… 40
第 5 表　発掘調査Ⅱ調査一覧表…… 42
第 6 表　第７調査区トレンチの規模…… 82
第 7 表　発掘調査Ⅱ部分発掘調査条里遺構溝一覧表…… 84
第 8 表　村高の推移…… 132
第 9 表　和泉型瓦器椀出現前後の器種構成一覧表…… 142
第 10 表　和泉型瓦器椀出現前後の器種構成…… 144
第 11 表　和泉型瓦器椀出現前後の器種推移概念表…… 146
第 12 表　木の本遺跡 point Ⅰの花粉・胞子出現率表…… 155
第 13 表　木の本遺跡 point Ⅱの花粉・胞子出現率表…… 156
第 14 表　木の本遺跡 point Ⅲの花粉・胞子出現率表…… 157

図 版 目 次

図版 一　調査地全景（西から）

同　上（東から）

図版 二　第1トレンチ　全景（東から）

同　上　近世条里遺構溝1T－3a（旧大乗川）断面

図版 三　第1トレンチ　近世条里遺構溝1T－1a（北から）

同　上　暗渠状遺構断面

図版 四　第2トレンチ　全景（東から）

図版 五　第3トレンチ　全景（西から）

図版 六　第4トレンチ　全景（西から）

図版 七　第5トレンチ　全景（南から）

図版 八　第5トレンチ　近世条里遺構溝5T－1a（東から）

同　上　近世条里遺構溝5T－1a杭列（西から）

図版 九　第5トレンチ　近世井戸遺構上面

同　上　近世井戸遺構完掘

図版一〇　第6トレンチ　全景（東から）

図版一一　第7トレンチ　全景（南から）

図版一二　第1調査区　全景（北から）

図版一三　第1調査区　自然河道1（東から）

同　上　自然河道1　断面

図版一四　第2調査区　全景（南から）

図版一五　第2調査区　自然河道2（南から）

同　上　自然河道2　断面

図版一六　第2調査区　畦畔1（東から）

同　上　畦畔1　断面

図版一七　第3調査区　畦畔2（南から）

同　上　畦畔2（東から）

図版一八　第3調査区　畦畔2　東断面

同　上　畦畔2　西断面

図版一九　第3調査区　水田（西から）

図版二〇　第３調査区　水田（東から）

図版二一　第３調査区　水田（西から）

同　上　畦畔３・畦畔４　断面

図版二二　第３調査区　水田Ｆ・水田Ｇ・畦畔７

図版二三　第３調査区　畦畔８（西から）

第４調査区　全景（西から）

図版二四　第２調査区　畦畔１　断面

第３調査区　畦畔２　断面

同　上　畦畔２　断面

図版二五　第３調査区　畦畔３　断面

同　上　畦畔３　断面

同　上　畦畔３　断面

図版二六　第３調査区　畦畔４　断面

同　上　畦畔４　断面

同　上　畦畔５　断面

図版二七　第３調査区　畦畔５　断面

同　上　畦畔６　断面

同　上　畦畔６　断面

図版二八　第３調査区　畦畔７　断面

同　上　畦畔８　断面

同　上　畦畔８　断面

図版二九　第５調査区　全景（東から）

同　上　全景（北から）

図版三〇　第５調査区　水田面足跡（北から）

図版三一　第６調査区　１区～４区全景（南から）

図版三二　第６調査区　５区～７区全景（北から）

図版三三　第６調査区　ＳＥ－１（東から）

同　上　ＳＥ－２（南から）

図版三四　第６調査区　ＳＥ　３（西から）

同　上　ＳＥ－３　断面

図版三五　第６調査区　ＳＥ　３・ＳＥ－４（西から）

同　上　ＳＥ－４　断面

図版三六　第６調査区　ＳＤ　６（西から）

同　　上　ＳＤ－６　断面

図版三七　第６調査区　ＳＤ－７（西から）

同　　上　ＳＤ－８（西から）

図版三八　第６調査区　ＳＫ－５（西から）

同　　上　ＳＫ－５　断面

図版三九　第６調査区　ＳＫ　６・ＳＫ　７（西から）

同　　上　ＳＰ－13・ＳＰ－14（西から）

図版四〇　第６調査区　ＳＥ－１・ＳＥ－２・ＳＥ　３出土遺物（土師器小皿・杯）

図版四一　第６調査区　ＳＥ　３出土遺物（椀、土師器中皿、瓦器椀）

図版四二　第６調査区　ＳＥ－３出土遺物（瓦器椀）

図版四三　第６調査区　ＳＥ　３出土遺物（瓦器椀）

図版四四　第６調査区　ＳＫ－５出土遺物（土師器小皿）

図版四五　第６調査区　ＳＫ－５出土遺物（土師器小皿・中皿・鍋、瓦器椀）

図版四六　第６調査区　ＳＫ－６・ＳＫ－７・ＳＤ－６出土遺物（土師器小皿・鍋、黒色土器椀、槌の子）

図版四七　第６調査区　ＳＤ－７・ＳＤ－11出土遺物（土師器小皿、須恵器甕、砥石）

図版四八　第６調査区包含層出土遺物（弥生時代～奈良時代の遺物、土師器鍋・羽釜）

図版四九　第６調査区包含層出土遺物（土師器小皿・中皿・台付皿）

図版五〇　第６調査区包含層出土遺物（瓦器椀、須恵器）

図版五一　第６調査区包含層出土遺物（緑釉陶器碗）

同上　裏面

図版五二　第６調査区包含層出土遺物（白磁碗）

同上　内面

図版五三　第６調査区包含層出土遺物（瓦、鈴）

第１章　調査に至る経過

八尾市南西部の木の本地区及び隣接する大阪市の長吉・長原地区一帯は、都市圏に近接する位置にありながら、主要交通幹線から隔たっているという社会的環境が起因してか、比較的開発の進展が緩慢な地域であった。しかし、昭和55年11月、大阪市高速電気軌道２号線（地下鉄谷町線）の延伸に伴って当地区南部に八尾南駅が開設され、この地域一帯が都市圏への交通網に組み入れられてからは、一躍注目される地域として社会的環境を急激に変えつつある。ただ、八尾南駅北側に関しては、八尾空港の誘導路を始めとする一連の施設が占地していることから、現状では駅利用者の要望に充分応え得る状況に至っていない。

このような現状を打開するため、運輸省・大阪市・八尾市の各関係機関では、一連の施設を八尾空港内の空地である八尾市南木の本無番地通称三角地（以下三角地と付称する）へ移転するとともに、跡地を整備して駅前としての機能の充実と他の公共施設を建設する旨の構想が立案され、昭和57年度以降の開発事業として計画された。

これらの計画に際して、事業主体者である運輸省第三港湾建設局から、空港関連施設の移転先である三角地の埋蔵文化財の有無に対する照会が、八尾市教育委員会文化財室へ寄せられた。当該地区は、昭和９年（1934）に阪神飛行学校が設立されて以来、大正飛行場・八尾飛行場・八尾空港と名称そのものの変革はあったものの、現在に至るまで終始飛行場という公共・軍事性の強い施設であったため、埋蔵文化財に対する認識もおのずと限定され、当文化財室では実態をつかむまでには至っていなかった。しかし、近年八尾空港の付近では、八尾南駅の建設に伴う発掘調査で縄文時代から鎌倉時代に至る遺構を検出したのを始めとして、南木の本・田井中・太田の各地区で実施され、それらの結果から三角地内にも何らかの埋蔵文化財が存在する可能性が想定された。このような経緯を踏まえたうえで、当文化財室では三角地内の試掘調査が必要であると判断し、事業者へその旨を通告した。

そこで、昭和56年10月15日に三角地内の６箇所に５×５ｍのグリッドを設定して試掘調査を実施した結果、表土下1.20～1.40ｍ付近で弥生時代から平安時代に比定される遺物を包含する灰色粗砂層の存在が確認された。この結果から当文化財室は、文化財保護法に基づいて文化庁へ木の本遺跡発見届を提出し、八尾空港一帯を周知の遺跡と認定した。ただ、八尾空港全域の面積は950,000㎡を測り、三角地内だけでも200,000㎡と広大であり、大概的な試掘調査の結果だけでは将来の開発行為に対処する資料としては乏しく、全域に対する埋蔵文化財の実態を正しく判断し、適切な行政処置を講ずることが危惧された。

これらの経過及び諸問題を踏まえ、大阪府教育委員会文化財保護課・八尾市教育委員会文化

財室・運輸省第三港湾建設局による三者協議が行われた。その結果、昭和57年度の事業として三角地全域の埋蔵文化財の分布状況を確認し、次期整備工事に対する基礎資料を作成する目的で、分布調査を実施することが三者の合意によって決定した。ただし、調査主体と成るべき八尾市教育委員会文化財室の体制が整わず、調査自体は昭和57年４月に発足の予定である財団法人八尾市文化財調査研究会に委託する予定であった。しかし、その後財団法人設立に関して事務的に停滞したことや、調査組織自体の諸問題も山積していたため、調査の開始は遷延を余儀なくされた。

その後、昭和57年７月１日付で財団法人八尾市文化財調査研究会が発足し、７月６日から分布調査を実施する運びとなった。なお、調査期間は昭和57年12月10日まで、調査面積は11,455㎡を測る。分布調査の結果、表土下1.20ｍ（ＴＰ＋9.1ｍ）付近で、古代条里遺構溝及びそれを被う粗砂層（遺物包含層）が全域に亘って遺存することが判明した。

このような経緯を踏まえて以後の工事掘削に際しては、表土下1.20m に達する工事区は全面発掘調査または部分発掘調査、表土下1.20ｍ以内の工事区に関しては立会調査を実施し、埋蔵文化財の記録保存に務めた。以後、発掘調査Ⅰ（昭和57年12月11日～昭和58年３月25日）、発掘調査Ⅱ（昭和58年４月１日～昭和59年３月25日）を実施し、分布調査を含めた全ての内業整理は昭和58年度事業として契約し、現場作業と併行して実施した。なお、分布調査・発掘調査Ⅰ・発掘調査Ⅱの各調査結果の詳細は、調査別に記載している。

第１図　調査地全景（西から）

第２章　地理・歴史的環境

八尾市は大阪府東部に位置し、東は生駒山地の山稜線で奈良県生駒郡平群町・三郷町と境し、西は大阪市平野区、南は柏原市・藤井寺市・松原市、北は東大阪市と隣接している。この地域は、構造盆地の大阪平野及び大阪湾の中でも東を生駒山地、西を上町台地、南を羽曳野丘陵、北を淀川によって画される沖積低地で、河内低平地、または狭義の河内平野（以下の河内平野は狭義を示す）と呼ばれている。この平野の地理的形成は、海水面の昇降による浸食作用と、旧大和川と淀川による堆積作用の相互作用による。以上の地理的形成過程の内、海水昇降に注目すれば、おおよそ7000年前～6000年前の縄文時代の海進期は、東は生駒山麓、南は八尾付近、北は高槻付近まで海水が入り込み、上町台地西縁や千里丘陵南西縁は海蝕崖が形成され、大阪市の松屋町筋付近には砂浜ができ、その北方の天満付近は砂洲が発達した。その後、3000年前～2000年前の縄文時代晩期から弥生時代中期には海水面も低下して、平野北部は干潟化し、さらに2000年前～1600年前の弥生時代後期から古墳時代前期には河内湖が存在した。一方平野南部は旧大和川の氾濫原となり、沖積作用が繰返され、自然堤防・後背湿地が形成されていった。

木の本遺跡が所在する八尾市南木の本付近は、河内平野南部旧大和川の後背湿地と南から伸びる羽曳野丘陵の縁辺部の接点に位置し、北側には旧大和川の流路である長瀬川・平野川、南側には南東から北西方向の流路を持つ大乗川（大正川）が流れていた。言うまでもないが、当遺跡はこれら河川の影響が多大であり、遺跡立地を考えるうえで河川の流路やその影響が大きな比重を持つことは、当遺跡だけに限ったことではなく、河内平野の中では特に重要な鍵になると思われる。当遺跡周辺では、宝永元年（1704）の大和川付替えが注目できる。現在見られる河内平野の地理的形態は大和川付替え以降のもので、当遺跡の景観に限っても付替え前と後で様相が異なっているようである。

河内平野が旧大和川の氾濫原であった時期は、この地域の歴史の大半を占める。当遺跡を始めとする河内平野の旧大和川水系に立地する多くの遺跡は、旧大和川が運んだ多量の土砂の下に埋没しているが、最近の発掘調査の結果、これらの遺跡は氾濫のたびに生活面を移動させながら脈々と営まれてきたことが明らかになってきた。

当遺跡周辺では、東方に弓削遺跡、北方に植松南遺跡[註1]・太子堂遺跡[註2]・跡部遺跡があり、旧大和川の主流である長瀬川の自然堤防上や、後背湿地に立地している。北西に位置する亀井遺跡[註3]は、東除川・平野川の２つの旧河道の河道変遷によって形成された微高地（自然堤防）上に立地し、弥生時代を中心として現代に至るまで居住空間として営まれてきた集落址である。また、南東には船橋遺跡があり、古市古墳群がある。西方に所在する長原遺跡[註4]・八尾南遺跡[註5]では旧石器時

代からの遺物が出土し、各層毎に遺構が検出されている。

一方、当調査区に隣接する遺跡には、東方に田井中遺跡、南方に太田遺跡があり、当遺跡の範囲内では、南木の本４丁目・木の本１丁目で検出された集落址が挙げられる。[註6] ここでは、弥生時代中期の土坑をはじめ、古墳時代中期の掘立柱建物や井戸、平安時代の土器集積が検出されている。

以上のように、この地域は古代より開けた地域で、遺跡の数も多く、その歴史は旧大和川との戦いの歴史といっても過言ではないだろう。しかし、大和川付替えは、河内平野の人々にとって大洪水の脅威という面からは、一応終止符を打つ結果となった。その反面、水量低下は人々の生活に少なからず障害をもたらし、新たに旧大和川跡に灌漑用水を通す井路川を生み出す結果となり、この川筋を利用する舟運が細々と続けられた。このように、大和川の変遷は単に地理的形成を押し進めたにとどまらず、古代から現代に至るまで人々の生活環境を左右し、絶えず影響し続けてきた。その後近年に至るまで、大都市近郊にもかかわらず開発の波は緩慢であったが、中央環状線・外環状線道路の開通や、地下鉄谷町線の伸延によって、当遺跡周辺も開発の波にのみこまれようとしている。旧大和川の氾濫原であった頃はおろか、近年までの田園風景も姿を消そうとしている。

註１　（財）八尾市文化財調査研究会　「八尾市埋蔵文化財発掘調査概要1980・1981年度Ⅰ」『（財）八尾市文化財調査研究会報告２』　1983

註２　1983年度に（財）八尾市文化財調査研究会が調査を実施し、現在整理中

註３　（財）大阪文化財センター　『亀井遺跡』－寝屋川南部流域下水道事業長吉ポンプ場築造工事関連埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－　1982

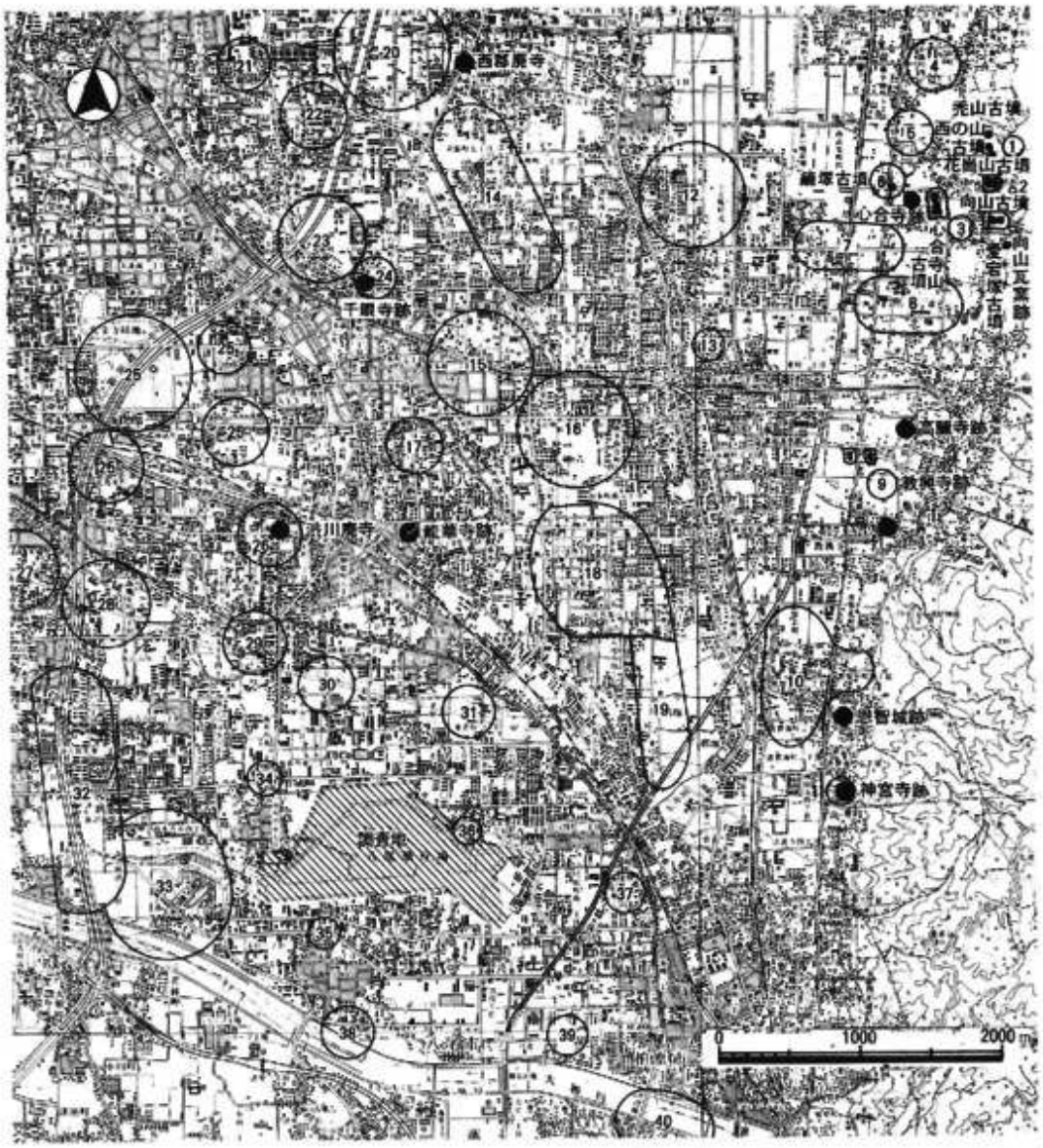
註４　a　（財）大阪文化財センター　『長原』－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴なう埋蔵文化財発掘調査概要報告書－　1978

b　長原遺跡調査会　『長原遺跡発掘調査報告』－大阪市交通局地下鉄谷町線延長工事、第31・32Ⅰ区の発掘調査－　1978　同改訂版（財）大阪市文化財協会　1982

c　（財）大阪市文化財協会　『長原遺跡発掘調査報告Ⅱ』－大阪市高速電気軌道第２号線延長工事に伴なう発掘調査報告書　1982

註５　八尾南遺跡調査会　『八尾南遺跡』－大阪市高速電気軌道第２号線建設に伴なう発掘調査報告書－　1981

註６　（財）八尾市文化財調査研究会　『昭和57年度における埋蔵文化財発掘調査』－その成果と概要－　1983



1 大光寺山遺跡	11 神宮寺遺跡	21 小若江遺跡	31 老原遺跡
2 花崗山遺跡	12 上之島福万寺遺跡	22 友井東遺跡	32 長原遺跡
3 大竹遺跡	13 万願寺遺跡	23 佐堂遺跡	33 八尾南遺跡
4 馬場川遺跡	14 萱振遺跡	24 宮町遺跡	34 木の本遺跡
5 えびじ遺跡	15 東郷遺跡	25 久宝寺遺跡	35 太田遺跡
6 大竹西遺跡	16 小阪合遺跡	26 跡部遺跡	36 田井中遺跡
7 太田川遺跡	17 成法寺遺跡	27 竹渕遺跡	37 弓削遺跡
8 水越遺跡	18 中田遺跡	28 亀井遺跡	38 大正橋遺跡
9 郡川遺跡	19 東弓削遺跡	29 太子堂遺跡	39 川北遺跡
10 恩智遺跡	20 山賀遺跡	30 植松南遺跡	40 船橋遺跡

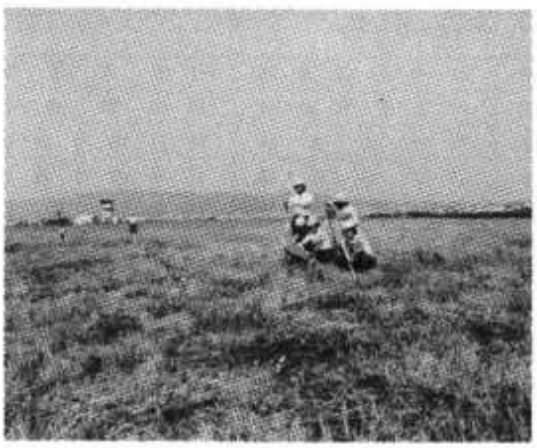
第2図　遺跡分布図

第3章　調査の目的

当調査地の位置する河内平野南西部一帯は、近年増加する発掘調査から看取されるように、河内平野の中にあっては、旧石器時代から自然環境に左右されながらも各時期に即した種々の遺跡が連綿と営まれ、人々が一早く活動し始めた地域である。当調査地の近隣に限っても、同遺跡内の南木の本4丁目（弥生時代中期～古墳時代中期末）・木の本1丁目（平安時代中期）において集落跡が検出され、西隣には八尾南遺跡（旧石器時代～鎌倉時代）、北東側には田井中遺跡（弥生時代前期～鎌倉時代）が位置している。

このうち八尾南遺跡は、旧石器時代から鎌倉時代に至る複合遺跡であるが、主要な遺構としては弥生時代末期から古墳時代後期に至る集落跡が挙げられる。特に古墳時代前期から中期にかけては、掘立柱建物群を中核として周囲に水田や墳墓を配する等、その規模・内容とともに今日では標式遺跡として位置付けられている。一方、田井中遺跡・南木の本4丁目では、八尾南遺跡で欠如している弥生時代中期に属する遺構・遺物を検出しており、当調査地周辺の集落の推移を知る上で注目される。更に、木の本1丁目の調査地では平安時代中期から後期にかけての集落遺構から多量の土器が検出される等、当調査地周辺には旧石器時代から鎌倉時代に至るまで、絶えることなく集落が営まれてきたことが傍証された。以上の様に、近年の発掘調査によって八尾空港周辺を取りまく遺跡の存在が、徐々に認識されるようになってきた。

今回の調査は、このような情勢下に実施されたもので、単に950,000㎡に及ぶ八尾空港内の調査のみにとどまらず、八尾市南西部全域の埋蔵文化財の分布状況を把握する上でも、重大な意義を内包しているものといえよう。そこで分布調査では、以下の3点に注意を払い、調査を実施した。



第3図　調査風景

1．調査地一帯の埋蔵文化財の有無及びその分布状況について

2．各時期における遺跡の立地条件と旧地形の関係について

3　近接する遺跡間との有機的な関係について

分布調査では、これらの条件を満たすため、最小限でしかも調査地全域の埋蔵文化財を把握し得るようなトレンチ設定に務めた。

第4章　調査の概要

第1節　調査方法

木の本遺跡の発掘調査は、運輸省第三港湾建設局から依頼を受けたもので、大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・運輸省第三港湾建設局の三者によって契約を締結し、分布調査・発掘調査Ⅰ・発掘調査Ⅱおよび内業整理は、財団法人八尾市文化財調査研究会が担当した。ただし、調査に関する土木工事等は、全て土木施工業者に請け負わせた。

分布調査：八尾市教育委員会文化財室が事前に実施した試掘調査の結果、表土下1.40m（TP+8.90m）以下は遺構検出の可能性が比較的希薄であると判断されたことから、この深度までが調査該当範囲であると明示されていた。以上から、調査方法としては、通常のオープンカット工法を使用した。ただ、試掘調査の際に多量の湧水が認められたため、壁面の保全等を考慮し、慎重に掘削を実施した。土層観察用の畦は、三角地内を南北に走る既設の暗渠及び工程を考え合わせて、50～60m間隔で適宜に設定した。掘削方法は、表土から第Ⅱ層までは機械掘削を行い、以下は土層葉理に従って人力掘削を実施し、試掘調査で中世の遺物が若干出土した第Ⅳ層に関連する遺構の有無の確認に務めた。第Ⅳ層での遺構確認の終了後、以下第Ⅶ層までについても機械掘削と人力掘削を実施し、遺構・遺物の実態把握を推進した。

発掘調査：分布調査の結果に基づいて実施したもので、発掘調査Ⅰ・発掘調査Ⅱに区別される。分布調査では掘削深度が実施計画書において限定されていたため、古代条里遺構施行面を平面的に捉えられなかったという不備もあり、完璧な調査であったとは言い難い。契約上の誤判の責を彼に帰す気持は微塵もないが、分布調査において困却したことは言うまでもない。このような経緯を自らも率直に反省するとともに、発掘調査Ⅰ・Ⅱでは、古代条里遺構溝及び条里施行面の状況把握を主たる調査目的とした。そこで、全ての当該工事区の掘削深度を検討し、全面発掘調査区・部分発掘調査区・立会発掘調査区に分類した。全面発掘調査区は分布調査と同様、上面から土層葉理順に調査を実施する方法をとったが、部分発掘調査区・立会発掘調査区に関しては、工事掘削時に断面観察を実施し、記録保存のための資料を作成することを目的とした。

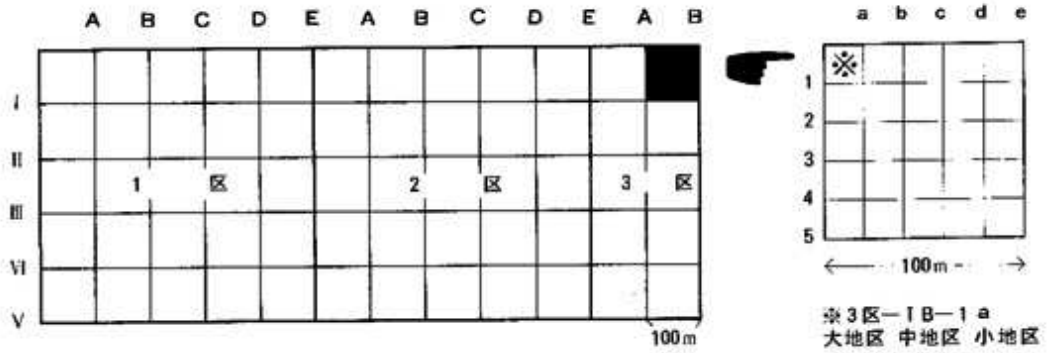
内業整理：各調査の期間内に遺物洗浄・ネーミング・復元等の作業を随時実施した。また、遺物実測の他、本書作成に関係する一連の作業は、昭和58年度事業の一環として、現地調査と併行して行った。

なお、以上の調査とは別に古環境を復元する目的で、花粉分析を安田喜憲氏（広島大学総合科学部助手）に依頼し、その結果を第9章に掲載した。

第2節　地区割

調査区の設定に当っては、八尾市教育委員会と運輸省第三港湾建設局の両者間で、分布調査以前に大概的なものが想定されていた。しかし、調査対象面積が200,000㎡と広大で、しかも遺構の検出状況如何では調査区の拡張も充分に予想されることから、厳密な地区割を行うことが必要となった。そのため通常実施されている公共測量図に従う方法を試みたが、地図上で確定した調査基準点を調査地区に設置するには、水準点の所在が不明瞭なため、正確な基準点の設置が憂慮された。以上から、遺憾ながら一般工事用図面の主軸であるA滑走路の中央線を東西の基準線とし、調査地全域の地区割を設定せざるを得なかった。

地区割に当っては、三角地ほぼ中央の管制塔北側に位置する建物西壁の延長線を南北線として、東・西に500×500ｍの大地区を設定し、西側を1区・東側を2区と付称した。なお、調査途中に第6調査区を設定したため、東側へ200ｍ分を追加して3区を設定した。この大地区を100ｍ毎に東西線（北からⅠ～Ⅴ）・南北線（西からA～E）で区画し、中地区を設定した。中地区は、各地区の南側を区画する東西線・東側を区画する南北線のライン名を用い、ⅠA・ⅡB……と付称した。更にこの中地区を20ｍ毎に東西線(北から1～5)・南北線（西からａ～ｅ）で区画し、小区画を設定した。小地区も中地区同様、1ａ・2ｂ……と付称した。地区の表示には大地区名ー中地区名　小地区名を併せ、第4図のように3区－ⅠB1ａと表わした。

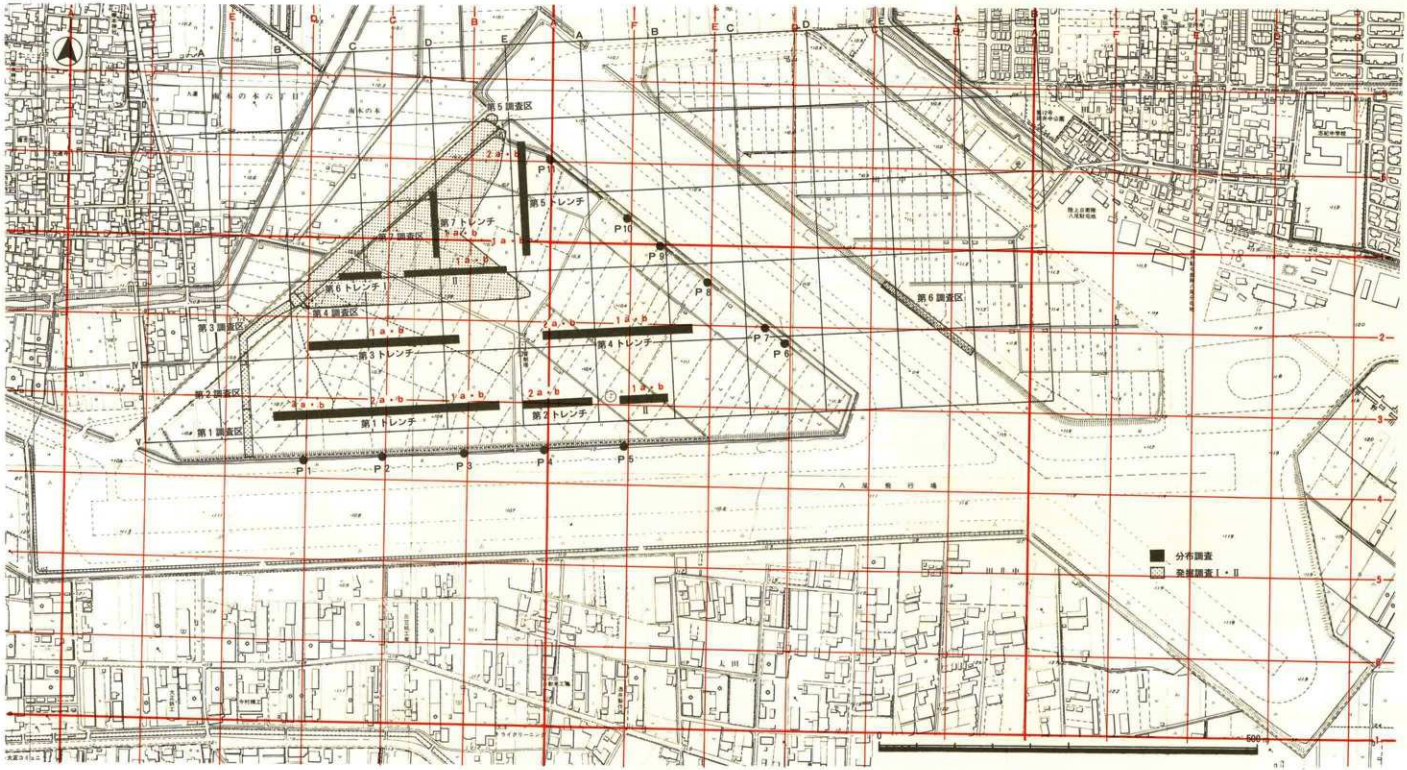


第4図　地区割模式図

第3節　条里区画の復元

八尾空港は昭和9年(1934)に阪神飛行学校が開設されて以来、数々の変遷をとげて現在に至っているため、現状では旧条里区画を知ることは困難である。しかし、この地域一帯も飛行場建設以前は全域が水田を中心とする耕作地で、条里区画（中区画）に規制された一町四方の土地区画の痕跡が良好に遺存していたことが、坪単位に小字名を付称していることからも窺える。

そこで、条里区画の復元設定に当っては、八尾市発行の2500分の1の地図を使用し、八尾空



第5図　地区割及び調査区設定図

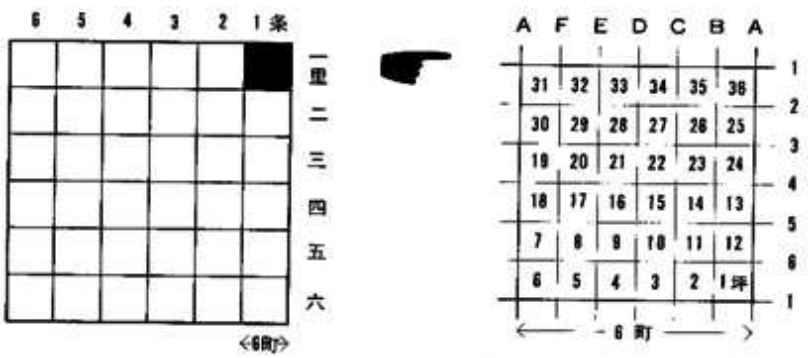
港周辺で比較的良好な形で遺存する阡陌線を摘出して、大概の基準とした。南北方向の基準は当調査地南方の太田地区の願立寺東側道路と北方の老原９丁目と南木の本１丁目を東西に区割する道路を結ぶ線上、東西方向は田井中３丁目と４丁目を区割する道路を基準線として捉えた。一方、条里区画（中区割）の一町単位に関しては、60歩（約108ｍ）を基準として線引きを実施した。ただ、部分的に遺存区画とそぐわない地点に関しては、整合する地点間の平均値で是正しているために多少のばらつきが認められ、目安の域を越えない。

第４節　条里遺構溝の記載方法

第１章の調査に至る経過で既述した様に、分布調査では古代・近世の二時期に亘る志紀郡条里の区画である溝遺構の存在を確認した。ここでは、これまでに復元されてきた志紀郡条里の推定ラインと、調査で検出した坪界溝とを対比させることで、両者間の関係を明確にしたい。なお、以下の記述に際しては調査範囲内の各条里ラインの所在を明らかにするため、六町四方を一区画とする一里内（大区画）を東西方向では東から西へＡ～Ｆ、南北方向では南から北へ１～６と付称した。すなわちこの付称方法では、南北ではＡライン、東西では１ラインがその一里内の起点と終点を共通するもので、同時に里界を示す符号とも一致する。

古代条里を踏襲した近世の溝遺構については適否にやや疑問を残すが、本書ではこの溝遺構に限って、便宜上『近世条里遺構溝』と付称した。なお、分布調査で検出した二時期の条里遺構溝は混乱を避けるため、調査トレンチ名とポイント名（第１～第４トレンチ・第６トレンチは東から西へ付称、第５・第７トレンチは南から北へ向かって付称）および近代・古代の区別には、前者をａ、後者をｂと付称した。

また、本文では六町四方の大区画（里）と一町四方の中区画（坪）を条里区画の範疇で捉え、中区画（坪）中の小区画（一筆耕地）は条里地割として両者を区別している。



第６図　条里区割復元模式図

第5章　分布調査

第1節　調査概要

分布調査の目的は前章でも一部触れた様に、950,000㎡に及ぶ八尾空港内の埋蔵文化財の分布状況や、遺跡の性格・規模等を把握し、次期工事に際して文化財保護法上の適切な処置を講じるための基礎資料を作成することである。

上記の目的に従って、三角地内に、当初第1トレンチ～第5トレンチを設定して調査を実施した。但し、空港内の増水時の水量を緩和する目的で、調整池を開削する旨の計画が調査中に具体化したため、第2トレンチの調査面積を半分に減じ、新たに第6トレンチ・第7トレンチを設定した。なお、調査期間は昭和57年7月7日～昭和57年12月10日、調査総面積は11,455㎡を測る。

八尾市教育委員会による試掘調査の結果では、表土下0.60m付近の灰褐色砂質土には中世の遺物が若干含まれ、表土下1.20～1.40m付近の灰色粗砂には弥生時代～平安時代の土器の細片を含むことが判明している。ここでは、この2層を調査対象面として捉えた。しかし、上層の灰褐色砂質土層は試掘結果と同様、遺物が若干出土するものの、平面的な広がりを持つものではなく、生活面としとは認定し難いものであった。なお、下層の灰色粗砂は全トレンチで共通した検出状況を示し、調査地全域で普遍的に広がることを確認した。

一方、調査と平行して付近一帯に遺存している水田・阡陌線を基準とし、条里区画の復元作業を行った結果、当調査トレンチ内にも該当する箇所が見い出された（第5図参照）。この箇所では表土付近（TP＋9.70～10.40m）から切り込む溝遺構と、表土下1.40m（TP＋8.80m）付近に広がる灰色粘土を切り込む溝遺構が重複する形で検出され、調査地全域に古代条里及びそれを踏襲する近世の坪界の区割溝が存在することを確認した。これによってTP＋9.00m付近で確認した灰色粗砂の広がりは、古代条里区割の坪界溝に関連する土層であると判断した。

ただ、表土下1.45mまでが調査範囲と限定されていたため、古代条里遺構溝の構築面である灰色粘土を平面的に捉えることはできなかったが、土層観察からこの層が古代条里施行時の水田面と推定することができる。

第1表　分布調査トレンチの規模

トレンチ名	設定方向	規模(m)	面積(㎡)
1	東西	10×300	3,000
2	東西	10×150	1,500
3	東西	10×200	2,000
4	東西	10×200	2,000
5	南北	10×150	1,500
6－1	東西	5×56	280
6－2	東西	5×135	675
7	南北	5×100	500
		総面積	11,455

第2節　基本層序

当調査地は、旧大和川の支流の一つである旧平野川の流域を東西方向に横断するもので、調査においてもこれらの事実を裏付けるように、沖積地に特有な層相を示す堆積が認められた。ここでは、発掘調査及び一部深掘りで得た結果から、各地点で普遍的に存在した土層を10層摘出して基本層序とした。なお、調査対象外の深層については、近接する遺跡間との立地条件の相異や、古環境を地質学の立場から比較する資料とするために、本調査地のボーリングデータを一部を掲載した（第8図）。以下、各層を概説する。

第Ⅰ層：表土。層厚10～25cm。飛行場建設時の整地等で撹乱を受けた土層で、旧耕土はほとんど存在しない。ただ、第5トレンチにおいては、旧耕土の上面が盛土によって整地されており、耕作に関連する小溝が認められた。地表面の標高はＴＰ＋10.30～11.00ｍで南東から北西に向って低くなっている。

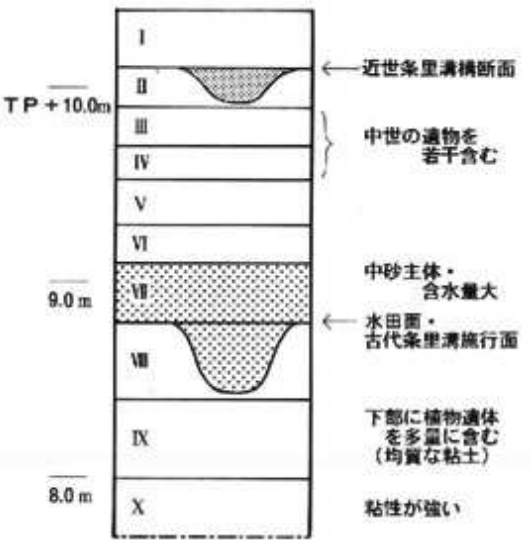
第Ⅱ層：淡灰黄色～暗灰褐色砂質土。層厚10～30cm。比較的安定した土層であるが、一部で水田の床土に特有な酸化鉄・マンガン・ノジュール等が斑点状に沈着している。なお、この土層の上面が、近世条里遺構溝の構築面に比定できる。

第Ⅲ層：灰黄色～淡灰褐色砂質土。層厚10～20cm。上位層との境がやや不明瞭な土層で、微砂と小粒の砂粒が主体である。

第Ⅳ層：淡灰黄色～灰褐色砂質土。層厚20～40cm。安定した土層で、全域に亘ってほぼ水平に堆積する。層中に中世末期の遺物を包含するが、出土量は希少である。

第Ⅴ層：灰色～暗灰色の色調で、土質には細砂・シルト・シルト質粘土の3種があり、各地点によって若干の相異が認められる。層厚10～15cm。

第Ⅵ層：淡灰青色～暗灰色の色調で、細砂・シルト・シルト質粘土で構成されている。層厚10～15cm。第Ⅴ層と同様、洪水に



Ⅰ	表土・旧耕土	
Ⅱ	淡灰黄色～暗灰褐色	砂質
Ⅲ	灰黄色～淡灰褐色	砂質
Ⅳ	淡灰黄色～灰褐色	砂質
Ⅴ	灰色～暗灰色	細砂・シルト・シルト質粘土
Ⅵ	淡灰青色～暗灰色	細砂・シルト・シルト質粘土
Ⅶ	淡灰色～灰色	細粒砂～粗粒砂
Ⅷ	青灰色～灰色	粘土
Ⅸ	灰色～暗灰色	粘土
Ⅹ	淡青灰色～灰青色	粘土

第7図　基本層序模式図

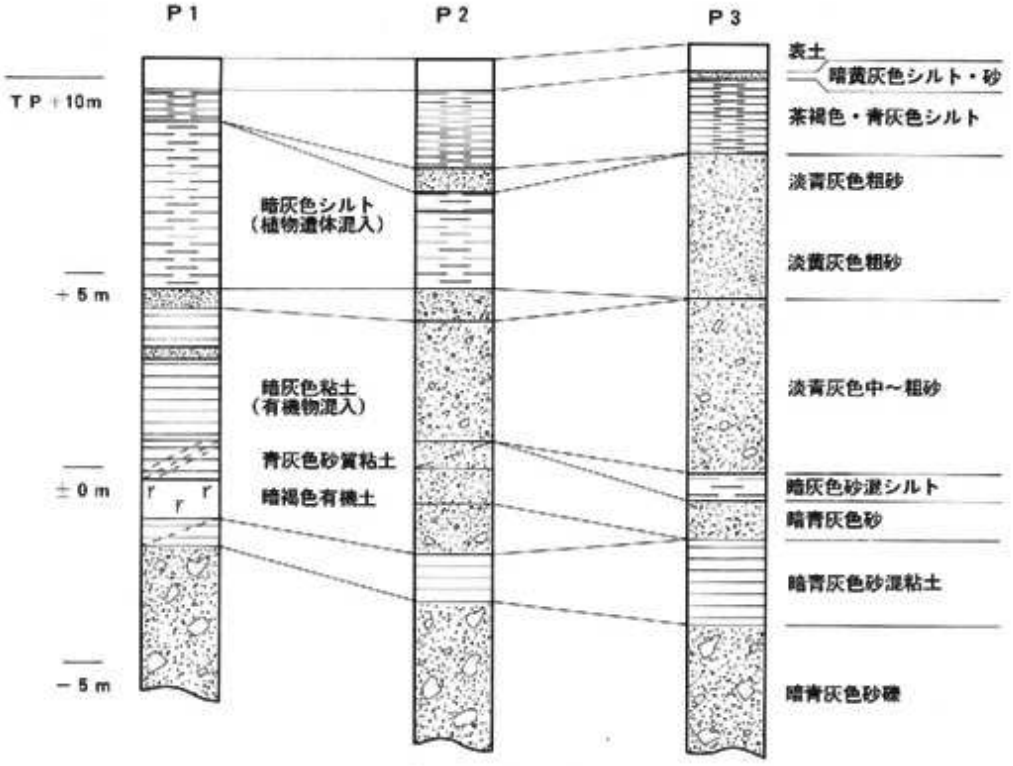
関係する土層である。

第Ⅶ層：淡灰色～灰色の色調で、細粒砂ないしは粗粒砂で構成される。本土層は一時期の洪水等の要因が看取される土層で、古代条里溝を中心に広がることを確認した。層厚は20～50cmを測るが、溝から隔たるにつれて薄く、無堆積で欠如する部分も認められた。なお、土層は細粒砂～粗粒砂で構成されているが、溝付近は特に粒子の大きい粗砂の堆積が顕著である。出土遺物は溝付近での密度が高く、縄文時代晩期～平安時代中期に至る多様な土器を含むが、全てローリングを受けた細片である。

第Ⅷ層：青灰色～灰色粘土。層厚40～60cm。全般に上位はシルト質がやや優勢する層相を示す。調査地全域で普遍的に認められる土層で、古代条里遺構溝の構築面に当る。なお、分布調査では調査の都合上、平面的に水田面を捉えられなかったが、発掘調査Ⅰ・発掘調査Ⅱでは、この上面で水田の存在を確認している。

第Ⅸ層：灰色～暗灰色粘土。層厚40～65cm。上位は均質で安定した様相を呈するが、下位は沼沢地を想起させる植物遺体が全面に広がっている。

第Ⅹ層：淡青灰色～灰青色粘土。層厚50cm以上。粘性の高い粘土層で、無遺物層である。



第8図　ボーリングデータ

第3節　調査結果

分布調査で検出した遺構・遺物は、そのほとんどが古代・近世の条里遺構溝に関連するものに限定されている。以上から、トレンチごとの記述に際しても、条里遺構溝を中心に概括する。各トレンチの層序については、基本層序（第5章第2節）の記述のみに委ねるが、条里遺構溝部分に関しては、その詳細及び断面図を掲載する。

出土遺物は、調査総面積が1.455㎡と広大であるにもかかわらず、コンテナ箱に10箱程度が出土したのみである。このうち、大半の遺物が第Ⅶ層淡灰色～灰色粗砂を中心に出土したが、全て洪水を起因とする流出に伴う二次堆積のものであり、一等資料としては認定し難い。時期的には縄文時代晩期～平安時代中期に至る種々の土器片が含まれているが、数量では縄文時代晩期～古墳時代に至る遺物は少量で、奈良時代～平安時代中期に属するものが前者を凌駕している。その他、第Ⅳ層からも中世の日常雑器が若干出土している。

なお、分布調査の出土遺物は、全て細片でしかもローリングを受けているため、個々の形態及び調整等の詳細は割愛した。ただ、特筆すべき出土遺物については、本文中で別稿を設けて記載している。

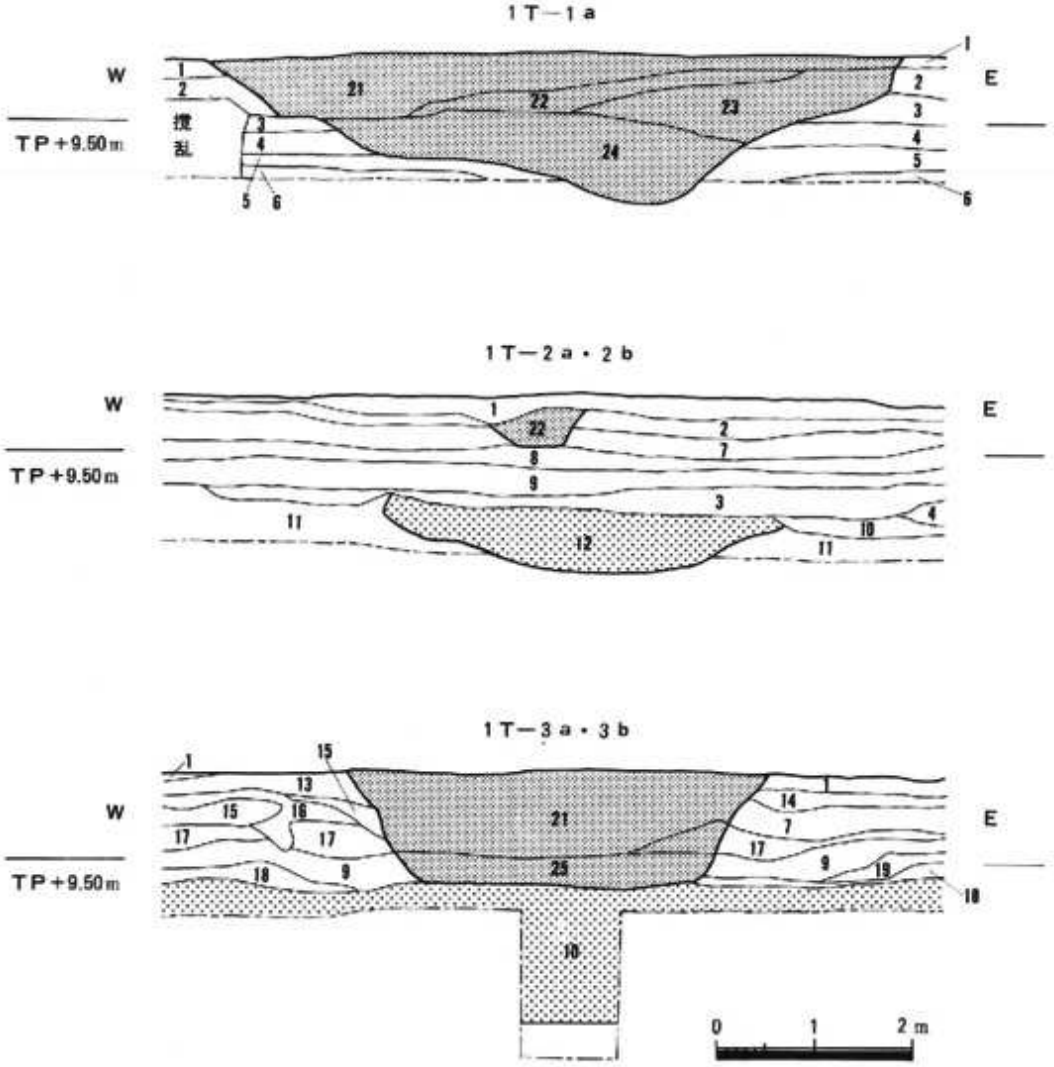
1　第1トレンチ

調査地の南西部に設定したトレンチで、300m×10mの調査区を5区に分割して調査を実施した。調査の結果、1区・3区・4区で古代条里遺構溝と近世条里遺構溝が重複する箇所を検出したのを始めとして、古代条里遺構溝に関連した粗砂の広がり、および近世の農耕に関した灌漑施設を検出した。

近世条里遺構溝

1T－1a：第92図調査地周辺小字名復元図の水路に一致するもので、幅7.2m・深さ1.2mを測る。なお、流路に沿って無数の杭が打たれており、後述する**1T－2a・1T－3a**でも認められた旧大乗川の流路と同規模であったことが窺われる。内部堆積土は、第1層灰色砂礫・第2層黄灰色砂質土・第3層茶褐色砂質土・第4層黄褐色粗砂の4層で構成されている。最下の第4層からは、近世・近代の陶磁器や瓦等の細片が出土していることから、溝遺構自体は昭和9年（1934）の飛行場建設までは機能していたものと推定できる。

1T－2a：**1T－1a**から109.7m西に位置するもので、幅0.92m・深さ0.38mを測る。内部には灰色砂質土1層が堆積している。後述する**1T－3a**と同様、旧大乗川の流路と一致しているが、掲載した断面図は河道を外れた北側のもので、河道から北へ続く通行の近世条里溝の存在が認められた。なお、先述の地図を参考にすれば、この地点は南北方向の条里区画に沿った旧大乗川が屈折した後東西方向に流路を変える部分で、調査においてはこの事実を裏付

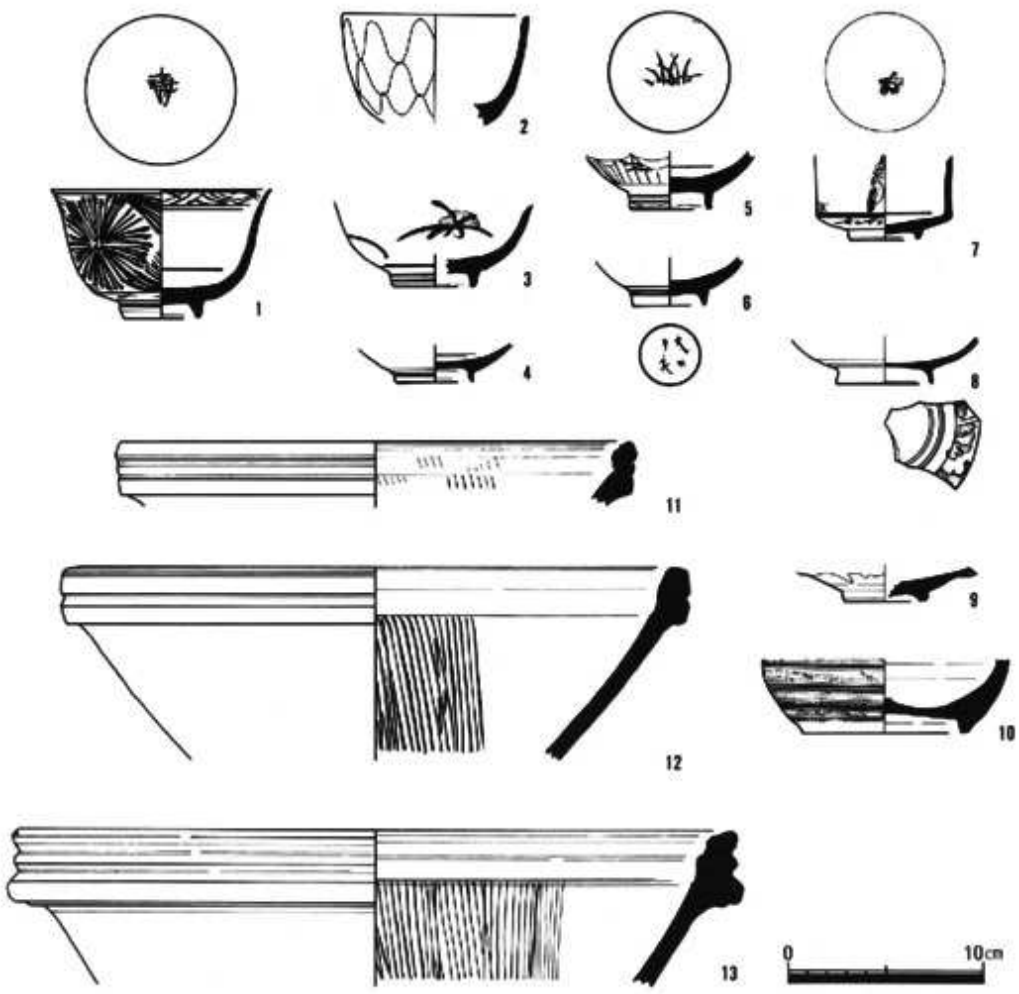


1 表土
2 黄灰色砂質土層
3 灰色細砂混粘質土層
4 灰色細砂混粘土層
5 淡黄灰色砂粘質土層
6 灰褐色シルト層
7 淡黄灰色砂質土層
8 淡灰黄色砂質土層
9 灰色粘質土層
10 灰色粗砂層
11 灰色シルト混粘土層
12 淡灰黄褐色粗砂層
13 茶褐色砂質土層（撹乱）
14 淡灰黄色小砂礫混土層
15 灰褐色砂質土層
16 灰色礫混砂質土層（撹乱）
17 淡灰褐色砂質土層
18 暗灰色砂質土層
19 灰色砂質土層（シルトっぽい）
20 灰色粘土層
21 灰色砂礫層
22 灰色砂質土層
23 茶褐色砂質土層（木片含む）
24 黄褐色粗砂層（近代の遺物を含む）
25 黒灰色粘質土層（植物遺体を含む）

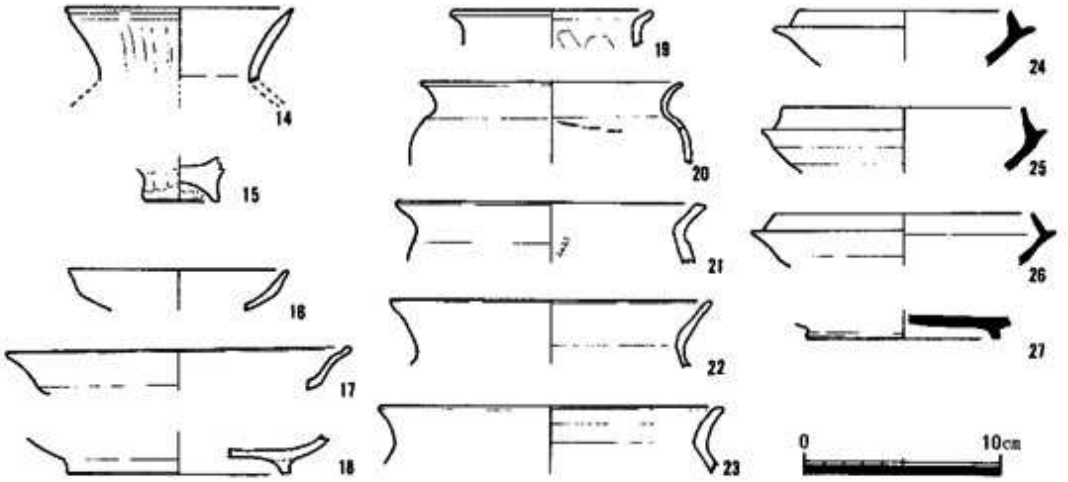
第9図　第1トレンチ条里遺構溝断面図

けるように、トレンチの中央部を境として南北へ延びる多数の杭列を認めた。

１Ｔ－３ａ：設定したトレンチの西端から39.3ｍの地点で検出した溝遺構で、幅4.3ｍ・深さ1.2ｍを測る。内部は、最下部に植物遺体等を含む黒色粘土が0.3ｍ程度堆積した上に、コンクリート塊や石材等を含む灰色砂質土が堆積している。現状では飛行場及び周辺の地域が開発されており不明であるが、先述の復元図（第92図）によれば、この部分は**１Ｔ－２ａ**で流路を西方に変えた旧大乗川が、条里区割に沿って再度流路を北に変える部分に当る。以上のことから、河道流路の選定に際しても、条里区割に基づいた土地利用が実施されていたことが窺える。



第10図　１Ｔ－２ａ・３ａ出土遺物実測図



第11図　１Ｔ－２ｂ出土遺物実測図

古代条里遺構溝

１Ｔ－１ｂ：先述の近世条里遺構溝１Ｔ－１ａの底部付近を中心として、粗砂の堆積が認められたが、明瞭な掘形等は検出できなかった。

１Ｔ－２ｂ：近世条里遺構溝１Ｔ－２ａの底部から約0.6ｍ下層に広がる灰色シルト混粘土の上面を構築面とするもので、幅4.0ｍ・深さ0.5ｍ以上を測る。内部は灰色粗砂のみが堆積しており、層中から土師器・須恵器等の細片が少量出土した。

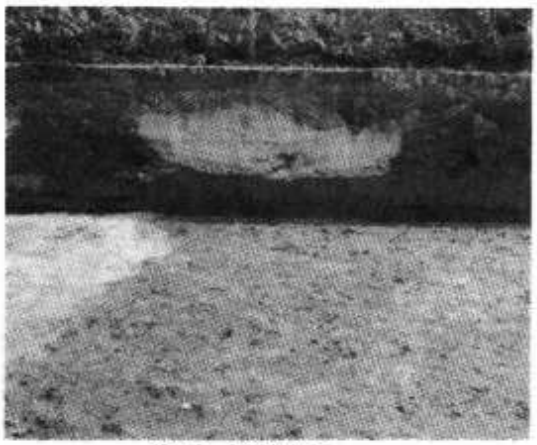
１Ｔ－３ｂ：平面的には確認し得なかったが、近世条里遺構溝１Ｔ－３ａの中央部の下層で深さ約1.4ｍを測る灰色粗砂の堆積を認めたことから、この部分が古代条里遺構溝と推定できる。

暗渠状遺構

仮に**暗渠状遺構**と付称した遺構で、３区で１箇所・４区で４箇所を確認している。上方から３層目ないしは４層目を構築面とする遺構で、幅1.6～3.1ｍ・深さ0.4～0.7ｍを測る。断面の形状はほぼU字形を呈しており、最下部は一様に粘土層を切り込んで終る。内部は、通常の溝遺構に見られる堆積状況は示さず、灰色あるいは黄褐色の粗砂１層で充填されている。なお、この様な特徴を持つ遺構は、北側に位置する第３トレンチ内でも検出しており、南北へ延びる溝状遺構であることを確認している。

以上の事柄から考えると、明らかに人工的な溝状遺構であり、この地域の近世における灌漑施設の一つであったものと推定できる。ただ、先述の様に内部は粗砂のみで充填されており、開溝以後の帯水状態を示す痕跡は見い出せない。この事実は、溝の開削直後に河川の氾濫等によって一時期に埋没したものとも理解できるが、同レベルの土層中には、これらを積極的に傍証し得る粗砂の存在は確認できない。

これらからこの遺構は、上部が開口した通常の溝遺構の機能とは別に、あらかじめ溝内を粗砂で充填することによって絶えず水を導くためのもの、あるいはその逆に周囲の水はけを良くするものかと考えられる。なお、推測が許されるならば、引水機能を果たしたと考えた場合、水田耕作の様に多量の水を必要とする目的には適さず、主に畑作等に使用されたものと推定でき、大和川付替え以降の農作物の変化等の要因と関わった遺構と考えることができる。

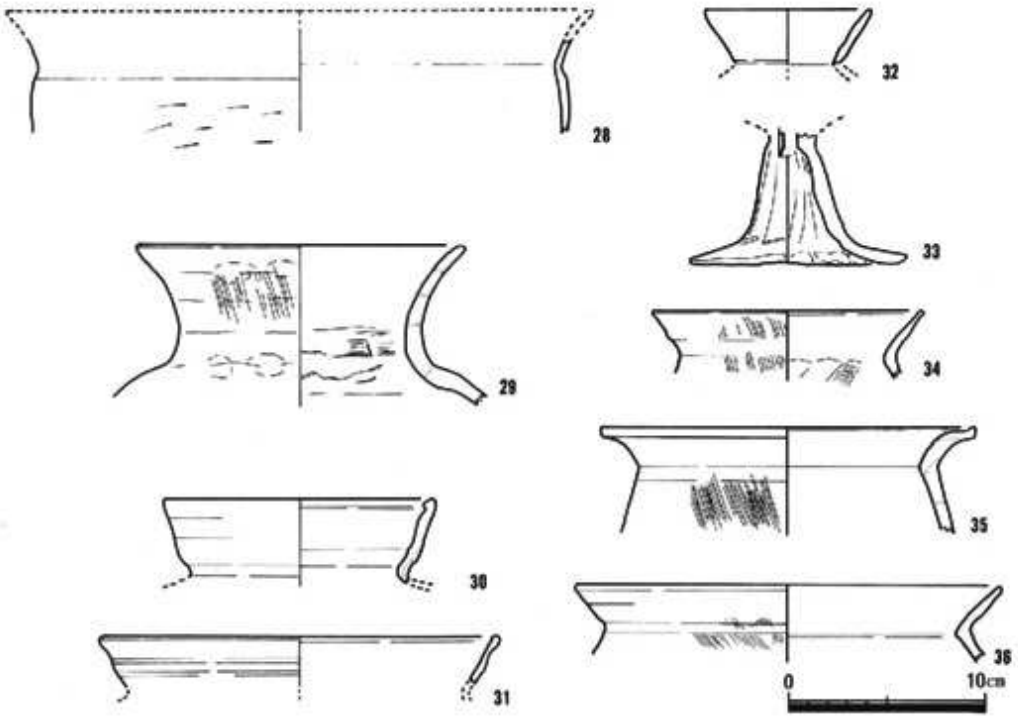


第12図　暗渠状遺構

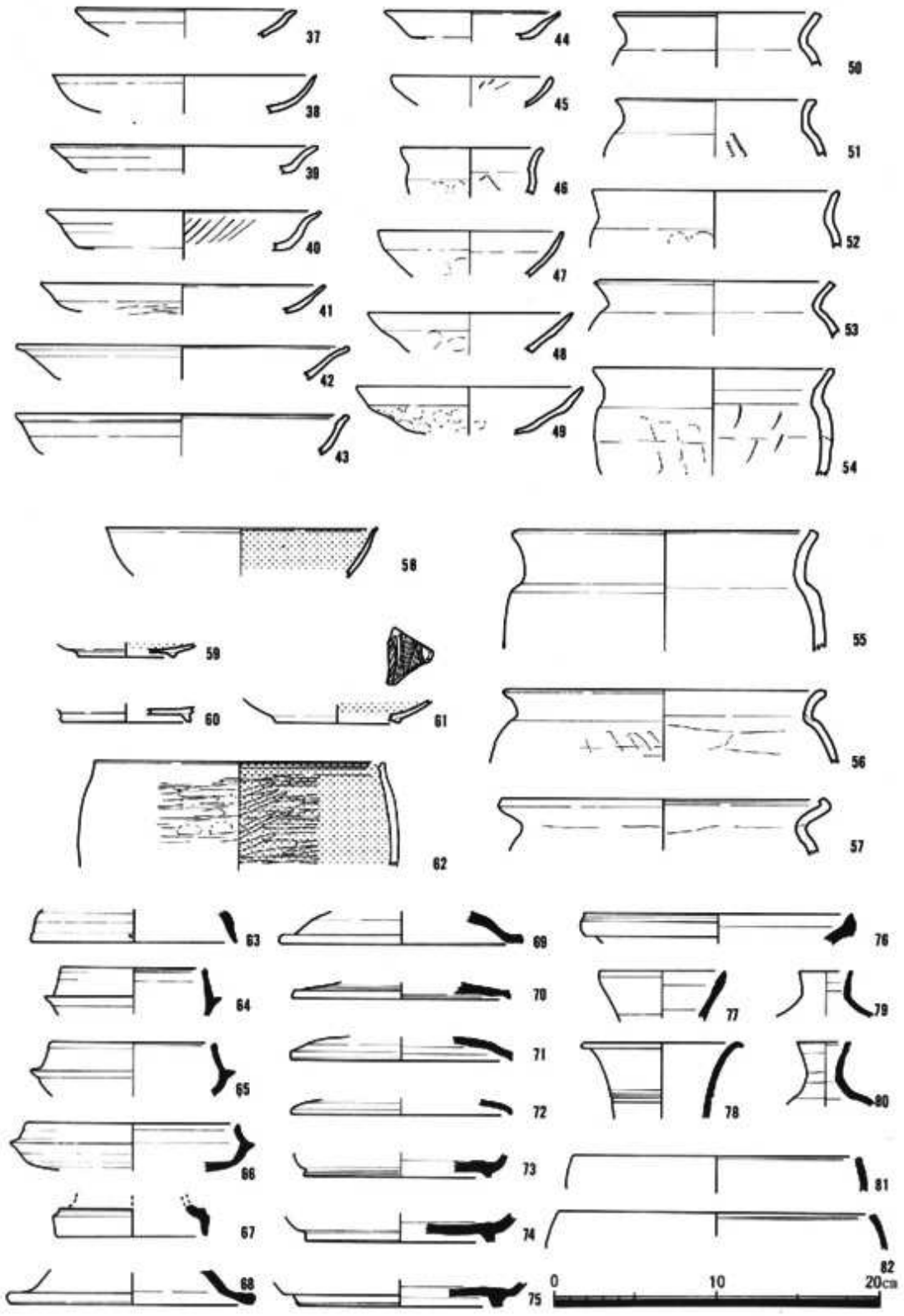
以上、暗渠状遺構について概略を記した。しかし、部分的に集中する箇所もあり、規則性についても不明瞭な部分も多く、今後この地域における近世農業の推移及び水利関係を明らかにする上でも重要な課題の一つとなろう。

出土遺物

出土遺物は、大半が古代条里溝の上面を被う灰色粗砂層から出土したもので、すべてローリングを受けた細片で量的にも少ない。特筆すべき遺物としては、縄文時代晩期に比定される甕28を検出しており、当調査地南方に位置する遺跡群との関係が推察される。



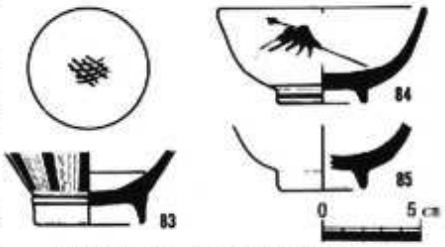
第13図　第1トレンチ包含層出土遺物実測図—1



第14図　第1トレンチ包含層出土遺物実測図－2

2　第2トレンチ

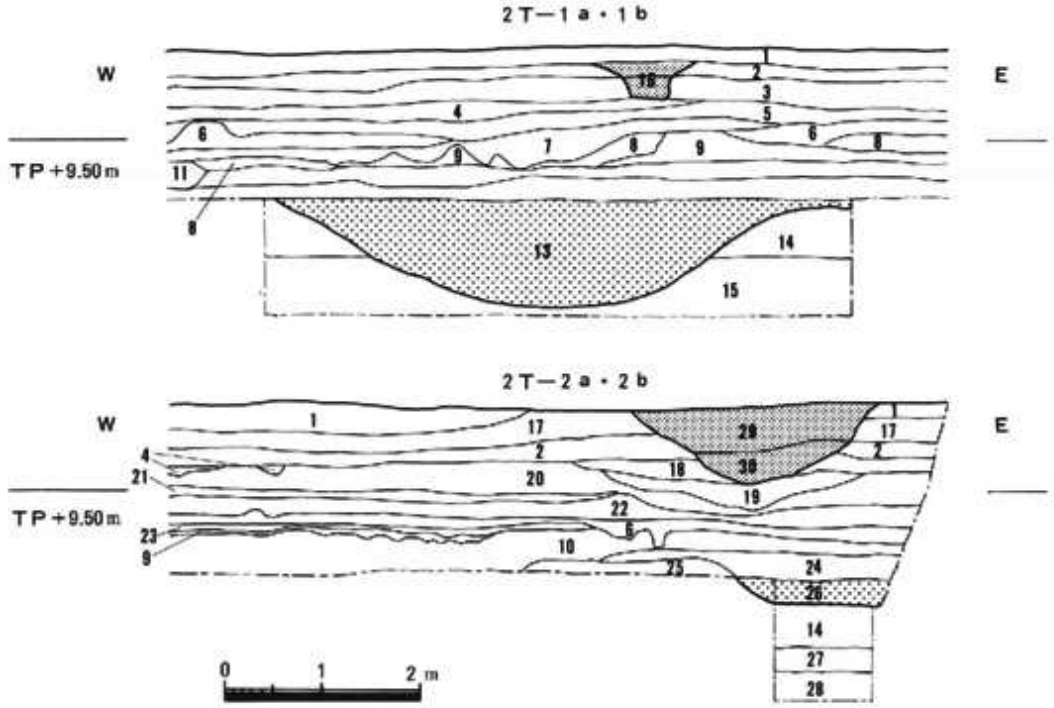
調査地の南東部に設定したトレンチで、第1トレンチ東端から30m隔てた延長線上に位置し、150×10mの規模を有する。なお、トレンチ設定に当っては、調査地内を南北に走る暗渠と、風向塔の位置を考慮し、調査区を3区に分割して調査を実施した。調査の結果第1トレンチと同様、古代条里遺構溝と近世条里遺構溝が重複する箇所を1区と3区で確認した。



第15図　2T－2a出土遺物実測図

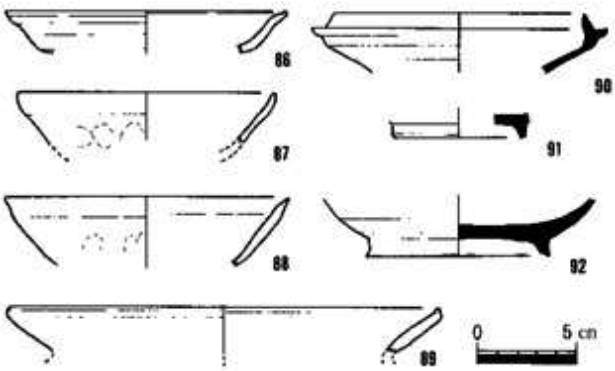
近世条里遺構溝

2T－1a：第Ⅱ層上面を構築面とする溝遺構で、幅1.1m・深さ0.4mを測る。内部には灰色粗砂のみが堆積しているが、遺物の出土は皆無であった。



1　表　土
2　灰黄色砂質土層
3　淡灰黄色砂質土層
4　淡灰褐色砂質土層
5　灰褐色砂質土層
6　灰色砂質土層
7　灰茶色砂質土層
8　灰色粗砂混粘土層
9　灰色シルト層
10　淡灰色シルト混粘土層
11　灰褐色粘質土層
12　暗灰色シルト混粘土層
13　灰色粗砂層
14　灰色粘土層
15　暗灰色粘土層
16　灰色砂質土層（粗砂含む）
17　黄灰色砂質土層
18　灰色砂質土層
19　淡灰色粗砂層
20　淡灰色砂質土層
21　灰色細砂層（シルトっぽい）
22　暗灰色砂質土層（粗砂）
23　淡灰青色シルト層
24　灰色シルト混粘土層
25　灰青色シルト混粘土層
26　灰茶色細砂層
27　灰色粗砂質
28　暗灰色粗砂層
29　灰色砂質土層
30　灰色粘質土層

第16図　第2トレンチ条里遺構溝断面図



第17図　2T－1b出土遺物実測図

2T－2a：近世条里遺構溝2T－1aから東方へ112.5mに位置するもので、幅2.5m・深さ0.8mを測る。内部の堆積土層は、灰色砂質土と灰色粘質土の2層から成り、前者からは国産陶磁器片が少量出土している（第15図）。

なお、第92図ではこの位置が南北を区画する里界溝に当るが、他の坪界溝とも大差はなく側道等の施設も付随していない。

古代条里遺構溝

2T－1b：近世条里遺構溝2T－1aの中央から西側へ1m程度ずれた形で重複するもので、幅5m・深さ1.1mを測る。構築面は表土下1.5m（TP＋8.90m）付近で、2T－1aの底部とは1.1mの比高差を持つ。内部は他の溝と同様灰色粗砂が堆積しており、弥生時代～平安時代中期に至る土器の細片が少量出土した程度である（第17図）。

2T－2b：1区と2区を区画する調査用畦部分と近接していて全容は知り難いが、現状では表土下1.8m（TP＋8.60m）に古代条里遺構溝の上面を被う灰茶色細砂が、西から東へ傾斜を持って広がることを確認した。一方、溝遺構の西肩に接して、第25層灰青色シルト混粘土が幅1.7m・厚さ0.15mに亘って台形に堆積している。このことは、近世条里遺構溝1T－2aの項でも一部触れたように、この部分が里界位置に一致する関係にあることから、古代条里遺構溝に伴う側道の可能性も充分に考えられる。

3　第3トレンチ

調査地の西部に設定したトレンチで、200×10mの規模を測る。予備調査の段階で、南北に延びる暗渠の存在が指摘されたため、当該部分を畦として残し、全体を3区に分割して調査を実施した。調査では、1区～3区全域の表土下1.3～1.5m（TP＋8.80～9.00m）付近で、厚さ0.3～0.7mを測る淡灰色粗砂層を確認した。この土層からは、密度は一定でないものの、ほぼ全域に亘って弥生時代～平安時代の土器の細片が出土したが、他トレンチと同様、全てが磨耗を受けていた。条里遺構溝は、2区で一箇所確認している。

近世条里遺構

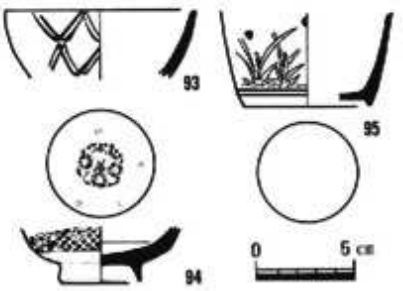
3T－1a：近世条里遺構溝1T－2aに続く坪界溝である。断面はV字形を呈し、幅1.2

m・深さ0.5mを測る。溝内は、淡明黄色粘質土層中に暗黒色粘土がブロック状に入る堆積状況で、内部からは近世及び近代の国産陶磁器片がわずかに出土した（第18図）。

なお、この近世条里遺構溝と照応する１Ｔ－２ａもほぼ同様の形状・規模を示し、調査で確認した他の近世条里遺構溝の様相と合致している。

古代条里遺構溝

３Ｔ－１ｂ：平面的な調査が実施できなかったため、全容は不明である。しかし、近世条里遺構溝３Ｔ－１ａの底部から約0.5m下位（ＴＰ＋8.90m）で、古代条里遺構溝に関連する灰色粗砂の広がりを確認したが、明瞭な掘形は認められなかった。



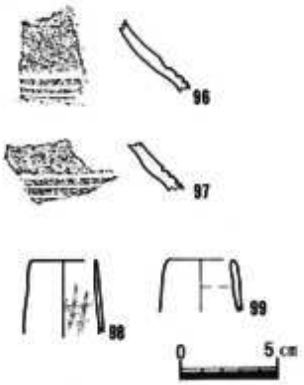
第18図　３Ｔ－１ａ出土遺物実測図

出土遺物

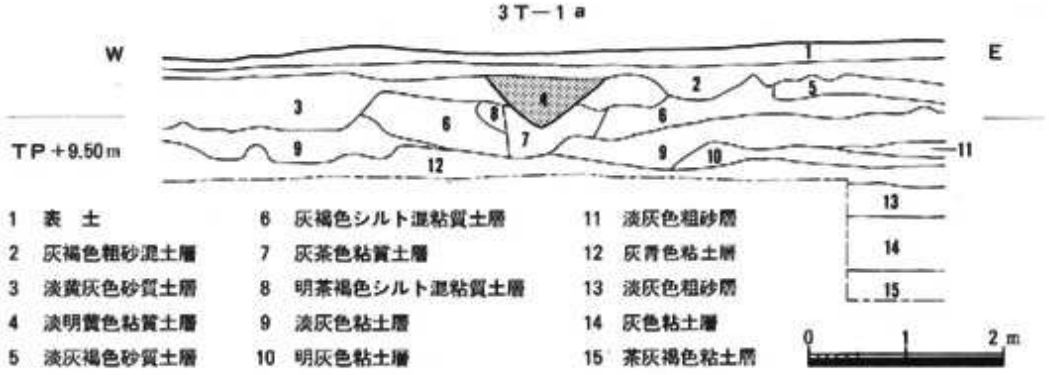
第３トレンチ出土遺物は、他トレンチと同様灰色粗砂を中心に少量出土している。

96・97は共に弥生時代前期の壺体部の破片で、前者は削り出し凸帯と沈線文を持つ中段階のもの、後者は沈線文を持つ新段階のものである。

98・99は薄手丸底式の製塩土器である。共にローリングを受けており、外面の調整は不明であるが、99の内面には貝ケズリの痕跡が認められる。なお、当遺跡周辺の八尾南遺跡、当遺跡範囲内の南木の本４丁目調査地でも、同様の製塩土器を検出している。

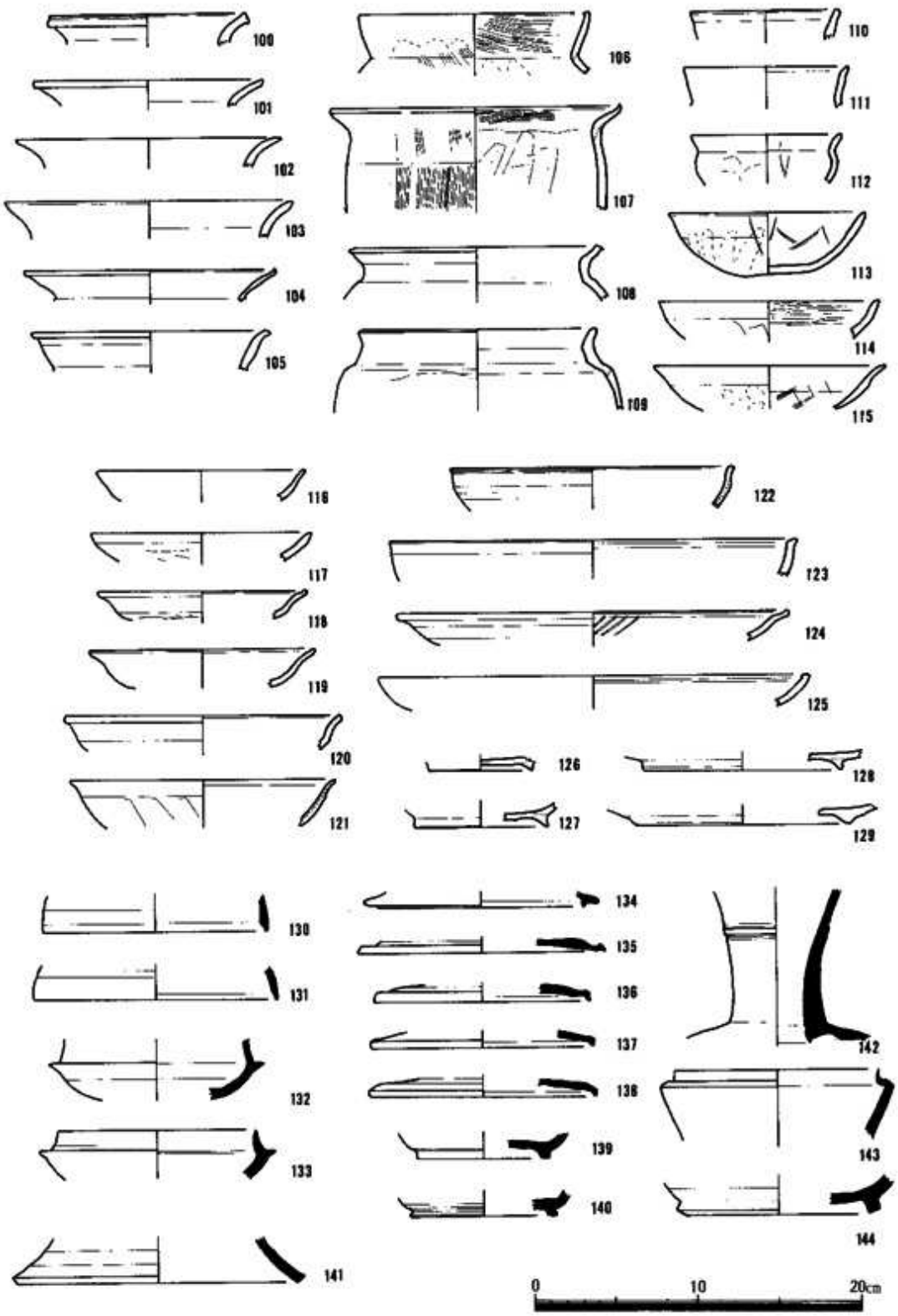


第19図　第３トレンチ包含層
出土遺物実測図－１



1　表　土
2　灰褐色粗砂混土層
3　淡黄灰色砂質土層
4　淡明黄色粘質土層
5　淡灰褐色砂質土層
6　灰褐色シルト混粘質土層
7　灰茶色粘質土層
8　明茶褐色シルト混粘質土層
9　淡灰色粘土層
10　明灰色粘土層
11　淡灰色粗砂層
12　灰青色粘土層
13　淡灰色粗砂層
14　灰色粘土層
15　茶灰褐色粘土層

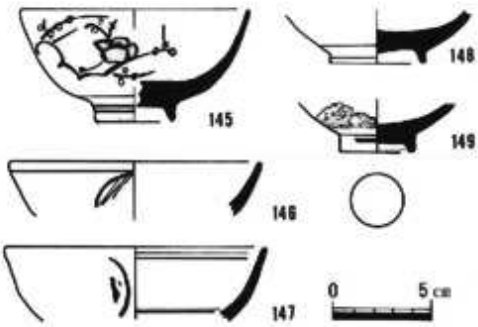
第20図　第３トレンチ条里遺構溝断面図



第21図　第３トレンチ包含層出土遺物実測図―２

4　第4トレンチ

調査地の東部中央に設定したトレンチで、200×10mの規模を測り、第3トレンチ東端から東へ110m隔てた延長線上に位置する。トレンチ内を南北に走る暗渠を考慮して、トレンチを3区に分割して調査を実施した。調査の結果、1区と3区で、近世条里遺構溝と古代条里遺構溝に関連する粗砂の広がりを確認した。



第22図　4T－2a出土遺物実測図

近世条里遺構溝

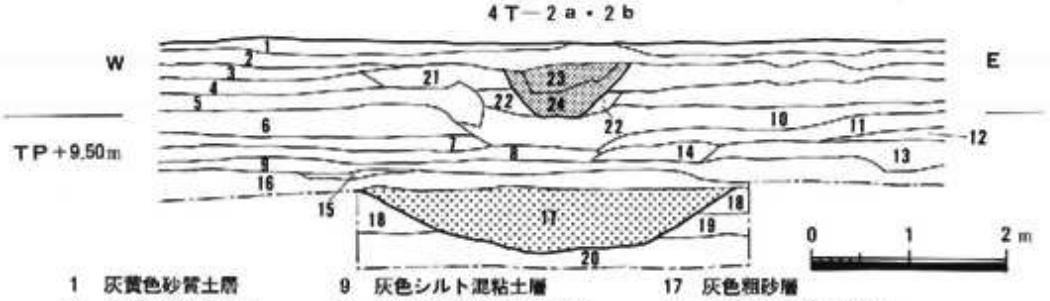
4T－1a：2T－1aに照応する溝であるが、位置は調査用畦と一致したため、全容は不明である。残存部の法量は、幅1.9m・深さ0.8mを測る。ここでは両肩に杭の痕跡が認められ、同一の溝である2T－1aとは、形状・法量共に異っている。

4T－2a：2T－2aに照応する溝で、里界を区画するAラインに該当し、先述の2T－1aからは113.2m西に位置する。幅1.3m・深さ0.5mを測り、内部は上方の暗灰色砂質土と下方の暗灰色砂礫混土の2層から成り、下層からは国産陶磁器の破片を検出した（第22図）。

なお、溝遺構の西肩に接して、第21層暗灰色砂質土が幅1.4m・厚さ0.2mに亘って広がる部分を認めたが、これは溝に付随した側道の痕跡かとも推定できる。しかし、位置的に照応する関係にある2T－2aにはこの様な土層堆積は認められず、現時点ではそれと断定し難い。

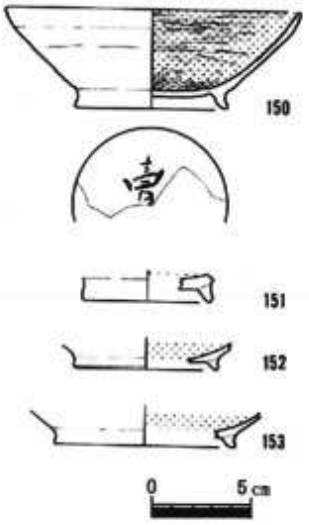
古代条里遺構溝

4T－1b：全体に湧水が著しく、その全容は確認できなかった。



1　灰黄色砂質土層
2　明黄褐色砂質土層
3　淡黄灰色砂質土層
4　黄灰色砂質土層
5　淡灰褐色砂質土層
6　灰色砂質土層
7　灰褐色砂質土層
8　灰青色粘土層
9　灰色シルト混粘土層
10　褐灰色シルト混粘質土層
11　茶褐色シルト層
12　茶灰褐色シルト混土層
13　灰褐色粘土層
14　淡灰色粘土層
15　灰色シルト層
16　灰色粘土層（シルトっぽい）
17　灰色粗砂層
18　茶褐色シルト粘質土層
19　灰茶色粗砂層
20　灰色粘土層
21　暗灰色砂質土層
22　灰褐色小砂礫混土層
23　暗灰色砂質土層
24　暗灰色砂礫混粘土層

第23図　第4トレンチ条里遺構溝断面図

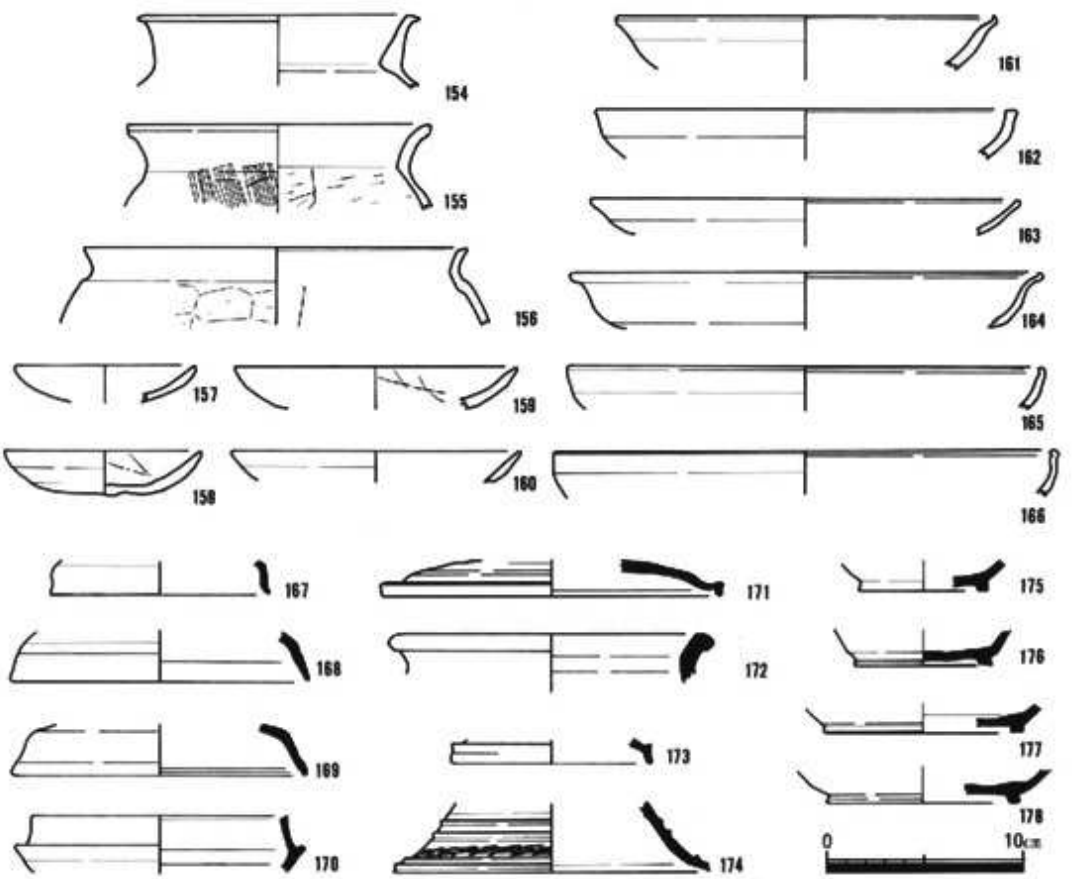


第24図　第４トレンチ包含層出土遺物実測図―１

４Ｔ－２ｂ：近世条里遺構溝４Ｔ－２ａの底部から約 0.7ｍ下位の茶褐色シルトを切り込むもので、幅 3.8ｍ・深さ 0.6ｍ前後を測る。内部には弥生時代～平安時代中期の遺物を含む粗砂が堆積している。

出土遺物

150は、口径14cm・器高５cm・高台径８cm・高台高0.8cmを測る黒色土器椀（Ａ類）で、高台内に「賣」と読める文字を墨書している。体部は重厚な高台から斜上方へ直線的に伸び、口縁部内側に沈線が一周している。調整は外面体部ナデ、内面は密なヘラミガキで体部と見込みを分化している。なお、この遺物は古代条里遺構溝の上面を被う青灰色シルト層から出土したもので、古代条里遺構溝の埋没時期を示唆する資料といえよう。



第25図　第４トレンチ包含層出土遺物実測図―２

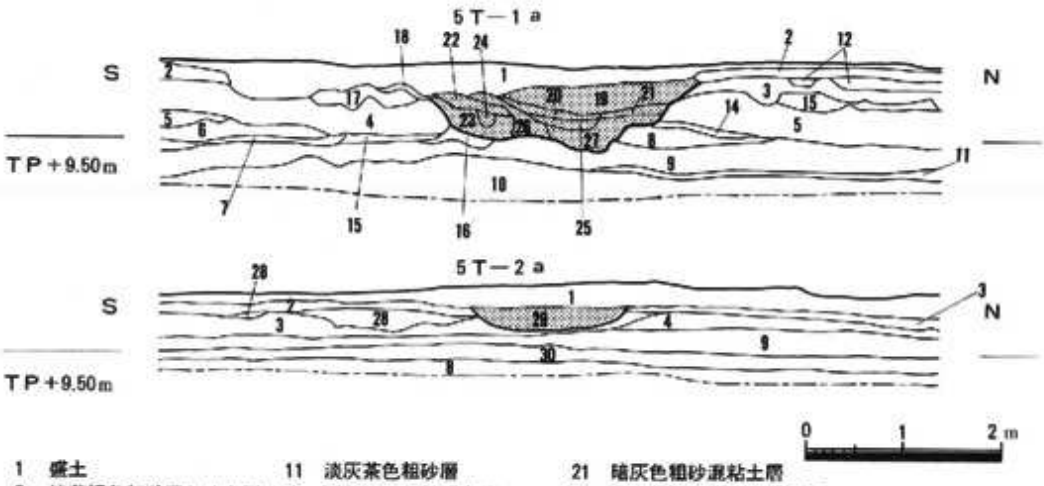
5　第5トレンチ

調査地の北部に南北方向に設定したトレンチで、10×150ｍの調査区を3区に分割して調査を実施した。調査の結果、1区と3区で近世条里遺構溝と古代条里遺構溝を、1区で近世の井戸を検出した。

近世条里遺構溝

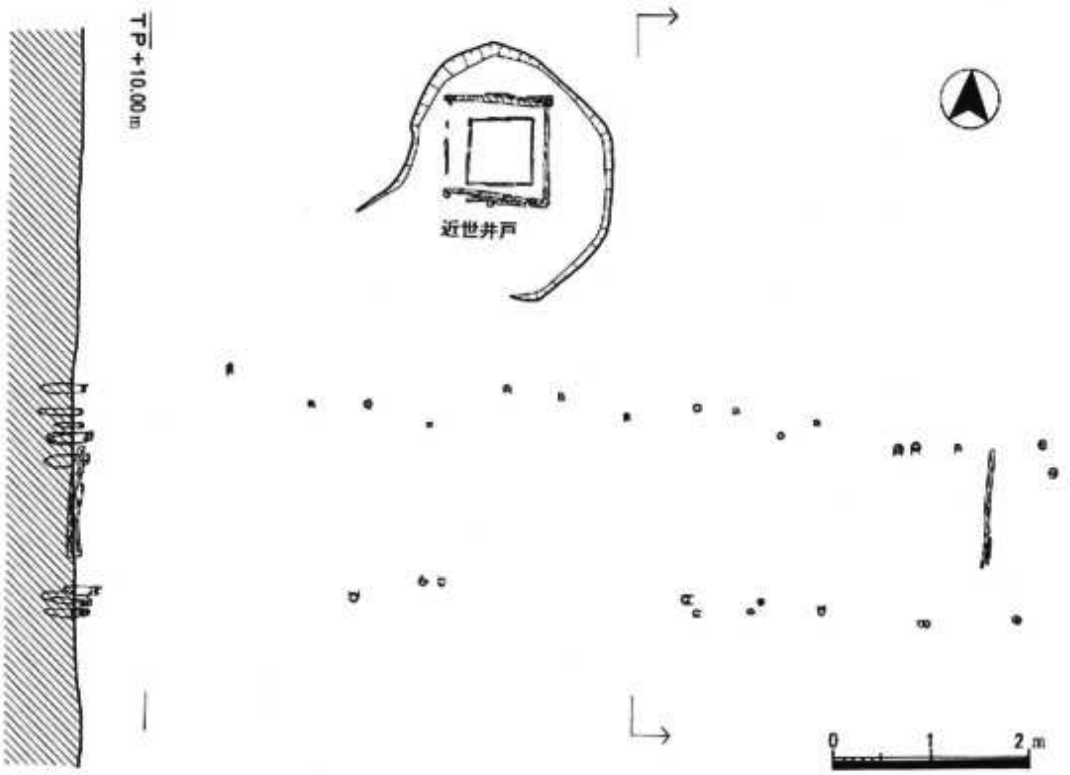
5T－1a：旧耕土の上面から切り込む遺構で、幅 2.8ｍ・深さ 0.7ｍを測る。復元した条里推定線では、志紀郡条里の五条三里の北側を区画する里界1ラインに該当する。溝内には、東西方向に平行して杭が 1.8～ 2.1ｍの間隔で打たれ、土地区画と水路の両機能を備えたものであったことが窺える。内部からは、近世・近代の陶磁器片の他、わずかではあるが、ねり鉢等の中世遺物も出土している（第28図）。

5T－2a：3区で検出した溝遺構で、幅1.6ｍ・深さ0.25ｍを測る。**5T－1a**の様に杭列を伴う溝遺構とは、深度・形態ともに異なっている。溝内には暗茶褐色細砂混粘土1層が堆積しており、内部から近世・近代の陶磁器片が若干出土している（第28図）。なお、**5T－1a**でも確認した様に、溝遺構の南側には、幅1.9ｍ・厚さ0.2ｍを測る茶褐色シルト混粘質土が断面菱形に堆積している。このような堆積状況は、溝遺構南肩に接して存在する点が共通しており、溝に付随した側道の可能性が考えられる。なお、**5T－1a**との間隔は108.8ｍを測る。

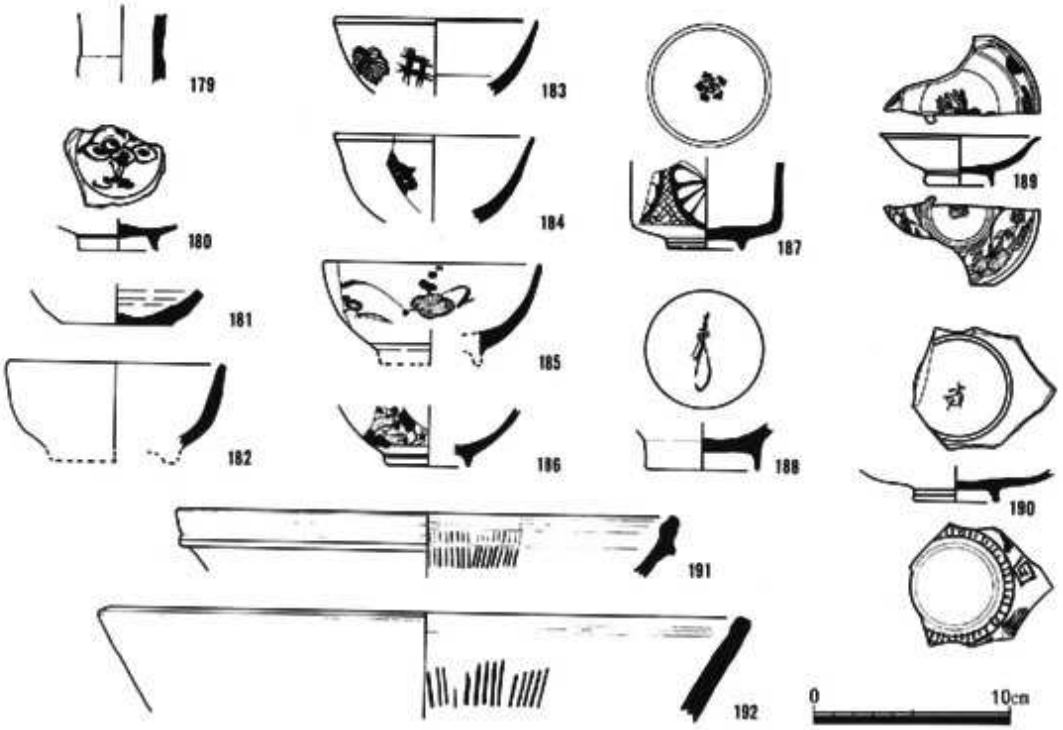


1	盛土	11	淡灰茶色粗砂層	21	暗灰色粗砂混粘土層
2	淡茶褐色細砂混シルト層	12	灰色シルト粘質土層	22	淡灰褐色細砂混シルト層
3	茶褐色細砂混シルト層	13	灰茶色シルト粘土層	23	淡灰黄色砂混シルト層
4	茶灰色シルト粘質土層	14	灰茶色粘土層	24	淡灰褐色粘土層
5	灰茶色シルト層	15	茶色粘土層	25	淡灰黄色シルト層
6	灰色シルト粘質土層	16	淡灰黄色粘土層	26	暗灰褐色シルト粘質土層
7	灰茶色粘質土層	17	茶灰色細砂混粘質土層	27	暗灰褐色細砂混粘土層
8	茶灰色粘土層	18	茶灰黄色シルト混粘質土層	28	茶褐色シルト混粘土層
9	灰茶褐色粘土層	19	茶灰色細砂層	29	暗茶褐色細砂混粘土層
10	灰茶褐色粗砂層	20	暗灰褐色粘土層	30	灰茶褐色粗砂層

第26図　第5トレンチ条里遺構断面図



第27図　5T－1a杭列平断面図



第28図　5T－1a出土遺物実測図

古代条里遺構溝

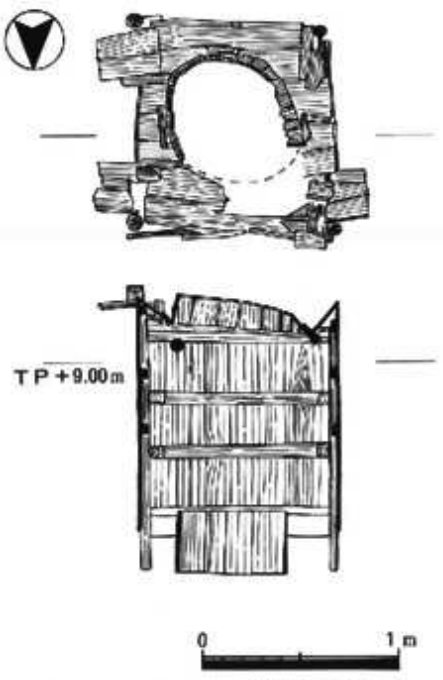
５Ｔ－１ｂ：古代条里に該当すると推定される溝遺構は、調査の都合上平面的には捉えられなかったが、部分的に行った近世条里遺構溝**５Ｔ－１ａ**下層の掘削の結果、中心よりやや南側へずれて古代条里遺構溝の存在を確認した。この遺構は、地表下1.7ｍ（ＴＰ＋8.6ｍ）付近に広がる暗灰色粘土の上面を構築面とし、幅約4.0ｍ・深さ0.8ｍを測る。先述の**５Ｔ－１ａ**の底部から0.9ｍ下位に位置し、内部は淡灰色の粗砂１層で構成されている。なお、内部堆積土である粗砂は溝遺構上面にも広範囲に広がっており、溝埋没の起因として一時期の大洪水が示唆されよう。粗砂内の遺物は、全てローリングを受けた細片で、弥生時代中期を上限にし、平安時代後期を下限とする遺物に限る。

５Ｔ－２ｂ：近世条里遺構溝**５Ｔ－２ａ**の下層を一部深掘りした結果、**５Ｔ－１ｂ**同様の古代条里遺構溝に関連した粗砂の堆積を認めるとともに、暗灰色粘土を切り込む溝遺構を確認することができた。しかし、**５Ｔ－１ｂ**で確認したように明瞭な掘形を持つものではなく、幅4.0ｍに亘り、0.15ｍ前後に窪む程度である。

近世井戸

近世条里遺構溝**５Ｔ－１ａ**の北に近接する井戸で、一辺1.0ｍ・深さ1.4ｍを測る。井戸検出時は上部が土圧によって陥没しており旧状をとどめていなかったが、本来は方形井戸枠の上面を板材で水平に東西方向に覆い、その中央部には幅20㎝・高さ15㎝を測る板材を桶状に巡らせている。井戸枠検出面は地表下0.6ｍ（ＴＰ＋9.60ｍ）と低いが、上部で井戸枠用の瓦を数点確認していることから、本来は桶状木枠を芯として、地表近くにまで井戸枠用の瓦が円形に積み上げられていたものと推定できる。

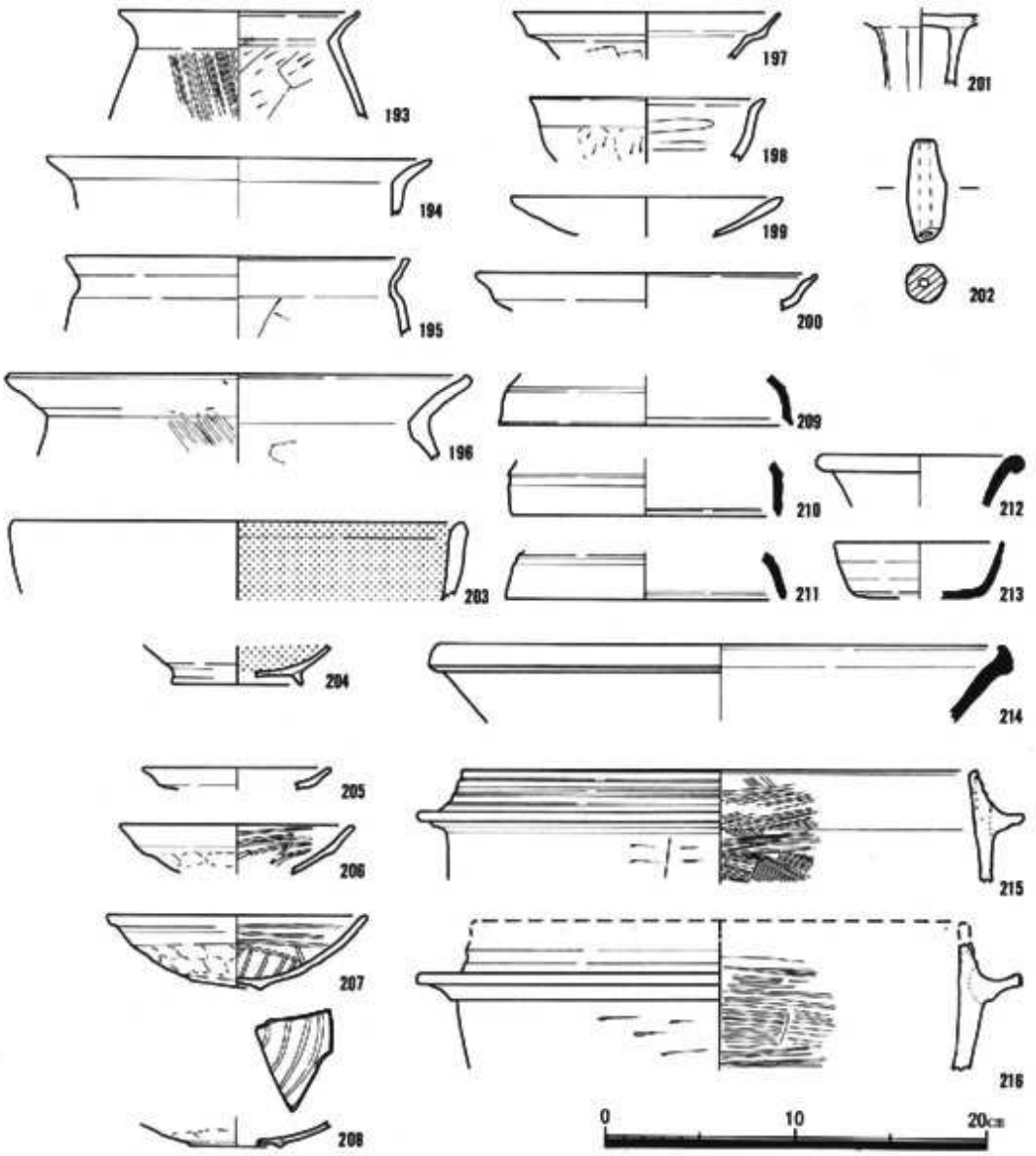
一方、井戸枠の下部は方形を呈し、内・外の二重構造から成る。下部井戸枠の構築に際しては、まず一辺45㎝・高さ30㎝を測る内枠の木組を粗砂中に埋設した後、更にその外側に一辺100㎝・高さ145㎝を測る外枠を設置している。また、外枠の構造は、四隅に一辺10㎝前後・長さ145㎝程度の角材を立て、各辺に四本ずつの角材を約30㎝間隔で横木として渡している。その外側から、幅15㎝前後の薄板を縦方向に釘で固定し、全体を囲繞している。それらの横木と井戸隅の角材との接合に際しては、最上段と最上段は枘統法によって



第29図　第５トレンチ近世井戸平断面図

密着しているが、２段目・３段目の横木は前者より太めの角材を使用しているためか、先端を削り込んで井戸隅の角材に挿入している。下部井戸枠の掘形は、古代条里遺構溝５Ｔ－１ｂの上面に被る灰色粗砂を切り込んでいるため明瞭にし得ないが、底部は５Ｔ－１ｂを構成する灰色粘土層に達し、調査中多大な湧水が認められた。

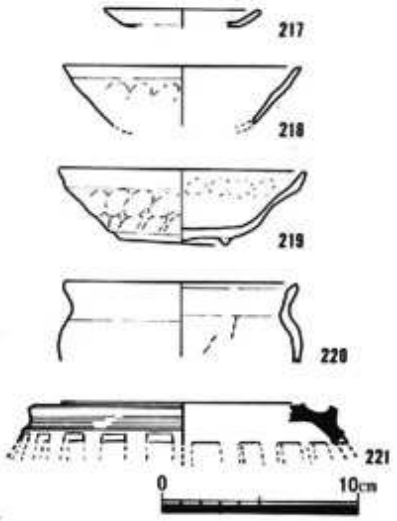
井戸内からは近世・近代の国産陶磁器片等が少量出土したのみで、飛行場建設まで使用されていたことは明らかであるが、構築時期については判然としない。



第30図　第５トレンチ包含層出土遺物実測図

6　第6トレンチ

調整池構築予定地の南部に東西方向に設定したトレンチで、調査地内を斜方向に走る小道を境として、西側を1区・東側を2区と付称し、調査を実施した。なお、1区は5×56m・2区は5×135mの規模を測る。



第31図　第6トレンチ包含層出土遺物実測図

近世条里遺構溝

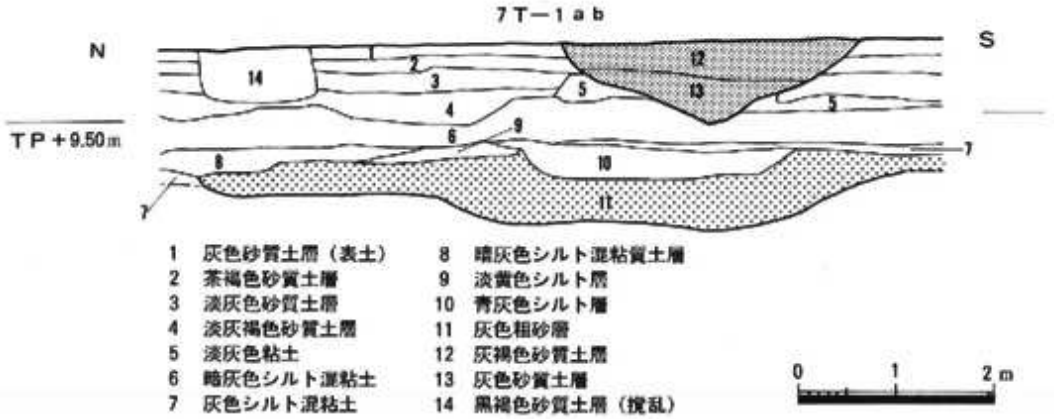
6T－1a：当初、**1T－1a**に照応する条里遺構溝を2区で想定し、調査を実施した。該当部分では、幅1.2m・深さ0.1m程度の窪みを検出したに過ぎず、溝の痕跡とするには他の検出例とは形状を異にしている。

古代条里遺構溝

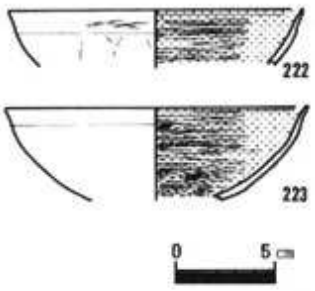
6T－1b：**6T－1a**の下方0.8mで、灰色粘土を切り込む粗砂が0.6m程度の厚さで堆積することが認められ、この地点を条里遺構溝として捉えると、**6T－1a**の窪みが近世条里遺構溝であろうと想定できる。ただし、照応関係にある**1T－1a**は河川としての役割を果たしているが、**6T－1a**は坪界の小溝としての機能のみを有しているだけである。

7　第7トレンチ

第6トレンチ同様、調整池構築予定地内に設定したトレンチで、構築予定地中央部を南北に縦断し、5×100mの規模を測る。トレンチを2区に分割して調査を実施した結果、1区の北部で**5T－1a・5T－1b**に照応する溝遺構を検出した。



第32図　第7トレンチ条里遺構溝断面図



第33図　第7トレンチ包含層出土遺物実測図

近世条里遺構溝

７Ｔ－１ａ：１区の北部で検出した溝で、断面Ｖ字形を呈し、幅3.0m・深さ0.9mを測る。この溝遺構は**５Ｔ－１ａ**に照応するもので、形状・数値等もほぼ近似する。内部堆積土は、上層の灰褐色砂質土と下層の灰色砂質土から構成され、**５Ｔ－１ａ**地点で認められた複雑な堆積状況は示していない。**５Ｔ－１ａ**同様、溝遺構に平行して杭が列状に打たれており、五条三里の北を区割する復元条里の里界１ラインに共通した特徴と言える。

古代条里遺構溝

７Ｔ－１ｂ：表土下1.4m（ＴＰ+8.8m）程度に広がる灰色粘土を切り込むもので、幅4.8m・深さ0.3mを測る。内部は灰色粗砂一層で充填されており、他の古代条里遺構同様、ローリングを受けた土器の細片が少量出土した。重複する**７Ｔ－１ａ**の溝底とは、比高差0.8mを測る。なお、古代条里遺構溝の上面を覆う粗砂は厚さ0.2mを測り、溝の北側は2.2m・南側へは3.2m程度の範囲で広がっている。溝内の中央部には、幅2.8mに亘って青灰色シルト層がレンズ状に堆積する部分が認められる。

第４節　条里遺構溝について

ここでは、分布調査で検出した近世・古代の条里遺構溝を一覧表で明示し、その数値及び現状等の特徴から若干の所見を記載する。

１　近世条里遺構溝

調査の結果、近世条里遺構溝には二つのタイプが存在することが判明した。一つは本来の単一的な機能である坪界の小区割を目的としたものであり、もう一つは前記に加えて河道流路としての機能を備えたものである。

前者は全て上方から２層目、あるいは３層の上面を構築面とするもので、断面はＵ字形又はＶ字形を呈している。全体に小規模なものが多く、幅1.1～1.6m・深さ0.25～0.9m程度を測る。内部堆積土は１層ないし２層から構成されており、一部で近世の国産陶磁器の細片が少量出土している。

後者は第92図調査地周辺小字名復元図でも明らかな様に、条里の小区画を踏襲あるいはそれに規制されて北流する人工河道で、調査地内には同様の人工河道が二つ存在することが判明した。これらの人工河道と前者の溝との開削時期については判然としないが、少くとも昭和９年（1934）の阪神飛行学校設立時までは、河道としての機能を果していたことは確実である。

第2表　条里遺構溝一覧表

地点名	時期	規模 幅	規模 深さ*	検出レベル高（TP値）	備考	溝間数値**	条里該当ライン名
1T-1a	近世	7.20(m)	1.20(m)	9.70(m)	近代まで使用		B
1T-1b	古代	—	—	(8.90)***		(m) 109.70	
1T-2a	近世	0.92	0.38	9.95			C
1T-2b	古代	4.00	0.50	9.05		113.50	
1T-3a	近世	4.30	1.20	10.40	近代まで使用、旧大乗川、杭列有		D
1T-3b	古代	—	(1.40)	(8.90)			
2T-1a	近世	1.10	0.40	10.30			F
2T-1b	古代	5.00	1.10	8.90		111.10	
2T-2a	近世	2.50	0.80	10.40			A
2T-2b	古代	—	—	(8.80)			
3T-1a	近世	1.20	0.50	9.90	V字溝		C
3T-1b	古代	—	—	—	未確認		
4T-1a	近世	1.90	0.80	10.30	杭列有		F
4T-1b	古代	—	—	—	未確認	113.20	
4T-2a	近世	1.30	0.50	10.00			A
4T-2b	古代	3.80	0.60	8.70			
5T-1a	近世	2.80	0.70	10.10			I
5T-1b	古代	4.00	0.80	8.60		108.80	
5T-2a	近世	1.60	0.25	10.00			6
5T-2b	古代	(3.50)	0.15	8.80			
6T-1a	近世	1.20	(0.10)	(9.60)	上部削平か？		B
6T-1b	古代	—	—	—	未確認		
7T-1a	近世	3.00	0.90	10.20			I
7T-1b	古代	1.20	(0.10)	8.80			

*　最深

**　近世溝の中央部間

***　（　）内は推定値

2　古代条里遺構溝

調査範囲が限定されていたため未確認の部分が多く、完全な資料とは言い難いが、大概的な意味でも認識は得られた。

溝幅は最小3.8mから最大5.0mを測るが、総体的には4m前後のものが多い。深さについても、5T－2bの0.15mを除けば0.7m前後のものが多く、溝開削に当っては一定の計画性の下に実施されたものと推定される。なお、溝構築面のレベル高は広大な範囲にありながら、TP+8.7～8.9mに集中している。このことから、現代の一般的な概念とは逆に、古代条里施行時におけるこの地域一帯は、旧大和川水系による洪水の被害もなく、比較的安定した土地であり、開発も容易であったことが首肯される。

一方、古代条里遺構溝の内部に粗砂が堆積している事実は、洪水時にはこれらの溝遺構が決疏の役目を果たし、大量の出水に伴なって流出する土砂により充填され埋没したことが看取できた。なお、これらの粗砂中には平安時代中期を下限とする遺物が含まれており、古代条里施行時は判然としないものの、埋没時期を示唆する資料の一つと言えよう。

第6章　発掘調査Ⅰ（昭和57年度調査）

第1節　調査概要

分布調査の結果、調査地全域の表土下1.20m（TP＋8.80m）付近を中心として、志紀郡条里遺制の溝遺構を検出したのを始めとして、近世の中期にこの遺制を踏襲して新たに開掘したと推定される溝遺構が重複する形で遺存していることが判明した。さらに、古代条里施行面の上面に被る粗砂の堆積が認められ、大洪水に伴う大量の土砂の流入によって、当地が耕地としての機能を完全に失い、土地自体をも放棄せねばならなかったことが看取された。この様なことから、上面に被る粗砂は二次堆積の包含層ではあるが、当地における古代条里遺構溝の崩壊時期を示唆する資料を内包したものとして注目された。

これらの調査経緯を踏まえて、八尾市教育委員会文化財室は大阪府教育委員会と協議の上、以後の工事に際しては志紀郡条里遺制の現状保存を要求する旨を書面で提示すると伴に、条里遺構溝該当部に当る工事掘削に際しては、文化財保護法上の適切な処置を講ずることが、不可欠であるとの結論に至り、その旨を事業主体者である運輸省第三港湾建設局へ通達した。これを受けた運輸省第三港湾建設局は、昭和57年度の当該事業計画の策定、及び実施事項の詳細を八尾市教育委員会文化財室に提示する一方、両者間で内容を検討し、各工事予定地の埋蔵文化財の対処方法についての協議が重ねられた。八尾市教育委員会文化財室は、大阪府教育委員会より書面で回答を受けた分布調査以後の調査地内の埋蔵文化財の行政措置に基づき、各工事予定地内の掘削深度に従って全面発掘調査・部分発掘調査・立会発掘調査の三種に区別した。

全面発掘調査：工事掘削深度が表土下1.2mに達し、比較的広範囲に亘る工事区を対象とし、全面発掘調査を実施した。昭和57年度の全面発掘調査区は、函渠構築予定地A－6－2・A－9－3の2箇所で、前者を第1調査区、後者を第2調査区とした。

部分発掘調査：先の分布調査の結果から条里溝を復元したが(第91図調査地周辺条里復元図)、その復元線に該当する工事区内の地点を5箇所（ポイント1～5）抽出し、部分的な発掘調査を実施した。

立会発掘調査：比較的小規模な工事区を対象としたもので、その掘削深度から記録保存の必要な立会調査aと、断面観察のみにとどめる立会調査bの2種に区別した。なお、立会発掘調査の概要は第3表昭和57年度発掘調査一覧表に委ねる。

なお、調査主体は八尾市教育委員会からその任を受けた財団法人八尾市文化財調査研究会が、分布調査の体制をそのまま引き継ぐ形で実施した。以下、各調査区の規模・期間等の詳細は、別に第3表で明示する。

第3表　発掘調査1調査一覧表

調査種別	調査区名	工事区名	調査対象	調査期間	所見
全面発掘調査	第1調査区	A－6－2	平面・断面 678㎡	昭和58年 1．11～24	自然河道 近世条里道溝
	第2調査区	A－9－3	平面・断面 678㎡	昭和58年 3．8～25	自然河道 水田・畦畔
部分発掘調査	ポイント1	A－5－1	断面	昭和58年1．28・29	近世条里遺構溝
	ポイント2	A－4－1		昭和58年2．7	旧大乗川
	ポイント3	A－3－1		昭和58年2．4	近世条里遺構溝
	ポイント4	A－3－1		昭和58年2．24	
	ポイント5	A－2－1		昭和58年3．24・25	
立会調査a	工事区名を使用	A－1－1	断面	昭和58年3．24・25	
		A－2－1		〃	近世・古代条里道構溝
		A－2－2		昭和57年12．11	
		A－3－1		昭和58年2．25	
		A－4－1		昭和58年1．31	近世条里遺構溝
		A－4－2		昭和57年12．11	
		A－5－1		昭和58年1．28	
		A－8－2		昭和58年3．24・25	
		A－9－2		〃	
		B－1－1		〃	
		B－1－2		〃	
		AT－5－1		昭和58年1．22	
		AT－6－1		昭和57年12．15・16	土師器・須恵器出土
		AT－6－2		昭和58年2．23	近世条里遺構溝
		BT－3－1		昭和58年2．22	
		BT－4－3		昭和58年2．18・19	
		BT－5－1		昭和57年12．17	
		BT－6－1		昭和57年12．15	土師器・須恵器出土
		BT－6－2		昭和58年3．14	
		C－4－2		昭和57年12．18	近世条里遺構溝
立会調査b	工事区名を使用	A－9－1	断面	昭和58年3．24・25	
		AT－1－1		昭和58年1．28	
		AT－2－1		〃	
		AT－3－1		〃	
		AT－4－1		〃	
		BT－1－1		昭和58年2．22	
		BT－2－1		昭和58年3．22	
		BT－4－2		〃	

第2節　全面発掘調査

1　第1調査区

函渠構築予定地（工事区名A－6－2）の工事に先だって実施した調査で、工事区に沿って東西11.3m・南北60mのトレンチを設定した。この位置は分布調査の第1トレンチの西側に近接することから、第1トレンチの調査結果に基づき、古代・近世条里遺構の存在有無と古代水田面の確認を主たる調査目的とした。

分布調査において確認した地表下1.2m（TP＋8.40m）付近の包含層の広がりは、当調査では確認し得なかった。以上から調査対象面を下層に移し、遺構・遺物の検出に務めた。その結果、調査区の南側で、東西方向に伸びる**自然河道1**を検出した。

なお、調査期間は昭和58年1月11日から1月24日まで、調査面積は678㎡を測る。

1）検出遺構

自然河道1

調査区の南端から12m付近で検出したもので、表土下1.6m（TP＋8.80m）付近から切り込んでいる。平面の形状は弧状を呈してわずかに北側へ曲がるもので、幅5.0m・深さ0.7mを測る。断面の形状は、南肩が途中で角度を変えて底部へ移行するのに比して、北肩は急角度で落ち込む等の差異があるが、概ねレンズ状を呈している。内部はほとんどが中砂を主体とする粗砂層で充填されており、土師器・須恵器等の細片が、極く少量出土した程度である。

なお、出土遺物からは直接時期を示すものは見出せなかったが、切り込み面は分布調査で判明した古代条里施行面と一致している。ただ、第91図調査地周辺条里復元図で見る限りでは、この位置は古代条里遺構溝の推定位置からは外れている。

2　第2調査区

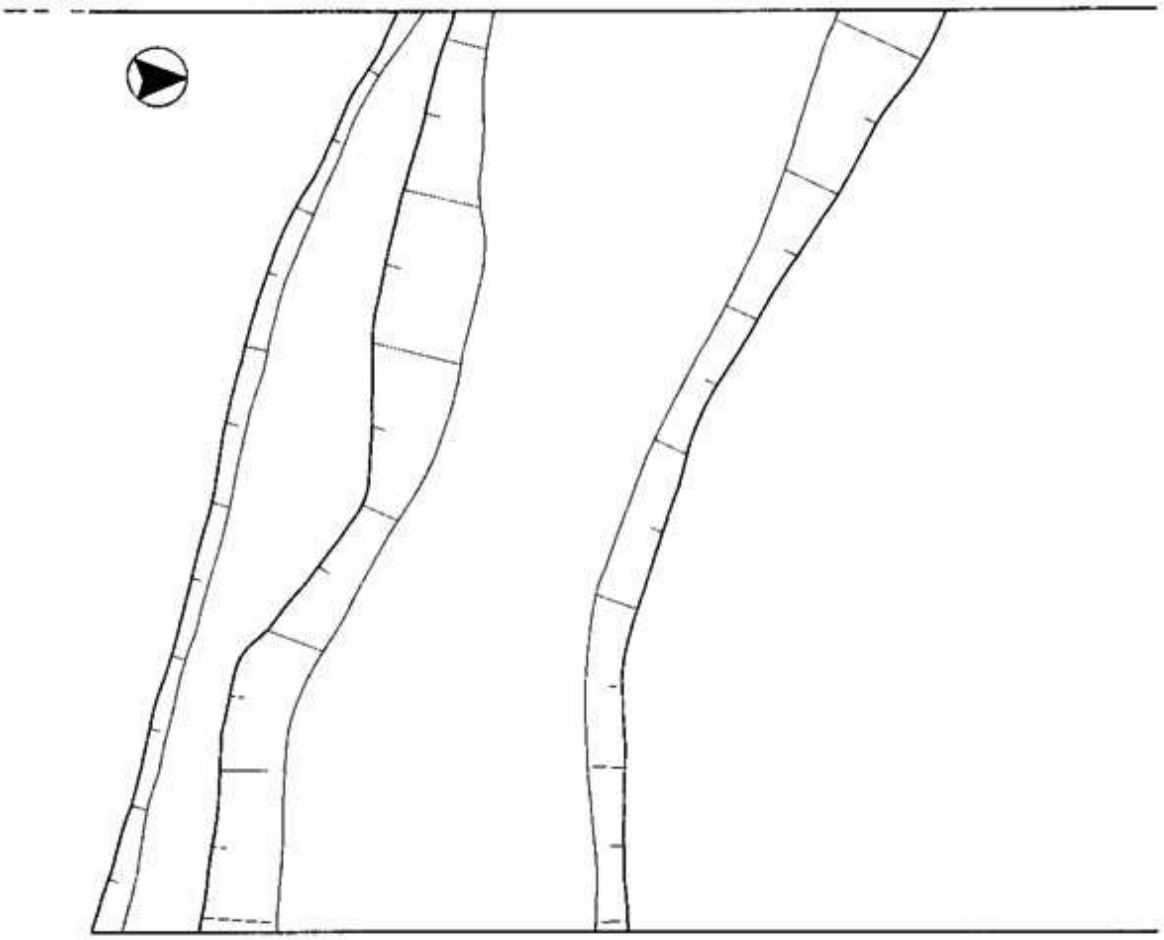
第1調査区の北側に続く函渠構築予定地（工事区名A－9－3）で、第1調査区と同規模の東西11.3m・南北60mを測る。ただ、調査区の東端から3mの地点に南北に伸びる既設の暗渠があり、この構築時の攪乱が顕著に認められたことから、既設暗渠より西側を調査対象とした。調査期間は昭和58年3月8日から3月25日までで、調査面積は678㎡を測る。

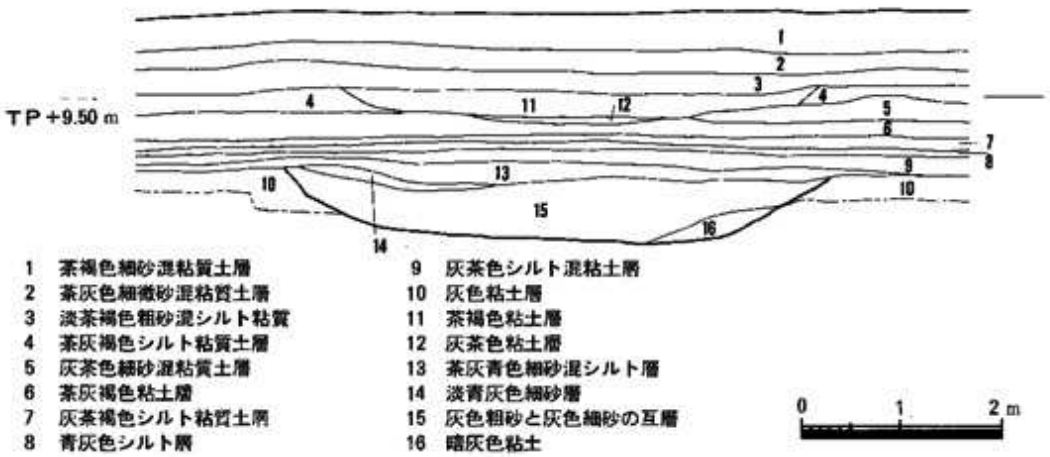
調査の結果、TP＋8.70mを切り込み面として東西方向を流路とする**自然河道2**と、**水田A**及び**畦畔1**を検出した。

1）検出遺構

自然河道2

調査区の北端から約25mの地点で検出した。東西方向に伸びるもので、幅12.5m・深さ1.6mを測る。断面の形状は南北肩ともに段を持ち、1段目と2段目の境にはテラス状の広がりを

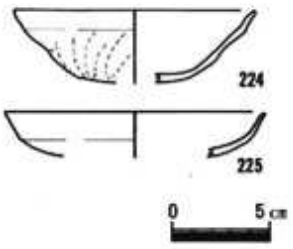




1 茶褐色細砂混粘質土層
2 茶灰色細礫砂混粘質土層
3 淡茶褐色粗砂混シルト粘質
4 茶灰褐色シルト粘質土層
5 灰茶色細砂混粘質土層
6 茶灰褐色粘土層
7 灰茶褐色シルト粘質土層
8 青灰色シルト層
9 灰茶色シルト混粘土層
10 灰色粘土層
11 茶褐色粘土層
12 灰茶色粘土層
13 茶灰青色細砂混シルト層
14 淡青灰色細砂層
15 灰色粗砂と灰色細砂の互層
16 暗灰色粘土

第34図　第1調査区自然河道1平断面図

有する。内部は細砂・中砂・小砂礫を主体とする土層が複雑に堆積しており、比較的水流の激しい河道であった可能性が推察できる。また、断面観察の限りでは、少くとも3時期に亘る流出土の堆積によって、この河道が完全に埋没したことが看取できる。この堆積土層内からは、分布調査で検出した古代条里遺構溝と同様に、平安時代中期を下限とする種々の土器類が出土したが、全て磨耗を受けた小破片であった（第35図）。



第35図　第2調査区自然河道2出土遺物実測図

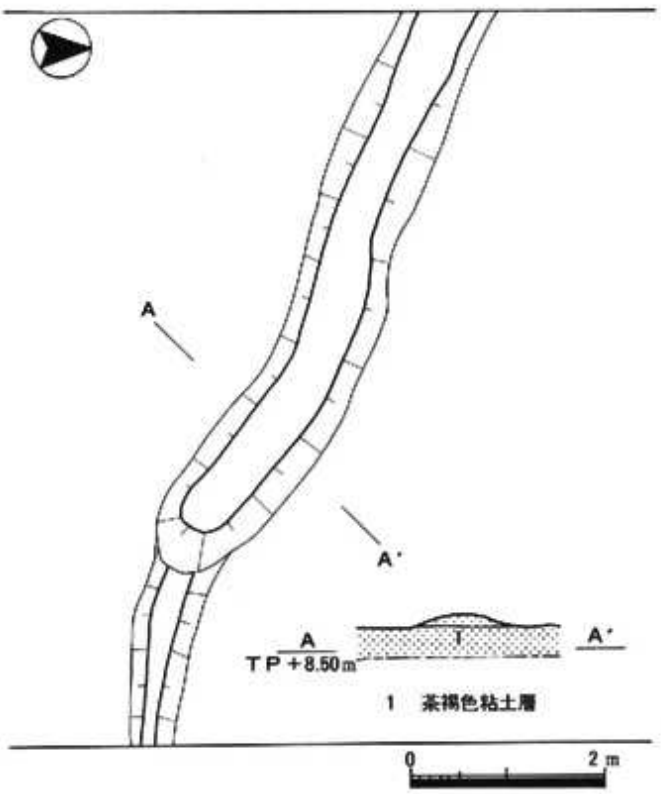
一方、この河道の切り込み面のレベル高はＴＰ＋9.00ｍ前後を測り、後述する水田面のレベル高より約0.3ｍ程度高い。しかし、この河道の北岸から北側へかけては、幅約5.0ｍ・厚さ0.3ｍに亘って灰茶色シルト混粘土が広がっており、この堆積を河道に伴う側道と解せば、水田と河道との同時併存が充分に考えられる。

なお、この河道は古代条里遺構溝の推定位置に一致しているため、条里区割の規制を受けて開掘された可能性が考えられる。

水田Ａ

水田は**畦畔1**より北側全域に広がっているが、調査区内では一筆耕地の地割単位等の詳細は不明である。比較的安定した堆積状況を示す第1層茶褐色粘土を耕作土としており、床面のレベル高はＴＰ＋8.70ｍを測る。水田面には大小の窪みが存在するものの、足跡や耕作に関連する痕跡は認められなかった。

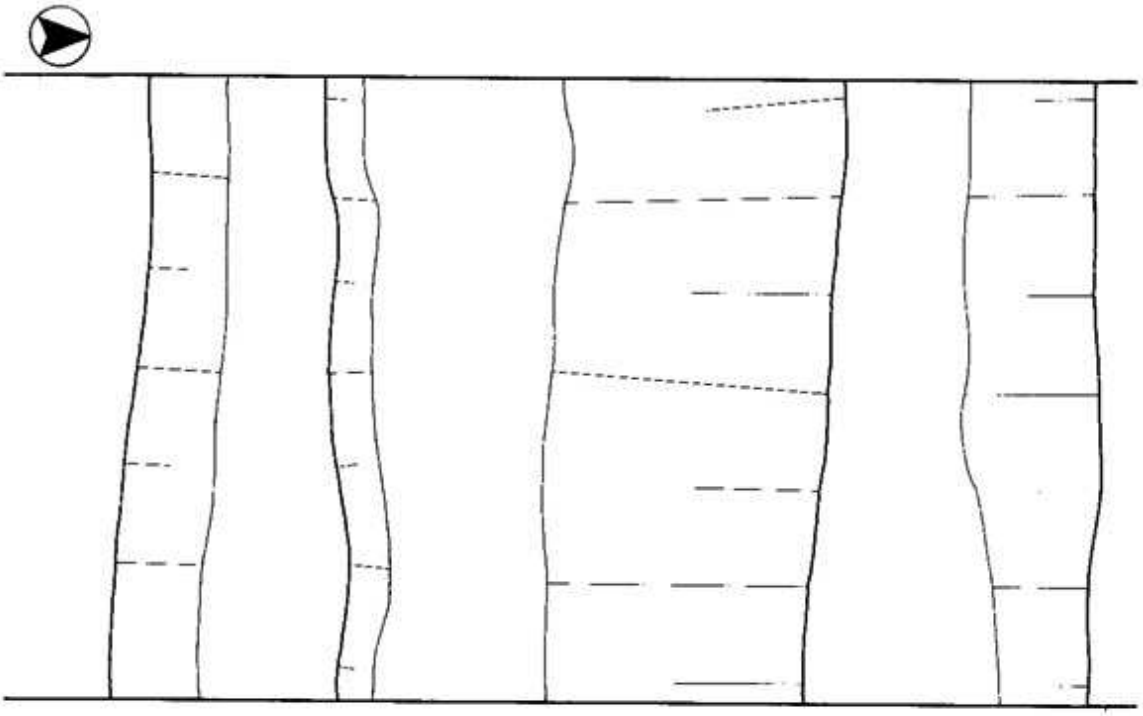
水田の上面には洪水に関連する青灰色シルトが15～20cm程度堆積しており、**自然河道2**の氾濫の時期が、当水田の埋没・放棄時期に一致するものと推定される。

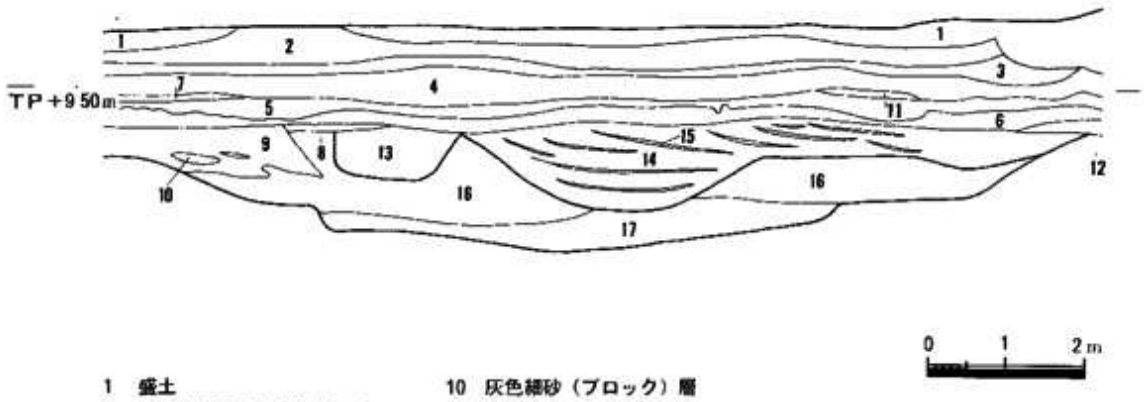


第36図　第2調査区畦畔1平断面図

畦畔1

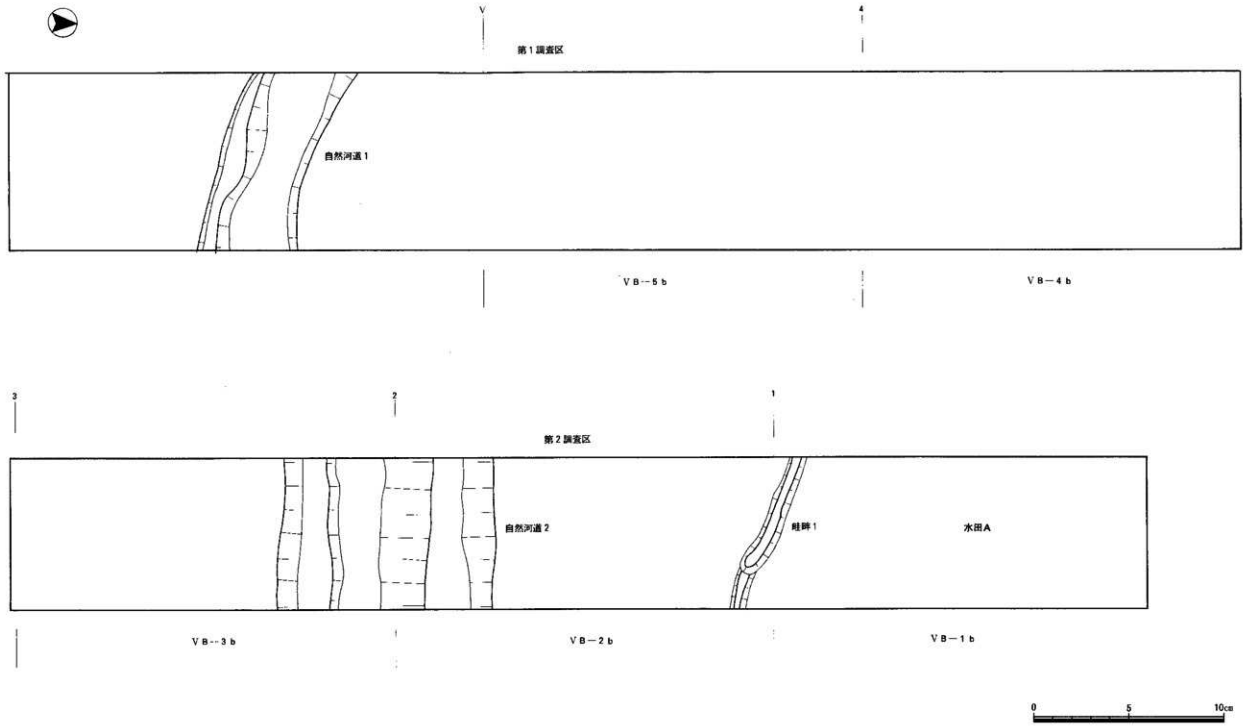
自然河道2から北へ約14ｍ地点





1 盛土
2 茶灰色砂質土（礫含む）層
3 茶灰色細砂層
4 茶灰色微粒砂層
5 淡茶褐色小砂混シルト層
6 茶灰褐色シルト混粘質土層
7 茶灰色微砂混粘土層
8 暗灰色シルト混粘土層
9 灰色シルト層
10 灰色細砂（ブロック）層
11 茶灰色シルト粘質土層
12 灰青色粘質シルト層
13 淡茶灰色細砂層
14 茶灰色細砂層
15 灰茶色微砂層
16 灰色細砂～粗砂層
17 茶灰色粗砂層

第37図　第2調査区自然河道2平断面図



第38図　第1調査区・第2調査区平面図

で検出したもので、調査区に対して斜方向に伸びる。断面の形状は概ね台形を呈し、上面幅50cm・基底幅100cm・高さ15cmを測る。畦畔は水出を構成する茶褐色粘土を盛り上げて構築されており、上面はほぼ平坦で足跡等の痕跡は認められない。

畦畔の東部に関しては、幅及び高さがともに減じていて不明瞭なため、この部分が水口の施設である可能性が考えられる。

第3節　部分発掘調査

部分発掘調査は、条里遺構溝該当地点でしかも掘削深度が表土下1.2mに達する工事掘削地区を対象して実施した。調査地の全域で11箇所（昭和57年度5箇所・昭和58年度6箇所）を設定し、各箇所を便宜上ポイント1～11と付称した。調査では平面及び断面を調査対象とし、記録保存を計るための資料の作成に務めた。

以下、各ポイント毎に詳細を記載する。

ポイント1

近世条里遺構溝：表土下0.6m（TP+9.70m）付近の灰茶色細砂混粘質土上面を構築面とするもので、断面はU字形を呈し、幅1.0m・深さ0.45mを測る。溝内の堆積土は、上層から淡灰茶色細砂混粘質土・灰青色シルトの2層で構成されている。

古代条里遺構溝：表土下1.4m（TP+8.80m）付近の暗灰茶色粘土層上面を構築面とするもので、幅6.5m・深さ0.4mを測る。溝内堆積土は、茶灰色の細砂と粗砂の互層である。

ポイント2

近世条里遺構溝：表土上面（TP+10.30m）を構築面とするもので、断面逆台形を呈し、幅3.3m・深さ1.0mを測る。内部堆積土は、上層が茶灰色砂質土・暗灰黒色砂質土の2層である。この溝遺構は、第92図調査区周辺小字名復元図で見る限りでは、旧大乗川の東に位置する側道に接した水路と想定される。

古代条里遺構溝：表土下1.85m（TP+8.35m）付近の灰色粘土層上面を構築面とするもので、幅6.1m・深さ0.6mを測る。内部堆積土は主に淡灰茶青色粗砂から成るが、部分的に微砂と粘質シルトの薄層が挟在している。これらの土層のうち淡灰茶青色粗砂は、溝内だけでなく、東西方向にも0.4m前後の厚さで広がっおり、この溝に関連する流出土と推

第39図　ポイント2古代条里遺構溝出土遺物実測図

定される。この層中には、平安時代中期を下限とする土器の細片がごくわずかに含まれており（第39図）、分布調査と同様の結果が得られた。

なお、この溝は上記の近世条里遺構溝からは約13m東側へずれていて、分布調査で確認した近世・古代条里遺構溝の一般的な重複関係とは著しく異なっている。以上のことからこの調査地点に関しては、古代条里遺構溝と旧大乗川が重複する関係にあるため、近世条里遺構溝を本来の区画とはずらせて設定した可能性が考えられる。

ポイント3

近世条里遺構溝：表土下0.4m（TP+9.80m）付近の灰褐色粘質土層上面を構築面とするもので、幅2.0m・深さ0.55mを測る。内部は、淡茶灰色細砂1層で充填されている。

古代条里遺構溝：古代条里遺構溝に該当する粗砂の広がりは認められたが、溝遺構自体の存在は明確にし得なかった。

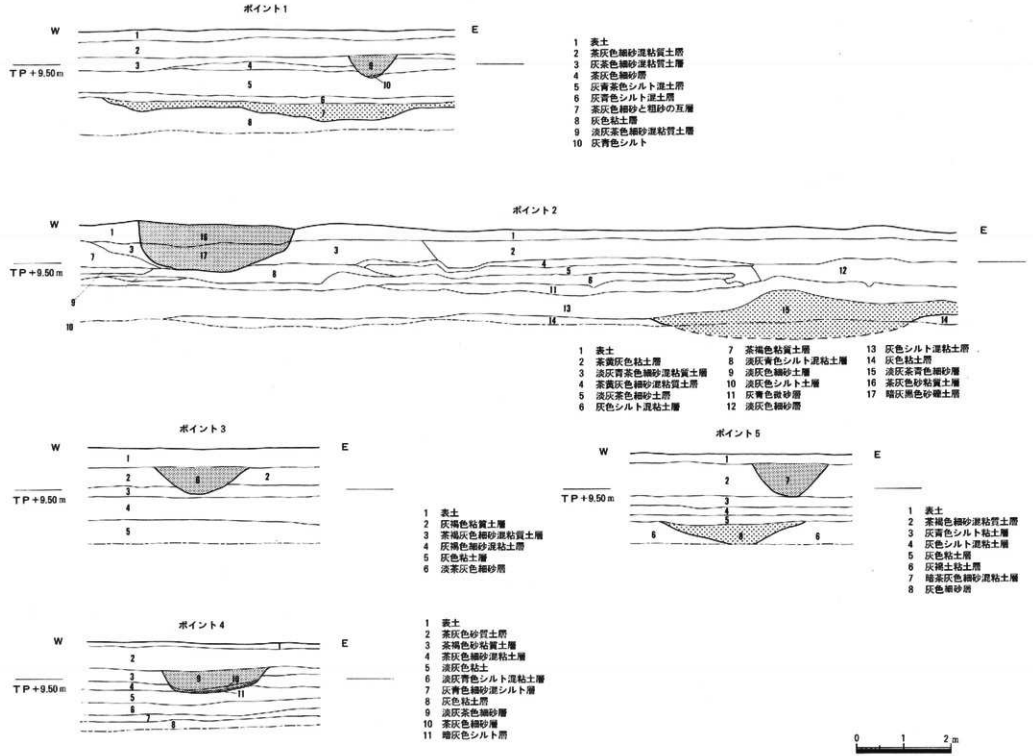
ポイント4

近世条里遺構溝：表土下0.6m（TP9.70m）付近を構築面とするもので、幅2.3m・深さ0.5mを測る。溝内堆積土は、上方から淡茶灰色細砂・茶灰色細砂・暗灰色シルトの3層から構成されている。

古代条里遺構溝：ポイント3と同様、粗砂の広がりをわずかに認める程度である。

第4表　発掘調査1部分発掘調査条里遺構溝一覧表

地点名	時期	規模 幅 (m)	規模 深さ (m)	検出レベル高 (TP値) (m)	備考	分布調査の照応地点	条里該当ライン名
ポイント1	近世	1.00	0.45	9.70	V字溝	1T—3a, 3b	D
	古代	6.50	0.40	8.80			
ポイント2	近世	3.30	1.00	10.30	近代まで使用	1T—2a, 2b	C
	古代	6.10	0.60	8.35	流出土層を伴う	3T—1a, 1b	
ポイント3	近世	2.00	0.55	9.80		1T—1a, 1b	B
	古代	—	—	—	未確認	6T—1a, 1b	
ポイント4	近世	2.30	0.50	9.70		2T—2a, 2b	A
	古代	—	—		未確認	4T—2a, 2b	
ポイント5	近世	1.60	0.70	10.00		2T—1a, 1b	F
	古代	3.20	0.40	8.80		4T—1a, 1b	



第40図　部分発掘調査（ポイント1～5）集里遺構溝断面図

ポイント5

近世条里遺構溝：表土下0.2m（ＴＰ＋10.0m）付近に広がる茶褐色粗砂混粘土層上面を構築面としている。断面はＶ字形を呈し、幅1.6ｍ・深さ0.7ｍを測る。溝内は暗茶灰色粗砂混粘土１層で充填されている。

古代条里遺構溝：表土下1.5m（ＴＰ＋8.80m）付近に広がる灰褐色粘土を構築面とするもので、幅3.2m・深さ0.4ｍを測る。溝内堆積土は灰色細砂の単一層である。上位の近世条里遺構溝とは1.2mの比高差を有して重複する関係にある。なお、照応する**１Ｔ－１ａ**とは構築面のレベル高・形状等が近似している。

第７章　発掘調査II（昭和58年度調査）

第１節　調査概要

昭和58年度の発掘調査は、先年度の調査と同様、工事区の掘削深度・規模に従って、全面発掘調査・部分発掘調査・立会発掘調査の３種に区別した。

全面発掘調査：本年度に実施した全面発掘調査は、第３調査区～第７調査区の５箇所で、総調査面積は3,690㎡を測る。なお、第６調査区は当初立会調査ｂの地区であったが、平安時代の遺物を多量に含む包含層が認められたため、全面発掘調査に切り替えた部分である。先年度の調査と同様、今年度も古代条里遺構溝の構築面を平面的に捉えることで、他の遺構との関係を明らかにし、当遺跡の位置付けを明確にすることに観点を置いた。

調査の結果、第３調査区と第５調査区で、古代条里施行時期に比定される水田と畦畔を検出した。さらに第６調査区では、先述の生産遺構とは別に、井戸・溝・柱穴等を検出し、両遺構間の有機的な関係を示唆する資料として、注目することができる。

部分発掘調査：条里遺構溝推定位置で、５箇所（ポイント６～11）を設定した。先年度の調査では、条里遺構溝に対してほぼ直角に交わる工事区であったことから、通有の断面の形状を捉えることができた。しかし本年度の工事区では、全ての条里遺構溝に対して斜方向に掘削する条件下の調査であったため、断面の形状及び数値等の記載に関しても、比較資料としては限界が感じられた。

立会発掘調査：立会調査ａ・ｂを含め、46箇所を調査対象としたが、先述した様に立会調査の結果から、２箇所の調査地点（工事区名Ｅ－４－１・Ｅ－５－１）で全面発掘調査を実施するに至った。この調査では、遺跡の範囲が調査地の東部にも広がることと、生産遺構以外の遺構を検出し、地道な立会調査の積み重ねの結果として、一応の成果が得られたと考えている。

第５表　発掘調査II調査一覧表

調査種別	調査区名	工事区名	調査対象	調査期間	所見
全面発掘調査	第３調査区	Ａ－９－３ Ａ－10－１	平面・断面 1,350㎡	８．３～10．20	水田・畦畔
	第４調査区	合流池上流	平面・断面 260㎡	８．３～８．26	水田
	第５調査区	合流池下流	平面・断面 120㎡	７．29～８．11	水田
	第６調査区	Ｅ－４－１ Ｅ－５－１	平面・断面 450㎡	６．27～８．１	弥生時代中期から鎌倉時代の遺構・遺物
	第７調査区	調整池	平面・断面 1,520㎡	11．６～ 昭和59年２．６	近世井戸 近世条里遺構溝

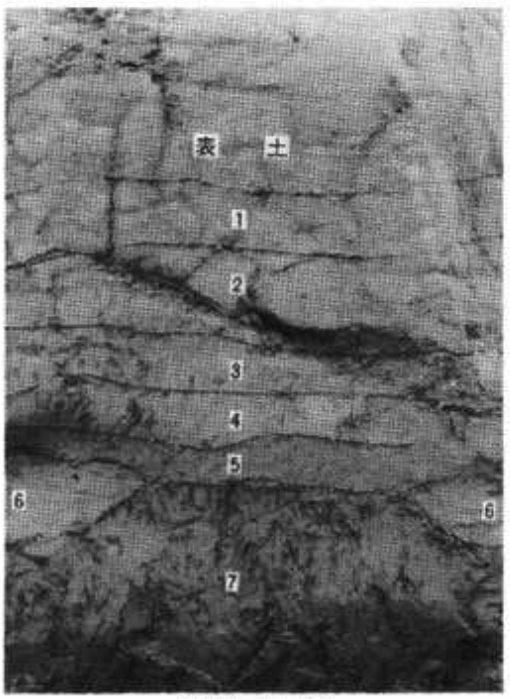
調査種別	調査区名	工事区名	調査対象	調査期日	所見
部分発掘調査	ポイント6	B－2－1	断面	6．24	近世・古代条里遺構溝
	ポイント7	B－3－1		6．23・24	〃
	ポイント8	B－3－1		6．15・17	古代条里遺構溝
	ポイント9	B－4－1		6．11・14	〃
	ポイント10	B－4－1		6．11	近世・古代条里遺構溝
	ポイント11	B－5－1		6．9	〃
立会調査a	工事区名を使用	B－2－1	断面	6．24	ポイント6と重複
		B－3－1		6．15	ポイント8と重複
		B－3－2		6．15	
		B－4－1		6．11	ポイント9と重複
		B－5－1		6．9	ポイント11と重複
		B－5－2		6．4・7	
		B－6－1		8．10	
		B－6－2		8．10	
		BT－6－3		5．18	近世溝
		BT－6－4		8．4	
		C－2－2		昭和59年2．29	
		E－2－1		6．8	
		J－1－1		10．29	
		J－1－2		10．29	
		J－1－3		10．24	
		J－1－4		10．24	
		J－1－5		10．21	
		J－2－1		8．27	
		J－2－2		8．27	
		J－2－3		6．11	
		J－2－4		5．19・23・24	
		S－5－2		12．9	
		S－9－1		12．24	
		S－9－2		10．21	
		S－7－1		12．24	
		S－8－1		昭和59年1．21	
		R－203		昭和59年1．21	
		R－205		昭和59年1．21	
立会調査b	工事区名を使用	A－6－1	断面観察		
		A－7－1		昭和59年2．29	
		A－8－1		昭和59年2．29	
		C－1－1		昭和59年2．29	
		C－2－1		昭和59年2．29	
		C－3－1		昭和59年2．29	

調査種別	調査区名	工事区名	調査対象	調査期日	所見
立会調査b	工事区名を使用	E－4－1	断面観察	6．18	
		E－1－1		4．18	
		E－2－2		6．18	
		E－3－1		6．18	
		E－4－2		6．27～8．1	全面発掘調査
		E－6－1		6．27～8．1	第6調査区に変更
		E－7－1		7．30	
		E－7－2		7．30	
		E－8－1		7．30	
		E－9－1		7．9	
		E－9－2		7．1	
		E－10－1		8．1	
		E－11－1		8．27	
		E－11－2		8．27	

第2節　全面発掘調査

1　第3調査区

先年度の第2調査区の北側に続く函渠構築予定地（工事区名A－9－3）で、幅11.4m、長さ109mを測る。調査区は「く」の字形を呈し、南端から35mまでは北方向、以後は北東に伸びる。先年度の調査と同様、古代条里施行面の検出と水田関係遺構の実態把握に重点を置いて調査を実施した。調査期間は昭和58年8月3日から10月20日までで、総調査面積は1,242㎡を測る。



第41図　基本層序

調査の結果、TP＋8.8m付近を中心として、**水田A～水田G・畦畔2～畦畔8・自然河道3**を検出した。なお、当調査に先立って八尾市教育委員会が実施した調査で**畦畔3・畦畔4**に続く畦畔を検出しており、両者の関係を明らかにするため、第42図平面図に併せて記載した。

1）基本層序

第3調査区の基本的層序は、既往調査の調査成果とほぼ同様の様相を呈している。堆積土層は、盛土以下第1層茶灰色粗砂混砂質土(旧表土)20～40cm、第2層茶灰色微砂混砂質土15～35cm

第3層淡茶褐色粗砂混砂質土10～50cm、第4層茶灰褐色粘質土10～30cm、第5層灰茶色シルト混粘土10～35cm、第6層青灰色シルト10～15cm、第7層茶褐色粘土25cm以上で構成されている。その内、第1層から第5層間においては、第5層で瓦器椀の細片がわずかに散見しているのが認められた以外は皆無であり、遺構面の存在も認められなかった。以下、第5層・第6層はシルトを主体とする土層で、洪水等を起因とする堆積土と推定される。第7層は、古代末期の水田面を構成するもので、既往調査で確認したように調査地全域に広がる土層で、ＴＰ＋8.70ｍ前後を中心としている。

2）検出遺構

a　水田

茶褐色粘土を耕作土とするものである。水田床面のレベル高はＴＰ＋8.7～8.5ｍ前後を測り、全体的に北東へ向って徐々に低くなっているが、それぞれの水田をみると**水田Ａ**は北東から南西へ、**水田Ｂ・水田Ｃ**は南から北へ、**水田Ｄ～水田Ｇ**は南西から北東へ傾斜を有している。

水田Ａ

先年度の第2調査区で検出した**水田Ａ**の北部分である。北側を**畦畔2**で**水田Ｂ**と区画されており、今年度の調査によって南北幅30ｍを測ることが確認された。**畦畔2**から15～20ｍ南の地点で約10cmの比高差を測る緩やかな段を持つ。床面のレベル高は、段の南側ではＴＰ＋8.70ｍと第2調査区内の床面レベル高と同数値を示している。

水田Ｂ

水田Ａの北に位置する水田で、南側を**畦畔2**・北側を**畦畔3**で区画されており、南北幅約20ｍを測る。床面のレベル高はＴＰ＋8.70ｍとほぼ平均している。

水田Ｃ

水田Ｂの北に位置し、南側を**畦畔3**・東側を**畦畔4**で区画されている。床面のレベル高はＴＰ＋8.73～8.67ｍを測る。水田面の北東隅から**畦畔4**の北端にかけて、耕作の痕跡もしくは足跡と推定される窪みを若干検出している。

水田Ｄ

水田Ｃの東に位置し、南側を**畦畔3**・西側を**畦畔4**・東側を**畦畔5**・北側を**畦畔6**で区画されている。南東部が調査区外へ至るものの、東西約14ｍ・南北約20ｍの長方形を呈する一筆耕地を復元することができる。床面のレベル高はＴＰ＋8.60ｍを測る。水田面の北端で、**水田Ｃ**と同様の窪みを検出している。

水田Ｅ

水田Ｄの東に位置し、西側を**畦畔5**・北側を**畦畔6**で区画されている。床面レベル高はＴＰ

+8.60前後を測る。水田面には足跡と推定される窪みが認められる。

水田F

水田D・水田Eの北に位置し、南側を**畦畔6**・東側を**畦畔7**で区画されている。床面のレベル高はＴＰ＋8.60～8.50ｍを測る。この水田の耕作土の上面には、青灰色シルトが5㎝程度堆積した後、更に茶灰色粘土が約5㎝堆積している。以上の堆積状況からこの水田は、青灰色シルトの堆積によって水田の機能を一旦失ったが、その後再び上面に茶灰色粘土を盛り、同じ水田区画で耕作を行ったものと推定される。

水田G

水田Fの東に位置し、西側を**畦畔7**・東側を**畦畔8**で区画されている。床面のレベル高はＴＰ＋8.56～8.50ｍとほぼ平均している。なお、この水田上面では**水田F**と同様の堆積状況が認められた。

ｂ．畦畔

東西方向に伸びるもの３本（**畦畔2**・**畦畔3**・**畦畔6**）、南北方向に伸びるもの４本（**畦畔4**・**畦畔5**・**畦畔7**・**畦畔8**）を検出した。これらの畦畔は、全て、水田の耕作土である茶褐色粘土を盛り上げて構築されている。

畦畔2

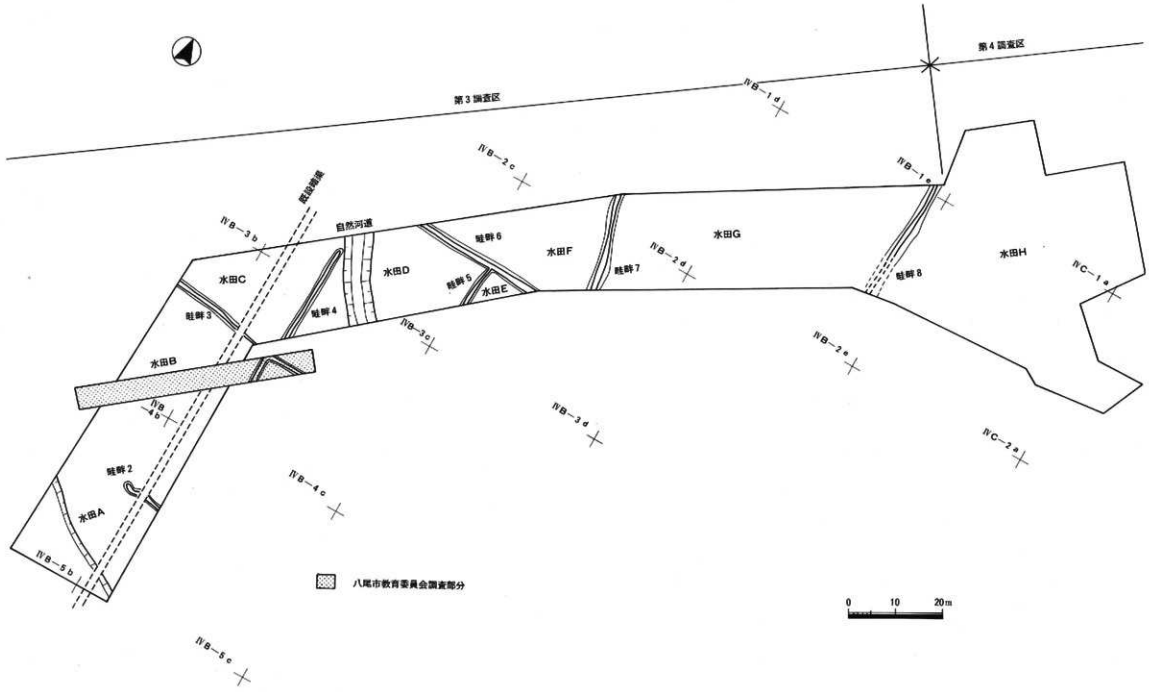
調査区の南端から約20ｍの地点で検出した。**水田A**と**水田B**を区割して東西方向に伸びるが、調査区西端から４ｍ付近で幅を減じて北へ屈曲した後丸く終る。検出長は4.4ｍを測り、断面は半円形を呈す。上面幅40～55㎝・基底幅55～80㎝を測る。高さは８～14㎝を測り、東から西へ徐々に高くなっている。

畦畔3

畦畔2から北へ約20ｍ地点に位置し、水田Ｂと水田Ｃを区画している。東西方向に直線的に伸び、検出長は9.6ｍを測り、断面は半円形を呈する。上面幅は西側50㎝・東側30㎝を測り、東へ徐々に狭くなっているが、基底幅は約70㎝程度と平均している。高さは東側21㎝・西側14㎝で、西へ向って漸減している。

畦畔4

調査区の南部で検出した南北方向の畦畔で、**水田B**と**水田C**を区画している。調査区南東端から11.2ｍの地点で丸く終り、断面は台形を呈している。上面幅は北側44㎝・南側24㎝を測り、南から北へ徐々に広くなっているが、基底幅は80㎝前後と平均している。高さは南側23㎝・北側４㎝と北へ向って低くなり、末端部はほぼ平坦である。末端部を中心として、多数の足跡状遺構を検出した。なお、八尾市教育委員会が実施した試掘調査の結果、**畦畔3**と**畦畔4**が交差して、さらに伸びることが確認されている。



第42図　第3調査区・第4調査区平面図

畦畔5

畦畔4から東へ約14mの地点に位置し、**畦畔4**と同様南北方向に伸びて**水田D**と**水田E**を区画しており、**畦畔6**とT字形に接続している。検出長は4.6mを測り、断面は半円形を呈する。上面幅は南側38cm・北側20cm、基底幅は南側70cm・北側50cmを測る。高さは南側13cm・北側5cmと幅・高さ共に北に向って漸減している。

畦畔6

畦畔5の北に位置し、東西方向に伸びて**水田D・水田E・水田F**を区画している。検出長は14.2mを測り、断面は半円形を呈している。上面幅は東側60cm・西側55cm、基底幅は東側105cm・西側85cmで、共に東から西へ漸減している。高さは東側14cm・西側20cmで、西側が若干高い。なお、畦畔の両斜面から基底部にかけて、灰茶色細砂層を埋土とする足跡状の窪みを若干確認している。

畦畔7

畦畔6に直角に接続すると推定されるもので、南北方向に伸びているが、途中で角度をやや西よりに振っている。**水田F**と**水田G**を区画し、検出長は約10m、断面の形状は台形である。上面幅28～58cm、基底幅72～104cm、高さ12～16cmを測る。

畦畔8

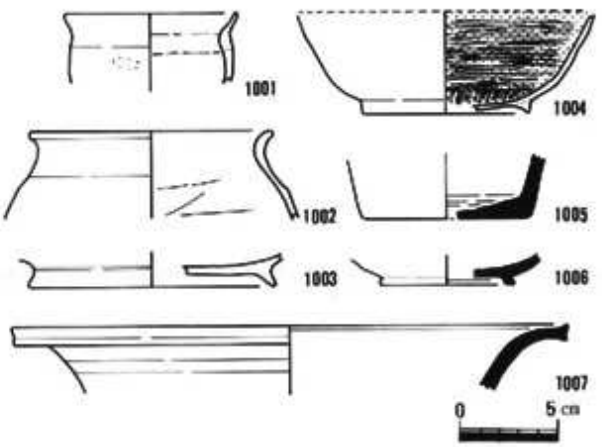
畦畔7から東へ約55mの地点に位置する畦畔で、**水田G**と**水田H**を区画している。南北方向に伸び、検出長12.4mを測る。断面は半円形を呈する。上面幅は30～42cm・基底幅は102～155cm、高さは15～22cmを測る。なお、この畦畔は上面幅を比して基底幅が広く、他の畦畔とは平面的な形状を異にしている。

c．自然河道

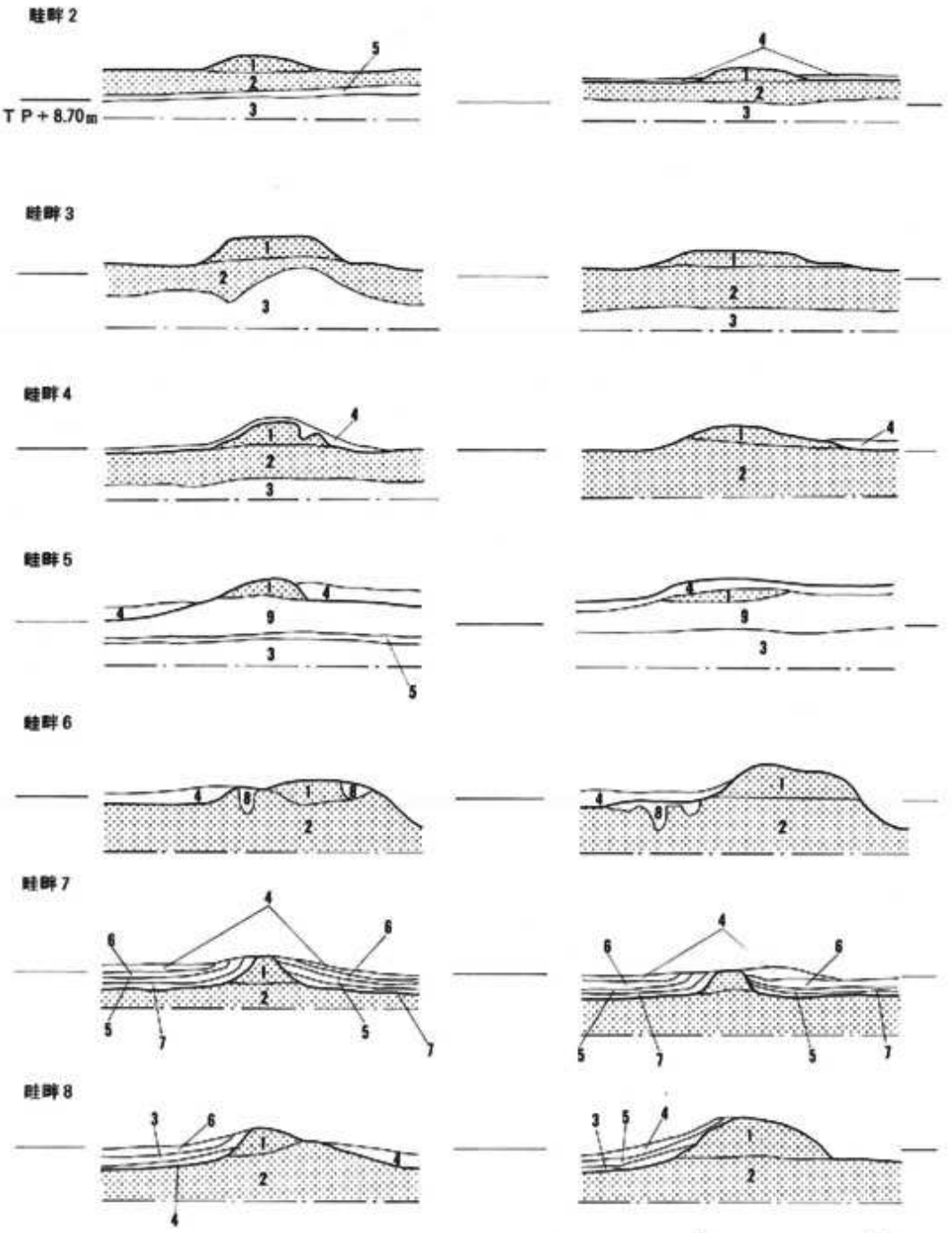
自然河道3

水田D内の西側で検出した自然河道で流路は南東から北西である。検出面は、水田遺構埋没に関与した堆積土層である青灰色シルトの上面で、内部の堆積土は、淡灰茶色細砂の単一層である。

断面の形状は、底部に向って緩やかな傾斜を有しており、幅3.0～3.2m・深さ0.1～0.15mを測る。遺物は、土師器・須恵器・黒色土器の細片が少量出土している（第43図）。



第43図　第3調査区自然河道3出土遺物実測図



1　茶褐色粘土層（畦畔）　4　灰青色シルト層　7　青灰色シルト層
2　茶褐色粘土層　5　茶灰色粘土層　8　灰茶色細砂層
3　暗灰色粘土層　6　灰茶色シルト層　9　灰色粗砂層

第44図　第3調査区畦畔2～畦畔8断面図

この自然河道の流路は、当調査区内の畦畔の構築に共通した方位とは一致せず、水田耕作に伴う水路とは言い難い。しかし、河道内の出土遺物で見る限りでは、水田埋没時とはさほど時間的な経過を持たない時期の流路と考えられる。

2　第4調査区

第3調査区の北東に続く調査区で、工事予定地である合流池上流全面について調査を実施した。調査期間は昭和58年8月3日から8年26日、調査面積は260㎡を測る。

調査の結果、第3調査区に続いて**水田H**を検出し、東側の壁面で近世条里遺構溝及び古代条里遺構溝が重複する部分を確認した。なお、層序は第3調査区を参考にされたい。

1）検出遺構

a．水田

水田H

水田Gの東に位置し、**畦畔8**を境として調査区全面に広がっている。**水田A～水田G**と同様、茶褐色粘土を耕作土としており、床面のレベル高はＴＰ＋8.58～8.40ｍと南西から北東へ徐々に低くなっている。

b．条里遺構溝

近世条里遺構溝

当調査区東側の壁面で、盛土を切り込んで南北方向に流路を持つ近世条里遺構溝を確認している。この溝の東側の肩は、昭和57年度の排水管埋設工事に伴う立会調査で確認していることから、幅約4ｍ、深さ1.55ｍを測ることが判明した。この溝は旧大乗川の流路に一致している。分布調査の結果と同様、内部には灰色粗砂が堆積している。

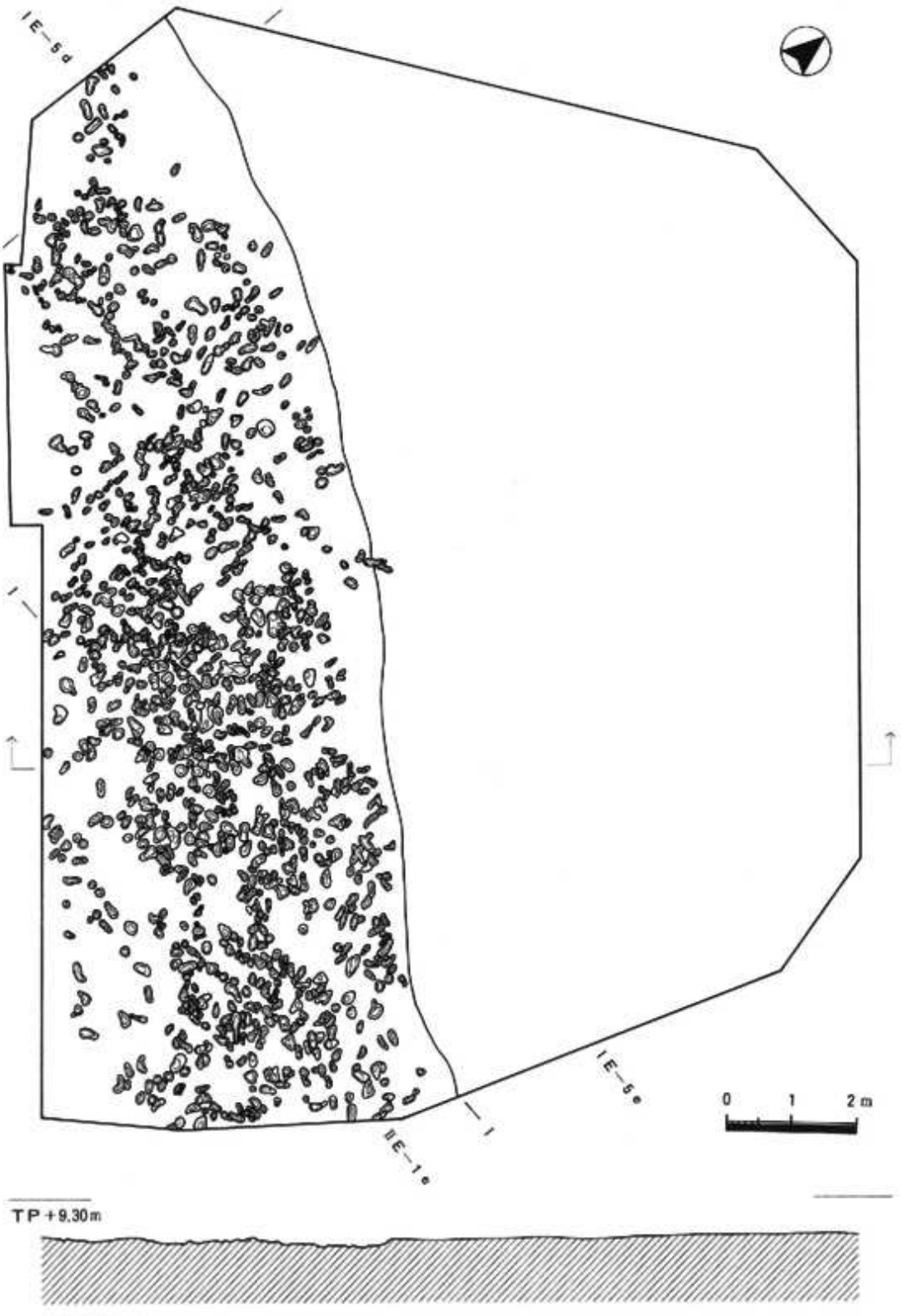
古代条里遺構溝

前述の近世条里遺構溝の下方約0.5ｍで、粗砂層の堆積を確認した。この粗砂層は、**水田H**の耕作土である茶褐色粘土層を切り込んでいることや、近世条里遺構溝とほぼ重復した位置にあることから、溝としての明確な形状は確認していないものの、古代条里遺構溝に比定できる。

3　第5調査区

三角地の北端に位置する合流池下流側を第5調査区とし、全面発掘調査を実施した。調査期間は昭和58年7月29日から8月11日までで、調査面積は120㎡を測る。

この調査区は、分布調査の第5トレンチから北西約400ｍの地点に位置していることから、第5トレンチの調査で明らかにされた近世・古代条里遺構溝の確認を主たる目的とし、調査を実施した。調査の結果、表土下約1.2ｍで、**水田1**を検出した。



第45図　第5調査区平断面図

1）検出遺構

a．水田

水田Ⅰ

調査区の中央部より西側で検出した。なお、**水田Ⅰ**は水田面を区画する畦畔を伴わないが、第2調査区・第3調査区・第4調査区で検出した水田遺構の構築面と照応することや、足跡状遺構を多数検出したことから、ここでは水田遺構とした。

この水田は灰色粘土を耕作土としており、床面のレベル高はＴＰ＋8.90～8.80m前後を測り、北から南へ向って緩やかな傾斜を有している。水田面上部には河道の氾濫を起因とする細砂が堆積しており、第2調査区・第3調査区・第4調査区の水田面上部で検出したシルトを主体とする比較的穏やかな堆積状況とは異っている。

足跡状遺構は水田面全面で検出した。足跡状遺構の形状は、足形・円形・不定形の3種があり、内部は一様に水田面を被う細砂で充填されている。そのうち足形のものは、無秩序な状態で検出され、歩く方向が一定しておらず、単一歩行として捉えることができなかった。ただ、比較的遺存状態の良好なものに限定して方向性を捉えると、東西および南北方向のものが多く見られた。これらの足跡の遺存状況および方向性は、耕作に伴う歩行の際のもの、あるいは水田内のある一定の部分を歩道として利用していた等の要因が考えられるが、一筆耕地の単位が明確でない現時点では推測の域を越えない。その他足形のもの以外では円形・不定形が混在しており、前者に関しては動物の足跡とも推定できるが、後者には規則性が認められず判然としない。

なお、水田の東側には足跡状遺構が少なく、未耕地と推定され、水田遺構と土地利用法を考えるうえで注目される。

4　第6調査区

第6調査区はＢ滑走路の北側に沿って伸びる水路構築予定地（工事区名Ｅ－4－1・Ｅ－5－1・Ｅ－6　1）である。当地区は当初立会発掘調査ｂの該当区であったが、立会調査で遺構・遺物を確認したことから、全面発掘調査に移行した地区である。調査に先立って予備調査を実施し、遺物の包含が認められた南東端から160m部分に限って全面発掘調査を行うことに決定したが、既設水路開削時に遺構面が削平を受けている部分があり、調査対象面は幅2mに限定された。調査期間は昭和58年6月27日から8月1日で、調査面積は450㎡を測る。調査に際しては、調査区南東端から北西へ20m毎に基準杭を設置し、調査区を1区～8区に区分した。

調査の結果、1区で弥生時代中期と古墳時代前期の土坑・溝、2区～7区で平安時代中期から鎌倉時代前期に比定される井戸・土坑・溝を検出した。

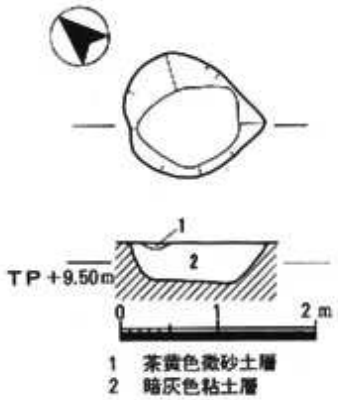
1）基本層序

当調査区は掘削深度が浅いにもかかわらず、弥生時代中期から鎌倉時代に至る雑移な遺物が出土している。したがって、調査区の堆積土層の様相も複雑で、基本層序の統一も困難である。

遺物包含層は、弥生時代中期から古墳時代前期の遺物を含むものと、平安時代中期から鎌倉時代初頭の遺物を含むものとに大別できる。前者は調査区の南東端に限定される黒灰色砂質土で、SK－1・SK－2・SD－1・SD－2・SD－3の遺構上面に堆積している。後者は表土下0.6～1.1m（TP＋10.10～9.70m）に存在する暗灰茶色細砂混粘質土で、平均層厚20cmを測る。この層は4区・5区では欠如するが6区・7区には存在し、7区の北西端を境として8区ではその存在を認めない。

第46図　第6調査区調査風景

一方遺構面は表土下0.9～1.1m前後に広がるが、全体に単一的に捉え得る土層はなく、各地点毎で土層の様相を異にしている。遺構毎に区別すれば、2区のSE－1・SE－2・SD－1・SP－3が灰色粗砂層、3区のSD－4・SD－5・SK－3が灰色砂質土層、4区のSE－3・SE－4は洪水による堆積土である灰色砂礫層、5区以降は全て黄灰色シルト層をベースにしており、遺構の種類に応じて構築場所を選定している。



第47図　第6調査区SE－1平断面図

2）検出遺構

a．井戸（SE）

井戸状遺構は2区と4区で計4基を検出した。全て上面が円形を呈する素掘井戸で、湧水面が高いためか、掘削深度も比較的浅い。構築面は灰色粗砂層ないしは灰色砂礫層で、他の遺構の設定地とは異なり、井戸機能の本質である湧水を得られる地点を選んで開掘したことが窺える。

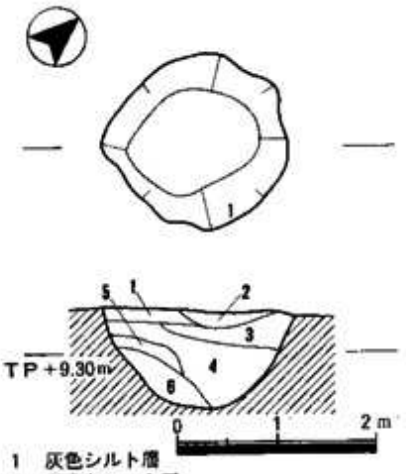
これらの井戸遺構を時期毎に区別すれば、SE－1・SE－2が12世紀、SE－3・SE－4が11世紀後半に推定される。

SE－1

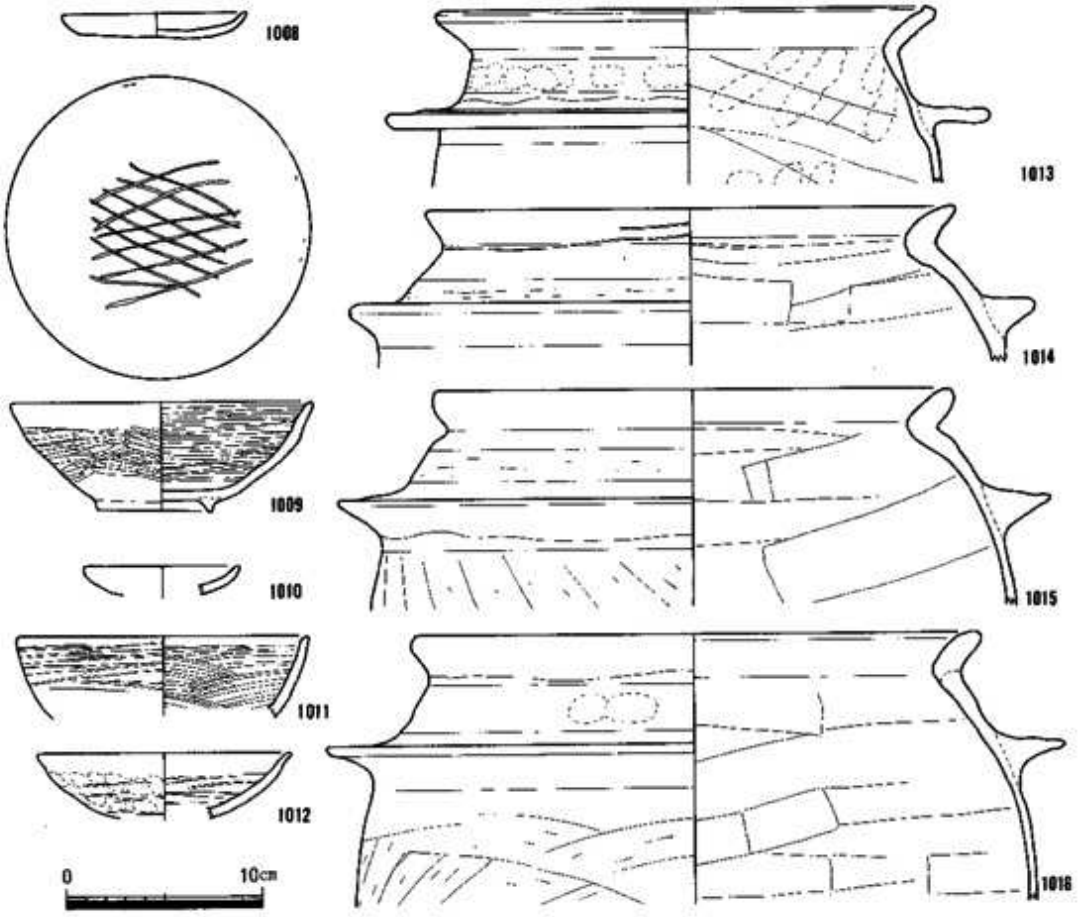
2区で検出した素掘井戸で、上面は円形を呈している。上面径65～70cm・底部径40～50cm・深さ20cmを測る。内部堆積土は上方の茶黄色微砂と下方の暗灰色粘土の2層で構成されている。なお、最下層は湧水層である灰色粘土層に達しており、調査中多量の出水が認められた。遺物は下層の暗灰色粘土層から、土師器小皿と瓦器椀が出土している（第49図）。

SE－2

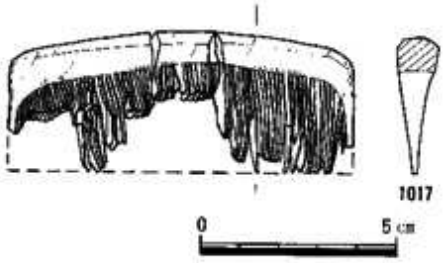
SE－1の東側で検出した井戸遺構で、SE－1と同様灰色粗砂層の上面を構築面としている。上面は円形を呈し、上面径90cm・底部径55～65cm・深さ50cmを測る。内部堆積土層は、上方から灰色シルト・灰青色シルト・



第48図　第6調査区SE－2平断面図



第49図　第6調査区SE－1（1008・1009）、SE－2（1010～1016）出土遺物実測図



第50図　第6調査区SE－3出土遺物実測図－1（櫛）

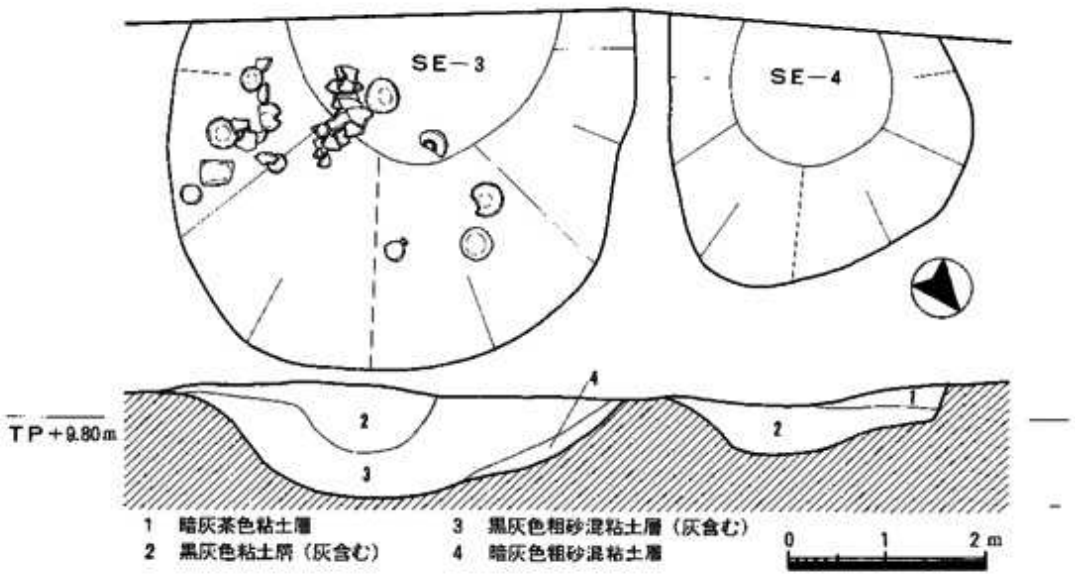
淡灰青色シルト・灰色粘土・灰青色細砂・暗灰色粘土で、淡灰色シルト層から土師器小皿・羽釜・瓦器椀が出土している（第49図）。

なお、出土した羽釜は全て底部を欠損する資料で、この井戸遺構に伴う井戸枠であった可能性が窺える。

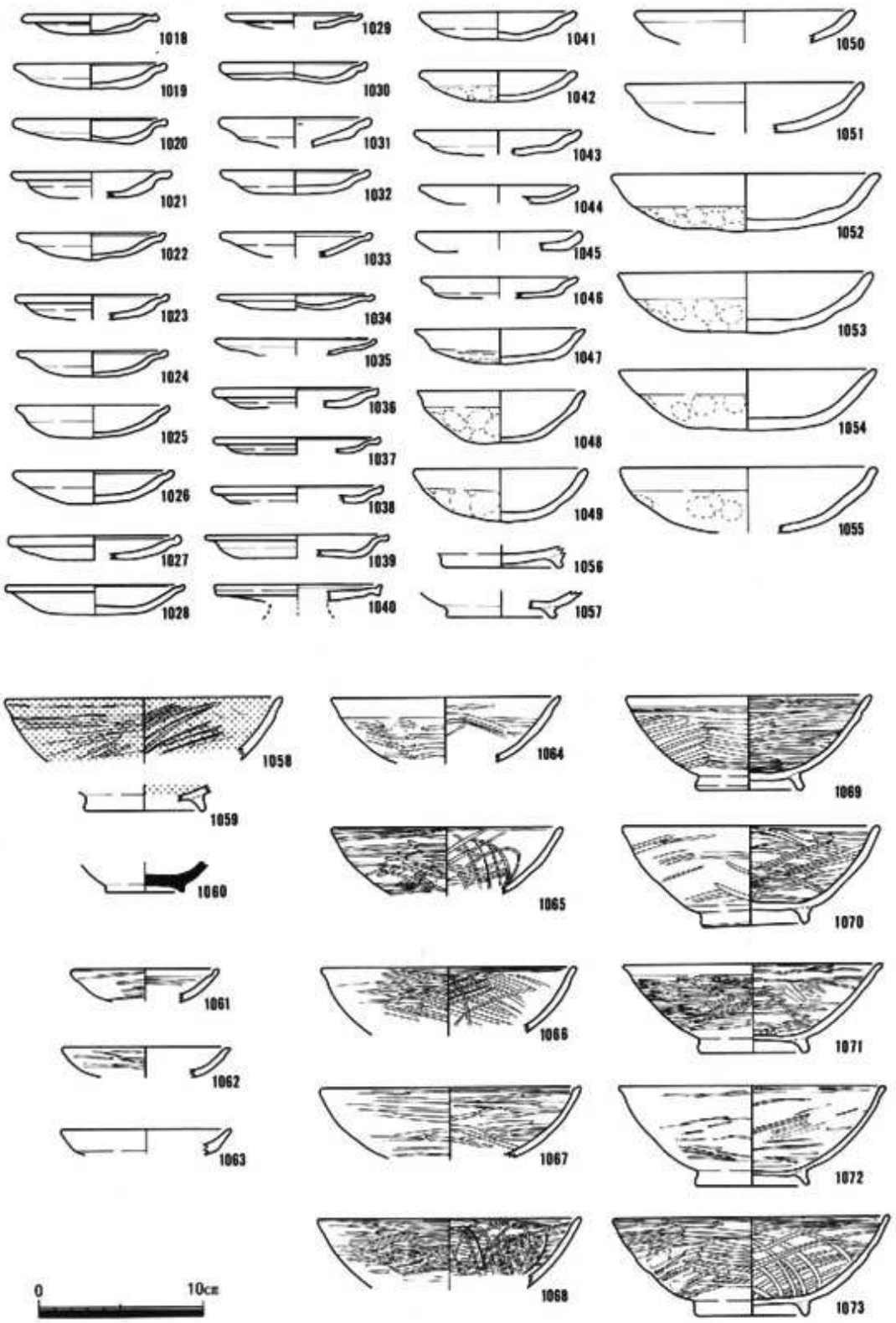
SE－3

4区の西壁付近で検出した。検出部の上面はほぼ半円形で、断面は擂鉢形を呈する。検出部上面径230cm・底部径135cm・深さ60cmを測る。内部堆積土は井戸付近に付随すると考えられる南側の堆積土層も含めて考えると、上方より暗茶色粘土・黒灰色粘土（灰を含む）・黒灰色粗砂混粘土（灰を含む）・暗灰色粗砂混粘土の4層から構成されている。そのうち主な遺物包含層は黒灰色粘土・黒灰色粗砂混粘土の2層で、内部から土師器小皿・中皿・小型杯・杯、黒色土器椀、瓦器椀・小皿等が比較的良好な形で出土した（第52・53図）。なお、遺構内特に最下層に灰の存在が認められ、遺物にも二次火熱を受けて白色・赤色に変化したものが多く認められた。ただ、後述するように当遺跡のこの時期の遺構に関しては、この様な土層堆積が一般的であり、出土遺物も一部を除いては、二次火熱を受けた後に廃棄されたものと考えられる。

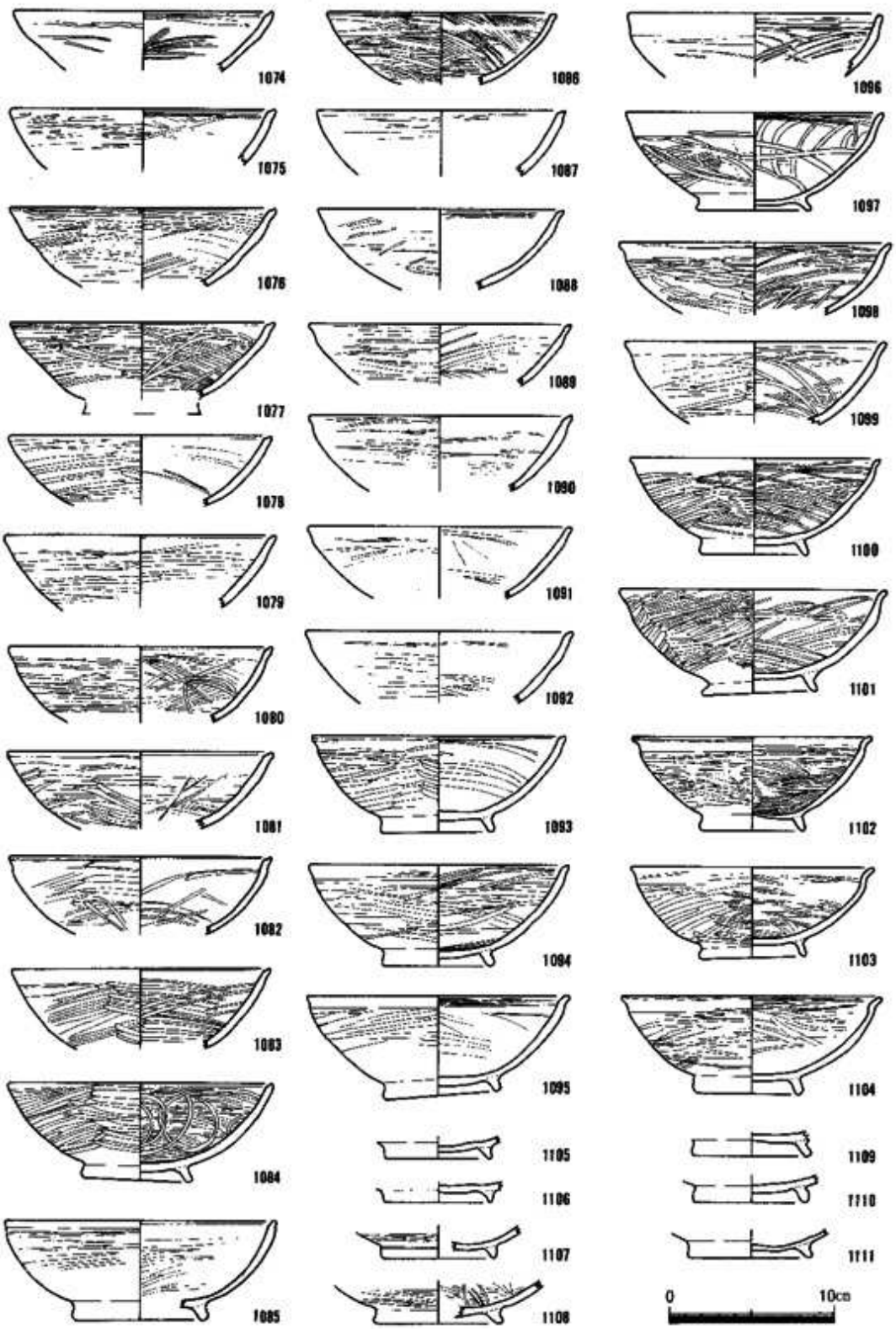
第50図は黒灰色粗砂混粘土から出土した櫛である。土圧のために彎曲しているものの、遺存状態は比較的良好である。背の部分には面取りが成され、櫛目は1cmあたり11本を数える。



第51図　第6調査区SE－3・SE－4平断面図



第52図　第6調査区ＳＥ－３出土遺物実測図－２（土師器皿・杯、黒色土器椀、須恵器壺、瓦器小皿・椀）

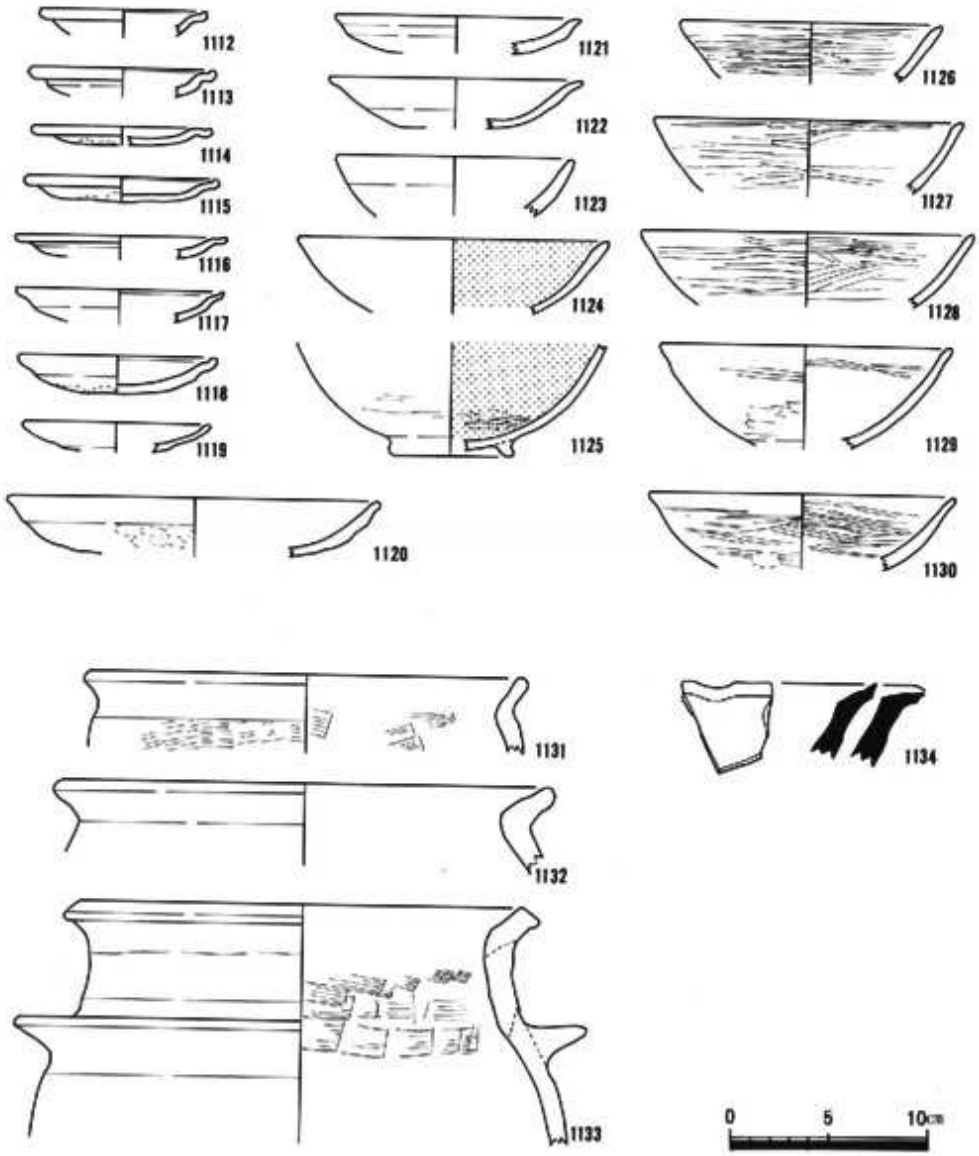


第53図　第6調査区ＳＥ－3出土遺物実測図－3（瓦器椀）

SE－4

SE－3の北隣で検出した素掘井戸である。SE－3同様西側は調査区外へ至るために不明であるが、検出部の上面径150cm・底面径80cm・深さ20cm前後を測る。内部堆積土は、上方の灰色粘土と下方の黒灰色粘土の2層から構成されており、最下層は湧水層である灰色粗砂に達している。遺物は上下層の双方から土師器小皿・中皿、須恵器壺、甕、瓦器椀等の破片が出土した。

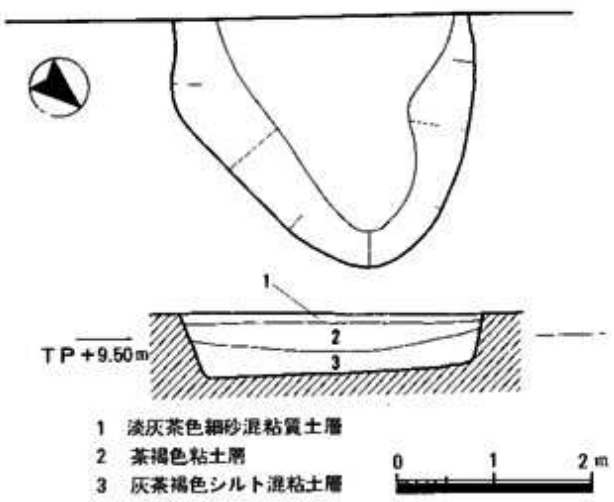
なお、SE－1～SE－4の井戸遺構は、調査地の中でも旧河川あるいは洪水等を起因とする灰色砂礫土の堆積地を選んで開掘されている。



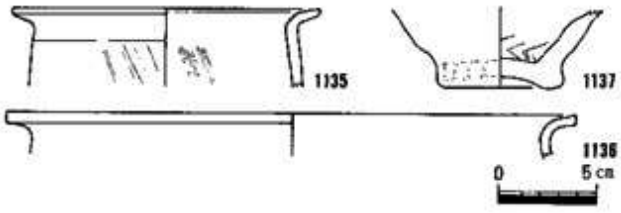
第54図　第6調査区SE－4出土遺物実測図

b．土坑（ＳＫ）

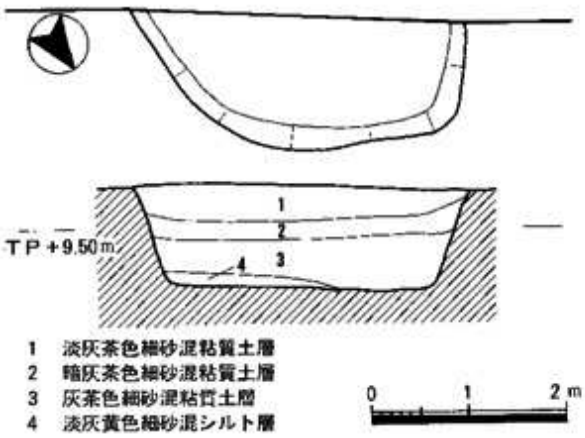
土坑状遺構は、調査区全体で７箇所検出している。ＳＫ－５を除いては小規模のものが多く、遺物も概して少ない。時期別では、ＳＫ－１～ＳＫ－３が弥生時代中期から古墳時代前期、ＳＫ－４～ＳＫ－７が平安時代後期から末期に比定される。



第55図　第６調査区ＳＫ－１平断面図



第56図　第６調査区ＳＫ－１出土遺物実測図



第57図　第６調査区ＳＫ－２平断面図

ＳＫ－１

調査区の南端で検出した遺構で、北側でＳＤ－１を切り込む。西側は調査区外のため全容は不明であるが、検出部幅（南北）140cm・深さ10cm前後を測る。内部堆積土層は、上方から淡灰茶色細砂混粘質土・茶褐色粘土・灰茶褐色シルト混粘土の３層で構成され、遺物は茶褐色粘土層を中心に弥生時代中期の壷・甕等の破片が少量出土している（第56図）。

ＳＫ－２

ＳＫ－１の北側で検出した遺構で、南側でＳＤ－１を切り込む。ＳＫ－１と同様、西側は調査区外のため全容は不明であるが、検出部幅（南北）170m・深さ30cmを測る。内部堆積土層は上方より淡灰茶色細砂混粘質土・暗灰茶色細砂混粘質土・灰茶色細砂混粘質土・淡灰黄色細砂混シルトから構成されている。遺物は弥生時代中期の壷の細片が出土している。

ＳＫ－３

３区の西壁付近で検出した。検出部で半円形を呈し、幅140cm・深さ15cm前後を測る。内部からは弥生時代前期の壷を初めとして、須恵器・黒色土器・瓦器等の細片が出土した。

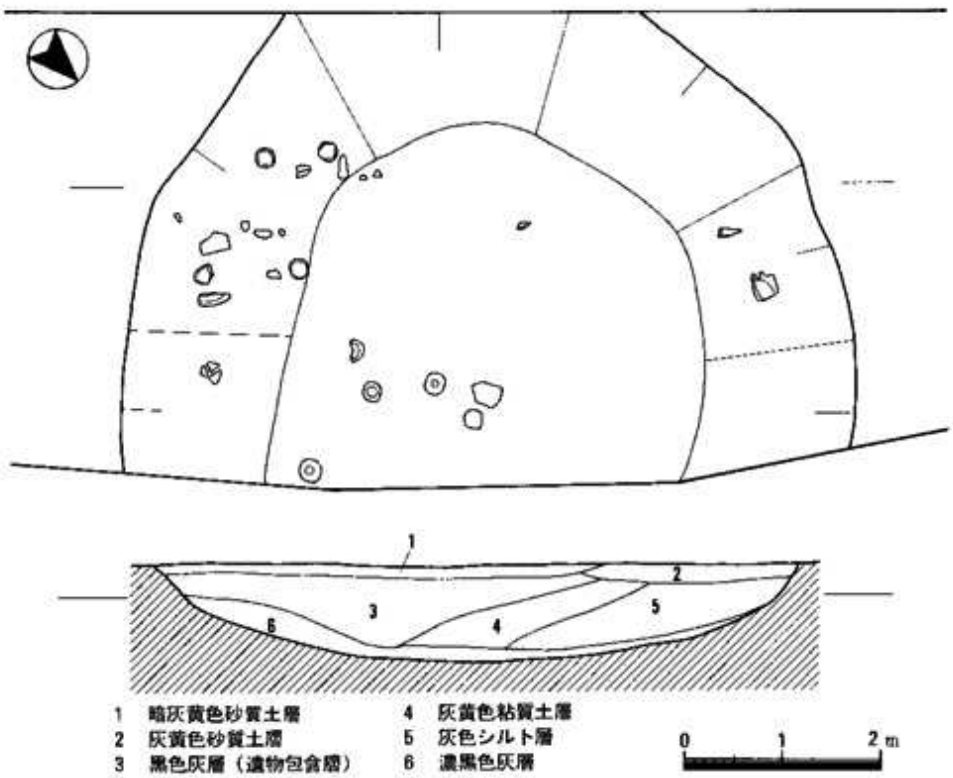
SK－4

6区で検出した土坑で、上面不定形を呈し、南北幅70～150cm・深さ15cm前後を測る。内部には茶灰色細砂混粘質土・灰茶色細砂混粘質土・暗灰茶色細砂混粘質土・淡茶黄色シルト混粘土・茶灰色粘質土が複雑に堆積しており、弥生時代中期から平安時代末期に至る種々の土器が細片で少量出土している。

SK－5

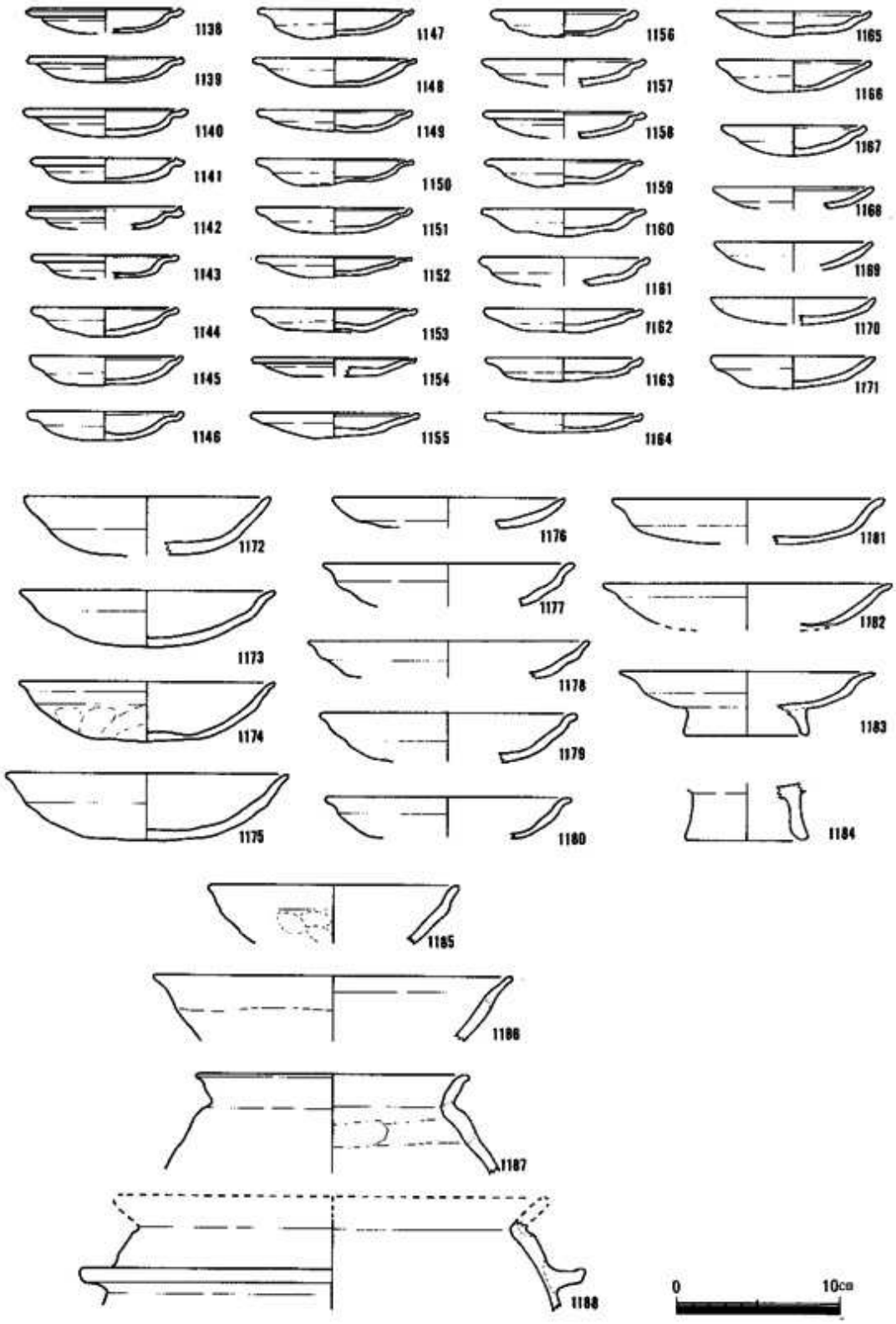
7区で検出した。上面円形を呈する土坑で、断面は半円形を呈する。上面形430cm・底径210cm・深さ50cmを測る。内部の堆積土層は、上方より暗灰黄色砂質土・灰黄色砂質土・黒色の灰・灰黄色粘質土・灰色シルト・濃黒色の灰の6層で構成されている。遺物は黒色の灰層及び灰色シルトから出土しているが、主な包含層は前者で、土師器小皿・中皿、須恵器壺・甕、黒色土器椀・片口鉢、瓦器椀・小皿、中国産白磁碗の他、焼土（スサを含む）・桃の種子・馬の歯等が出土した（第59図～第61図）。

なお、堆積状況は最下層の濃黒色灰層が底部全体に薄く堆積した後、時間的な空白を隔てて黒色灰層がレンズ状に再堆積している。灰層の堆積そのものは当遺跡においては普遍的であるが、明瞭に二時期に分かれる灰層が認められる遺構は当遺構のみであるため、上部に堆積する灰層は焼土坑の性格を帯びたものと理解できる。

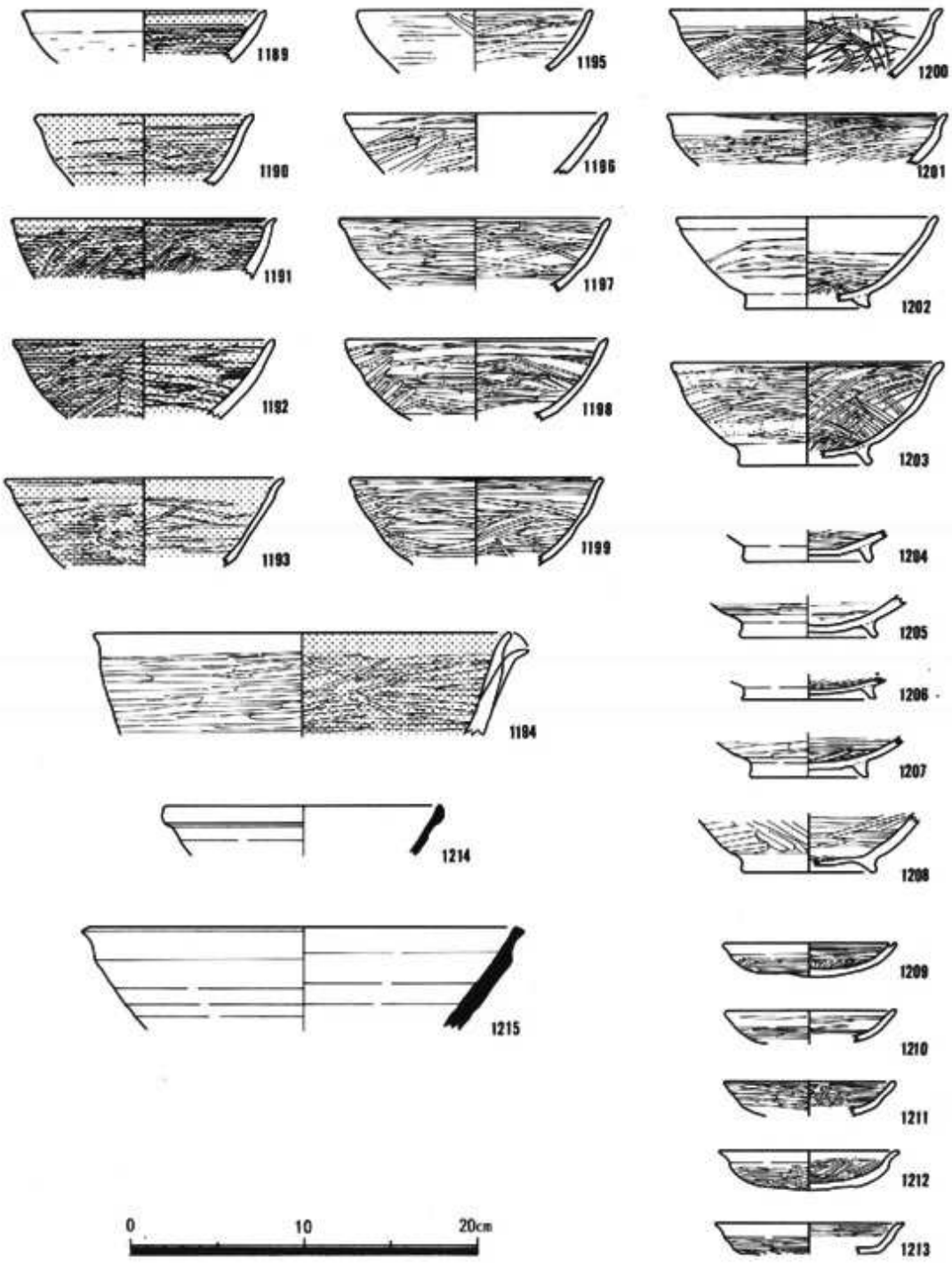


1　暗灰黄色砂質土層
2　灰黄色砂質土層
3　黒色灰層（遺物包含層）
4　灰黄色粘質土層
5　灰色シルト層
6　濃黒色灰層

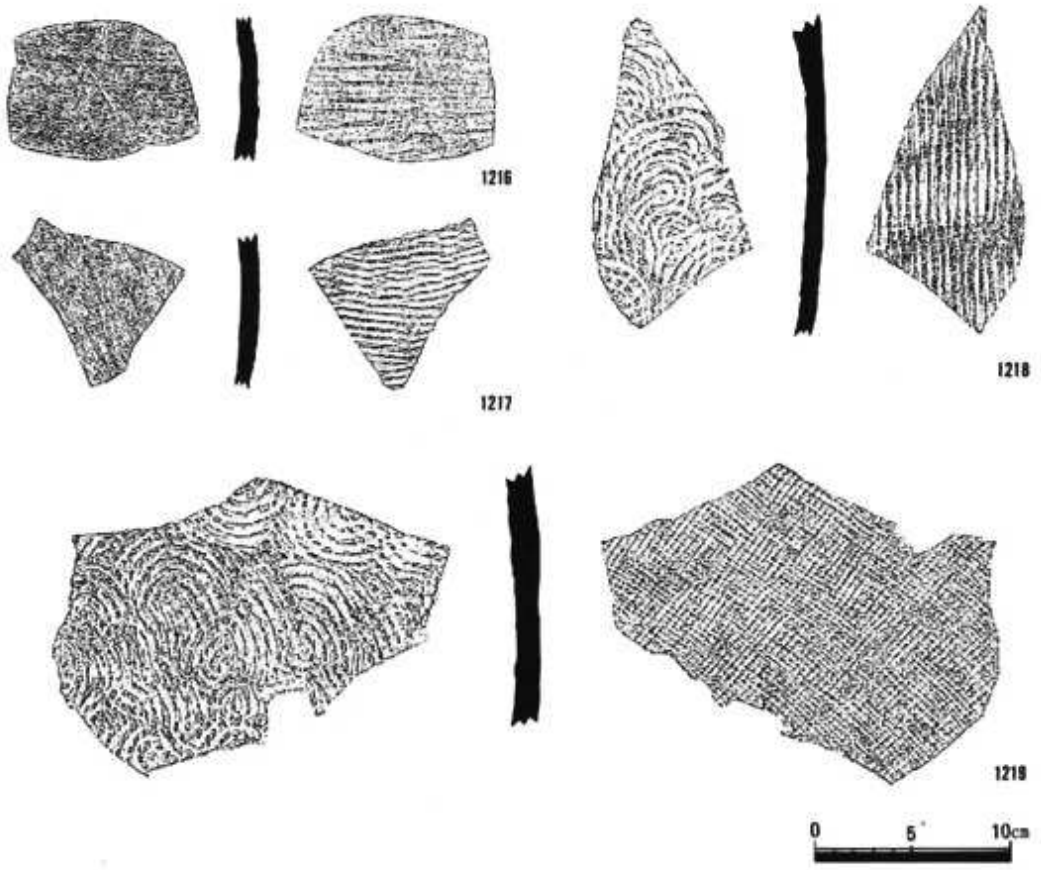
第58図　第6調査区SK－5平断面図



第59図　第6調査区ＳＫ－５出土遺物実測図－１（土師器小皿・中皿・台付皿・杯・甕・羽釜）



第60図　第6調査区ＳＫ－５出土遺物実測図－２（瓦器椀・小皿、黒色土器椀・鉢、白磁椀、須恵器鉢）



第61図　第６調査区ＳＫ－５出土須恵器拓影

ＳＫ－６

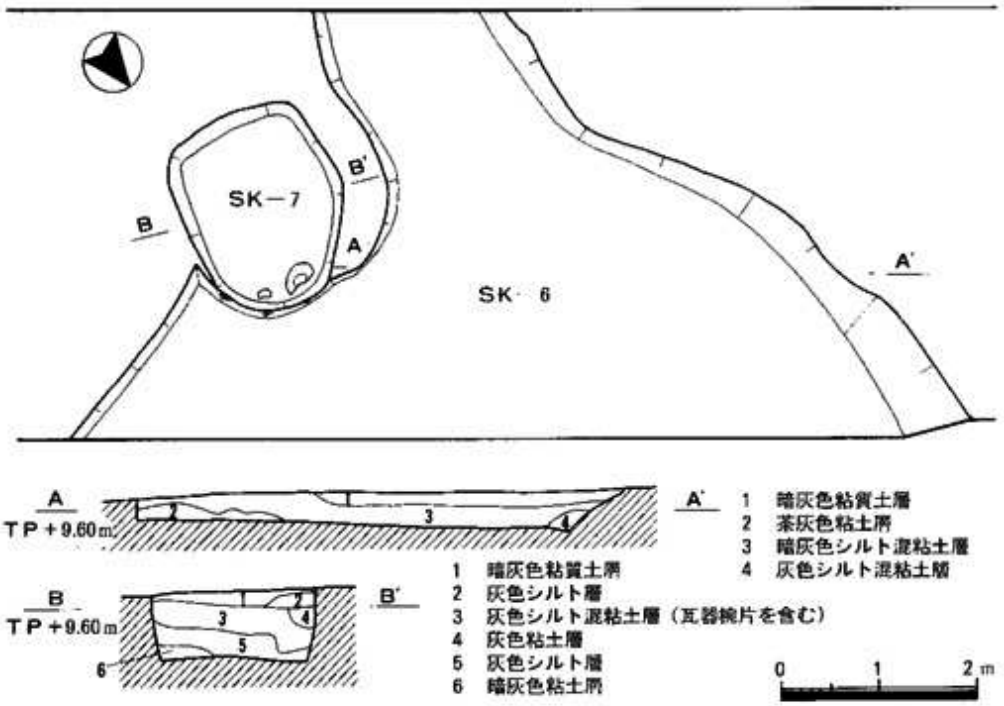
５区で検出した。検出部の形状は西から東へ扇形に広がる土坑で、底部は水平である。内部堆積土は暗灰色粘質土・茶褐色粘土・暗灰色シルト混粘土・灰色シルト混粘土の４四層から構成されている。遺物は暗灰色シルト混粘土から土師器小皿・中皿・羽釜、瓦器椀等の破片が少量出土した（第63図）。

ＳＫ－７

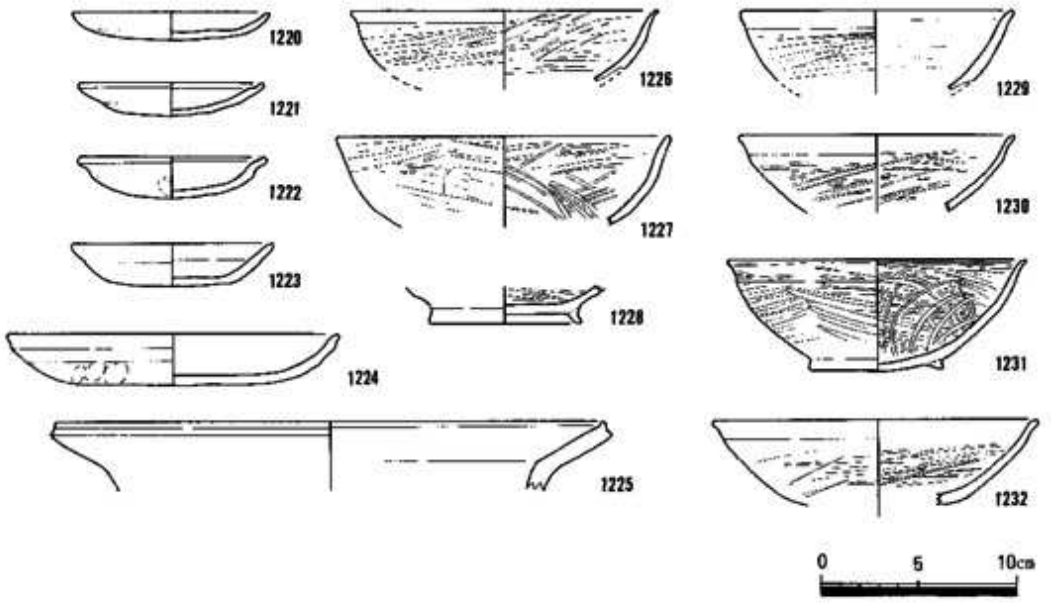
上面楕円形を呈する遺構で、東側はＳＫ－６を切り込んでいる。長径100cm・短径85cm・深さ35cmを測る。内部の堆積土は、上方から暗灰色粘質土・灰色シルト・灰色シルト混粘土・灰色粘土・灰色シルト・暗灰色粘土から構成されており、灰色シルト混粘土層から瓦器椀等が出土している（第63図）。

ｃ．溝（ＳＤ）

溝状遺構は調査区全体で11本を検出している。ただ、調査範囲が限定されているため、性格は明確にはし難いが、ＳＤ－１・ＳＤ－２・ＳＤ－３・ＳＤ－11を除いては、概ね東西方向に

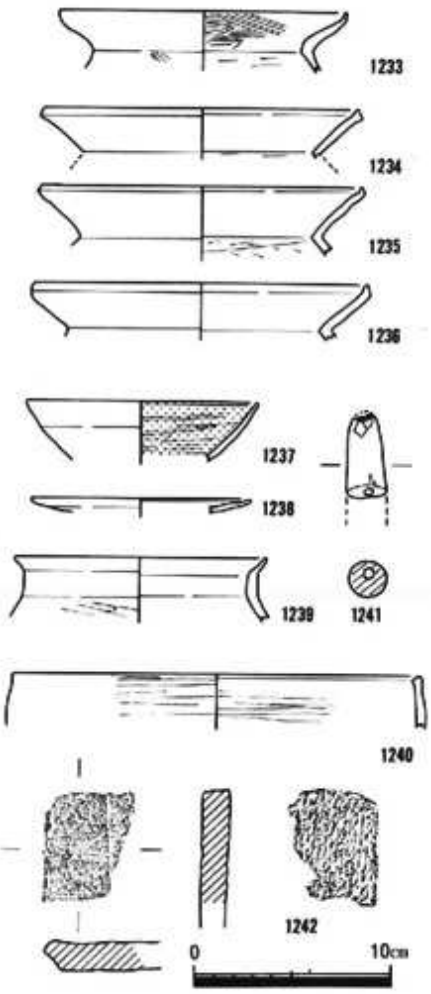


第62図　第6調査区SK－6・SK－7平断面図



第63図　第6調査区SK－6（1220～1228）、SK－7（1229～1232）出土遺物実測図

伸びるものと南北方向に伸びるものとに大別でき、一部は条里遺制に関係した溝状遺構の可能性も考えられる。時期別では、SD－1～SD－3が弥生時代中期から古墳時代前期、SD－4～SD－11が平安時代中期から平安時代末期に比定できる。



第64図　第6調査区SD－1（1233）、SD－3（1234～1336）、SD－4（1237～1242）出土遺物実測図

SD－1

調査区南東端で検出した。南北方向に伸びる遺構で、検出部の東端付近で東へ屈曲している。幅60cm前後・深さ5～10cmを測る。内部堆積土は上方から灰色細砂混粘土・茶灰色細砂である。溝内からは弥生時代中期から古墳時代前期に至る種々の土器片が少量出土している（第64図）。

なお、検出部南端は、SK－1とSK－2によって一部を切り込まれている。

SD－2

SD－1の西側を南北方向に伸びる遺構で、検出部北端付近で東へ屈曲している。幅40cm前後・深さ5cmを測り、堆積土層はSD－1と同様である。溝内からは時期不詳の土器の細片が極くわずか出土している。

SD－3

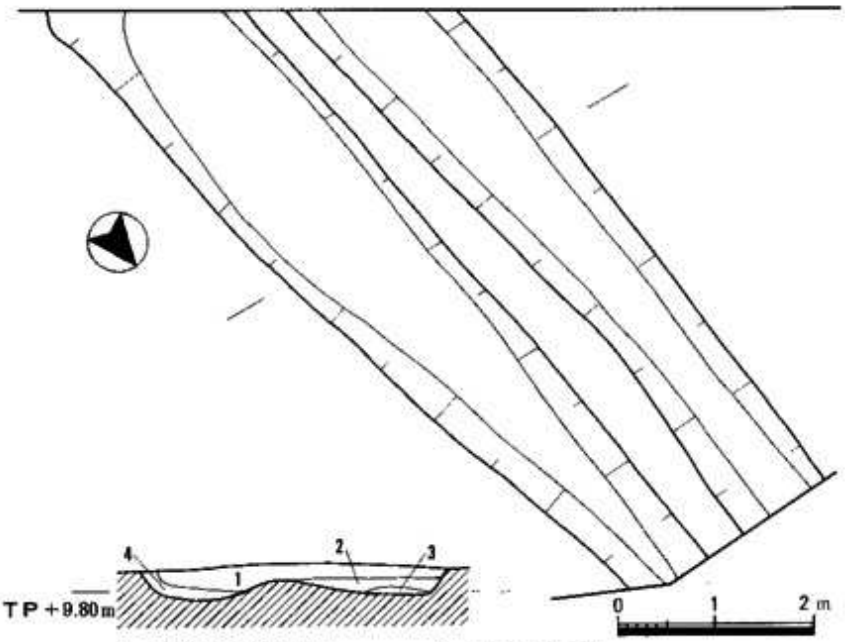
SD－2の東側を南北方向に伸びる遺構で、検出部北端で東側へわずかに角度を変える。幅80～160cm・深さ4～7cmを測る。溝内の堆積土は上方から灰色粘土・灰茶色細砂混粘土の2層から構成されている。内部からは、弥生時代中期・古墳時代前期に至る甕・壺等の破片の他、石材（サヌカイト）がごくわずかに出土している（第64図）。

SD－4

3区で検出した南北方向に伸びる溝状遺構である。検出部の形状では、中央の畦状の高まりを境として、2条の溝状遺構が平行して伸びるように見られるが、内部の堆積状況からここでは一応一つの遺構として捉えた。幅140cm・深さ20cm前後を測るが、中央の畦状の部分は深さ10cm程度と浅い。溝内堆積土層は、上方から灰茶色細砂混粘土・灰茶褐色シルト混粘土・青灰色シルト・灰青色シルト混粘土である。溝内からは土師器・須恵器・黒色土器・瓦器の他、瓦・土錘等が出土したが、すべて細片で量的にもわずかである（第64図）。

SD－5

3区北西部で検出した東西方向のもので、幅40cm・深さ20cm前後を測る。内部堆積土層は、灰茶色細砂混粘土・灰色細砂混粘土の2層で、土師器・瓦器の細片を含んでいる。



1　灰茶色細砂混粘土層　　3　青灰色シルト層
2　灰茶褐色シルト混粘土層　　4　灰青色シルト混粘土層

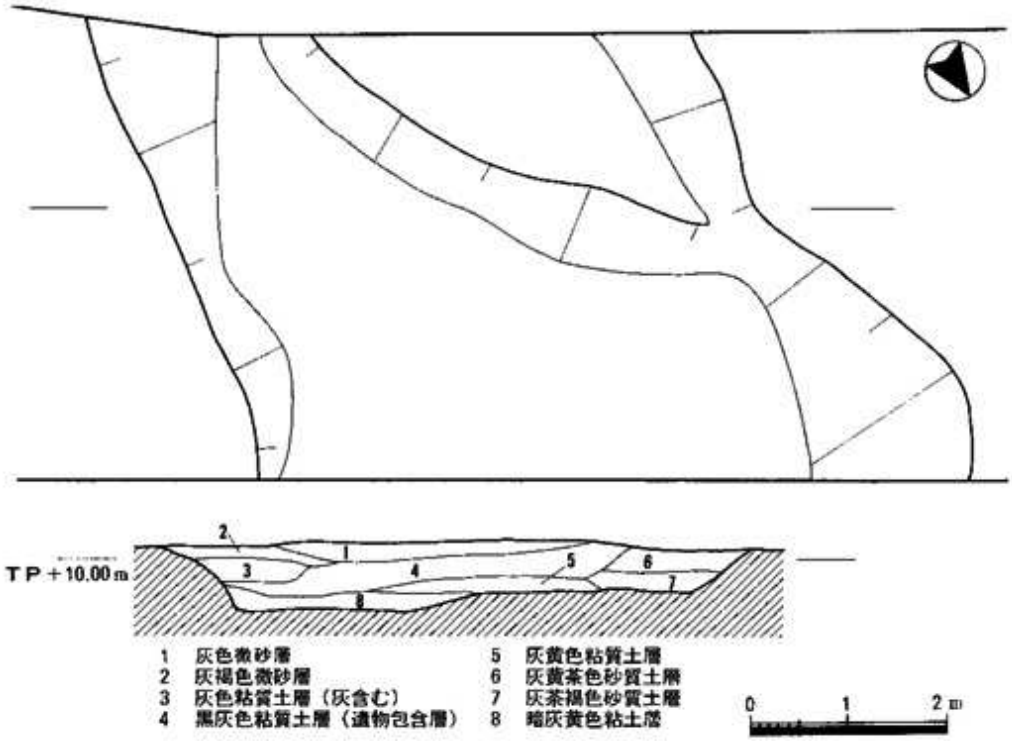
第65図　第6調査区SD－4平断面図

SD－6

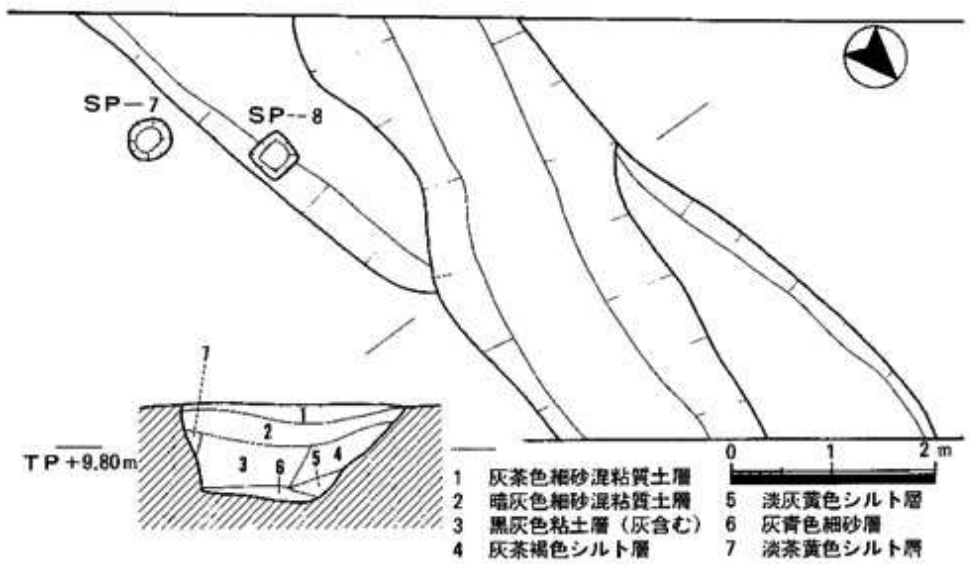
5区の北部で検出した溝状遺構で、南北方向に伸びる。幅300～380cmを測り、底部は西から東に向って緩斜面を持ち、深さは10～35cmと南から北へ徐々に増している。内部堆積土層は灰色微砂・灰褐色微砂・灰色粘質土・黒灰色粘質土（灰含む）・灰黄色粘質土・灰黄茶色砂質土・灰茶褐色砂質土・暗灰黄色粘土の8層から構成されている。このうち遺物を包含する土層は、SE－3・SE－4で認められた灰を含む層と同層に比定できる黒灰色粘質土で、内部から土師器小皿・中皿・杯・羽釜、須恵器ねり鉢、黒色土器椀・小皿の他、中国産磁器が一点出土している（第68図）。

SD－7

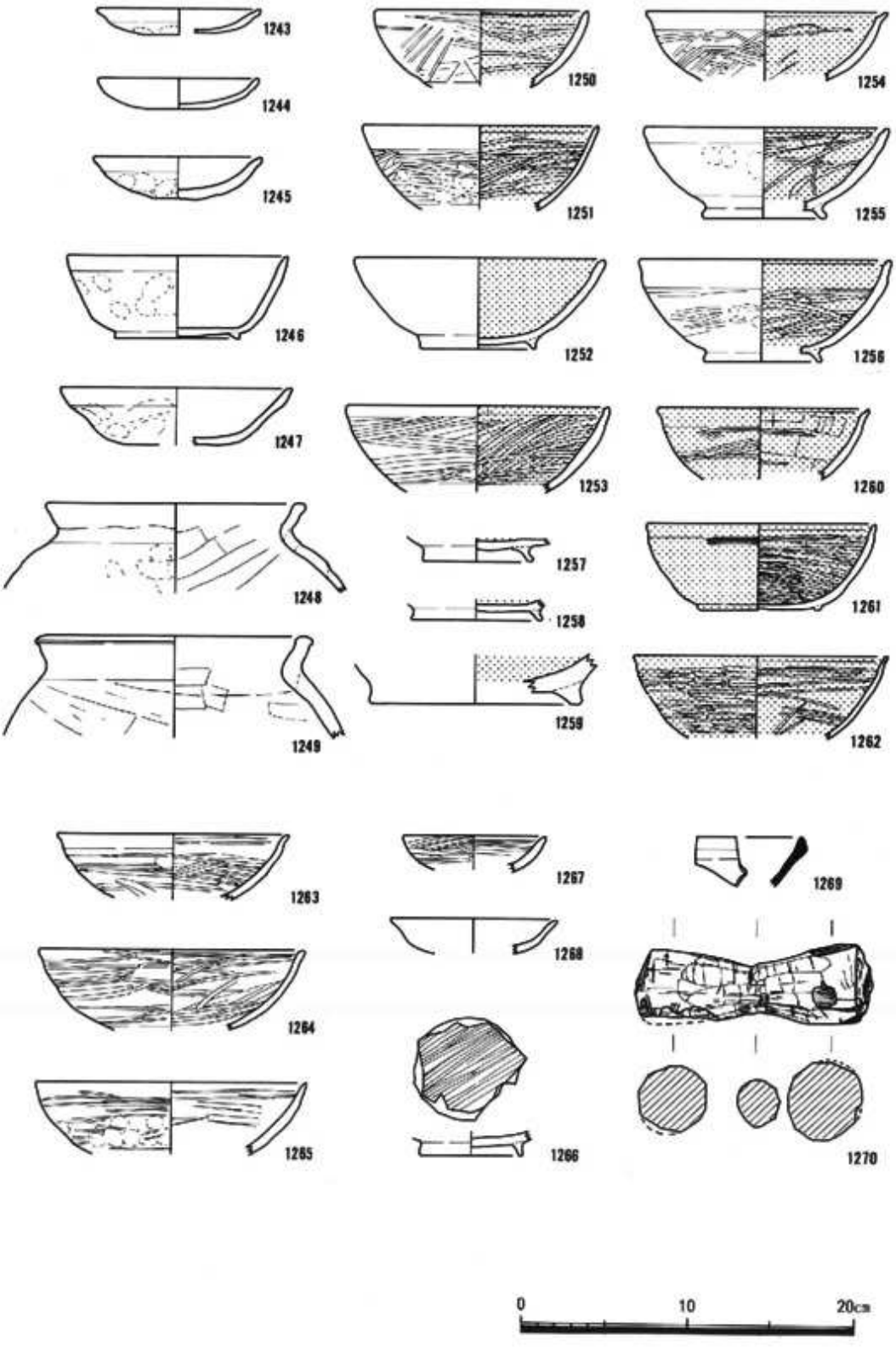
6区で検出した。既設の溝状遺構を切り込み、重復して南北方向に伸びている。幅110cm・深さ45cmを測り、内部には灰茶色細砂混粘質土・暗灰色細砂混粘質土・黒灰色粘土(灰含む)・灰茶褐色シルト・淡灰黄色シルト・灰青色細砂・淡茶青色シルトの7層が堆積している。これらの土層のうち主な包含層は灰を含む黒灰色粘土で、SD－6の黒灰色粘質土と同層に比定できる。層中からはSD－6同様、土師器小皿・中皿・杯・羽釜、黒色土器椀、瓦器椀・小皿の他、土錘、中国産磁器等が出土している（第69図）。



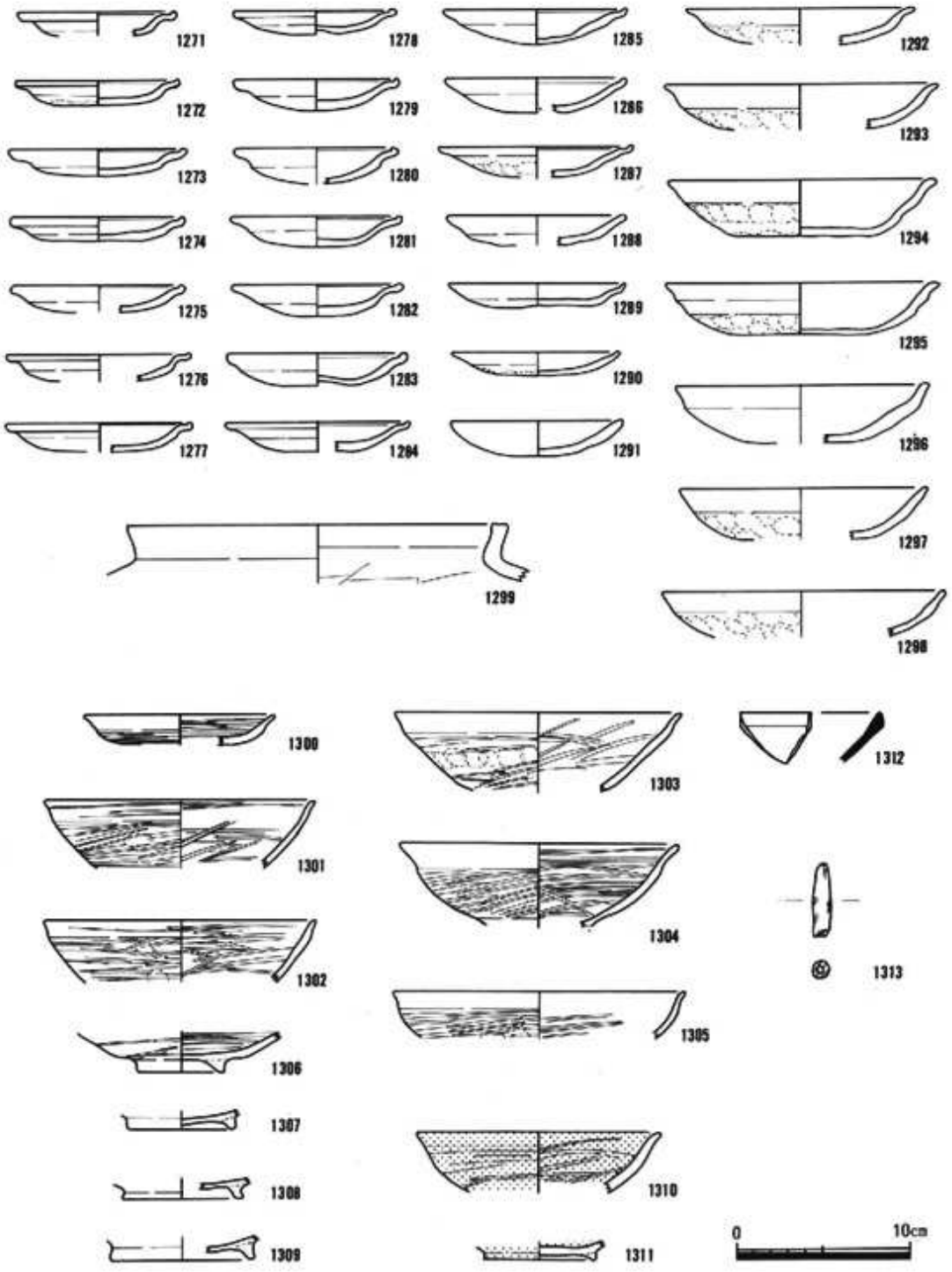
第66図　第6調査区SD－6平断面図



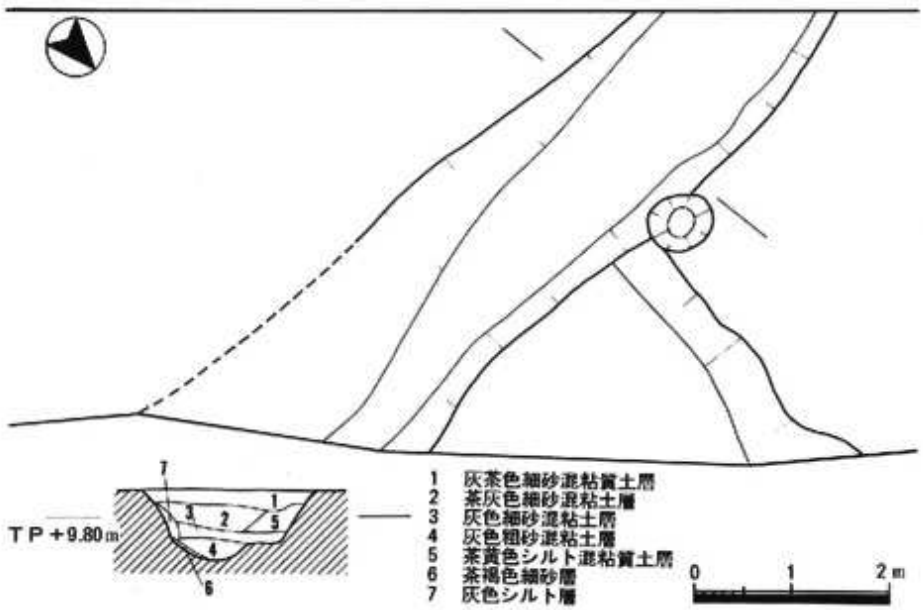
第67図　第6調査区SD－7平断面図



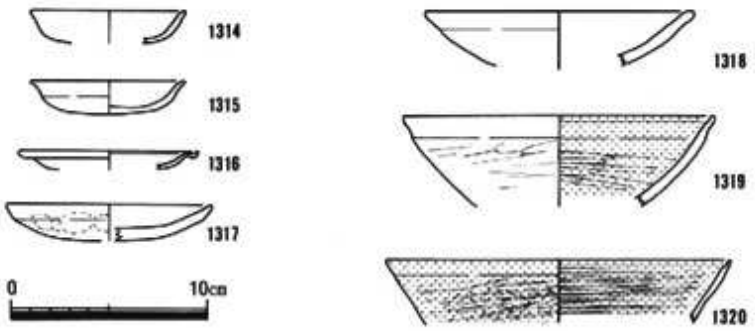
第68図　第6調査区SD－6出土遺物実測図



第69図　第６調査区ＳＤ－７出土遺物実測図



第70図　第6調査区SD－8平断面図



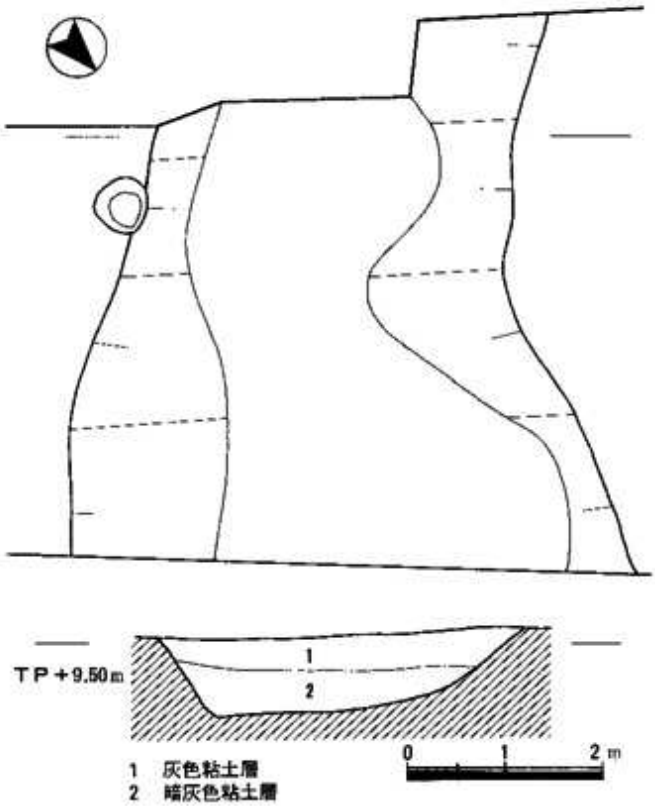
第71図　第6調査区SD－8出土遺物実測図

SD－8

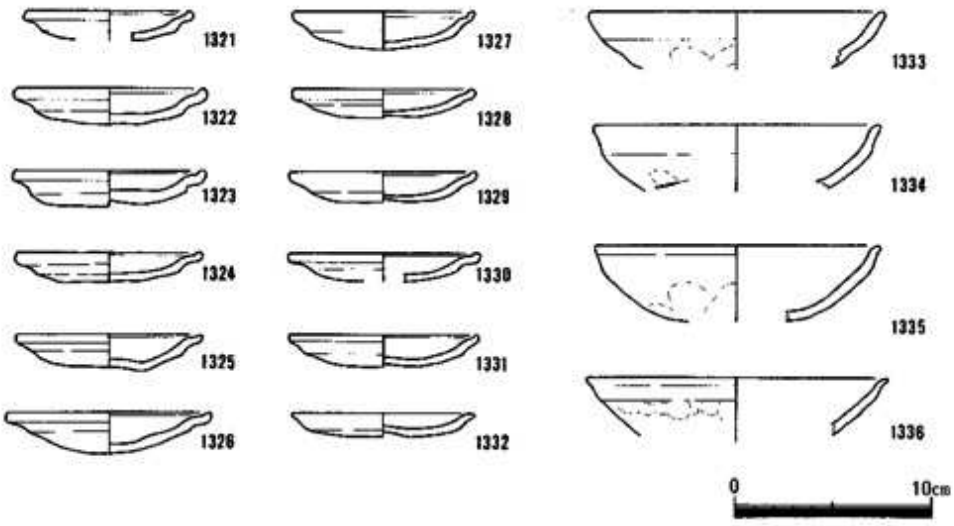
5区で検出した遺構で、東部は後世の掘削によって撹乱を受けている。幅0.9m・深さ27～46cmで、東へ徐々に深くなっている。溝内には上方から灰茶色細砂混粘土・茶灰色細砂混粘土・灰色細砂混粘土・灰色粗砂混粘土・茶黄色シルト混粘質土・茶褐色細砂・灰色シルトが複雑に堆積している。内部からは、土師器小皿・中皿・杯、須恵器杯、黒色土器椀・瓦器椀等の細片が少量出土している（第71図）。

SD－9

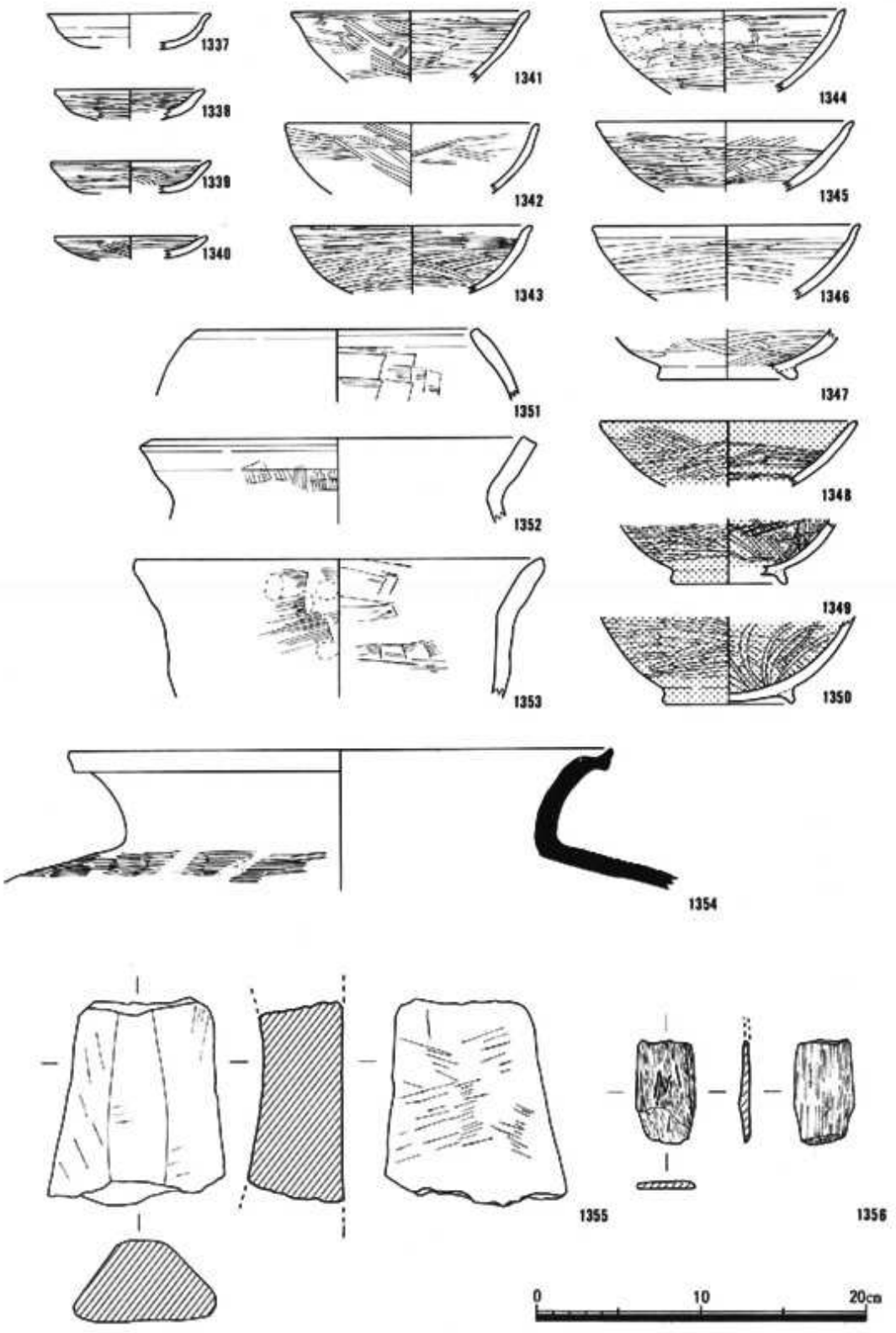
SD－8の北に位置し、南北に伸びる。幅40cm・深さ10cm前後を測り、内部には、上方から灰茶色細砂混粘質土・灰色シルト・茶灰色粗砂が堆積し、土師器・瓦器等の細片が少量出土した。



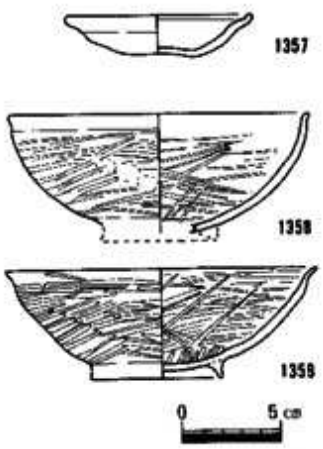
第72図　第6調査区SD－11平断面図



第73図　第6調査区SD－11出土遺物実測図－1（土師器小皿・中皿・杯）



第74図　第6調査区SD—11出土遺物実測図—2（瓦器小皿・椀、黒色土器椀、土師器甕、須恵器壺、砥石）



第75図　第6調査区SP－14（1357）、SP－7（1358・1359）出土遺物実測図

SD－10

SD－9の西に位置し、同様に南北方向に伸びる遺構で、北端はとぎれ、南側では段を有する。幅40～75cm・深さ15～25cmを測り、南側へ行くほど深くなっている。内部には上方から灰茶色シルト混粘土・灰青色シルト混粘土の2層が堆積し、土師器・瓦器の細片がごく少量出土した。

SD－11

6区と7区の境で検出した南北方向に伸びる溝遺構である。幅180～280cmで北側が広く、深さは37～52cmで南側が深い。内部堆積土層は、上方から灰色粘土・暗灰色粘土の2層からなり、両層から土師器小皿・中皿・杯、瓦器椀・小皿等の他、砥石、桃の種子、炭化木等が出土している（第73・74図）。

d．小穴（SP）

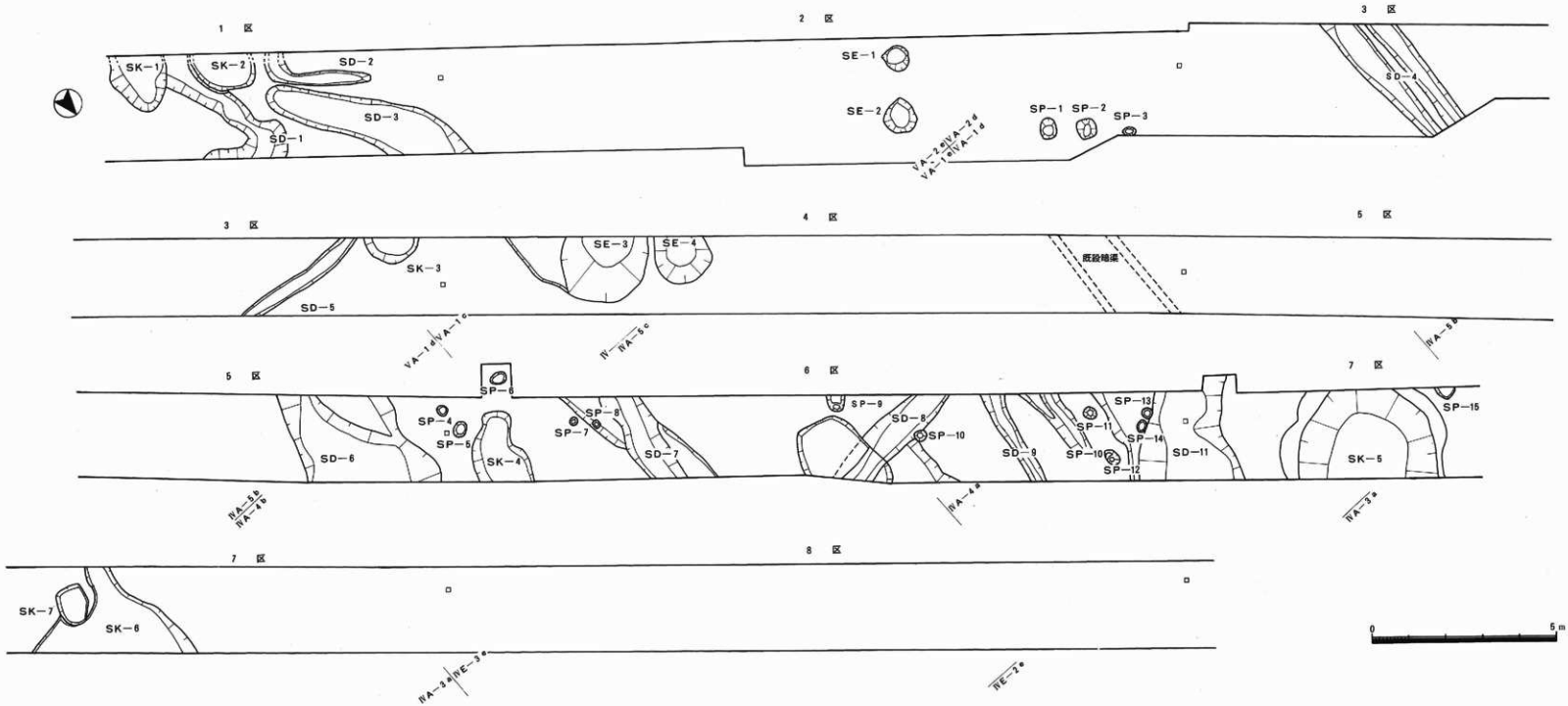
小穴遺構は調査区全域で14個検出している。しかし、調査範囲が限定されていたため、群としてのまとまりは明確ではないが、比較的深度の深いSP－8・SP－10等は掘立柱建物の柱穴を構成した可能性も考えられる。その他、SP－7・SP－14の様に完形に近い瓦器椀・土師器小皿の出土した遺構もあり（第75図）、これらを埋納した可能性が考えられるが、遺構の性格は不明である。

3）出土遺物

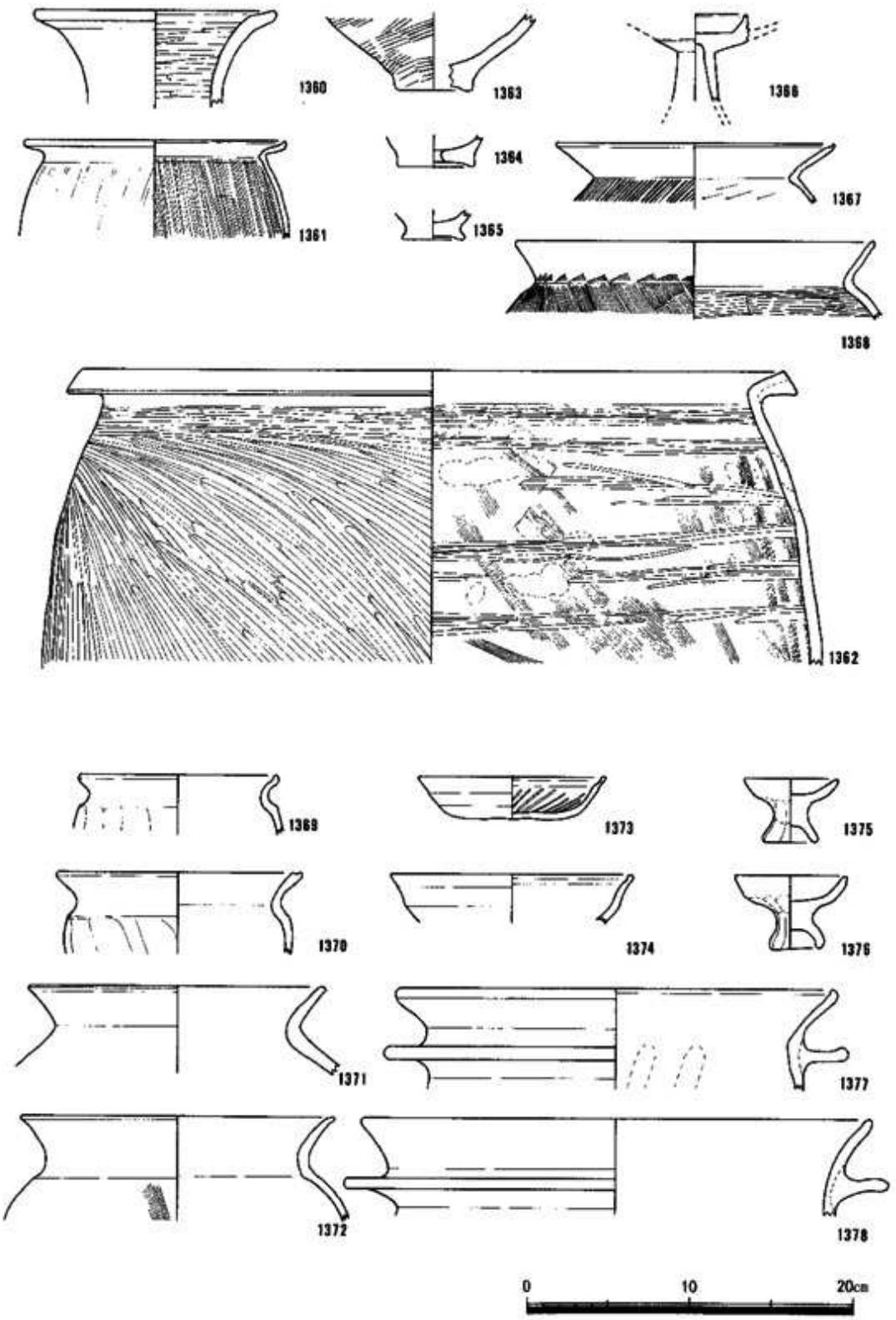
遺物は包含層及び各遺構から出土し、総量はコンテナ箱に30箱程度である。これらは弥生時代中期・古墳時代前期・奈良時代・平安時代後期から鎌倉時代の遺物に区別できるが、量的には平安時代後期のものが多くを占める。

平安時代後期の遺物は土器が主で、特に井戸SE－3、土坑SK－5、溝SD－6・SD－7・SD－11等から比較的良好な遺存状態を保って多量に出土している。このうち、SE－3・SK－5・SD－6・SD－7では、灰を含む粘土層・粘質土層から遺物が出土しており、共通した出土状況を示している。これらの土器群は、器種構成等から見て短期間に使用されたものと推測でき、この時期の土器類の様相を知る上で重要なものと言える。換言すれば、黒色土器椀から瓦器椀への変遷を具体的に示唆する資料として注目できるばかりではなく、近接して存在した田井庄との関連や条里遺構と土地利用など、多岐に亘る問題を提起している。

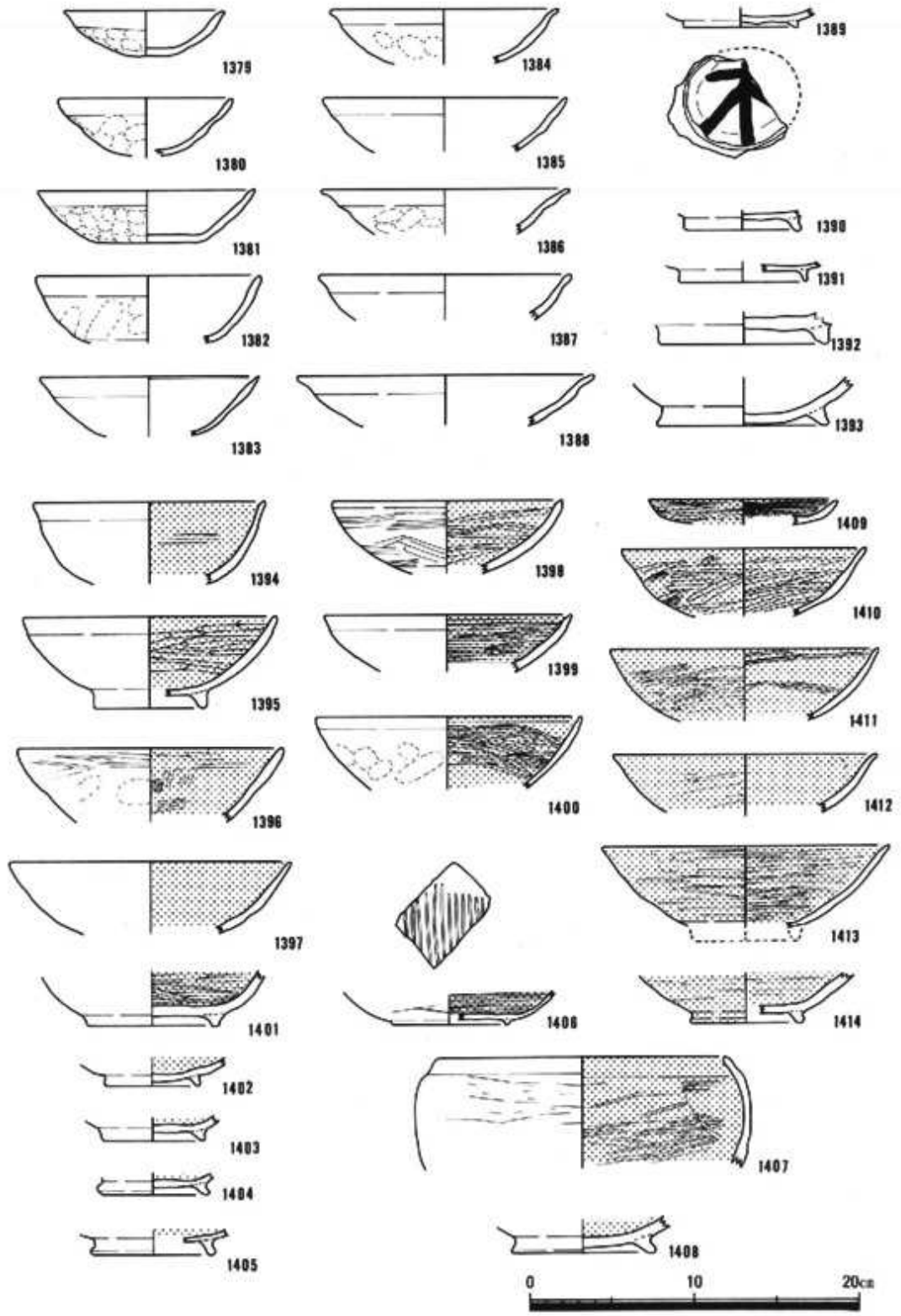
本稿では、各遺構から出土した遺物については、遺構説明内の記載のみにとどめ、遺物個々の特徴は第8章の出土遺物観察表に委ねた。また、特に遺存状態の良好な瓦器椀を含むSE－3出土の一括資料については、第9章まとめに別稿を設けて記載する。



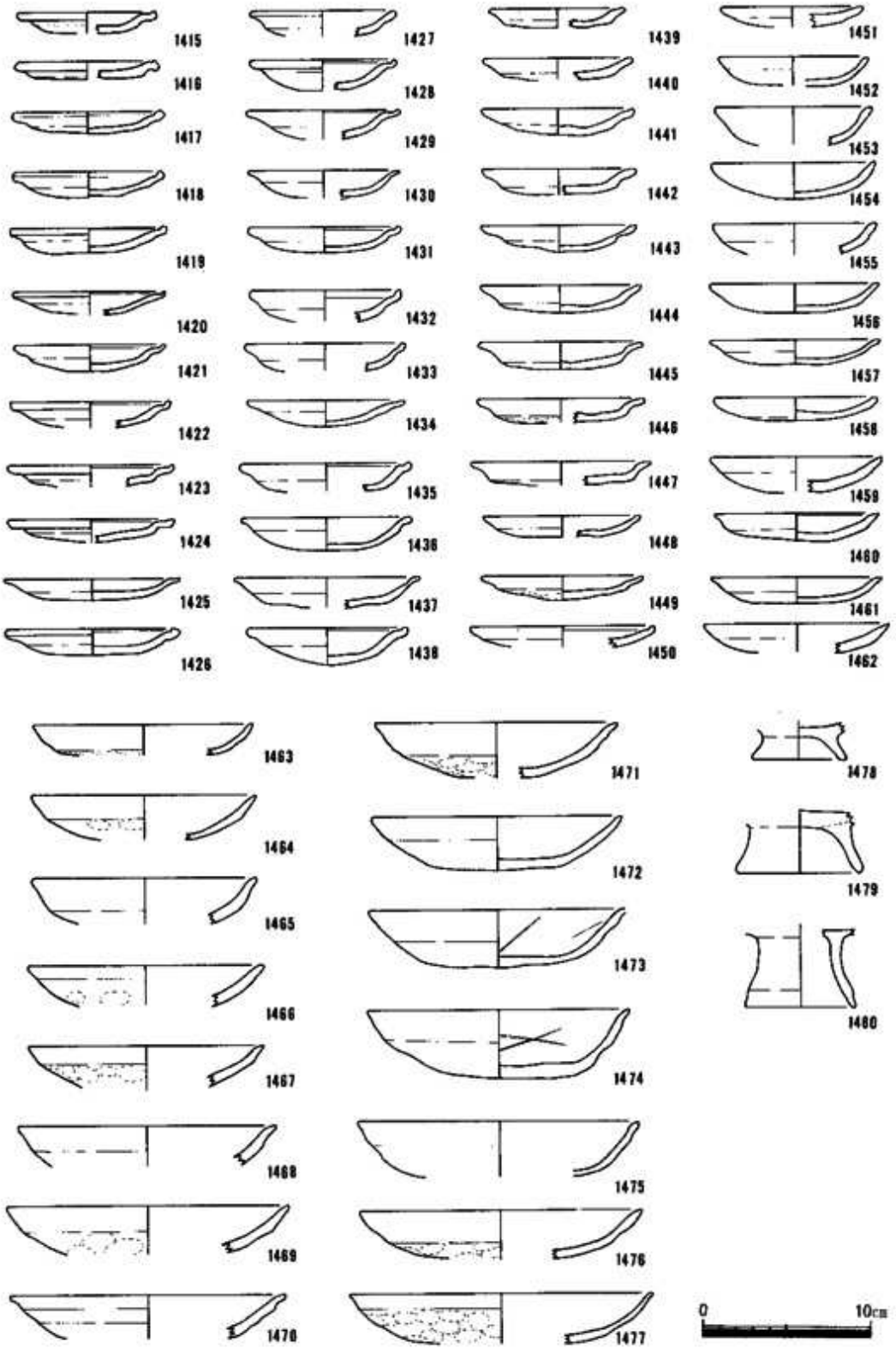
第76図　第6調査区平面図



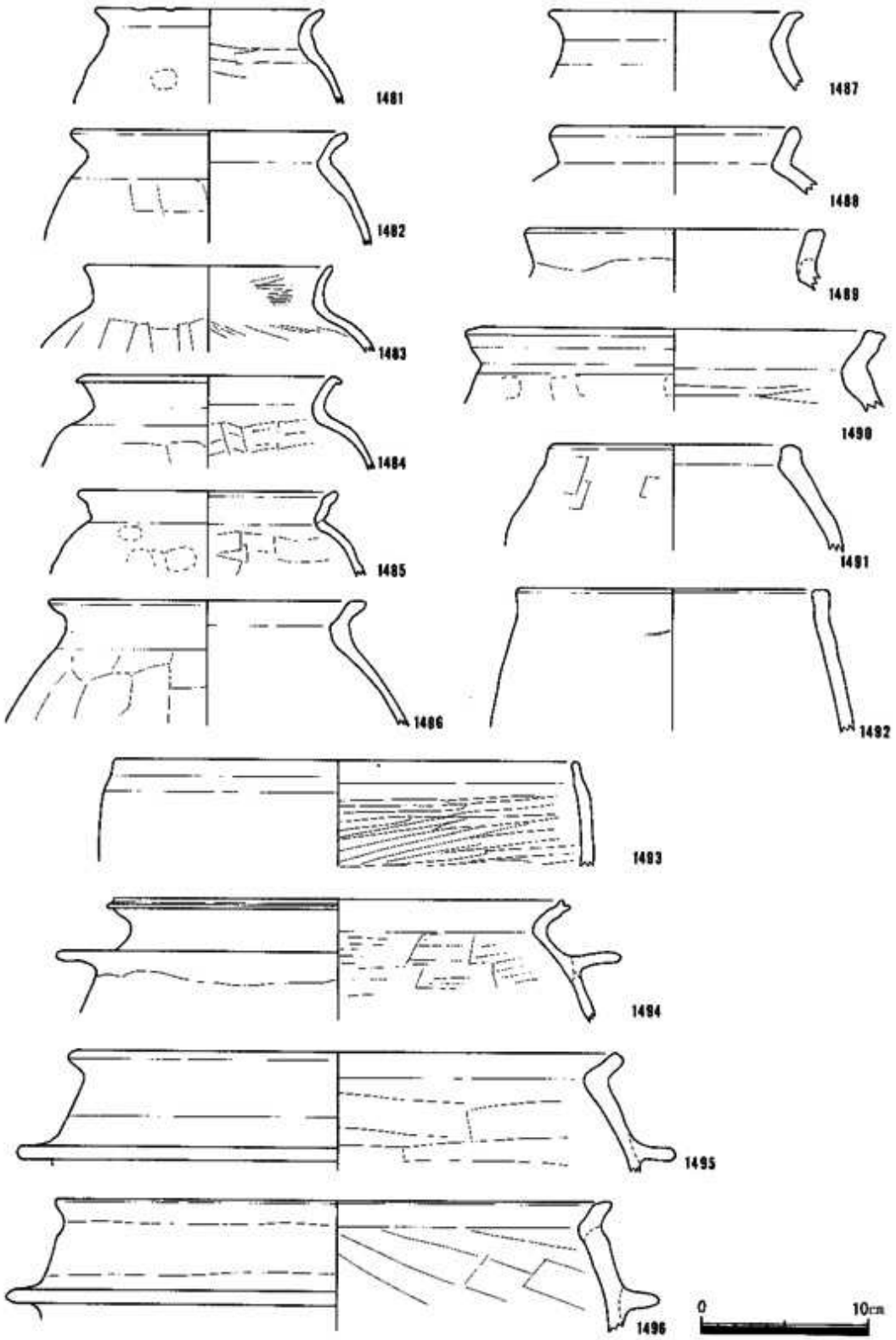
第77図　第6調査区包含層出土遺物実測図―1（弥生時代～奈良時代の出土遺物）



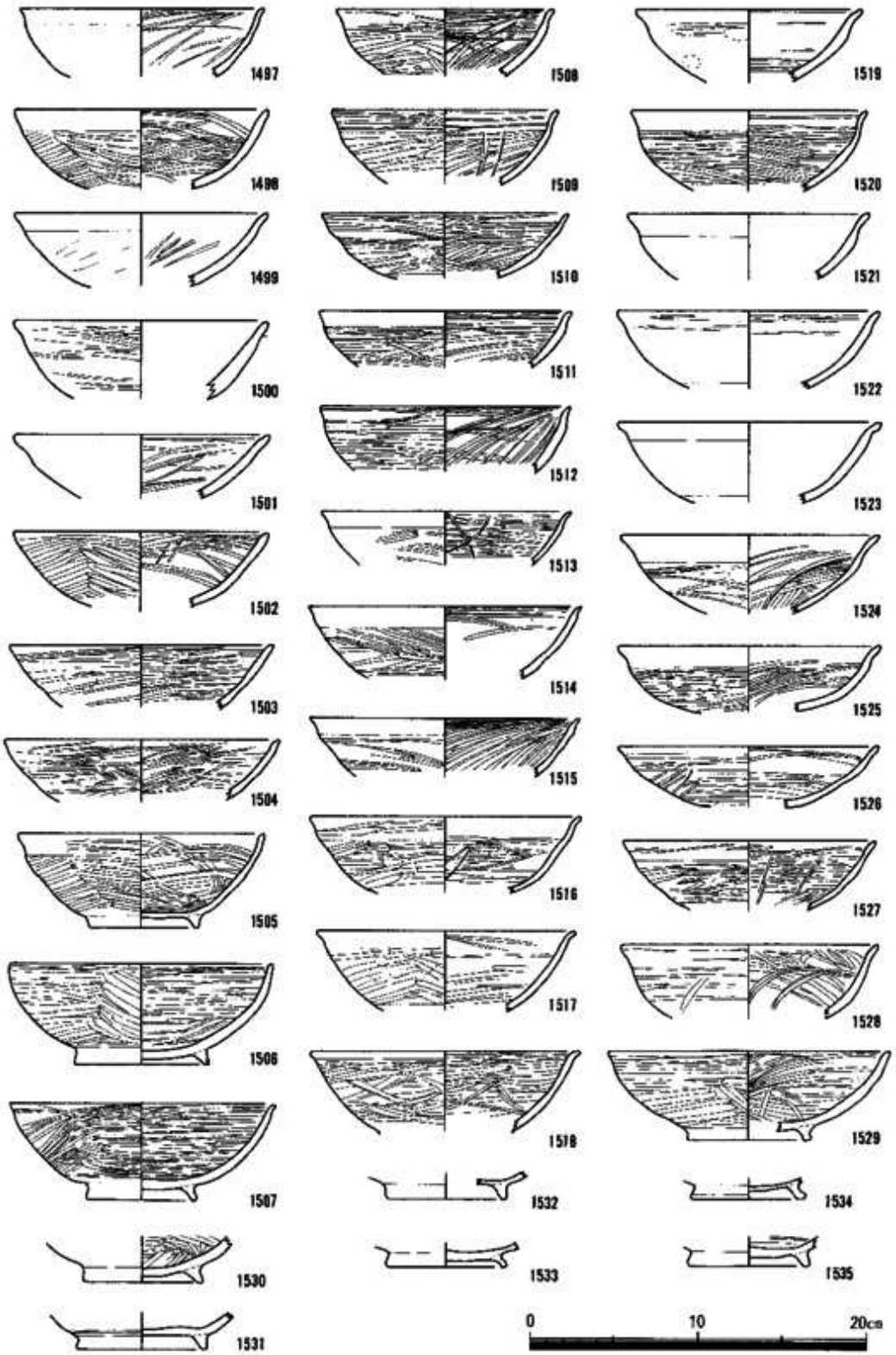
第78図　第6調査区包含層出土遺物実測図―2（土師器杯・鉢、黒色土器椀・鉢）



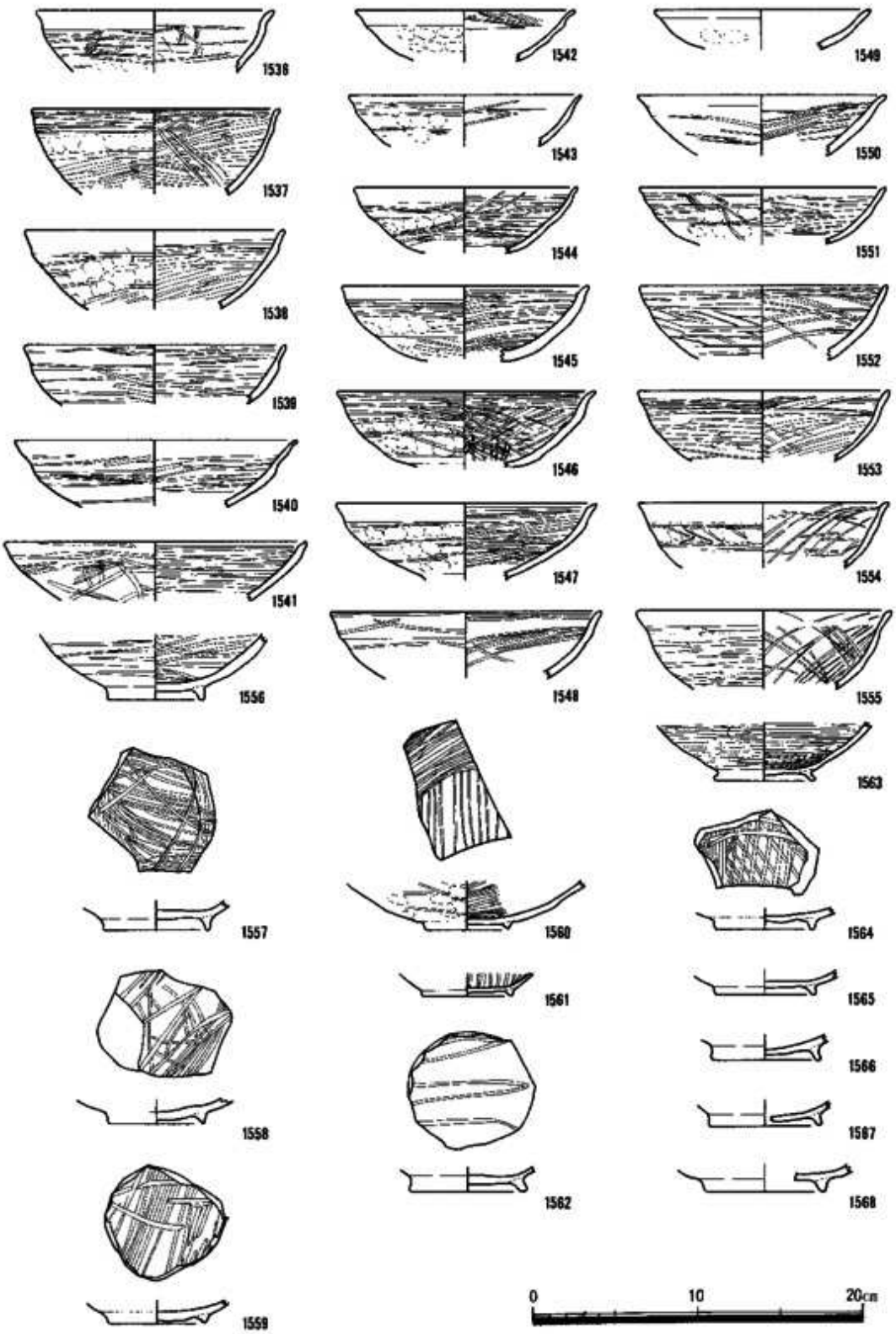
第79図　第６調査区包含層出土遺物実測図―３（土師器小皿・中皿・台付皿）



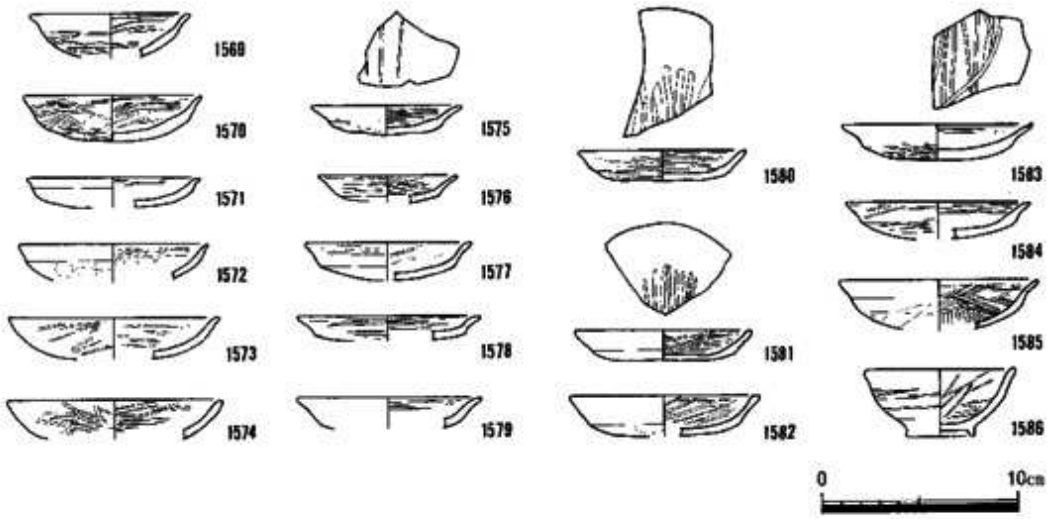
第80図　第6調査区包含層出土遺物実測図－4（土師器甕・羽釜）



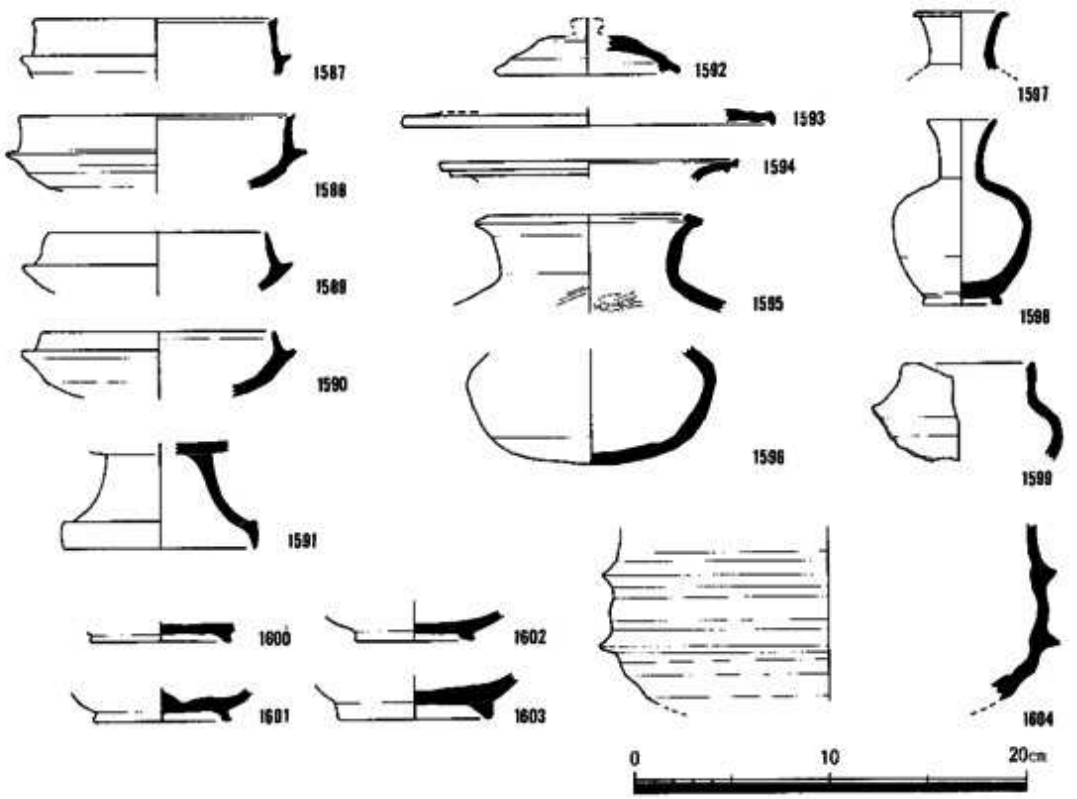
第81図　第6調査区包含層出土遺物実測図—5（瓦器椀）



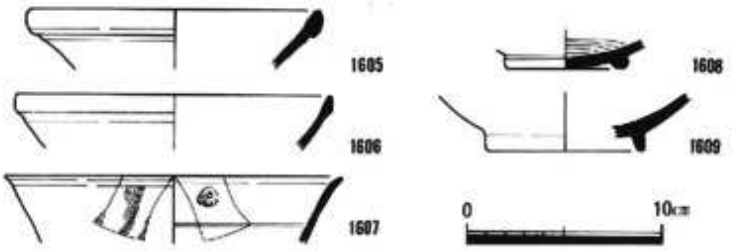
第82図　第6調査区包含層出土遺物実測図―6（瓦器椀）



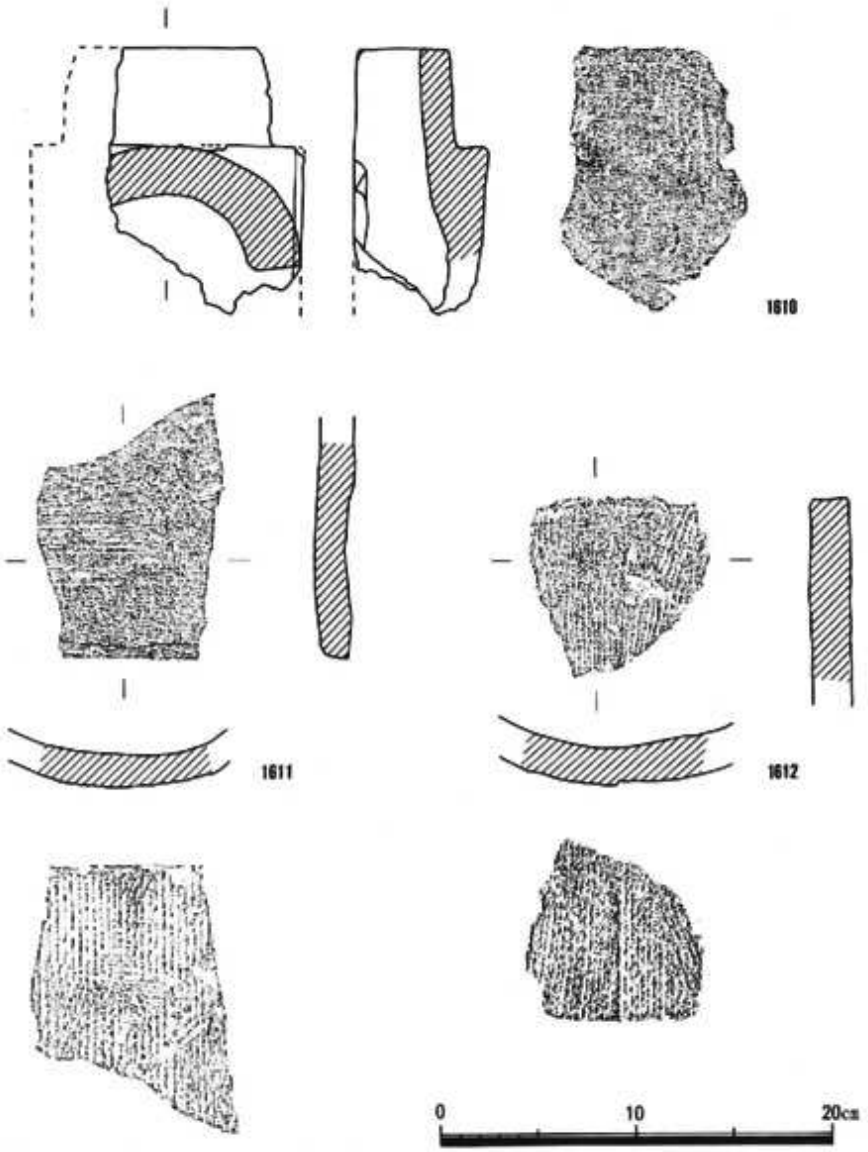
第83図　第6調査区包含層出土遺物実測図―7（瓦器小皿）



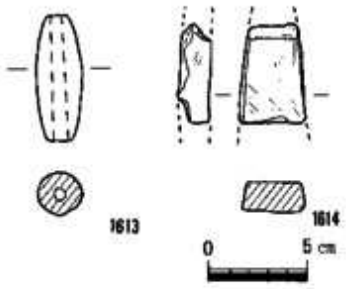
第84図　第6調査区包含層出土遺物実測図―8（須恵器）



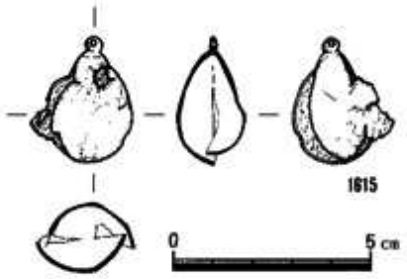
第85図　第6調査区包含層出土遺物実測図—9（白磁碗、緑釉陶器碗）



第86図　第6調査区包含層出土遺物実測図—10（瓦）



第87図　第6調査区包含層出土遺物実測図—11（土錘・砥石）



第88図　第6調査区包含層出土遺物実測図—12（鈴）

5　第7調査区

三角地の北西部の調整池掘削予定地を第7調査区とした。分布調査の第6トレンチ・第7トレンチ、発掘調査Ⅱの第4調査区・第5調査区を含み、調査対象面積は29,400㎡を測る。調査に際しては発掘調査Ⅰ・Ⅱの調査仕様に従い、掘削深度が1.2ｍまでの部分には立会発掘調査を行い、それ以下に達する排水管路埋設部分（幅約1ｍ）にはA～Zトレンチを設定して全面発掘調査を実施した。調査期間は昭和58年11月6日から昭和59年2月6日まで、全面発掘調査面積は1520㎡を測る。

1）立会発掘調査

調査区の北東部分を中心として、6箇所で遺物が散見される地点を確認した。遺物の散見状況は、いずれも調整池底面の掘削によって、遺物を包含する粗砂層が頭出した部分に限られる。遺物の時期は、全て古墳時代から平安時代に至るものであり、この粗砂層が分布調査で検出された遺物包含層（流出粗砂層）に照応することを示している。

また、調査区北東端において、近世の井戸遺構を検出した。この井戸は、樽状に組まれた木枠を2段に重ねた井筒を持ち、深さ1.4ｍを測る。井戸底からは、近世の瓦が1枚出土している。

2）全面発掘調査

A～Zトレンチの基本的層序は同一で、第1層灰褐色粘土・第2層黄褐色粗砂または淡青灰色シルト・第3層青灰色粘土である。

第2調査区～第5調査区の調査結果から、第3層上面が平安時代の水田面となることは明らかであったが、畦畔等の水田施設の存在の有無は確認できなかった。また、足跡状の窪みはトレンチの断面において数個を確認したにすぎない。

また、平面的には捉えていないが、断面観察の結果から、分布調査同様流路である厚い粗砂の堆積を確認した（**流路1～6**）。そのうちの**流路1～流路4**が、条里復元ラインに合致してい

る。ここではこれまでの調査結果と照合し、古代条里遺構溝に該当する流路についてのみ記載する。なお、条里復元ラインについては、第5図及び第91図を参考にされたい。

第6表　トレンチの規模一覧表

トレンチ	長さ（m）	トレンチ	長さ（m）
A	15.4	N	79.3
B	18.9	O	59.6
C	39.8	P	42.4
D	60.9	Q	25.2
E	90.5	R	117.9
F	97.9	S	136.0
G	105.2	T	40.6
H	86.2	U	18.0
I	93.6	V	24.5
J	71.1	W	40.6
K	95.7	X	95.1
L	98.8	Y	20.2
M	56.1	Z	6.2

流路1（K・L・X・Y・Zトレンチ）

調査区南西隅で検出した。第4調査区の東側断面で検出した旧大乗川の流路に重複し、条里復元ラインCにあたる。第4調査区では近世条里遺構溝の西肩を検出しただけで、古代条里遺構溝の形状は捉えられなかったが、当調査区で検出した**流路1**は既調査で確認した古代条里遺構溝に該当するものであり、分布調査の結果同様、近世から古代の条里遺構溝が重複して存在することが明らかとなった。

流路2（Lトレンチ）

調査区南端中央付近で検出した。南北に流路を持ち、流路1とは100m前後隔たっている。分布調査第1トレンチ**1T－2b**・第3トレンチ**3T－1b**、発掘調査**Iポイント2**の延長線上に位置し、条里復元ラインCに相当する。

流路3（G・Rトレンチ）

調査区中央付近の東側に位置し、南北に流路を持つ。分布調査第1トレンチ**1T－1b**・第6トレンチ**6T－1b**・発掘調査**Iポイント3**の延長線上にあり、条里復元ラインBに当る。

流路4（Nトレンチ）

流路3の南西で検出した東西の流路である。分布調査第5トレンチ**5T－2b**・第7トレンチ**7T－1b**の間に位置する地点で、里界を区画するライン6に該当する。

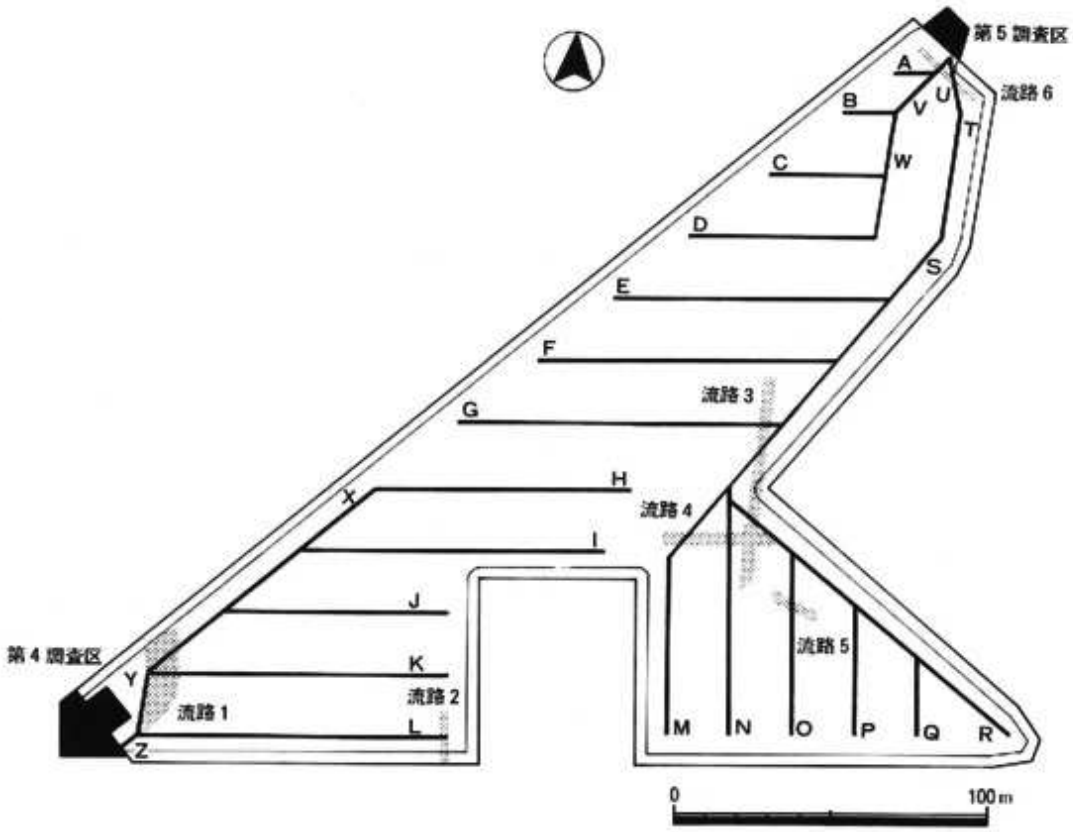
第3節　部分発掘調査

発掘調査I同様、条里復元ラインに該当する工事で、掘削深度が表土下1.4mに達する地点を調査区とした。今年度は**ポイント6～ポイント11**までの六箇所である。

ポイント6

近世条里遺構溝：表土（TP＋10.00m）を構築面とする溝遺構で、幅1.0m・深さ0.2mを測る。内部堆積土層は、暗茶褐色粗砂混質土の単一層である。

古代条里遺構溝：表土下0.9m（TP＋8.90m）を構築面とするもので、幅2.4m・深さ0.4



第89図　第7調査区平面図

mを測る。内部堆積土は淡灰茶色細砂の単一層である。

ポイント7

近世条里遺構溝：表土（ＴＰ＋10.20m）を切り込むもので、幅2.2m・深さ0.2mを測る。溝内は暗茶灰色細砂1層で充填されている。形状から推定すれば、飛行場の開設時までは溝遺構の機能を果たしていたものである。

古代条里遺構溝：表土下約1.5m（ＴＰ＋8.70m）付近の茶灰色シルト混粘土層を切り込むもので、幅2.4m・深さ0.6mを測る。近世条里遺構溝とは約2m程度西へずれている。

ポイント8

近世条里遺構溝：表土上面が削平を受けた後盛土されているため、近世条里遺構溝は消滅している。

古代条里遺構溝：表土下0.9m（ＴＰ＋8.70m）を構築面とするもので、幅3.5m・深さ0.5mを測る。断面の形状は、西側肩部が緩やかに底部に達するのに比して、東側肩部は急角度で底部に至る。溝内堆積土は茶灰色細砂一層であるが、この層はさらに東側へ0.4mの厚さを有して広がっている。

ポイント9

近世条里遺構溝：確認できなかった。

古代条里遺構溝：表土下1.3m（TP+8.60m）付近の暗灰色粘土を構築面とするもので、幅3.2m・深さ0.8mを測る。溝内堆積土は淡灰色細砂と灰茶色細砂の互層である。

ポイント10

近世条里遺構溝：断面逆台形を呈する溝遺構で、幅3.0m・深さ0.5mを測る。この溝は構築面が表土上面（TP+10.30m）に一致していることから、空港開設までは機能を果していたものと推定される。内部堆積土は黒灰色細砂混粘土一層である。

古代条里遺構溝：表土下1.5m（TP+8.80m）付近の淡灰色シルト混粘土を構築面とするもので、幅5.7m・深さ0.4mを測る。溝内堆積土層は淡灰色粗砂の単一層で、この層はさらに溝の東側へも広範囲に広がっている。

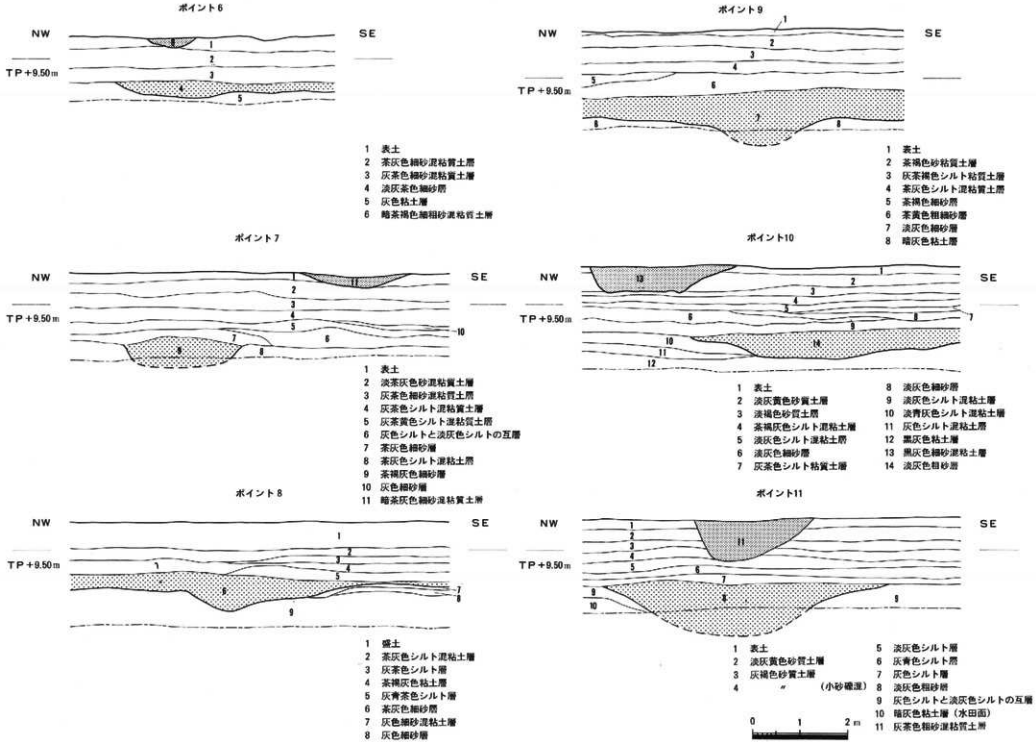
ポイント11

近世条里遺構溝：表土上面（TP+10.20m）を構築面とする溝遺構で、断面逆台形を呈する。幅2.5m・深さ0.8mを測り、内部は灰茶色粗砂混粘質土で充填されている。

古代条里遺構溝：表土下1.4m（TP+8.80m）付近を構築面とするもので、幅6.2m・深さ1.2mを測る。溝内堆積土は淡灰色粗砂の単一層である。

第7表　発掘調査Ⅱ部分発掘調査条里遺構溝一覧表

地点名	時期	規模 幅	規模 深さ	検出レベル高（TP値）	備考	分布調査照応地点	条里該当ライン名
ポイント6	近世	1.00(m)	0.2(m)	10.00		ナシ	D
	古代	2.4	0.4	8.90			
ポイント7	近世	2.2	0.2	10.20		ナシ	2
	古代	2.4	0.6	8.70			
ポイント8	近世	—	—	—	削平消滅	ナシ	E
	古代	3.5	0.5	8.70			
ポイント9	近世	—	—	—	不明	5T—$\frac{1a}{1b}$	1
	古代	3.2	0.8	8.60		7T—$\frac{1a}{1b}$	
ポイント10	近世	3.0	0.5	10.30		2T—$\frac{1a}{1b}$	F
	古代	5.7	0.4	8.80		4T—$\frac{1a}{1b}$	
ポイント11	近世	2.5	0.8	10.20		5T—$\frac{2a}{2b}$	6
	古代	6.2	1.2	8.80			



第90図　部分発掘調査（ポイント6～11）条里遺構溝断面図

第８章　出土遺物観察表

ＳＥ－１出土遺物　（第49図）

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1008 図〇	土師器小皿	9.3 1.3		扁平な底部から丸味を持って立ち上がり、口縁部に至る。端部丸く終る。 指頭圧成形後外面底部板ナデ、外面口縁部・内面右廻りヨコナデ。	灰色～ 灰褐色	精良 雲母粒含む	良好	
1009 図〇	瓦器椀	15.3 5.6 高台径 5.8 高台高 0.6		平坦な底部。口縁部はヨコナデにより外反ぎみに開く。高台は断面逆三角形で垂直に下る。 ヘラミガキは外面体部４分割、内面体部横方向。見込みに斜格子の暗文。	黒色 内面灰黒色	精良	良好	外面に油煙 完形

ＳＥ－２出土遺物　（第49図）

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1010	土師器小皿	7.8 —		上外方へつまみ上げる口縁部。端部は先細となり、尖って終る。 指頭圧成形後外面口縁部・内面をヨコナデ。	灰色～ 灰褐色	良好 石英・砂粒を含む	良好	
1011	瓦器椀	14.8 —		上外方へ連続したカーブで伸び、口縁部に至る。端部丸く終る。 内外体部密で細かいヘラミガキ、端部のみヨコナデ。	灰黒色	精良	良好	
1012	〃	12.9 —		浅い半球形の体部から外反して伸びる短い口縁部。端部は内にわずかな面をも持つ。 指頭圧成形後外面体部粗いヘラミガキ、内面体部ナデの後粗いヘラミガキ。内外口縁部ヨコナデ。	灰黒色～ 灰色	精良	良好	外面に炭素吸着不良
1013 図〇	土師器羽釜	24.6 — 鍔 径30.6		体部から「く」の字形に屈曲して口縁部に至る。端部つまみ上げ、四角く終る。鍔は下りぎみに伸びる。内面指頭圧ナデ、内外口縁部・鍔の周囲ヨコナデ。	灰褐色	良	良好	
1014	〃	26.8 — 鍔 径34.8		丸い体部から「く」の字形に屈曲し、斜上方に伸びる短い口縁部。鍔は断面三角形で短い。 外面体部ヘラケズリ、内面体部ナデ、内外口縁部・鍔周囲ヨコナデ。	黄灰色 内面灰茶色	良 石英・チャート・雲母を多量に含む。	良好	
1015 図〇	〃	25.1 鍔 径36.0		形態・調整とも1014に似るが、口縁部の屈曲やや強く、鍔は直線的で長く伸びる。	灰緑色～ 灰褐色 内面灰緑色 ～淡褐色	良 石英・石粒多量に含む	良好	外面煤付着
1016	〃	28.4 — 鍔 径37.4		形態・調整とも1014・1015に似るが、鍔がより薄くなり、長く伸びる。	灰緑色 内面淡褐色	良 石英・石粒多量に含む	良好	外面煤付着

ＳＥ－３出土遺物　（第50・52・53図）

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 口径 法量・器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1017 四一	栓	幅 8.8 長 3.6 最大厚 1.0 最小厚 0.1	半円形の栓。上圧のため、彎曲する。端の遺存状態は良い方で、11本／1㎝を測る。横木取り。			—	
1018	上師器小皿	7.9 1.2	やや丸味を持つ底部から外反し、口縁部に至る。端部は内に巻き込み、外傾する面を持つ。 外面底部板状工具によるナデの後、内外口縁部ヨコナデ。	乳橙色	精良	良好	
1019 四〇	〃	8.9 1.5	形態・調整とも1018に似るが、口縁端部はやや丸味を持って巻き込む。	乳白色	精良	良好	
1020	〃	9.0 1.5	口縁部の形態は1018に似るが、底部は歪む。	灰茶色	精良	良好	
1021	〃	9.4 1.6	1020に似るが、口縁端部の巻き込みは弱く、肥厚気味に終る。 指頭圧成形後内外口縁部ヨコナデ。	黒褐色～淡褐色 内面、淡褐色	精良	良好	
1022	〃	8.8 1.7	底部と口縁部とは、あまり外反せずに続く。端部の巻き込み幅は狭く、つまみ上げ気味に終る。 調整1021と同じ。外面に縦位の粘土接合痕有り。	淡褐色 内面乳褐色～淡褐色	精良	良好	燈芯油皿 完形
1023	〃	9.0 1.5	形態1022に似る。 外面底部板状工具によるナデの後、内外口縁部ヨコナデ。	灰緑色	精良	良好	
1024	〃	9.0 1.6	形態・調整とも1022に似る。	乳橙色	精良	良好	完形
1025 四〇	〃	9.2 2.0	形態1022に似る。 調整1023と同じ。外面に縦位の粘土接合痕。	乳褐色	精良	良好	ほぼ完形
1026 四〇	〃	8.6 2.0	形態1022に似るが、口縁端部の巻き込みが弱く、肥厚気味に終る。 指頭圧成形後内外口縁部ヨコナデ、内面底部不整方向のナデ。	灰褐色～明橙色	良好 白色砂粒を含む	良好	完形
1027	〃	10.3 1.6	形態1022に似るが、全体に扁平な器形。口縁端部は丸く巻き込む。 外面底部板状工具によるナデの後内外口縁部ヨコナデ、内面底部一方向のナデ。	灰緑色～淡褐色	精良 石粒を含む	良好	
1028	〃	10.8 1.8	形態1027に似るが、やや大型で深めの器形。 指頭圧成形後内外口縁部ヨコナデ。	淡褐色	精良	良好	
1029	〃	8.2 0.9	底部からわずかに外反し、口縁部に至る扁平な器形。端部巻き込み幅狭く、つまみ上げ気味。 調整1028と同じ。	乳白色 やや赤味を帯びる部分あり。	精良	良好	
1030 四〇	〃	8.8 1.4	凹凸の激しい底部から強く外反し、短い口縁部に至る。端部は肥厚気味に終る。 指頭圧成形後内外口縁部右廻りヨコナデ。	淡褐色～乳橙色	精良	良好	完形
1031	〃	9.0 —	いびつで波線的な底部から外反し、口縁部に至る。端部先太となり、丸く巻き込んで終る。 指頭圧成形後内外口縁部ヨコナデ。	乳白色 やや赤味を帯びる部分あり	精良	良好	

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1032	土師器小皿		9.0 1.5	形態・調整とも1031に似る。	黄褐色 内面灰白色	良好 砂粒を含む		
1033	〃		9.0 —	丸味のある底部からわずかに外反し、口縁部に至る。端部は丸く巻き込む。 外面底部板状工具によるナデの後内外口縁部ヨコナデ。	乳橙色	精良 赤色酸化粒を含む	良好	
1034	〃		9.4 1.0	形態・調整とも1033に似るが扁平な器形。	乳白色	精良	良好	
1035	〃		9.6 —	底部から内彎気味に開き、口縁部に至る扁平な器形。端部巻き込み幅狭く、つまみ上げ気味。 粘土紐巻き上げ。外面底部板状工具によるナデ。口縁部・内面右廻りヨコナデ。	乳白色～ 乳橙色	精良	良好	
1036	〃		9.8 —	底部からわずかに外反し、口縁部に至る扁平な器形。端部は丸く巻き込む。 内外口縁部のヨコナデの施不明瞭。	乳白色 やや赤味を帯びる部分あり	精良	良好	
1037	〃		10.0 —	平坦な底部から丸く屈曲した後外反し、口縁部に至る。端部巻き込み幅狭く、つまみ上げ気味。 指頭圧成形後内外口縁部ヨコナデ。	乳橙色	精良 赤色砂粒を含む	良好	
1038	〃		10.5	形態1037に似るが、口縁端部は外に垂直な面を持つ。 内外口縁部のヨコナデの施不明瞭。	乳白色 やや赤味を帯びる部分あり	良好	良好	
1039	〃		9.0 1.4	形態1037に似る。 外面底部に木葉痕あり。内外口縁部ヨコナデ。内面底部板状工具によるナデ。	灰緑色	精良	良好	
1040	〃		10.0 —	直線的な底部からわずかに外反し、口縁部に至る。端部は著しくつまみ、垂直な面を作る。 指頭成形後内外口縁部ヨコナデ。	茶灰色 内面黒灰色 ～茶灰色	良好	良好	台付小皿か？
1041 図○	〃		9.4 1.3	丸味のある底部からあまり外反せずに口縁部に至る。端部は肥厚気味に終る。 粘土紐巻き上げ。指頭圧成形後内外口縁部右廻りヨコナデ。内面底部に一方向のナデ。	乳白色～ 明橙色	良好	良好	完形
1042	〃		9.3 1.9	形態1041に似るが、底部はより丸味を持つ。 指頭圧成形後内外口縁部ヨコナデ。	乳橙色 内面乳黄色 ～乳橙色	精良	良好	
1043	〃		10.0 1.5	形態・調整とも1042に似る。	灰茶色	精良	良好	
1044	〃		9.6	浅い半球形を呈し、口縁端部は丸く終る。 指頭圧成形後内外口縁部ヨコナデ。	灰白色～ 明橙色	良好 白色砂粒を含む	良好	
1045	〃		10.0 —	平坦な底部から丸味を持って斜上方へ屈曲し、口縁部に至る。端部は外傾する面を持つ。 内外口縁部ヨコナデ。	淡褐色	精良	良好	
1046	〃		9.5 —	平坦な底部から外反して開く口縁部に至る。端部は丸く終る。 指頭圧成形後内外口縁部ヨコナデ。	灰褐色	精良	良好	

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1047 四〇	土師器小皿	10.3 2.2	やや丸味のある底部から外反して開く口縁部に至る。端部は先細となり、尖り気味に終る。 調整1046と同じ。	乳橙色～明橙色 内面乳白色～明橙色	良好	良好	完形
1048	土師器小型杯	10.2 3.3	ほぼ半球形を呈する。口縁部外反し、端部尖り気味に終る。底部わずかに半坦面を持つ。 指頭圧成形後内外口縁部ヨコナデ。	灰褐色	精良	良好	完形
1049 四〇	〃	10.3 3.3	半球形を呈する。 指頭圧成形後内外口縁部ヨコナデ、内面底部板状工具によるナデ。	淡褐色	良好 石英・長石を含む		完形
1050	土師器中皿	13.4 —	浅い半球形を呈し、わずかに角度を変え、口縁部に至る。端部尖り気味に丸く終る。 内外口縁部ヨコナデ。	灰茶色	精良	良好	
1051	〃	7.4 —	形態1050に似るが、より深い。 指頭圧成形後ヨコナデ。	乳橙色	精良	良好	炭化物付着
1052 四一	〃	16.2 3.5	形態1051に似るが、底部が扁平である。 指頭圧成形後内外口縁部右廻りヨコナデ。内面底部に板状工具による不整方向のナデ。	黒色～灰褐色	良好	良好	内外面に煤付着
1053 四一	〃	15.2 3.7	形態1052に似る。 指頭圧成形後外面口縁部ヨコナデ。	褐色～乳白色	良好	良好	内面炭化物付着 外面煤付着 完形
1054 四一	〃	15.5 3.7	形態・調整とも1052に似るが底部はより扁平となり、口縁部は直線的に伸びる。	淡褐色～明橙色 内面乳褐色	良好	良好	内面煤付着 ほぼ完形
1055	〃	15.4 —	形態1051～1054に似るが深めでほぼ半球形を呈する。	灰茶色	精良	良好	
1056	土師器杯	— — 高台径 7.0 高台高 0.8	断面逆三角形で垂直に下る高台。内面底部は丸く窪む。 高台貼付はヨコナデによる。	淡褐色	良好 白色砂粒を含む	良好	
1057	〃	— — 高台径 6.4 高台高 0.6	断面逆三角形で端部近くで外反気味に開く。 高台貼付はヨコナデによる。	灰褐色	良好 白色砂粒を含む	良好	
1058	黒色土器椀（B類）	16.8 —	丸いカーブで口縁部に至る。端部短く外反し、先細となり丸く終る。 内外面密なヘラミガキ、外面口縁部ヨコナデ。	漆黒色	良好	良好	
1059	黒色土器椀（A類）	— — 高台径 7.2 高台高 0.9	断面U字形で「ハ」の字形近くに開く高台。 高台貼付はヨコナデによる。見込みにヘラミガキ見られる。	褐灰色 一部明橙色 内面黒色	良好	良好	
1060	須恵器蓋	— 高台径 4.8 高台高 0.3	断面逆三角形の高台。 内外面回転ナデ。	淡灰色	良好	良好	
1061	瓦器小皿	9.8 —	浅い半球形を呈する。口縁端部は内に幅広の窪みが一周し、内彎気味となり丸く終る。 内外体部ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ。	黒灰色	精良	良好	

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1062	瓦器小皿	10.2 —	浅い半球形を呈し、口縁部外反気味に伸びる。端部は内に沈線状の段を持ち、尖り気味に終る。 調整1061と同じ。	黒灰色	精良	良好	
1063	〃	10.2 —	底部から屈曲し、直線的に斜上方に伸び口縁部に至る。端部は尖って終る。 内外口縁部のヨコナデの他不明。	黒灰色	精良	良好	
1064	瓦器椀	14.0 —	丸いカーブで口縁部に至る。端部先細となり、尖り気味に終る。 外面やや粗、内面密なヘラミガキ、口縁部ヨコナデ。指頭圧成形時の窪み残す。	淡褐色	良好 白色細砂粒を含む		
1065	〃	14.0 —	1064 に似るが、口縁端部は丸く終る。 内外面密なヘラミガキ、その後内面に螺旋状ヘラミガキ。指頭圧成形時の窪みを残す。	漆黒色～灰白色	精良	良好	二次火熱を受けたため一部変色
1066	〃	15.4 —	口縁部は若干外反気味となり、器肉を減じて端部へ至る。 内外面密なヘラミガキ、1065同様内面に螺旋状ヘラミガキ。	褐灰色～黒色	精良	良好	
1067	〃	15.8 —	丸いカーブで口縁部へ至り、端部丸く終る。 内外面密で丁寧なヘラミガキ。	黒灰色	精良	良好	
1068	〃	16.0 —	やや直線的に伸び、口縁部に至る。端部若干尖り気味に終る。 1065・1066同様のヘラミガキ。	黒灰色 光沢有り	精良	良好	
1069	〃	14.9 5.8 高台径 6.1 高台高 1.1	平坦な底部から丸く終る端部まで連続する。高台は断面U字形でシャープ、「ハ」の字形に開く。 内外面密なヘラミガキ、外面4分割・内面乱方向。	白黄色～灰白色 内面に黒色の部分あり	良好	良	二次火熱を受ける。
1070 四一	〃	15.4 6.2 高台径 6.4 高台高 1.1	1069に似るが、口縁部は直立気味となる。高台断面逆台形、端部近くで外反する。 外面分割を意識した粗いヘラミガキ、内面密な乱方向のヘラミガキで体部と見込みを分化する。	黒灰色～灰白色	良好	良好	器表斑点状に剥離する 完形
1071	〃	15.8 5.5 高台径 6.4 高台高 0.9	浅く直線的な器形、口縁部外反気味で端部丸く終る。高台は断面U字形で「ハ」の字形に開く。 内外面密なヘラミガキ。見込みには一方向に施される。	黒灰色	精良	良好	
1072	〃	16.2 6.1 高台径 6.8 高台高 0.9	半球形を呈し、口縁部・高台の形態は1071に似る。 内外面密なヘラミガキ。	黒灰色 光沢あり	精良	良好	外面に油煙
1073 四一	〃	16.8 6.1 高台径 6.6 高台高 0.9	半球形を呈し、口縁端部に内傾する面を持つ。高台は重厚で断面逆三角形、「ハ」の字形に開く。 外面分割を意識したヘラミガキ、内面密なヘラミガキ後螺旋状。指頭圧痕顕著である。	黒灰色 光沢あり	精良	良好	内面に油煙
1074	〃	15.6 —	直線的に伸びた後、内向気味となる口縁部。端部は内に沈線状の段を持つ。 外面やや粗、内面密なヘラミガキ。	灰白色 外面やや黄味を帯びる。	良好	良	
1075	〃	15.8 —	直線的に口縁端部まで伸びる。端部は1074同様。 内外面密で丁寧なヘラミガキ。	黒灰色 光沢あり	良好	良好	
1076	〃	16.0 —	形態1074に似る。 内外面密で丁寧なヘラミガキ。外面に指頭圧成形時の窪みが残る。	黒灰色	良好	良好	

遺物番号 図版番号	器種	(径) 法量 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1077	瓦器椀	15.8 -	形態1074に似る。 外面分割を意識したヘラミガキ、内面密なヘラミガキの後螺旋状ヘラミガキ。	黒灰色～ 淡橙色	良好 白色細砂粒を含む	良好	破損後二次火熱を受ける。
1078	〃	15.8 -	半球形の体部、口縁端部は1074同様。 外面やや粗、内面密で丁寧なヘラミガキ。	灰白色 外面やや黄味を帯びる。	良好	良	
1079	〃	16.4 -	形態・調整とも1078に似る。	灰白色 内面は灰白色～黒灰色	良好 白色細砂粒を含む	良	
1080	〃	15.8 -	形態1078に似るが、口縁部直線的である。 外面やや粗、内面密なヘラミガキの後螺旋状ヘラミガキ。	灰白色	良好	良	
1081	〃	16.0 —	形態1078に似るが、口縁部短く外反し、端部内面の段が深くなる。 外面やや粗、内面粗いヘラミガキの後方射状ヘラミガキ。	漆黒色～ 灰白色	良好 白色細砂粒を含む	良	
1082	〃	15.8 -	形態1078に似るが、口縁部外反気味に直立し、端部内面の段鋭い。 外面粗い乱方向、内面粗い弧状ヘラミガキ。	黒灰色～ 灰白色	精良	良	一部に炭素吸着不良部分あり
1083	〃	15.6 —	形態1078に似る。 外面分割を意識したヘラミガキ、内面密なヘラミガキの後弧状ヘラミガキ。	白灰色～ 黒灰色	良好	良	
1084 四三	〃	15.8 6.1 高台径 6.3 高台高 1.1	形態1078に似る。高台は重厚で断面U字形、「ハ」の字形に開き、貼付の際の段を残す。 外面5分割ヘラミガキ、内面密なヘラミガキの後螺旋状ヘラミガキ。高台貼付はヨコナデ。	黒灰色	精良	良好	内外に油煙 ほぼ完形
1085	〃	16.2 6.1 高台径 7.8 高台高 1.2	半球形で丸味の強い体部、口縁部短く外反する。端部・高台は1084同様。 内外面ヘラミガキ。	黒灰色～ 白灰色	精良	良好	破損後風化・二次火熱を受ける。
1086	〃	13.8 —	半球形の体部。口縁部わずかに外反し、端部は水平な面を持つ。 内外面密なヘラミガキ、内面は斜方向に交差する。	黒灰色 光沢あり	精良	良好	
1087	〃	15.0 -	短く外反する口縁部、端部内傾する面を持つ。 内外面粗いヘラミガキ。	黒灰色	良好 白色砂粒を含む	良好	内外に油煙
1088	〃	14.8 -	形態1086に似るが、端部丸く終る。 外面分割を意識したヘラミガキ、内面密なヘラミガキの後螺旋状ヘラミガキ。	漆黒色	良好	良好	内面表皮磨耗気味
1089	〃	15.9 -	形態1086に似る。 内外面丁寧なヘラミガキ。	黒灰色～ 灰白色 光沢あり	良好	良好	外面の一部に炭素吸着不良部分あり
1090	〃	16.0 —	形態1089に似るが、体部と口縁部との境に稜を持つ。器肉厚い。 調整1089と同じ。	漆黒色～ 灰白色	良	良好	
1091	〃	16.0 —	半球形、端部先細となり内傾する面を持つ。 外面やや粗、内面密なヘラミガキ。	灰白色 やや赤味を帯びる	良好	良好	

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1092	瓦器椀		16.2 —	形態1088に似る。 内外とも水平なヘラミガキ。	灰白色 やや赤味を帯びる	良好	良好	
1093 四一	〃	高台径 6.6 高台高 1.0	15.4 5.9	平坦な底面を持ち、1089同様の形態。高台は断面U字形で「ハ」の字形に開く。 外面4分割、内面体部乱方向、見込み一方向のヘラミガキ。	灰白色～ 薄黒色 赤味を帯びる部分あり	良好	良	破損後風化 二次火熱を受ける 完形
1094	〃	高台径 6.5 高台高 1.0	15.8 6.2	形態は1093に似るが、底面はやや窪む。 外面・内面体部横方向、見込み乱方向のヘラミガキ。	褐灰色～ 黒灰色 中核は赤味を帯びる	良好	良	
1095 四三	〃	高台径 6.8 高台高 1.0	15.9 6.3	形態は1093に似るが、端部丸く終る。 外面に分割を意識したヘラミガキが施されているが不明瞭。	灰白色～ 灰黒色 赤味を帯びる	良好	良	破損後二次火熱のため部分的に変色　完形
1096	〃		15.4 —	丸味を持つ体部から外反し、直立する口縁部に至る。端部丸く終る。 外面分割を意識したヘラミガキ、内面密なヘラミガキ。	灰白色～ 黒灰色	精良	良好	
1097 四三	〃	高台径 6.8 高台高 0.8	15.6 6.0	形態は1096に似る。底部は薄く窪む。高台は断面U字形で、「ハ」の字形に強く外反する。 外面やや粗、内面螺旋状のヘラミガキ。	灰白色～ 黒灰色 一部褐色	精良	良好	
1098	〃		16.4 —	形態・調整とも1096に似るが、口縁部は強く外反する。	黒灰色 光沢あり	精良	良好	
1099	〃		15.8 —	形態1098に似る。 外面やや粗、内面に弧状のものを交差させる。	灰白色 やや赤味を帯びる。	良好	良好	二次火熱を受けたための変色？
1100 四二	〃	高台径 6.3 高台高 1.0	15.0 6.0	形態1098に似る。高台は厚手で断面U字形、「ハ」の字形に開く。 ヘラミガキは外面3分割、内面乱方向で体部と見込みを分化する。	黒灰色～ 灰白色 光沢あり	精良	良好	外面に油煙 内面炭素吸着不良 完形
1101 四三	〃	高台径 6.8 高台高 1.1	16.0 6.5	形態1098に似る。高台は強く外反する。 外面5分割ヘラミガキ、内面の調整は1100と同じ。	黒灰色	精良	良好	ほぼ完形
1102 四二	〃	高台径 6.3 高台高 1.0	14.5 5.6	平坦な底部。口縁部は短く、著しく外反する。高台は薄手で断面U字形、「ハ」の字形に開く。 外面分割を意識したヘラミガキ、内面密に乱方向、体部と見込みを分化する。	黒灰色 光沢あり	精良	良好	外面に油煙
1103 四二	〃	高台径 6.3 高台高 1.0	14.7 6.6	底部はやや丸味を持つ。口縁部・高台は1102とほぼ同じ。 外面5分割ヘラミガキ、内面の調整は1102と同じ。	黒灰色	精良	良好	外面に油煙 表皮磨耗 完形
1104 四二	〃	高台径 6.1 高台高 1.1	15.8 5.9	形態・調整とも1102同様、高台は垂直に下る。	黒灰色～ 灰白色	精良 赤色酸化粒を若干含む	良好	外面に油煙 内面炭素吸着不良 完形
1105	〃	高台径 6.3 高台高 0.7	— —	断面逆台形で垂直に下る高台。底面中央はやや窪む。 見込みのヘラミガキは乱方向に施される。	漆黒色	良好 灰白色細砂粒を含む	良好	
1106	〃	高台径 6.4 高台高 0.7	— —	断面逆三角形で垂直に下る高台、底面は平坦である。 見込みのヘラミガキは乱方向。	黒灰色	精良	良好	

遺物図版番号	器種	(cm) 法量 口径 底径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1107	瓦器椀	— — 高台径 6.8 高台高 0.8	断面U字形で垂直に下る高台。 ヘラミガキわずかに認められる。	黒灰色	精良	良好	
1108	〃	— — 高台径 7.6 高台高 1.0	断面逆三角形で「ハ」の字形に外反する高台。 外面一方向に粗、見込みに乱方向のヘラミガキ。	灰白色 中核は赤味を帯びる	精良		
1109 図二	〃	— — 高台径 6.8 高台高 1.0	断面U字形の重厚な高台、「ハ」の字形に外反気味に開く。 見込みのヘラミガキは乱方向。	黒灰色	精良	良好	
1110	〃	— — 高台径 6.8 高台高 1.0	断面U字形の重厚な高台、「ハ」の字形に開く。 見込みのヘラミガキは乱方向。	黒灰色～ 灰白色	精良	良好	高台炭素吸着不良
1111	〃	— — 高台径 7.3 高台高 1.0	断面逆台形で「ハ」の字形に外反気味に開く高台。 底面中央は深く窪む。器肉は薄い。 見込みのヘラミガキは乱方向。	黒灰色	精良	良好	

SE-4出土遺物　(第54図)

遺物図版番号	器種	(cm) 法量 口径 底径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1112	土師器小皿	8.4 —	外反して口縁部に至る。端部は内に巻き込み、外傾する面を作る。 内外面ヨコナデ。	乳白色	精良	良好	
1113	〃	9.3	形態・調整とも1112に似る。	乳橙色	精良 赤色酸化粒を含む	良好	
1114	〃	9.0 0.9	丸味のある扁平な底部から、強く外反して口縁に至る。端部は1112と同じ。 指頭圧成形後内外口縁部ヨコナデ、内面底部一方向のナデ。	灰白色 内面乳橙色	精良	良好	
1115	〃	9.7 1.3	形態1114に似るが、端部の巻き込み幅狭く、つまみ上げ気味に終る。 指頭圧成形後内外面口縁部ヨコナデ。	灰茶色	精良	良好	煙芯油煙
1116	〃	10.6 —	底部から緩やかに外反し、口縁部に至る。端部はわずかに巻き込み、つまみ上げ気味に終る。 指頭圧成形後内外口縁部ヨコナデ。	灰茶色	精良	良好	
1117	〃	10.5 —	形態・調整1116に似る。	淡橙色～ 鮮赤色	精良	良好	
1118	〃	10.0 2.0	底部からごくわずかに外反し、口縁部に至る。端部は丸く巻き込む。 指頭圧成形後外面底部板状工具によるナデ、内外口縁部ヨコナデ。	灰緑色 黄味を帯びる	良好	良好	
1119	〃	9.4 —	平坦な底部から屈曲し、口縁部は丸いカーブで伸びる。端部つまみ上げ、外傾する面を持つ。 内外口縁部ヨコナデ。	灰白色～ 褐色	良好 白色細砂粒を含む	良好	

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1120	土師器中皿		8.4 —	浅い半球形、口縁部やや外反する。 指頭圧成形後外面口縁部、内面ヨコナデ。	灰白色 やや赤味を帯びる	精良	良好	
1121	〃		12.4 —	丸味のある浅い底部から、外反気味に立ち上がる口縁部に至る。端部は尖り気味に終る。 内外口縁部ヨコナデ、外面に補位の粘土接合痕あり。	灰褐色～ 淡橙色	精良	良好	
1122	〃		12.8 2.5	底部から丸く屈曲し、斜上方へ直線的に伸び、端部近くで外反する。端部は丸く終る。 指頭圧成形後内外口縁部ヨコナデ。	灰褐色～ 灰黄色	精良	良好	
1123	土師器杯		12.0 —	半球形を呈し、口縁部は上外方へ直線的に伸びる。端部は先細で丸く終る。 指頭圧成形後外面口縁部・内面ヨコナデ。	黒褐色	良 石英・石粒を多量含む	良好	
1124	黒色土器 A類椀		15.8 —	口縁部まで連続した丸いカーブで伸びる。端部は先太で丸く終る。 外面体部ヘラケズリの痕跡あり。内面ヘラミガキ、内外口縁部ヨコナデ。	乳橙色 内面漆黒色	良好 石英・白色石粒を含む	良好	
1125	〃		— 高台径 6.0 高台高 0.9	ほぼ半球形を呈する体部。高台は断面U字形、「ハ」の字形に開く。 内外面ヘラミガキ、外面表皮剥離のため、一次調整のケズリが認められる。	淡褐色 内面黒褐色	良好	良好	
1126	瓦器椀		13.2 —	口縁部まで直線的に伸び、端部尖り気味に丸く終る。 内外面丁寧なヘラミガキ。	漆黒色	精良	良好	
1127	〃		15.6 —	形態・調整とも1126に似るが、端部は先太となり、わずかな平坦面を持つ。	灰黒色～ 灰白色	精良	良好	内外面とも斑点状に剥離
1128	〃		16.8 —	形態・調整とも1126に似る。	漆黒色	精良	良好	
1129	〃		14.8 —	直線的に伸びる深い器形。体部と口縁部との境には、ヨコナデによる稜を持つ。 内外面丁寧なヘラミガキ。	灰黒色～ 灰色	精良	良好	
1130	〃		17.5 —	浅い体部から、ヨコナデによって外反する口縁部に至る。 内外面やや粗いヘラミガキ。	漆黒色	精良	良好	
1131	土師器釜		22.1 —	丸く外反する口縁部。端部は丸く終る。 外面体部ヘラケズリの後ナデ、内面体部ヘラケズリ、内外口縁部ヨコナデ。	淡褐色～ 灰褐色	良好 石英・石粒を多量含む	良好	
1132	〃		24.8 —	「く」の字形に屈曲する口縁部。器肉を減じ、丸く終る端部へ至る。 内面体部板状工具によるナデ、内外口縁部ヨコナデ。	灰褐色～ 明橙色	良 石英・石粒を多量含む	良好	
1133	土師器羽釜		22.7 — 鍔 径 29.3	直立気味の頸部から斜上方へ伸びる口縁部。端部外傾する面を持つ。鍔は水平に伸びる。 内面板状工具によるナデ、内外口縁部・鍔周辺ヨコナデ。	灰緑色～ 淡褐色	良 石英・石粒を多量含む	良好	内面に煤付着
1134	須恵器片口鉢		—	内に稜を持って外反する口縁部のみ遺存。端部は外に皿を持ち、つまみ上げる。 全体を回転ナデ、流口はナデによってつまみ出す。	灰白色	精良	堅緻	

ＳＫ－１山土遺物　（第56図）

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量 口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1135	弥生時代中期 甕	15.4 —	直線的な体部から丸く屈折し、水平近くに伸びる口縁部、端部丸く終る。 外面体部ヘラミガキ、内面体部ハケナデ、内外口縁部ヨコナデ。	黒色～褐色 内面黄褐色	良好 石英・雲母石粒を多量に含む	良好	
1136	〃	28.6 —	丸く屈曲し、水平近くに伸びる口縁部、端部はわずかにつまみ上げ、垂直な側面を作る。 内外面ヨコナデ。	乳橙色	良好 石英・白色石粒を含む	良好	
1137	〃	— 底径 5.6	体部から突出する底部、中央は深く窪む。 外面底部周囲ユビナデ、内面にはヘラ状工具の圧痕認められる。	淡褐色	良好 石英・雲母を多量に含む	良好	

ＳＫ－５山土遺物　（第59・60図）

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1138 四四	土師器小皿	9.2 1.5	丸味のある底部から外反し、口縁部に至る。端部の巻き込み幅広く、外傾する面を持つ。 指頭圧成形の後ナデにより、余分の粘土を削る。外面口縁部・内面全体を右廻りヨコナデ。	乳黄色～黒灰色	良好	良好	化粧土剥離 完形
1139	〃	9.4 1.6	形態・調整1138に似るが、口縁部へはあまり外反せずに続く。	淡褐色	精良 繊維多量に含む	良好	完形
1140	〃	9.5 1.7	形態・調整1138に似るが、底部の器肉厚く、内面底部には一方向のナデが施される。	淡褐色	精良	良好	
1141 四四	〃	8.6 1.5	形態・調整1138に似るが、端部のヨコナデが強く、凹面となる。	淡褐色～乳橙色	精良 赤色酸化粒を含む	良好	完形
1142	〃	9.2 —	形態1141に似るが、端部のヨコナデがより強く、端部には沈線状の窪みが一周する。 内外口縁部ヨコナデ。	灰緑色	精良	良	
1143	〃	8.7 1.4	形態・調整1138に似るが、端部は丸く巻き込む。	灰白色～乳橙色 内面灰白色	精良 赤色赤化粒を含む	良好	完形
1144	〃	9.2	形態・調整とも1143に似る。	灰茶色～灰緑色 内面乳褐色	精良	良好	化粧土一部剥落
1145 四四	〃	9.2 1.8	形態・調整とも1143に似る。	灰緑色	精良	良好	完形
1146 四四	〃	9.4 1.8	形態・調整とも1143に似るが、口縁端部にはつまみ上げる部分も見られる。	淡褐色～灰緑色	精良	良好	完形

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	打欠石器	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1147 四四	上師器小皿	9.3 1.8		底部から緩やかに外反し、口縁部に至る。端部はつまみ上げ気味に巻き込む。 指頭圧成形後内外口縁部ヨコナデ。	淡橙色	精良 赤色酸化粒を含む	良好	完形
1148 四四	〃	9.8 1.7		形態1147に似る。 指頭圧成形後丁寧なナデで圧痕を消す。内外口縁部ヨコナデ。	灰緑色	精良	良好	完形
1149 四四	〃	9.3 1.3		形態1147に似るが、やや扁平である。 指頭圧成形後外面口縁部・内面全体を右廻りヨコナデ。	乳橙色	精良	良好	燈芯油煤 完形
1150 四四	〃	9.5 1.6		形態1147に似るが、端部はつまみ上げ、外傾する狭い面を作る。 指頭圧成形後内外口縁部右廻りヨコナデ、内面底部一方向のナデ。	暗灰緑色～黒灰色	精良	良好	煤付着 燈芯油煤 完形
1151 四四	〃	9.3 1.6		形態・調整とも1150に似る。	灰茶色～明橙色	精良	良好	完形
1152 四四	〃	9.4 1.2		平坦な底部から外上方へ伸びた後屈曲し、水平に開く口縁部。端部つまみ上げ気味に終る。 指頭圧成形後ナデで余分の粘土を削る。内外口縁部右廻りヨコナデ、見込み一方向のナデ。	乳橙色～鮮赤色	精良	良好	完形
1153 四四	〃	10.0 1.4		形態・調整とも1152に似るが、器肉厚く、口縁部への屈曲は緩い。	乳橙色	精良 白色砂粒を含む。	良好	完形
1154 四四	〃	9.9 1.1		形態・調整とも1152に似る。	淡褐色～黒色	良好	良好	燈芯油煤 完形
1155 四四	〃	10.1 1.5		形態1152に似るが、はとんど屈曲せずに口縁部に至る。 粘土紐巻き上げ後内外体部ユビナデ、口縁部ヨコナデ。	灰褐色～明橙色	良好	良好	完形
1156	〃	8.5 1.6		扁平な底部から外反し、口縁部に至る。端部は先太となり、内彎気味に巻き込んで終る。	灰褐色～乳橙色	精良	良好	燈芯油煤
1157	〃	9.8 —		形態・調整とも1156に似る。	灰緑色～黒灰色	精良	良好	化粧土剥落
1158	〃	9.4 1.6		形態1156に似るが、端部は丸く肥厚する。 指頭圧成形後外面底部板状工具によるナデ、内外口縁部ヨコナデ、内面底部一方向のナデ。	淡灰色～褐色	精良	良好	燈芯油煤
1159 四四	〃	9.2 1.7		緩やかに外反し、口縁部に至る。端部はほとんど巻き込まず、丸く終る。 指頭圧成形後外面底部板状工具によるナデ、外面口縁部・内面全体右廻りヨコナデ。	淡褐色 やや赤味を帯びる	精良 白色砂粒を含む	良好	完形
1160 四五	〃	9.8 1.6		扁平な底部からわずかに外反して口縁部に伸びる。端部は丸く終る。 指頭圧成形後内外口縁部ヨコナデ。	明橙色～乳黄色	良好	良好	完形
1161	〃	10.1 —		形態・調整1160に似る。	灰茶色	精良	良好	

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1162	土師器小皿	9.5 1.4	底部からほとんど外反せずに口縁部に至る。端部つまみ上げ気味に丸く終る。 調整1160と同じ。	灰緑色～乳橙色	精良	良好	完形
1163 四五	〃	9.5 1.4	きわめて扁平な底部から外反して口縁部に至る。端部は肥厚気味に丸く終る。 粘土紐巻き上げ後外面底部板状工具によるナデ外面口縁部・内面全体右廻りヨコナデ。	灰緑色	良好	良好	完形
1164 四五	〃	9.5 1.1	形態1162に似るが、扁平な器形。 調整1163と同じ。	灰白色～乳橙色	精良	良好	完形
1165	〃	9.3 1.6	形態1160に似る。 指頭圧成形後内外口縁部右廻りヨコナデ、内面底部一方向のナデ。	淡灰色～乳橙色	精良 砂粒を含む	良好	完形
1166 四五	〃	9.5 1.9	やや深めの器形、口縁部へは外反せずに続く部分もある。端部はつまみ上げ気味に終る。 指頭圧成形後内外口縁部ヨコナデ。	淡褐色	精良	良好	完形
1167	〃	8.6 1.8	ほとんど外反せずに口縁部に至る。端部はごくわずかにつまみ上げ気味に終る。 指頭圧成形後内外口縁部ヨコナデ。	淡褐色	精良	良好	
1168	〃	9.6 —	丸いカーブで口縁部まで連続する。端部は丸く終り、内に沈線が廻る。 内外口縁部付近のヨコナデのみ遺存。	灰色 内面灰黄色	良好 砂粒を含む	良好	
1169	〃	9.5 —	形態1168に似るが深く、端部は丸く終る。 指頭圧成形後外面口縁部・内面全体ヨコナデ。	乳橙色	精良	良好	
1170	〃	9.9 1.6	扁平な底部から稜を持ち、斜上方へ伸びる口縁部に至る。端部は尖り気味に終る。 粘土紐巻き上げ後外面底部指頭圧ナデ、内外口縁部ヨコナデ、内面底部一方向のナデ。	明橙色～灰緑色	良好 石粒を含む	良好	完形
1171 四五	〃	10.0 2.0	いびつで扁平な底部、口縁部はわずかに外反して伸びる。端部尖り気味に終る。 調整1170と同じ。	灰褐色 内面は灰褐色～乳橙色	良好	良好	完形
1172	土師器中甕	15.2 —	ほぼ半球形を呈する。口縁部は尖り気味に終る。 指頭圧成形後外面底部を板状工具によるナデ、内外口縁部ヨコナデ、内面横撫一方向のナデ。	乳橙色～鮮赤色	良	良好	内面に煤付着
1173	〃	15.7 3.4	浅めの半球形を呈し、口縁部は外反し、端部尖り気味に終る。 外面口縁部のヨコナデの他不明。粘土の接合痕顕著である。	黒色～淡褐色 内面灰褐色	良好	良好	内外面に煤付着
1174 四五	〃	15.9 3.6	形態1173に似るが底部は平坦面を持つ。 粘土紐巻き上げ後外面横形指頭圧ナデ、内外口縁部右廻りヨコナデ、内面底部に一方向のナデ。	乳褐色	良 チャート・くさり礫を含む	良	外面に煤・表皮剥離
1175	〃	17.0 4.2	形態1174に似る。 粘土紐巻き上げ後ナデ、内外口縁部ヨコナデ。	黒色～褐色 内面淡褐色	精良	良好	外面に煤
1176	〃	14.2 —	扁平な底部から、稜を持って斜上方へ内彎して伸びる口縁部に至る。端部は丸く終る。 指頭圧成形後内外口縁部ヨコナデ。	灰緑色	精良	良好	

遺物番号 図版番号	器種	(㎝) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1177	土師器中皿		15.1	浅い器形、強く外反する口縁部に至る。端部尖り気味に丸く終る。 調整1176と同じ、外面には指頭圧成形の際の凹みを残す。	淡褐色～ 褐色	精良	良好	内外面煤付着
1178	〃		17.0	形態・調整とも1177に似るが、指頭圧痕はより顕著である。	灰色～ 乳橙色	精良	良好	
1179	〃		15.0 —	短く外反する口縁部。端部丸く肥厚して終る。 調整1178と同じ。	乳灰色	精良	良好	
1180	〃		15.0	形態・調整とも1179と同じ。	灰白色～ 灰緑色	精良 砂粒を含む	良好	
1181	〃		16.6	平坦な底部から屈折し、外反して口縁部に至る。端部わずかに肥厚した後、尖って終る。 指頭圧成形後内外口縁部ヨコナデ、内面底部方向のナデ。	褐色	精良	良好	内面に煤付着
1182	〃		17.6 —	浅めの半球形、外反して長く伸びる口縁部。端部丸く終る。器肉薄い。 指頭圧成形後内外口縁部ヨコナデ。	褐色～灰色 内面は淡褐色～褐色	良好 砂粒を含む	良好	内外面に煤付着
1183 四五	土師器台付皿	褐径	15.4 4.0 7.4	扁平な底部から強く外反し、長く伸びる口縁部端部尖る。「ハ」の字形に開く脚が付く。 指頭圧成形後内外底部ナデ、口縁部・脚にヨコナデ。	淡褐色～ 黒褐色	精良	良好	
1184	〃	褐径	— — 7.2	外反ぎみに長く伸びる高台のみ遺存。 内外面ともヨコナデ。	灰緑色	良好 小石粒含む	良好	
1185	土師器杯		15.0 —	直線的に斜上方に伸びる体部。口縁部は外反し、端部は丸く終る。 指頭圧成形後内外口縁部ヨコナデ。	暗灰色～ 灰色	精良	良好	
1186 四五	〃		21.8 —	形態1185に似るが大型で、口縁部は器肉を減じて強く外反する。 内外口縁部ヨコナデ、内面体部板状工具によるナデ。	乳橙色～ 淡褐色	良好	良好	内面に煤付着
1187 四五	土師器甕		16.4 —	体部から屈曲し、斜上方へ伸びる口縁部。端部は短く屈折し、丸く終る。	淡褐色～ 茶褐色	良 石英・白色砂粒を多量に含む	良好	内外面口縁部に煤付着
1188	土師器羽釜	鍔径	— — 31.0	「く」の字形に屈曲する口縁基部を残す。鍔はほぼ水平に伸び、端部はつまみ上げる。 外面ヨコナデ、内面口縁部ヨコナデ、体部ナデ。	黒色～褐色	良 石英・長石多量に含む	良好	内外面に煤付着
1189	黒色土器椀 （A類）		13.8 —	丸いカーブで口縁端部へ至る。端部は内にヨコナデによる緩い稜を作り、内傾する面を持つ。 内外口縁部ヨコナデ。体部外面ヘラケズリ、内面ヘラミガキの痕跡が認められる。	灰褐色 内面は黒色	良好	良好	
1190	黒色土器椀 （B類）		12.4 —	直線的に伸びる体部から、わずかに外反して口縁部に至る。端部は丸く終る。 外面のヘラミガキ粗く、一次成形の指頭圧痕・ヘラケズリが認められる。内面密なヘラミガキ。	淡褐色 内面黒灰色	良好	良好	
1191	〃		14.8 —	ごくわずか外反気味となる口縁部。端部先細で丸く終る。 指頭圧成形・ナデの後外面分割を意識したヘラミガキ、内面密なヘラミガキ。	漆黒色	良好 白色砂粒を多量に含む	良好	

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1192	黒色土器椀 (B類)	15.0 —	口縁部短く外反し、端部は内傾する面を持って尖る。 内外面とも密な水平のヘラミガキの後、斜方向のものを施す。	漆黒色	精良	良好	
1193	〃	15.9 —	深めで直線的な体部、口縁部緩い稜を持って外反する。端部丸く終る。器肉薄い。 指頭圧成形後内外体部ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ。	漆黒色	良好 白色砂粒を多量に含む	良好	
1194	黒色土器片口鉢 (B類)	22.8 —	上外方に伸びる口縁部。端部は器肉を減じて外反ぎみに伸びる。 内外面粗いヘラミガキ、口縁部ヨコナデ。流口は指ナデによってつまみ出す。	乳橙色～ 灰褐色 内面は黒色	良好 白色細砂粒を含む	良好	
1195	瓦器椀	13.4 —	丸いカーブで連続して端部に至る。 内外面とも密なヘラミガキ、外面は分割を意識している。	灰黒色	精良	良好	
1196	〃	15.0 —	直線的に伸びる体部。ヨコナデによって内外に凹線状の窪みが廻った後、尖って終る。 内外面とも粗いヘラミガキ、外面にはヘラケズリの痕跡が認められる。	淡褐色	精良	良好	
1197	〃	15.5 —	口縁部へはわずかに外反して続く。端部は丸く終る。 内外面ともやや粗いヘラミガキ、外面は水平、内面は弧状に施される。	灰黒色	精良	良好	
1198	〃	15.0	口縁部は厚みを増し、端部内面に沈線状の段が廻る。 内外面ともやや粗いヘラミガキ、外面は分割を意識し、指頭圧痕認められる。	灰色～ 灰黒色	精良	良好	
1199	〃	14.4 —	やや深めの体部で、口縁部はわずかに外反気味端部は丸く終る。 内外面密なヘラミガキ、外面は分割を意識する。	明褐色～ 淡褐色	精良	良好	二次火熱を受けたために変色
1200	〃	15.5 —	浅い体部からヨコナデによって著しく外反し、端部は薄く尖り気味に終る。 内外面とも密なヘラミガキ、内面には螺旋状の部分がある。	灰黒色 一部灰緑色	精良	良好	
1201	〃	16.0 —	外面にヨコナデによる稜を持ち、強く外反する端部は尖って終る。 内外面とも密なヘラミガキ、外面横方向、内面斜方向。	灰黒色	精良	良好	
1202	〃	14.8 5.3 高台径 6.9 高台高 0.9	形態1199に似るが、口縁部はより強く外反する。高台は断面逆三角形で、「ハ」の字形に開く。 内外面体部ヘラミガキ、口縁部ヨコナデを施すが、不明瞭である。	灰色～ 灰黒色 鮮赤色の部分あり	良好 径3.0㎜前後の石粒含む	良好	二次火熱を受けたために変色。胎土気味
1203 図五	〃	15.5 6.0 高台径 7.1 高台高 1.1	形態1199に似る。高台は断面逆台形で長く「ハ」の字形に開く。高台端部は面を持つ。 内外面ヘラミガキ、内面斜方向に交差し、見込みと体部を分化する。外面やや粗く指頭圧痕残る。	黒灰色	精良	良好	完形
1204	〃	— — 高台径 7.0 高台高 0.9	断面U字形で「ハ」の字形に開く高台、楕円形に貼付される。底部は直線的に窪む。 見込みにヘラミガキ、高台貼付はヨコナデによる。	灰黒色～ 褐色	精良	良好	
1205	〃	— — 高台径 7.8 高台高 1.0	断面逆三角形で「ハ」の字形に外反する長めの高台。底部は丸く窪む。 内外面ヘラミガキ、高台貼付のヨコナデは丁寧で、端部にまで施される。	黒灰色～ 褐色	精良	良好	
1206	〃	— — 高台径 7.6 高台高 0.7	断面逆三角形に近い高台、端部近くで外反して伸びる。 内面のヘラミガキは体部と見込みを分化する。	灰黒色 内面は黄味を帯びる	精良 密	良好	

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1207	瓦器椀	— - 高台径 高台高 0.9	形態1206に似るがやや高めの高台、貼付の際の段が認められ、楕円形に付く。 外面には成形時のヘラケズリが認められる。内面体部水平、見込みにジグザグのヘラミガキ。	淡橙色	精良 白色細砂粒を含む	良好	二次火熱を受けたために変色
1208	〃	— - 高台径 7.2 高台高 0.7	断面逆台形で外反気味の高台、底部の器肉は薄く、体部厚い。 内外面ヘラミガキ、外面は分割を意識し、内面体部と見込みの間にナデが一周する。	灰褐色	良好 白色砂粒を含む	良好	
1209	瓦器小皿	9.8 1.9	浅い半球形、口縁部外反気味に伸び、端部は内に段を持つ。 内外面ヘラミガキ、口縁部水平、外底面・見込み一方向。	淡赤色 鮮紅色・黒色の部分あり	精良	良好	二次火熱を受けたために変色 完形
1210	〃	9.8 —	形態1209に似るが、端部丸く終る。 指頭圧成形後内面水平なヘラミガキ。	黒灰色	精良	良好	
1211	〃	9.8 —	底部からわずかに角度を変え、口縁部に至る。端部薄くなって終る。 内外面水平で密なヘラミガキ、内面には格子状に施す部分もある。	黒灰色	精良	良好	
1212	〃	10.3 2.3	浅い半球形の底部から、ヨコナデによって外反する口縁部に至る。端部丸く終る。 外面4分割のヘラミガキ、内面は体部と見込みを分化する。	黒灰色	精良	良好	
1213	〃	10.8	平坦な底部から屈曲し、直線的に伸びる口縁部に至る。端部つまみ上げ、内に段が一周する。 ヘラミガキ、外面体部・内面口縁部は水平、外面底部平行。外面口縁部・内面底部ヨコナデ。	黒灰色 やや黄味を帯びる	精良	良好	
1214	白磁椀	15.8 —	直線的に伸びる体部から折り返し、断面半円形の玉縁状口縁部に至る。	灰緑色の釉	灰白色緻密	良好	
1215	須恵器ねり鉢	24.4 —	直線的な体部から外に稜を持ち、器肉を減じて外反する口縁部。端部は外傾する面を持つ。 外面体部、内面全体ロクロナデ、外面口縁部ヨコナデ。	灰茶色 内面は灰色	精良 密	良好 緊緻	

ＳＫ　６出土遺物　（第63図）

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1220	土師器小皿		10.0 1.4	扁平な底部から、口縁部のみ丸く立ち上がる。端部丸く終る。 指頭圧成形後外面底部ナデ、外面口縁部・内面全体ヨコナデ。	乳褐色	良好	良好	
1221 四六	〃		9.4 1.7	丸味のある底部から、わずかに外反して口縁部に至る。端部つまみ上げ、側面に凹線が廻る。 指頭圧成形後外面底部に板状工具によるナデ、内外口縁部右廻りヨコナデ、内底面一方向ナデ。	灰褐色～ 乳橙色	精良 細石粒を含む	良好	ほぼ完形
1222	〃		9.4 2.1	丸く深味のある底部から短く外反する口縁部に至る。端部は丸く肥厚気味に巻き込む。 内外面とも口縁部のヨコナデの他不明瞭	灰緑色	精良	良好	
1223	〃		10.2 2.2	浅い半球形の底部。外面はヨコナデによって屈曲した後、外反気味となる口縁部に至る。 指頭圧成形後外面底部ヘラケズリ、内外口縁部ヨコナデ。	灰白色～ 乳橙色	良好	良好	
1224	土師器中皿		16.8 2.6	扁平な底部から丸味を持って立ち上がる。口縁部はヨコナデによって2段に外反する。 指頭圧成形後内外口縁部右廻りヨコナデ、内面底部一方向のナデ。	乳白色～ 乳橙色	精良 赤色酸化粒を含む	良好	
1225	土師器壺		28.0 —	内に稜を持ち、斜上方に伸びる口縁部のみ遺存端部はつまみ上げ、外傾する面を持つ。 調整不明	黒褐色	良 石英・石粒を多量に含む	良好	
1226	瓦器椀		15.6 —	半球形の体部から外反する口縁部に至る。端部は尖り気味に終る。 内外面とも密なヘラミガキ。	灰黒色 光沢あり	精良	良好	外面の一部炭素吸着不良
1227	〃		17.0	丸く張り出した後、口縁端部まで直線的に伸びる。器肉厚い。 外面ヘラケズリの後上位に粗いヘラミガキ。内面はナデの後弧状のヘラミガキ。	灰黒色～ 灰白色	精良	良好	外面の一部炭素吸着不良
1228	〃		— — 高台径 7.6 高台高 0.9	断面逆台形で「ハ」の字形に開く高台で、貼付の際の段を残す。底面は平坦である。 内面ヘラミガキ、高台の貼付はヨコナデによる。	灰黒色	精良	良好	

ＳＫ－７出土遺物　（第63図）

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1229	黒色土器椀（B類）		13.7 —	半球形を呈する。口縁部はごくわずかに外反し、尖り気味に終る 外面ヘラケズリの後体部ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ。内面不明瞭。	漆黒色～ 暗灰色	良好 白色細砂粒を含む	良好	
1230	瓦器椀		13.8 —	直線的に伸びる体部から、ヨコナデによって外反する口縁部に至る。端部丸く終る。 内外とも体部ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ。	灰黒色 内面黒灰色	精良	良好	完形
1231 四六	〃		15.2 5.7 高台径 6.5 高台高 0.6	形態1230に似るが、端部先細で尖る。底部深く窪む。高台は断面逆台形で低い。 ヘラミガキ外面4分割、内面密の後螺旋状。高台貼付のヨコナデは丁寧である。	灰黒色 内面黒灰色	精良	良好	完形

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1232	瓦器椀	16.4 —		底部から一旦開いた後、斜上方に伸びる浅い器形、口縁部の形態は1230に似る。高台貼付の痕跡を残す。 内外とも体部ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ。	鮮赤色 中核灰白色	精良	良	二次火熱を受けたため変色

SD－1出土遺物　(第64図)

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器形	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1233	古墳時代前期 甕	14.6 —		体部から丸く屈曲し、斜上方へ内彎気味に伸びる口縁部。端部上方へ丸味を持って立ち上がる。 外面体部ハケナデ、口縁部ヨコナデ。内面体部ヘラケズリ、口縁部ハケナデ。	良好 雲母粒・白色砂粒を含む	良好	良好	

SD－3出土遺物　(第64図)

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器形	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1234	古墳時代前期 甕	15.6 —		体部から「く」の字形に緩く屈曲し、斜上方へ外反する口縁部。端部上方へつまみ、外傾する面を持つ。内外口縁部ヨコナデ。内面体部ヘラケズリがわずかに認められる。	乳茶色 内面灰色	良好 白色砂粒を含む	良好	
1235	〃	15.8 —		形態・調整とも1234と同様。	灰褐色	良好 雲母粒を多量に含む	良好	
1236	〃	16.4 —		形態・調整とも1234に似るが、端部は丸味を持ち、垂直な面を作る。	黒色 内面淡褐色	良 長石・石英多量に含む	良好	外面に煤付着

SD－4出土遺物　(第64図)

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器形	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1237	黒色土器椀 (A類)	11.8 —		半球形の体部。口縁部直線的に伸び、端部は内に沈線状の段を持ち、尖り気味に終る。 外面体部ヘラケズリの後ナデ、内面ヘラミガキ内外口縁部ヨコナデ。	淡褐色 内面・口縁端部以下1cmは黒灰色	良好 雲母粒を多量に含む	良好	
1238	土師器小皿	11.0 —		扁平な底部、口縁端部のみヨコナデによってつまみ上げる。 内外口縁部のヨコナデの他不明	乳橙色 一部褐色	精良	良好	
1239	土師器甕	12.8 —		体部から一旦直立した後屈折し、斜上方へ内彎気味に伸びる口縁部に至る。端部丸く終る。 外面体部ヘラミガキ、外面口縁部・内面ヨコナデ。	灰白色～黒色 内面は黒色	良好 石英・白色砂粒を含む	良好	
1240	土師器鉢	10.7 —		内傾気味に直立する口縁部・端部は内に肥厚し、内傾する面を持つ。 外面ヘラケズリの後内外体部をヘラミガキ、口縁部ヨコナデ。	灰色	精良 白色砂粒を含む	良好	

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1241	土錘	径 孔径	1.8 0.4	一端を欠損する管状土錘。欠損面は転用のためか平滑にされている。	淡褐色	良好	良好	
1242	平瓦			凹面に模骨痕残す。7本／1cmの布目痕。凸面縄目タタキ。狭端面・側面をナデ。側面には0.5cmの面取り。	淡灰色	良 石英を含む	良 やや軟質	

SD－6出土遺物　(第68図)

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1243	土師器小皿		9.8 1.5	扁平な底部からわずかに外反し、口縁部に至る。端部はごくわずかにつまみ上げる。 指頭圧成形後内外口縁部ヨコナデ。	灰褐色	精良	良好	
1244	〃		9.6 1.9	浅い半球形を呈し、端部は丸く終る。底部と口縁部との境に緩い稜を持つ部分もある。 内外口縁部ヨコナデ。	明橙色～ 乳褐色	精良 赤色酸化粒を含む	良好	
1245 図六	土師器小型杯		10.0 2.6	半球形を呈し、口縁部はヨコナデによってわずかに外反し、先細で終る。 指頭圧成形後内外口縁部ヨコナデ。内面底部は無調整。	淡褐色 やや赤味を帯びる	良好	良好	完形
1246	土師器杯		13.2 — 高台径 7.4 高台高 0.3	平坦な底部から屈曲し、上外方へ直線的に伸びる。高台は断面逆三角形で低く、垂直にとる。 指頭圧成形後外面体部ナデ、口縁部ヨコナデ。内面口縁部ヨコナデ、内面底部一方向のナデ。	淡褐色～ 茶褐色	精良 白色細砂粒を含む	良好	
1247	〃		13.8 3.4	平坦な底部から屈曲し、斜上方へ直線的に伸びる。 指頭圧成形後内外口縁部ヨコナデ。	茶褐色	良　石英 チャート・ 白色砂粒を多量に含む	良好	
1248 図六	土師器甕		15.4 —	丸味のある「く」の字形に屈曲し、内彎気味に開く口縁部。端部は肥厚し、平坦面を作る。 体部ナデ、口縁部ヨコナデ。外面体部には指頭圧痕が残る。	淡褐色	良好 白色細砂粒を含む	良好	
1249 図六	〃		15.5 —	緩やかに屈曲して伸びる口縁部。端部は外傾する面を持つ。器肉厚い。 外面体部ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ、内面体部ナデ、口縁部ヨコナデ。	灰褐色 内面淡褐色	良好 白色細砂粒を含む	良好	
1250	黒色土器椀 (A類)		12.6 —	半球形を呈し、端部尖り気味に丸く終る。 外面体部ヘラケズリ後粗いヘラミガキ、口縁部ヨコナデ。内面体部ナデの後粗いヘラミガキ、口縁部ヨコナデ。	灰褐色 内面灰黒色	良好 白色細砂粒を含む	良好	
1251	〃		13.9 —	深い半球形、器肉薄く端部尖り気味に終る。 内外面体部ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ。外面体部には指頭圧痕が残る。ヘラミガキ原体の幅は狭い。	褐色 内面・端部下1.2cmは黒灰色	良好	良好	
1252	〃		14.8 5.5 高台径 6.8 高台高 0.8	丸味のある底部から、直線的に伸び、丸く終る端部に至る。高台は断面逆三角形で低い。 外面体部にヘラケズリの痕跡、内面体部にヘラミガキの痕跡、口縁部・高台貼付ヨコナデ。	乳褐色 内面は灰褐色～黒色	良好 白色細砂粒を含む	良好	
1253	〃		15.6 —	半球形を呈する。端部尖り気味に丸く終る。 内外体部ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ。高台貼付の際のヨコナデが認められる。	淡褐色～ 黒色 内面は黒色	精良	良好	

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1254	黒色土器椀 (A類)		14.3 —	浅めの半球形を呈する。口縁部外反した後端部は内に内傾する凹面を作り、尖って終る。 外面体部ケズリ後、内面体部ナデ後粗いヘラミガキ。内外口縁部ヨコナデ。	乳橙色～ 灰褐色 内面は黒色	良好	良好	
1255	〃		14.4 5.5 底径 7.2	半球形の体部。口縁部は内に浅い沈線が廻る。 高台は断面U字形で「ハ」の字形に開く。 内外面体部ヘラミガキ、口縁部・高台貼付ヨコナデ。外面体部には指頭圧痕が認められる。	褐色 内面は黒色	良好 石英を含む	良好	
1256	〃		14.8 6.2 底径 7.0	形態・調整1255に似るが、口縁部直立気味となり、端部の沈線は鋭い。	淡褐色 内面は黒色	良好	良好	
1257	〃		— — 底径 6.4	断面U字形で長く外反する高台。 高台の貼付はヨコナデ、見込みヘラミガキ。	灰褐色～ 明橙色 内面は黒色	精良 白色細砂粒を含む	良好	
1258	〃		— — 底径 7.6	断面逆三角形で「ハ」の字形に開く高台。 調整1257と同じ、外底面には指頭圧痕残る。	明橙色～ 乳褐色 内面は黒色	精良 白色細砂粒を含む	良好	
1259	黒色土器鉢 (A類)		— 底径 12.4	断面逆三角形の高台。 高台周囲のヨコナデの他不明。	乳橙色 内面は黒灰色～乳褐色	良 石英・石粒を多量に含む	良好	
1260	黒色土器椀 (B類)		12.6 —	深めの半球形、端部の形態は1254に似るが、つまみ上げが顕著で内に沈線状の段を持つ。 内外とも表皮磨耗著しく、ケズリ・ナデの痕跡が認められる。	黒色	良好 石英・白色細砂粒を多量に含む	良	
1261 四六	〃		13.6 5.2 底径 7.2	平坦な底部から屈曲し、直線的に伸びる。端部1260と同じ、高台は断面半円形で極めて低い。 内外とも体部細く密なヘラミガキ、口縁部ヨコナデ。	灰黒色	精良	良好	
1262	〃		15.0 —	直線的に開く体部からわずかに外反する口縁部。端部は巻き込み、内に沈線状の落みが廻る。 内外とも体部細く密なヘラミガキ、口縁部ヨコナデ。	黒色	良好 白色細砂粒を含む	良好	
1263	瓦器椀		13.8 —	浅めの半球形の体部からわずかに外反するIJ線部に至る。端部は尖り気味に終る。 外面指頭圧成形後ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ、内細密なヘラミガキ。	乳白色	精良	良好	
1264	〃		15.8 —	形態・調整とも1263に似るが、口縁部の外反は緩い。	灰黒色	精良	良好	
1265	〃		16.2 —	半球形の体部、端部は尖って終る。 調整1263と同じ。	灰黒色～ 灰白色	精良	良好	外面の一部炭素吸着不良
1266	〃		— — 高台径 6.0 高台高 0.7	断面逆台形で垂直に下る長い高台。 高台貼付はヨコナデによる。見込みに平行なヘラミガキ。	灰白色～ 灰黒色	精良	良好	底部炭素吸着不良
1267	瓦器小皿		8.4 —	浅い半球形、端部は尖り気味に丸く終る。 内外面ヘラミガキ。	灰黒色～ 灰白色	精良	良	内面の一部炭素吸着不良
1268	〃		9.8 —	底部からわずかに外反し、器肉を減じて丸く終る端部に至る。 外面底部にヘラケズリの、内外口縁部にヘラミガキの痕跡。	灰色	精良	良好	表皮磨耗気味

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1269	白磁碗	— —	直線的に伸び、断面三角形の玉縁状口縁部に至る。	灰緑色の釉	密 灰白色	良好	貫入あり
1270	棰の子	幅 14.1 最大径 4.8 最小径 2.9	両端を粗く削る。中央部には工具による丁寧な削りが認められ、使用痕の窪みが一周する。芯材を使用する。	—	—	—	火熱を受ける

SD－7出土遺物　（第69図）

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1271	土師器小皿	8.8 —	底部から丸く外反する口縁部。端部は丸く巻き込む。 内外口縁部ヨコナデ。	乳白色～ 乳橙色	精良	良好	
1272	〃	9.3 1.4	丸味のある底部から外反する口縁部。端部はつまみ上げ、外に面を作る。 指頭圧成形後外面口縁部、内面全体ヨコナデ。	淡褐色	精良	良好	
1273	〃	10.0 1.6	丸味のある底部から外反する口縁部。端部は丸く巻き込む。 指頭圧成形後外面底部ナデ、内面板状工具によるナデの後内外口縁部。	乳橙色	精良 赤色酸化粒 砂粒を含む	良好	
1274	〃	9.7 1.4	形態1273に似るが、底部は扁平である。 指頭圧成形後内外口縁部ヨコナデ。	乳橙色	精良	良好	
1275	〃	9.7 —	形態1273に似るが、口縁部の外反・端部の巻き込みは緩い。 調整1274と同じ。	乳橙色	精良	良好	
1276	〃	10.6 —	浅い半球形の底部から水平に外反する口縁部。端部の巻き込み幅狭く、つまみ上げ気味に終る。 調整1274と同じ、内面底部に一方向のナデが認められる。	乳橙色	精良	良好	
1277	〃	9.6 1.7	形態1276に似る。 調整1273と同じ。	灰白色	精良	良好	
1278	〃	9.3 1.5	底部からあまり外反せずに口縁部に至る。端部肥厚気味に丸く終る。底部丸く隆起する。 指頭圧成形後内外口縁部ヨコナデ、内面底部一方向ナデ。	灰白色	精良	良好	燈芯油痕
1279	〃	9.4 1.4	浅めの半球形を呈する底部。口縁部の形態は、1278に似る。 調整も1278に似るが、外面に縦位の粘土の接合痕認められる。	淡褐色	精良	良好	
1280	〃	9.2 2.1	浅めの半球形の底部から外反して口縁部に至る。端部は外傾する面を持ち、巻き込む。 調整1278と同じ。	灰色～ 乳橙色	精良 石粒を含む	良好	
1281 四七	〃	9.7 1.8	平坦な底部から斜上方に伸びた後緩やかに外反する。端部は丸く巻き込む。 指頭圧成形後外面底部板状工具によるナデ、内外口縁部右廻りヨコナデ。縦位の粘土接合痕。	乳褐色～ 乳橙色	精良	良好	完形

遺物番号 図版番号	器種	(㎝)口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1282 四七	土師器小皿	10.6 1.9	半球形の底部からあまり外反せずに口縁部に至る。端部は1281のように丸く巻き込む。 調整1281と同じ。	乳褐色～明橙色	精良	良好	完形
1283	〃	10.3 1.9	形態1282に似るが、底部は丸く隆起する。 指頭圧成形後内外口縁部ヨコナデ、内面底部一方向のナデ。	乳褐色～灰白色	精良 石粒を含む	良好	
1284	〃	10.5 1.8	形態1281に似る。口縁端部の巻き込み幅は狭く、つまみ上げ気味に終る。 指頭圧成形後内外口縁部ヨコナデ。	灰褐色	精良	良好	
1285	〃	10.4 2.0	浅めの半球形を呈する。端部は丸く巻き込む。 指頭圧成形後外面底部ナデ、内外口縁部右廻りヨコナデ。	乳白色 内面乳橙色	精良	良好	
1286	〃	10.0 2.0	形態・調整1285に似る。	乳橙色	精良	良好	
1287	〃	11.0 1.8	形態・調整1285に似る。	乳橙色	精良	良好	
1288	〃	9.9 1.8	扁平な底部からごくわずかに外反し、口縁部に至る。端部丸く終る。 指頭圧成形後外面底部ナデ、外面口縁部・内面ヨコナデ。	乳白色	精良	良好	
1289	〃	10.0 1.4	扁平な底部からごくわずかに外反した後、内彎する口縁部、端部は丸く終る。器肉薄い。 調整1288と同じ。	灰白色	精良 砂粒を含む	良好	
1290	〃	9.6 1.4	浅い半球形、端部は丸く終る。 指頭圧成形後内外口縁部ヨコナデ、内面底部に一方向のナデ。	乳白色 やや赤味を帯びる	精良	良好	
1291	〃	9.9 2.1	浅めの半球形を呈する。端部尖り気味に丸く終る。器肉厚い。 指頭圧成形後外面底部ナデ、外面口縁部・内面全体ヨコナデ。	灰褐色～灰色	精良	良好	
1292	土師器中皿	13.2 —	丸味を持つ底部から外反気味の口縁部に至る。端部は丸く終る。 指頭圧成形後内外面とも底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡褐色	精良 雲母粒含む	良好	
1293	〃	15.5 —	形態1292に似るが、大きい。 指頭圧成形後内面底部に板状工具によるナデ、内外口縁部ヨコナデ。	褐色～乳橙色	精良 雲母粒含む	良好	
1294 四七	〃	15.4 3.3	形態・調整とも1293に似る。	乳橙色～明橙色	精良	良好	煤付着 完形
1295	〃	15.6 3.0	形態・調整とも1293に似るが、外面口縁部のヨコナデは2段に施される。	灰褐色～乳橙色	精良 雲母粒含む	良好	
1296	〃	14.5 3.4	浅めの半球形を呈し、口縁部は上外方へ外反気味に伸びる。 指頭圧成形後内面底部に不整方向のナデ、内外口縁部ヨコナデ。	乳橙色	精良 雲母粒含む	良好	

遺物番号 図版番号	器種	(㎝) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1297	土師器中皿	14.1 -		浅めの半球形を呈し、端部は尖り気味に丸く終る。 調整1296と同じ。	乳白色 やや赤味を帯びる。	精良	良好	
1298	〃	16.0 -		浅い半球形、端部丸く終る。 指頭圧成形後内外口縁部ヨコナデ。	灰褐色	精良 雲母粒含む	良好	
1299	土師器甕	22.0 -		肩部から丸く屈曲し、外傾して伸びる口縁部。端部は水平な凹面となる。 内外面口縁部ヨコナデ、内面体部にヘラケズリの痕跡。	淡褐色	良	良好	口縁端部に煤付着
1300	土師器小皿	11.0 -		丸味を持った底部から屈曲し、器肉を減じて外反する口縁部に至る。端部は丸く終る。 内外面とも密なヘラミガキ、外面口縁部ヨコナデ。	灰黒色	精良	良好	
1301	瓦器椀	15.4 —		直線的な体部からヨコナデによってわずかに外反する口縁部に至る。端部は尖り気味に終る。 内外面とも密で細かいヘラミガキ、外面体部に指頭圧痕残る。	乳橙色～ 乳白色	精良	良好	
1302	〃	15.6 —		形態・調整とも1301に似るが、体部は丸味を持つ。	灰黒色	精良	良好	
1303	〃	16.4 —		丸く屈曲した後直線的に伸び、外反する口縁部に至る。端部尖り気味に丸く終る。 指頭圧成形後粗いヘラミガキ、口縁部ヨコナデ内面のヘラミガキは円弧状。	灰黒色	精良	良好	
1304	〃	16.0 —		半球形の体部から器肉を減じて屈曲し、口縁部に至る。端部は尖り気味に終る。 内外面ヘラミガキ、外面口縁部ヨコナデ。	灰白色～ 黒灰色	精良	良好	炭素吸着不良
1305	〃	16.6 —		丸い体部からわずかに外反する短い口縁部に至る。端部は丸く終る。 指頭圧成形後ヘラミガキ、外面口縁部ヨコナデ。	灰白色～ 灰黒色	精良	良好	炭素吸着不良
1306	〃	— 高台径 4.9 高台高 0.8		断面逆三角形で垂直に下る高台。底部は平坦で一旦張った後、体部に続く。 内外面ヘラミガキ、内面は体部と見込みを分化する。高台貼付の際のナデは強い。	灰黒色	精良	良好	
1307	〃	— 高台径 6.0 高台高 0.8		断面逆三角形で垂直に下る高台。 見込みにヘラミガキ。	乳灰色 やや赤味を帯びる	精良	良好	二次火熱を受けたための変色とも考えられる。
1308	〃	— — 高台径 6.9 高台高 0.9		断面逆台形で、「ハ」の字形に外反する高台。内側には貼付の際の段を残す。 見込みにヘラミガキ。	灰黒色～ 灰白色	精良	良好	底部炭素吸着不良
1309	〃	— 高台径 8.0 高台高 1.0		断面逆三角形で垂直に下る高めの高台。 見込みにヘラミガキ。	乳灰色 やや赤味を帯びる	精良	良好	炭素吸着不良
1310	黒色土器椀 (B類)	14.0 —		丸味のある体部からわずかに外反する口縁部に至る。端部は丸く終る。 内外ともナデの後粗いヘラミガキ。	灰黒色～ 黒色	良好 白色砂粒を含む	良好	
1311	〃	— 高台径 6.4 高台高 0.5		断面U字形の低い高台で、わずかに開き気味となる。底部は平坦。 見込みにヘラミガキ。	黒色	良好 石粒を含む	良好	

遺物番号 図版番号	器種	(口) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1312	青磁碗		-- —	器肉を増しながら斜上方に伸び、断面三角形の口縁端部に至る。	灰釉色の釉薄く光沢あり	白色緻密	良好	
1313	土錘	径	0.9	細い管状土錘、一端は欠損する。	乳橙色	良好 石粒を多量に含む	良好	

SD－8出土遺物　(第71図)

遺物番号 図版番号	器種	(口) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1314	土師器小皿		7.4 —	丸味のある底部から立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。 調整不明。	灰色～ 明橙色	良好 白色細砂粒を含む	良好	外面底部に煤付着
1315	〃		7.7 1.7	形態1314に似るが、口縁部はより強く外反する。 指頭圧成形後内外口縁部ヨコナデ、内面ナデ。	灰褐色～ 黒灰色	精良	良好	口縁部に煤付着
1316	〃		9.1 —	偏平な底部から丸味を持って立ち上がった後、外反して口縁部に至る。端部巻き込んで終る。 調整1315と同じ。	乳白色～ 乳橙色	精良	良好	
1317	〃		10.4 1.8	浅い半球形を呈し、口縁部は斜上方へ伸びる。 調整1315と同じ。	乳褐色～ 灰褐色	良好 白色細砂粒を含む	良好	内面煤付着
1318	土師器杯		10.4 1.8	浅い半球形を呈する。口縁部はわずかに外反し、端部丸く終る。 内外口縁部のヨコナデの他不明。	褐色	良好 石英・砂粒を多量に含む	良好	
1319	黒色土器椀 (A類)		15.8 —	半球形の体部。口縁部は外反気味となり、端部は内に沈線状の窪みを持ち、丸く終る。 内外面ともヘラミガキの後口縁部ヨコナデ。	褐色～ 茶褐色 内面黒色	良好 石英・白色砂粒を含む	良好	
1320	黒色土器椀 (B類)		18.9 —	直線的に伸びる口縁部、端部は内に沈線状の段を持ち、尖って終る。 指頭圧成形後内外体部密なヘラミガキ、口縁部ヨコナデ。	漆黒色	精良	良好	

SD－11出土遺物　(第73・74図)

遺物番号 図版番号	器種	(口) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1321	土師器小皿		8.2 —	丸味のある底部から稜を持って屈曲し、外反する口縁部。端部外傾する面を持ち、つまみ上げる。 指頭圧成形後外面底部板状工具によるナデ、内外口縁部ヨコナデ。	乳橙色	精良	良好	
1322 四七	〃		9.5 1.9	形態1321に似るが、端部は肥厚気味に丸く巻き込む。 指頭圧成形後外面底部ケズリ、外面・内面口縁部右廻りヨコナデ、見込み無調整。	淡褐色～ 褐色	良好 白色砂粒を含む	良好	完形

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 口径 底径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1323 四七	土師器小皿	9.6 1.9	形態1321に似るが、口縁部へは強く屈曲し、鋭い稜が廻る。底面はわずかに隆起する。 指頭圧成形後内外口縁部右廻りヨコナデ、内面底部一方向のナデ。	灰褐色～淡褐色	良好	良好	完形
1324 四七	〃	9.4 1.6	調整・形態1323に似るが、器肉薄く扁平である。	乳橙色～灰白色	精良	良好	ほぼ完形
1325 四七	〃	9.4 1.8	凹凸のある底部から直線的に伸び、わずかに外反する口縁部。端部つまみ上げ、面を作る。 調整1323と同じ。	乳橙色～灰緑色	精良	良好	完形
1326	〃	10.4 2.1	半球形の体部からわずかに外反して口縁部に至る。端部は丸く巻き込む。 指頭圧成形後内外口縁部ヨコナデ、見込みは無調整。	灰褐色～明橙色	良好	良好	
1327	〃	9.0 2.0	浅い半球形の体部からほとんど外反せずに口縁部に至る。端部は巻き込んで終る。 指頭圧成形後板状工具によるナデ、内面底部は無調整。	乳白色	精良	良好	
1328	〃	9.2 1.5	形態・調整とも1327に似るが底部は平坦である。	淡褐色	精良	良好	
1329	〃	9.4 1.6	形態・調整とも1328に似る。内面に指頭圧痕が見られる。	灰白色 やや赤味を帯びる	精良	良好	
1330	〃	9.6 1.5	形態・調整とも1328に似るが、口縁部やや長く伸びる。	灰緑色	良好 雲母粒含む	良好	
1331	〃	9.6 1.6	形態・調整とも1328に似るが、端部の巻き込み幅は一定でない。内面に指頭圧痕が見られる。	乳白色	精良	良好	
1332	〃	9.4 1.2	扁平な底部から、口縁部のみ外反する。端部は薄く、尖り気味に終る。 指頭圧成形後内外口縁部ヨコナデ。	淡橙色	精良	良好	
1333	土師器中皿	15.0 —	底部から丸く屈曲した後、内湾して伸びる口縁部に至る。端部丸く終る。 指頭圧成形後内外口縁部ヨコナデ。指頭圧痕の凹みが顕著である。	灰茶色	良好 砂粒を含む	良好	
1334	〃	14.6 —	半球形の体部、口縁部短く外反する。端部は尖り気味に終る。 指頭圧成形後外面体部ナデ、外面口縁部・内面右廻りヨコナデ。	灰茶色	精良	良好	
1335	〃	14.4 —	形態・調整1334に似る。	灰褐色	精良	良好	
1336	〃	13.2 —	直線的に伸びる体部から外反して開く口縁部に至る。端部は尖って終る。器肉は薄い。 調整1334と同じ。	淡茶色	精良	良好	
1337	瓦器小皿	9.8 2.1	浅い半球形の体部から外反して口縁部に至る。端部は薄く尖る。 指頭圧成形後内外底部ナデ、口縁部2段のヨコナデ。	灰緑色	精良	良好	

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	形態・製整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1338	瓦器小皿	9.0 —	浅い半球形の底部から、斜上方へ伸びる口縁部に至る。底部の器肉厚く、端部は先細で終る。 内外面ヘラミガキ。	漆黒色～灰色 中核やや黄味を帯びる	精良	良好	
1339	〃	9.6 1.9	扁平な底部から斜上方へ直線的に伸びる口縁部。端部は内に沈線状の窪みを持ち、丸く終る。 指頭圧成形後内外ヘラミガキ、内面底部一方向にヘラミガキを施す。	灰緑色	精良	良好	
1340	〃	9.2 —	きわめて浅い半球形で、口縁端部まで連続する。端部は尖り気味に丸く終る。 内外面ともヘラミガキ。	黒灰色～灰白色 内面乳白色	精良	良好	一部炭素吸着不良
1341	瓦器椀	14.4 —	斜上方へ直線的に伸び、口縁部はごくわずかに外反し、丸く終る端部に至る。 ナデの後内外面ヘラミガキ。	黒灰色～灰白色	精良	良好	内面一部炭素吸着不良
1342	〃	15.2 —	半球形の体部、口縁部は直立気味となり、端部は尖り気味に終る。 内外面ヘラミガキが認められるが、不明瞭。	漆黒色～灰黒色	精良	良好	内面表皮層耗気味
1343	〃	14.6 —	半球形の体部から短く外反する口縁部に至る。端部は尖り気味に丸く終る。 外面ヘラケズリの後、内面ナデの後、内外口縁部ヨコナデ。内外体部やや粗いヘラミガキ。	灰黒色	精良	良	表皮斑点状に剥離する
1344	〃	14.8 —	形態1343と同じ。 指頭圧成形の後内外ともナデ、粗いヘラミガキ、口縁部ヨコナデ。	灰黒色～灰白色	精良	良好	内面一部炭素吸着不良 外面に油煙
1345	〃	15.6 —	形態1343に似る。端部は屈曲した後丸くつまんで終る。 内外面とも体部密なヘラミガキ、口縁部ヨコナデ。	灰黒色～灰白色	精良	良好	炭素吸着不良・外面に油煙、表皮斑点状剥離
1346	〃	16.2 —	形態1343に似るが口縁部は強く外反する。 内外面とも体部ヘラミガキ。口縁部ヨコナデ。	漆黒色～灰色 中核やや黄味を帯びる	精良	良好	表皮磨耗気味
1347	〃	— — 高台径 8.0 高台高 0.6	断面逆台形で「ハ」の字形に開く高台。高台高は低い。 内外面ヘラミガキ、高台の貼付はヨコナデ。	灰黒色	精良	良好	
1348	黒色土器椀（B類）	15.4 —	直線的に伸びて、尖り気味に終る端部へ至る。 内外密なヘラミガキ。	漆黒色	良好 砂粒を含む	良好	
1349	〃	— 高台径 6.5 高台高 0.9	断面U字形で、「ハ」の字形に開く高台。体部は上方で器肉を増す。 外面丁寧なヘラミガキ、内面粗いヘラミガキ。高台の貼付は丁寧なヨコナデによる。	漆黒色	精良	良好	
1350	〃	— — 高台径 7.6 高台高 1.0	断面逆台形で「ハ」の字形に開く重厚な高台。底部は丸く窪む。 内外面ヘラミガキ、その後内面には螺旋状のものを施す。高台貼付は丁寧なヨコナデによる。	漆黒色	精良	良好	
1351	土師器鉢	17.1 —	内彎する口縁部、端部では器肉を減じて内傾する面を作る。 外面口縁部付近のヨコナデのみ遺存。内面板状工具によるナデの後口縁部ヨコナデ。	黒色 内面淡茶色	良 石英・チャート・砂粒を多量に含む	良好	外面に炭化物付着
1352	土師器甕	22.6 —	体部から丸く屈曲し、斜上方へ直線的に伸びる口縁部。端部は外傾する面を持つ。 ハケナデの後外面口縁部ヨコナデ、内面全体をナデ。	灰色～灰褐色	良 石英を多量に含む	良好	

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量 口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1353	土師器甕	24.6 —	直線的な体部から緩やかに屈曲し、上外方へ伸びる口縁部。 粗雑な作りで指頭圧痕・板状工具の痕跡が顕著に見られる。	淡褐色～黒灰色	良 石英・白色砂粒を多量に含む	良好	
1354 四七	須恵器甕	32.9 —	肩部から内に稜を持って直立した後、外反して口縁部に至る。端部は上方へつまみ、凹面を作る。 外面肩部に水平な平行タタキの後ナデ、内面体部ナデ、内外口縁部ヨコナデ。	灰色～褐色	精良 石粒を含む	堅緻	内外面煤付着
1355 四七	砥石	幅 8.5～10.5 厚 4.8～ 5.8	断面台形を呈する。両端を欠損し、半面も台形を呈する。4面に使用痕があり、稜の部分は使用のために深く窪む。	—	—	—	
1356	〃	幅 3.6前後 厚 0.3～ 0.5	扁平な石材で、一端は欠損する。他の一端は斜方向に面取りされ、表面全体は平滑である。 一面に使用痕が認められる。	—	—	—	

SP—14出土遺物　(第75図)

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量 口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1357	土師器小皿	9.4 2.1	平坦な底部から斜上方に伸び、わずかに外反する口縁部に至る。端部はつまみ上げ気味。 指頭圧成形後外面底部板状工具によるナデ、内外口縁部右廻りヨコナデ。粘土接合痕あり。	乳橙色	精良	良好	完形

SP－7出土遺物　(第75図)

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量 口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1358	瓦器椀	14.9 —	半球形の体部から短く外反する口縁部に至る。端部は薄く尖る。 指頭圧成形後内外面とも粗いヘラミガキ、口縁部ヨコナデ。	灰黒色～灰白色	精良	良好	一部炭素吸着不良
1359	〃	15.3 5.4 高台径 6.4 高台高 0.7	浅い半球形の体部から外反する口縁部、端部は尖る。高台は断面逆三角形で「ハ」の字形に開く。 内外面体部ナデの後ヘラミガキ、外面は分割し、内面は体部と見込みを分化する。	黒灰色	精良	良好	

包含層

弥生時代～奈良時代の出土遺物（第77図）

遺物番号 図版番号	器種	法量（cm）口径 器高 底径	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1360	弥生時代後期 壺	14.4 —	直立気味の頸部から外反して開く口縁部。端部は丸く終る。 外面口縁部のヨコナデの他不明。内面頸部ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ。	茶褐色	粗 大粒の角閃石・石英を多量に含む	良	2～5区
1361 図八	弥生時代中期 甕	15.2 —	体部から「く」の字形近くに屈曲し、口縁部に至る。端部は先太となり、つまみ上げて終る。 内外面とも体部ハケナデ、口縁部ヨコナデ。	黄褐色	良	良好	2～5区
1362 図八	〃	22.8 —	体部から丸く屈曲し、水平近くに開く短い口縁部。端部は外傾する面を作る。 外面体部ヘラミガキ、内面指頭圧ナデ後ハケナデ・ヘラミガキ、内外口縁部ヨコナデ。	茶褐色～暗褐色	粗 径5.0㎜以上の花崗岩多い	良好	1区
1363	弥生時代後期 甕	— — 底径 4.3	体部から長く突出する上げ底状の底部、底面の器肉きわめて厚い。 外面細い右上がりタタキ、内面ナデ。	黒褐色	粗	良好	2～4区
1364	弥生時代後期 底部有孔土器	— — 底径 4.5	体部から突出する上げ底状の底部、底面中央に焼成後の孔。 調整不明。	黄褐色～淡褐色	やや粗	良好	2～4区
1365	弥生時代後期 小型鉢	— — 底径 3.6	体部から突出し、「ハ」の字形近くに開く上げ底状の底部。 調整不明。	黄褐色	精良	良好	2～4区
1366 図八	古墳時代前期 高杯	— —	杯底部内面に輪状の突起を持つ高杯。 調整不明。	淡灰褐色～乳橙色 杯底面は黒灰色	良	良好	2～4区 表皮磨耗
1367	古墳時代前期 甕	16.8	体部から「く」の字形に鋭く屈曲し、斜上方に伸びる口縁部。端部はつまみ上げて終る。 外面体部細いタタキ、内面体部ヘラケズリ、内外口縁部ヨコナデ。	灰褐色	良好 角閃石含む	良好	2～4区
1368	〃	23.7 —	体部から「く」の字形に屈曲し、外反気味に伸びる口縁部。端部丸く終る。 内外面とも体部ハケナデ、口縁部ヨコナデ。ハケ目は外面密、内面粗。	乳橙色	良好	良	3～4区
1369	奈良時代 甕	11.8 —	体部との境に稜を持ち、丸く外反する口縁部に至る。端部は丸く終る。 外面体部指頭圧ナデ後ヘラケズリ、外面体部ナデ。内外口縁部ヨコナデ。	黒褐色 中核赤褐色	やや粗	良好	3～4区 内面に煤
1370	〃	16.0 —	丸味のある体部から稜を持ち、丸く外反する口縁部。端部は先太で水平な凹面を作る。 外面体部ヘラケズリ、内外口縁部ヨコナデ。	赤褐色～黒灰色	やや粗	良好	3～4区
1371	〃	17.9 —	体部から丸味のある「く」の字形に屈曲して伸びる口縁部。端部は外へわずかに肥厚し、面を持つ。 内外口縁部のヨコナデの他不明。	黄褐色	やや粗 花崗岩含む 雲母付着	良	3～4区
1372	〃	19.0 —	体部から丸く屈曲して立ち上がった後、外反して伸びる口縁部。端部は丸く終る。 外面体部ハケナデ、内面体部ナデ後、内外口縁部ヨコナデ。	淡褐色	良好 微粒の石英長石を含む	良	2～4区
1373	奈良時代 杯	13.4 2.7	平坦な底部から丸味を持って立ち上がり、斜上方に伸びる。端部は丸く巻き込んで終る。 指頭圧成形後外面底部ナデ、口縁部に2段のヨコナデ。内面には放射状の暗文。	淡褐色～乳橙色	良好	良	3～4区 器表磨耗

遺物番号 図版番号	器種	(㎝) 法量 口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1374	〃	14.6 —	丸い体部からわずかに外反する口縁部に至る。端部は丸く肥厚気味につまみ上げる。 口縁部2段のヨコナデの他不明瞭。	乳橙色	良好	良	3～4区 器表磨耗
1375	奈良時代 小型高杯	5.8 3.9 裾 径 3.3	半球形の杯部、端部は尖る。脚は中実で、「ハ」の字形に開く裾部へ至る。 指頭圧成形後脚部縦位のヘラによるナデ、杯部・裾部はユビナデ。	黄褐色	精良 径5.0㎜以下の花崗岩含む	良	3～4区
1376 図八	〃	6.8 4.6 裾 径 2.9	形態・調整とも1375に似るが、杯部は深い。	乳褐色	やや粗	良好	3～4区
1377	奈良時代羽釜	26.4 — 鍔 径 28.4	斜上方へ直線的に伸びる口縁部。端部は内に巻き込んで終る。鍔は水平に伸び、先太で終る。	黄褐色 鍔以下は黒褐色	やや粗 大粒の花崗岩含む	良好	2～4区
1378	〃	30.9 — 鍔 径 33.3	上外方へ外反気味に伸びる口縁部。端部は丸く終る。鍔は水平に伸びる。 鍔付近のヨコナデの他不明。	赤褐色	粗 花崗岩・チャートを含む	良	3～4区

土師器杯・鉢（第78図）

遺物番号 図版番号	器種	(㎝) 法量 口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1379	土師器小型杯	9.3 1.9	浅めの半球形を呈する。口縁部はわずかに外反し、尖り気味に終る。 指頭圧成形後内外口縁部右廻りヨコナデ、内面底部一方向のナデ。	淡黄褐色	良 雲母・細砂粒を含む	良好	5～6区 外面に黒斑 ほぼ完形
1380	〃	10.4 3.5	半球形を呈し、口縁部は尖り気味に終る。 指頭圧成形後内外口縁部ヨコナデ。	乳褐色	良好 白色砂粒を含む	良好	4区
1381	土師器杯	13.2 3.2	平坦な底部から屈曲し、直線的に伸びる。端部は先細で終る。 指頭圧成形後内外口縁部ヨコナデ、内面底部に一方向のナデ。	淡褐色～黄褐色	良	良好	2～4区
1382	〃	13.5 —	底部から一旦張った後立ち上がり、直線的に口縁部へ続く。端部は尖り気味に終る。 指頭圧成形後内面体部板状工具によるナデ、内外口縁部ヨコナデ。	褐色	精良	良好	4区
1383	〃	13.2 —	半球形の体部、口縁部は直線的に伸び、尖り気味に丸く終る端部に至る。 内外面口縁部ヨコナデの他不明瞭、外面には指頭圧痕認められる。	淡褐色	やや粗	良	4区 表皮剥離
1384	〃	13.6 —	半球形の体部から外反する短い口縁部。端部丸く終る。 指頭圧成形後内面体部ナデ、外面口縁部・内面ヨコナデ。	乳橙色	精良 雲母・赤色酸化粒含む	良好	7区
1385	〃	14.8 —	やや直線的な体部。若干丸味を持つ口縁部に至る。端部は丸く終る。 調整1384と同じ。	暗褐色	良	良好	1区 煤付着
1386	〃	15.0 -	口縁部まで直線的に伸びる。端部は丸く終る。 指頭圧成形後内外口縁部ヨコナデ、内面体部は一方向のナデ。	乳茶色	精良	良好	7区

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1387	土師器杯		15.2 —	丸味のある底部から外反し、口縁部に至る。端部は丸く終る。 内外口縁部ともヨコナデ。	淡褐色～ 灰褐色 中核乳橙色	良	良	3～4区
1388	〃		18.2 —	やや直線的に伸びる体部から、わずかに外反する口縁部に至る。端部丸く終る。 指頭圧成形後口縁部2段のヨコナデ。内面体部には不整方向のナデ。	暗灰褐色 中核赤褐色	良	良好	3～4区 二次火熱を受ける
1389	〃		— 高台径 6.8 高台高 0.7	平坦な底部に断面逆台形の低い高台が垂直に下る。高台内に「木」の墨書。 高台貼付はヨコナデ、高台内に指頭圧痕を残し、内面はナデ。	淡褐色	良	良好	
1390	〃		— — 高台径 7.8 高台高 0.7	断面U字形で垂直に下る重厚な高台。 調整不明瞭。	淡褐色 内面黒色	良好	良好	4区 器表磨耗
1391	〃		— 高台径 10.2 高台高 1.2	平坦な底部に断面U字形の高台が垂直に下る。 内面底部に平行なヘラミガキを密に施す。高台周囲にはヨコナデ。	明橙色～ 乳褐色	精良 細砂粒を含む	良好	4区
1392	土師器鉢		— 高台径 10.0 高台高 1.2	平坦な底部に断面逆三角形の高台が垂直に下る。 内面板状工具によるナデ、高台の周囲はヨコナデ。	明橙色	良 石英・チャート等を含む	良好	4区 内底面に炭化物付着
1393	〃		— 高台径 10.2 高台高 1.2	断面逆三角形で「ハ」の字形に開く高台。底部深く窪む。 内外面板状工具によるナデ、高台の周囲ヨコナデ。	明橙色～ 乳褐色	良 石英粒を多く含む	良好	4区 内面に媒付着

黒色土器　(第78図)

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1394	黒色土器椀 (A類)		14.0 —	底部から丸く屈曲した後、直線的に伸びる深い器形。口縁はわずかに外反し、端部丸く終る。 内面にヘラミガキの痕跡、内外口縁部ヨコナデ。外面の調整は不明瞭。	乳橙色～ 白灰色 内面黒色	良好 赤色酸化粒を含む	良好	4区
1395	〃		15.2 — 高台径 6.4 高台高 1.2	半球形の体部。口縁部わずかに外反し、端部丸く終る。高台は断面逆台形で垂直に下る。 内面に幅広のヘラミガキ、内外口縁部ヨコナデ、外面の調整は不明瞭。	乳褐色 内面黒色	精良	良好	4区
1396	〃		16.8 —	口縁部まで直線的に伸びる。端部は丸く終る。 内外面にヘラミガキが見られるが、外面には指頭圧痕、内面には成形時のヘラケズリの痕跡が認められる。	淡褐色 内面黒色	精良	良好	4区
1397	〃		17.0 —	半球形を呈する。端部は尖り気味に終る。 内面ヘラミガキ、外面の調整は不明瞭。	淡褐色～ 淡赤褐色 内面黒灰色	良	良好	3～4区
1398	〃		13.8 —	半球形を呈し、端部は内に沈線状の凹みのある内傾する面を持つ。 内外面とも乱方向の粗いヘラミガキを施すが、外面には成形時のヘラケズリが認められる。	明橙色～ 淡褐色 内面黒色	精良	良好	4区
1399	〃		15.0 —	浅い半球形を呈する。端部は内に沈線状の段を持つ内傾する面を持つ。 外面口縁部のヨコナデの他不明瞭。内面細く丁寧なヘラミガキ。	乳橙色 内面黒褐色	精良	良好	3～4区 表皮磨耗

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1400	黒色土器椀 (A類)		16.0 -	半球形を呈し、端部は内に沈線状の段を作った後、丸く終る。器肉きわめて薄い。 指頭圧成形後内面体部細かいヘラミガキ、内外口縁部ヨコナデ。	淡褐色 内面～外面口縁下2.0cm黒色	良好 石英・長石を含む	良好	4区
1401	〃		- - 高台径 8.2 高台高 0.5	平坦な底部から丸く屈曲して体部に至る。高台は断面逆台形で垂直に下る。 内面粗いヘラミガキの他不明瞭。	淡褐色 内面黒色	良好	良	4区 外面表皮磨耗
1402	〃		- - 高台径 5.7 高台高 0.5	断面逆三角形で垂直に下る高台。 高台周囲に貼付の際のヨコナデ、見込みナデ。	淡褐色 内面黒灰色	良好	良	4区
1403	〃		- - 高台径 6.0 高台高 0.7	断面逆三角形で垂直に下る高台。 調整不明。	淡褐色 内面灰褐色	精良	良好	4区 表皮磨耗
1404	〃		- - 高台径 6.4 高台高 0.8	断面U字形で「ハ」の字形に開く高台。 調整不明。	淡褐色 内面黒灰色	良	良	3～4区
1405	〃		- - 高台径 7.4 高台高 1.0	断面U字形で「ハ」の字形に開く高台。端部は丸く肥厚する。 高台周囲のヨコナデの他不明瞭。	淡褐色 内面黒灰色	精良	良好	3～4区
1406	〃		- - 高台径 7.0 高台高 0.9	平坦な底部から丸味を持って体部に至る。高台は断面逆二角形で低く、垂直に付く。 高台周囲ヨコナデ、内面ヘラミガキ。	淡褐色 内面黒灰色	精良	良好	1～2区
1407	黒色土器鉢 (A類)		17.4 - 最大径 20.3	丸い体部から内傾する口縁部に至る。端部は内に曲を持つ。 内外面とも体部ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ、外面には成形時のヘラケズリの痕跡あり。	灰褐色 内面～外面口縁下2.0cm黒色	良好 石英粒含む	良好	4区
1408	〃		- - 高台径 8.6 高台高 1.1	断面U字形で「ハ」の字形に開く高台。底面は丸く痛む。 高台周囲のヨコナデ他不明瞭。	淡褐色 内面黒灰色	良	良	3～4区
1409	黒色土器小皿 (B類)		11.4 -	平坦な底部から斜上方に立ち上がる口縁部に至る。端部は尖る。 内外面とも細かいヘラミガキ。	漆黒色	良好 白色細砂粒を含む	良好	6～7区
1410	黒色土器椀 (B類)		14.8 -	半球形の体部。端部先太で丸く終る。 外面ヘラケズリの後ヘラミガキ、内面ヘラミガキ。	黒色	良好 白色細砂粒を含む	良好	7区
1411	〃		16.2 -	半球形を呈し、端部尖り気味に丸く終る。 内外面とも細かいヘラミガキ。	黒色～灰色	良好 白色細砂粒を含む	良好	7区 表皮やや磨耗する
1412	〃		16.0 -	半球形の体部。口縁部は外反し、尖り気味に丸く終る。 内外面とも体部ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ。	黒灰色	精良	良好	3～4区
1413	〃		17.3 -	半球形の体部。口縁部わずかに外反気味となり、端部は丸く終る。 指頭圧成形後内外体部ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ。	漆黒色	良好 白色細砂粒を含む	良好	6～7区
1414	〃		- - 高台径 6.7 高台高 0.7	平坦な底部から、直線に伸びる体部に至る。高台は断面逆台形で垂直に下る。 内外面とも密なヘラミガキ。高台の周囲はヨコナデ。	黒色	良好 白色細砂粒を含む	良好	区

土師器皿（第79図）

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1415	土師器小皿	8.2 1.3		平坦な底部から丸味を持って外反し、口縁部に至る。端部は丸く巻き込む。 指頭圧成形後外面口縁部・内面全体ヨコナデ。	淡褐色	良好 白色砂粒を含む	良好	4区
1416	〃	8.2 1.1		形態1415に似るがきわめて扁平な器形。端部は外傾する面を持ち、巻き込む。器肉厚い。 調整1415と同じ。	乳橙色	精良 赤色酸化粒を含む	良好	4区
1417 四九	〃	9.2 1.4		やや丸味を帯びた扁平な底部から緩く外反し、口縁部に至る。端部は肥厚して丸く終る。 内外面とも板状工具によるナデの後底部ユビナデ、口縁部右廻りヨコナデ。粘土接合痕あり。	乳橙色	精良	良好	7区 完形
1418 四九	〃	8.7 1.5		形態・調整とも1417に似るが、口縁部へはほとんど外反せずに続く。	乳橙色	精良	良好	7区 完形
1419 四九	〃	9.2 1.6		形態・調整1418に似る。	乳橙色 中核灰白色	精良	良	3～4区
1420	〃	8.9 -		底部から口縁部までなだらかなカーブで続く。端部は一旦器肉を絞じた後、小さくつまみ上げる。 外面口縁部・内面全体右廻りヨコナデ。	乳橙色 中核灰白色	精良 雲母含む	良好	7区
1421	〃	8.8 1.5		底部から外反して口縁部に至る。端部は上方へわずかにつまみ上げる。 粘土板接合後外面底部板状工具によるナデ、外面口縁部、内面全体ヨコナデ。	灰緑色～ 暗灰色	精良 雲母を含む	良好	7区
1422	〃	9.4 —		形態1421に似るが、端部は丸くつまみ上げる。 ヨコナデ。	灰緑色～ 茶褐色	精良 雲母含む	良好	7区
1423	〃	9.7 —		形態・調整1422に似る。	淡橙色	精良	良好	7区
1424	〃	9.8 1.3		底部から屈曲し、水平近くに伸びる口縁部。端部は肥厚し、垂直に近い広い面を持つ。 指頭圧成形後外面底部ユビナデ、外面口縁部・内面全体ヨコナデ。	灰茶色	精良	良好	7区
1425	〃	10.3 1.3		平坦な底部から丸味を持って立ち上がり、水平近くに外反する口縁部。端部わずかにつまむ。 指頭圧成形後内外口縁部ヨコナデ、内面底部一方向のナデ。	淡褐色	良	良	3～4区 黒斑あり
1426 四九	〃	10.0 1.6		形態1425に似るが、全体に器肉が厚く、端部は幅広に丸く巻き込む。 指頭圧成形後外面底部板状工具によるナデ、外面口縁部ヨコナデ。	乳白色	精良	良好	6区 内面表皮剥離
1427	〃	8.4 —		底部から外反し、斜上方に伸びる口縁部。端部は外傾する面を持つ。 外面底部板状工具によるナデの後、外面口縁部内面全体を右廻りヨコナデ。	茶褐色～ 淡橙色	精良	良好	7区
1428	〃	8.5 1.8		半球形の底部からわずかに外反し、口縁部に至る。端部はごくわずかに巻き込む。 外面口縁部・内面ヨコナデ。	淡橙色～ 淡褐色	精良	良好	7区 外面に籾の圧痕、内面に燈芯油煙
1429	〃	9.0 —		形態・調整1428に似るが、端部は巻き込まずに丸く終る。	灰褐色	精良 雲母を含む	良好	7区

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1430	土師器小皿	8.6 —	形態1427に似るが、端部は先細となり丸く終る。 指頭圧成形後外面底部ユビナデ、外面口縁部・内面全体ヨコナデ。	灰緑色	精良	良好	7区
1431	〃	9.0 2.8	形態1430に似るが、端部つまみ上げる。 外面底部板状工具によるナデの後内外口縁部ヨコナデ。	淡褐色	精良	良好	8区
1432	〃	8.8 —	底部からごくわずかに外反し、つまみ上げる。口縁端部に至る。 調整1430と同じ。	乳橙色～灰褐色	精良 雲母わずかに含む	良好	7区
1433	〃	9.4 —	形態1432に似るが、口縁端部はわずかに肥厚する。 外面口縁部・内面ヨコナデ。	淡茶色 内面灰褐色	良好 白色細砂粒を含む	良好	7区 燈芯油痕
1434	〃	9.4 1.5	わずかに平坦面を持つ底部から緩やかに外反し、口縁部に至る。端部は外へ丸く終わる。 外面口縁部・内面全体ヨコナデ。	灰茶色	精良	良好	7区 外面表皮磨耗、内面に燈芯油痕
1435	〃	9.4 —	底部からわずかに外反し、丸く終る端部に至る。 調整不明瞭	灰緑色	精良 雲母含む	良好	7区
1436	〃	10.0 —	形態1435に似るが若干深く、平坦な底面を持つ。 外面底部板状工具によるナデ、外面口縁部・内面全体ヨコナデ。	明橙色～灰緑色	精良	良好	7区
1437	〃	10.3 —	形態1345に似るが、口縁部は長めに開く。 外面口縁部・内面全体ヨコナデ。	灰茶色	精良 雲母粒・石粒を含む	良好	7区
1438 四九	〃	9.5 3.2	半球形の底部から外反して口縁部に至る。端部は肥厚して丸く終る。 粘土板接合後外面底部ユビナデ、外面口縁部・内面右廻りヨコナデ。	灰白色～明橙色	良好 白色砂粒を含む	良好	7区
1439	〃	7.7 1.1	平坦な底部から外反する口縁部。端部は器肉を増し、内に段を持った後、外傾する面を持つ。 外面底部ユビナデの後外面口縁部・内面全体ヨコナデ。	乳褐色～明橙色	良好 石英・白色砂粒を含む	良好	4区
1440	〃	8.8 —	形態1439に似るが、端部は尖り気味に丸く終る。 粘土板接合後外面底部板状工具によるナデ、外面口縁部・内面全体ヨコナデ。	乳白色	精良	良好	4区
1441 四九	〃	9.0 1.6	浅い半球形の底部からわずかに外反し、口縁部に至る。端部は若干肥厚する。 調整1438と同じ。	淡灰褐色～灰白色	精良	良好	7区 燈芯油痕 ほぼ完形
1442	〃	9.0 1.5	形態・調整とも1441に似る。	淡灰褐色	良好 白色細砂粒をわずかに含む	良好	8区
1443 四九	〃	9.2 1.6	形態・調整1441に似るが、端部はつまみ上げ気味に肥厚する。	乳橙色	精良	良好	7区 燈芯油痕 完形
1444 四九	〃	9.5 1.7	形態1441に似るが、底部は平坦面を持つ。 調整1441と同じ。	灰褐色	精良	良好	7区 完形

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量 口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼土	備考
1445	上師器小皿	9.6 1.6	平坦な底部から稜を持ち、外反する口縁部に至る。端部尖り気味に丸く終る。 外面底部板状工具によるナデ、内外口縁部ヨコナデ。	乳褐色～灰色	精良 雲母をわずかに含む	良好	7～8区
1446	〃	9.9 1.4	形態1445に似るが底部と口縁部の境の稜はなく、端部は丸く終る。 外面底部板状工具によるナデ、外面口縁部・内面全体ヨコナデ。	明橙色～淡灰褐色	良好 赤色酸化粒を含む	良	7区
1447	〃	10.7 —	形態1445に似るが扁平である。 指頭圧成形後外面底部ユビナデ、外面口縁部・内面全体ヨコナデ。	淡橙色～淡灰褐色	良好 赤色酸化粒を含む	良	7区
1448	〃	9.1 —	きわめて浅い半球形。端部はごくわずかに内に肥厚する傾向を残す。 外面底部板状工具によるナデ、外面口縁部・内面全体右廻りヨコナデ。	乳白色	精良	良好	7区
1449	〃	9.6 1.4	きわめて浅い半球形。口縁部はごくわずかに外反し、端部肥厚気味に丸く終る。 指頭圧成形後外面底部ナデ、外面口縁部・内面全体右廻りヨコナデ。	乳橙色～灰白色	精良	良好	6～7区
1450	〃	10.9 —	丸いカーブで、丸くつまみ上げる端部へ続く。 外面底部ユビナデ後外面口縁部・内面全体ヨコナデ。	灰褐色 内面は淡褐色	良好	良好	4区
1451	〃	8.3 —	きわめて浅く、尖り気味に丸く終る端部まで連続して伸びる。 指頭圧成形後外面口縁部ヨコナデ・内面全体ヨコナデ。	乳橙色～淡橙色	良好 石英粒含む	良好	4区
1452	〃	8.8 1.8	浅い半球形、端部丸く終る。 調整不明。	淡褐色	良	良	3～4区 器表磨耗
1453	〃	9.2 —	浅い半球形。口縁部やや直線的に伸び、端部丸く終る。 調整不明。	淡褐色	良好 白色細砂粒雲母多量に含む	良好	7区 器表磨耗
1454 四九	〃	9.7 2.2	形態1453に似るが、端部は尖り気味に終る。 調整不明。	明橙色～褐色	良好 砂粒を多量に含む	良好	6区 器表磨耗 灯芯油煤 完形
1455	〃	9.8 —	形態1453に似る。 内外口縁部ヨコナデ。	褐色～明橙色	良好 白色細砂粒を含む	良	7区
1456 四九	〃	10.0 1.8	形態1463に似るが、端部は尖り気味に丸く終る。 調整不明。	乳橙色	精良 雲母・赤色酸化粒を含む	良好	7区 器表磨耗
1457	〃	10.2 1.5	浅い半球形。口縁部わずかに外反気味に伸び、端部は丸く終る。 指頭圧成形後内外口縁部ヨコナデ。	灰褐色	精良	良好	8区
1458	〃	9.6 1.4	きわめて浅い半球形。端部は丸く終る。 粘土板接合後外面口縁部・内面全体ヨコナデ。	乳橙色	良好 細砂粒を多量に含む	良好	4区
1459	〃	10.2 2.1	浅めの半球形。器肉厚く、端部尖り気味に終る。 指頭圧成形後外面口縁部・内面全体ヨコナデ。	淡褐色	良好 雲母・白色砂粒を含む	良好	7区

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量 口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1460	土師器小皿	9.8 1.7	丸味のある浅い底部から角度を変え、口縁部に至る。端部は外へ尖って終る。 指頭圧成形後外面底部ナデ、外面口縁部・内面全体ヨコナデ。	淡灰褐色	精良	良好	7区
1461	〃	10.1 1.6	形態1460に似るが、器肉薄い。 指頭圧成形後内外口縁部ヨコナデ。	乳橙色～淡橙色	良好 細砂粒・赤色酸化粒を含む	良好	8区
1462	〃	11.0 —	浅い半球形。器肉厚く、端部先細となり尖って終る。 指頭圧成形後外面口縁部・内面全体ヨコナデ。	淡褐色	やや粗	良好	3～4区
1463	土師器中皿	13.0 —	底部から外に緩い稜を持ち、丸いカーブで立ち上る口縁部に至る。端部は丸く終る。 内外口縁部ヨコナデ。	乳褐色 内面褐色	精良 雲母粒含む	良好	7～8区 内面に煤付着
1464	〃	13.4 —	浅い半球形。口縁部付近で器肉を増した後、角度を変え、尖って終る。 指頭圧成形後外面口縁部・内面全体ヨコナデ。	淡赤褐色 中核乳橙色	やや粗	良	3～4区
1465	〃	14.0 —	浅めの半球形。口縁部わずかに直立気味となり、端部は丸く終る。 外面口縁部・内面全体ヨコナデ、底部ナデ。	乳橙色～褐色	精良	良好	4区
1466	〃	14.0 —	浅い半球形を呈し、口縁部先細となり丸く終る。 外面体部ユビナデ後外面口縁部、内面全体ヨコナデ。	淡褐色 内面灰褐色	良好 石英・小石粒を含む	良好	4区 内面に煤付着
1467	〃	14.0	直線的な体部から外反する口縁部に至る。端部尖り気味に終る。 外面体部板状工具によるナデの後、外面口縁部内面全体ヨコナデ。	乳橙色 内面灰褐色	精良	良好	4区
1468	〃	15.3 —	浅い半球形。端部尖って終る。 指頭圧成形後内面底部不整方向のナデ。内外口縁部ヨコナデ。	乳褐色	精良	良好	4区
1469	〃	16.8 —	形態・調整1468に似る。	淡褐色～褐色	良好 石英・石粒を含む	良好	4区 内面に煤付着
1470	〃	16.4 —	底部から丸く屈曲し、斜上方に伸びる口縁部に至る。端部近くで外反し、丸く終る。 口縁部の2段のヨコナデの他不明瞭。	灰色	精良	良好	4区
1471	〃	14.4 —	浅めの半球形、口縁部は外反気味に伸びる。 指頭圧成形後内外底部ナデ、口縁部2段のヨコナデ。	灰白色	精良	良好	7区
1472	〃	14.8 3.2	丸味のある平坦な底部から、直線的に伸びる口縁部に至る。端部内に丸く終る。 指頭圧成形後内外底部板状工具によるナデ、口縁部右廻りヨコナデ。	灰茶色	良好 白色砂粒を多量に含む	良好	7区
1473 四九	〃	15.0 3.5	形態・調整とも1472に似るが、口縁部は若干外反気味となる。	乳橙色～灰白色	精良	良好	7区 ほぼ完形
1474 四九	〃	15.4 4.1	形態・調整とも1473に似るが、深めの器形。	褐色～灰褐色	良好	良好	7区 完形

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1475	土師器中皿		16.7 -	形態1472に似る。 指頭圧成形後内外底部ナデ、口縁部2段のヨコナデ。	乳橙色～ 淡灰褐色	精良 赤色酸化粒 多量に含む	良好	7区
1476	〃		16.8 -	浅い半球形。端部尖り気味に丸く終る。 指頭圧成形後外面口縁部・内面全体ヨコナデ。	乳白色	良好 雲母・石英 石粒を含む	良好	6区
1477	〃		18.0 -	浅い半球形。口縁部はわずかに外反し、端部先細となって終る。 指頭圧成形後外面底部ナデ、内面底部板状工具によるナデ、外面口縁部・内面全体ヨコナデ。	灰茶色	精良	良好	7区
1478 四九	土師器台付皿		- - 脚径 7.2 脚高 1.5	「ハ」の字形に開くやや短めの脚台部。端部は丸く終る。 内外面ヨコナデ。	淡茶色	精良 白色細砂粒 石英・赤色 酸化粒含む	良好	8区
1479 四九	〃		- 脚径 7.2 脚高 2.9	「ハ」の字形に開く脚台部。端部丸く終る。 内外面ヨコナデ。	灰白色～ 黒褐色	精良 白色細砂粒 石英・赤色 酸化粒含む	良好	8区
1480	〃		- - 脚径 6.6 脚高 4.3	皿底部から一旦直線的に伸びた後、「ハ」の字形に開く。端部は先細となる。 内外面ヨコナデ。	淡褐色～ 乳褐色	精良 雲母含む	良好	7区 内面全体・外面の所々に煤付着

十師器甕・羽釜　(第80図)

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1481	土師器甕		13.6 -	張りの少ない体部から丸く屈曲し、外反する口縁部に至る。端部は先細で丸く終る。 指頭圧成形後外面体部ナデ、内面体部ヘラケズリ後ナデ、内外口縁部ヨコナデ。	明橙色～ 乳褐色	良好 石英・白色 砂粒を含む	良好	4区
1482	〃		16.4 -	形態は1481に似るが、端部は丸く終る。 指頭圧成形後外面体部ヘラケズリ、内面体部ヘラケズリ後ナデ。粘土の接合痕顕著である。	明橙色	良好 雲母・石英 等含む	良好	6区
1483	〃		14.8 -	張りの強い体部から一旦真立し、丸く外反する口縁部。端部は器肉を減じ、丸く終る。 内外面とも体部板状工具によるナデ、口縁部ヨコナデ。	乳橙色～ 乳褐色	精良	良好	4区 外面に黒斑
1484 四八	〃		15.0 -	体部の形態は1483に似る。口縁部は強く外反し、端部外へつまみ、外傾する面を作る。 指頭圧成形後内外体部板状工具によるナデ、口縁部ヨコナデ。	茶褐色	粗 チャート・ 石英含む	良好	3～4区 内面に煤付着
1485	〃		15.3 -	丸い体部から「く」の字形に屈曲する口縁部に至る。端部近くで再び屈曲し、外へ丸く終る。 内面ヘラケズリ、内外口縁部ヨコナデ。外面体部には指頭圧痕残る。	淡橙色	精良 石英・白色 細砂粒含む	良好	4区
1486 四八	〃		18.9 -	体部から「く」の字形に緩く屈曲し、外反する短い口縁部。端部は外へつまみ、水平な面を作る。	乳褐色 内面乳橙色	やや粗 花崗岩・石 英含む	良	3～4区
1487	〃		15.0 -	体部から「く」の字形近くに屈曲し、外反気味の口縁部に至る。端部は外へつまみ、水平な面を持つ。内外口縁部ヨコナデ、内面体部板状工具によるナデ。外面不明	乳褐色	良 石英を多量 に含む	良好	7区 外面に煤付着

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1488	土師器甕		14.4 —	体部から「く」の字形近くに屈曲し、口縁部に至る。端部は内へ巻き込み気味に丸く終る。 外面体部板状工具によるナデ、内外口縁部ヨコナデ。	淡灰褐色	やや粗 チャート含む	良好	3～4区
1489	〃		17.4 —	体部から丸く屈曲し、外傾する口縁部に至る。端部は水平な面を持つ。 外面に粘土帯接合痕・内面に板状工具痕あり。内外口縁部ヨコナデ。	灰褐色	良好 石英・石粒多量に含む	良好	4区
1490	〃		23.6 —	体部から「く」の字形に屈曲し、2段に外反する口縁部に至る。端部は外傾する凹面を持つ。 指頭圧成形後外面体部板状工具によるナデ、内面体部ヘラケズリ後ナデ。口縁部2段のヨコナデ。	黄褐色 内面灰褐色	良 石英・白色砂粒含む	良好	4区
1491	〃		14.2 —	内彎する体部から、器肉を増して直立する短い口縁部に至る。端部外傾する面を持つ。 外面体部ヘラケズリ、内外口縁部ヨコナデ。内面体部不明。	淡灰褐色～ 明橙色	良 石英多量・チャート・角内石含む	良好	6区
1492	〃		18.3 —	内傾する体部から垂直に立つ口縁部に至る。端部水平な面を持つ。 内外面板状工具によるナデの後、口縁部ヨコナデ。	乳橙色～ 黄褐色 内面灰色	良 石英を多量に含む	良好	4区
1493	〃		28.8 —	丸味を持って直立する体部から、器肉を減じて内傾気味の口縁部に至る。端部は丸く終る。 外面体部ナデ、内面体部ヘラミガキ、内外口縁部ヨコナデ。	淡褐色	良 石英・石粒を多量に含む	良好	7区
1494	土師器羽釜	鍔 径20.6	29.6 —	体部から「く」の字形に丸く屈曲する口縁部。端部外傾する凹面となる。鍔は水平に伸びる。 指頭圧成形後外面鍔下面から内面口縁部ヨコナデ。内面体部ヘラケズリ。	灰緑色～ 明橙色	良好 雲母・白色細砂粒多く含む	良好	7～8区 内面体部に煤付着
1495	〃	鍔 径20.6	33.3 —	体部から「く」の字形に屈曲する口縁部。端部外傾する面を持つ。鍔はほぼ水平に伸び短い。 調査1949と同じ。	灰褐色	良好	良好	2～4区
1496 図八	〃	鍔 径38.7	32.8 —	内傾気味の体部から直線的に屈曲する口縁部。端部内傾する面を持つ。鍔は短く直線的に伸びる。 鍔から内面口縁部ヨコナデ、内面体部板状工具によるナデ。	灰褐色～ 明橙色	良 石英・チャート雲母含む	良好	5～6区

瓦器　(第81～83図)

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1497	瓦器椀		14.4 —	底部から丸味を持って立ち上がり、直線的に伸びる口縁部に至る。端部は内に丸味を持つ。 内外面ヘラミガキ。	灰黒色～ 灰白色	精良	良	5～6区 油膜あり 炭素吸着不良部分あり
1498	〃		14.8 -	半球形を呈する。端部はごくわずかに尖り気味に丸く終る。 外面口縁部ヨコナデ後、外面体部・内面全体に密なヘラミガキ。外面体部には指頭圧痕残す。	灰黒色 内面は灰黒色～黒灰色	精良	良好	7区 内面に油煙
1499	〃		15.0 -	半球形の口縁部は外反気味で端部丸く終る。 ナデの後外面ところどころにヘラミガキ、内面は粗いヘラミガキ。	明橙色～ 黒灰色	精良	良好	4区 二次火熱のため変色
1500	〃		15.0 —	半球形。器肉きわめて厚く、先細となって端部丸く終る。 内外面にヘラミガキ。	漆黒色	精良	良好	4区

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1501	瓦器椀	15.0 —	浅めの半球形。口縁部わずかに外反し、内に沈線状の浅い凹みを持つ。 内外面のヘラミガキ不明瞭。	濃黒色	精良	良好	4区 器表磨耗
1502	〃	15.2 —	半球形を呈する。端部は丸く終る。 調整外面不明瞭・内面ナデの後、粗いヘラミガキ。	灰色～ 灰黒色	精良 石英含む	良	7区
1503	〃	15.6 —	やや直線的に伸び、丸く終る端部へ至る。 内外面ともヘラケズリの後ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ。	灰白色	良	良	3～4区 煤付着
1504	〃	16.2	浅めの半球形を呈する。端部は内に内傾する面を持つ。 外面細く密なヘラミガキ、内面細いヘラミガキ。	灰黒色	精良	良好	7区
1505 五〇	〃	14.6 5.6 高台径 6.8 高台高 0.9	半坦な底部から直線的に伸び、外反気味の口縁部に至る。高台は断面逆三角形で底部に付く。 指頭圧成形後ヘラケズリ、ヘラミガキは外面分割を意識し、内面は円弧を重ねる。	灰黒色～ 灰白色	精良	良	7区 炭素吸着不良部分・油煙あり。ほぼ完形。
1506 五〇	〃	15.4 6.4 高台径 7.9 高台高 1.0	半球形で口縁部直立し、端部尖り気味に丸く終る。高台断面逆三角形で高く、「ハ」の字形に開く。 ヘラミガキ外面4分割、内面体部横方向、見込み見方向。	灰黒色	精良	良好	7区 油煙あり 完形
1507 五〇	〃	16.1 5.9 高台径 6.7 高台高 0.9	半球形の体部、口縁部わずかに外反して端部尖細で終る。高台は断面U字形で「ハ」の字形に開く。 外面4分割のヘラミガキ、内面密なヘラミガキ。高台貼付はヨコナデ。下半にヘラケズリ残る。	黒灰色	精良	良好	7区
1508	〃	12.8 —	深めの体部からヨコナデによる稜を持ち、外反する口縁部。端部は丸くつまんで終る。 外面ヘラケズリ・内面ナデの後粗いヘラミガキ。	黒灰色	精良 白色細砂粒を含む	良好	7区
1509	〃	13.3 —	形態1508に似るが、端部は尖り気味に終る。 ヘラミガキは外面やや粗・内面細く密。	灰白色	精良	良好	6区
1510	〃	14.6 —	浅めの半球形。口縁部ごくわずかに外反して丸く終る端部に至る。 外面ヘラケズリの後ヘラミガキ。内面密なヘラミガキ。	灰黒色 光沢あり	精良	良好	6区
1511	〃	15.0 —	1508に似るが、口縁部は強く外反し、端部尖って終る。 外面体部ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ、内面全体をヘラミガキ。	黒灰色 光沢あり	良	良好	3～4区
1512	〃	14.8	形態1511に似る。 細く密なヘラミガキ、外面は水平、内面は円弧状のものを重ねる。	灰黒色 光沢あり	精良 白色細砂粒を含む	良好	7区
1513	〃	14.8	体部から外反する口縁部、端部尖って終る。器肉きわめて薄い。 内外ヘラミガキ。	灰黒色	精良 雲母含む	良好	6区
1514	〃	16.0 —	半球形の体部。口縁部は短く外反し、端部は先細で尖って終る。 粗いヘラミガキ、外面水平・内面円弧状。	灰黒色～ 灰白色	良	良	3～4区
1515	〃	15.7 —	形態・調整とも1514に似るが、体部に指頭圧痕が顕著である。	灰黒色	精良	良好	6区

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1516	瓦器椀	16.0 —		形態・調整とも1515に似るが、端部は丸く終る。	黒灰色～ 灰白色	精良 雲母含む	良好	6区 一部炭素吸着不良
1517	〃	15.4 —		形態1516に似るが、口縁部は2段に緩く外反する。 外面ヨコナデ後分割を意識したヘラミガキ、内面ナデ後粗いヘラミガキ。	黒灰色～ 白灰色	精良	良好	7区 外面一部炭素吸着不良
1518	〃	15.8 —		形態1516に似るが、口縁部は強く外反し、端部つまみ出す。 調整1517と同じ。	灰黒色 光沢あり	精良	良好	6区
1519	〃	13.3 —		半球形・口縁部外反した後端部立ち上がり気味となり、内に沈線状の凹みを持つ。 内外面ともヘラミガキ不明瞭。	漆黒色	精良	良好	4区
1520	〃	14.0 —		深めの半球形。口縁部は一旦直立した後外反する。 内外面ともヘラミガキ不明瞭。	黒灰色 光沢あり	良好	良好	3～4区
1521	〃	14.3		半球形の体部から器肉を減じて外反した後、肥厚して丸く終る端部に至る。 内外面とも体部水平なヘラミガキ、口縁部ヨコナデ。	灰黒色	精良	良好	4区 表皮磨耗
1522	〃	15.5		半球形。口縁部外反し、端部尖り気味に終る。 内外面ともヘラミガキ不明瞭。	漆黒色	精良	良好	4区
1523	〃	15.6 —		形態・調整とも1522に似るが、口縁部は強く外反し、端部肥厚気味に丸く終る。	黒灰色	精良	良好	4区
1524	〃	15.4 —		やや直線的な体部から外反する長めの口縁部に至る。端部は器肉を増した後尖り気味に終る。 外面口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは外面全体・内面底部付近一方向、体部は円弧状。	乳橙色～ 乳白色	精良	良好	7区 二次火熱のため変色
1525	〃	15.6 —		浅めの半球形。口縁部の形態は1524に似る。 指頭圧成形後ヘラミガキ。外面密、内面円弧状。	漆黒色	精良 石英を含む	良好	6区
1526	〃	15.4 —		浅めの半球形。口縁部外反気味に伸び、端部丸く終る。 指頭圧成形後ヘラミガキ。外面分割を意識し、内面密。	黒灰色～ 灰白色	精良	良	7～8区 一部炭素吸着不良
1527	〃	15.5 —		半球形の体部。口縁部の形態は1525に似る。 指頭圧成形後内外面密なヘラミガキ。	灰黒色 光沢あり	精良	良好	6区
1528	〃	15.2 —		底部から丸く開いた後直線的に伸び、外反する口縁部。端部近くで器肉を増した後尖って終る。 板状工具によるナデの後ヘラミガキ。外面やや粗、内面密な円弧状。	黒灰色	精良 白色細砂粒を含む	良好	6～7区
1529	〃	16.6 5.3 高台径 7.3 高台高 1.0		浅めの半球形。口縁部は直立し、端部丸く終る。高台は断面逆台形でやや開き気味に付く。 ヘラミガキは外面分割を意識し、内面は乱方向。	灰黒色	良好 白色細砂粒を含む	良好	8区
1530	〃	— — 高台径 6.5 高台高 0.8		丸い底部。高台は断面U字形で「ハ」の字形に付く。 ヘラミガキは内面横方向、見込み乱方向。	灰黒色～ 灰色	精良	良好	7区 高台付近炭素吸着不良

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1531	瓦器椀	— — 高台径 7.7 高台高 0.9	断面U字形で「ハ」の字形に開く重厚な高台。 見込みのヘラミガキ不明瞭。高台内には指頭圧痕認められる。	黒灰色	良	やや不良	3～4区
1532	〃	— — 高台径 6.9 高台高 0.9	断面U字形で垂直に下る高めの高台。 見込みにヘラミガキ認められる。	灰黒色	精良	良	3～4区 表皮磨耗
1533	〃	— — 高台径 6.8 高台高 0.8	丸味のある底部。高台断面U字形で内彎気味に終る。高台内には貼付の際の段を残す。 見込みに放射状ヘラミガキ。	灰黒色～ 灰白色	精良	良	7区 外面底部炭素吸着不良
1534	〃	— — 高台径 6.6 高台高 0.8	断面方形で「ハ」の字形に外反して開く長めの高台。底部は直線的に延む。 見込みヘラミガキ。	黒灰色～ 乳橙色	良	良	2～4区 二次火熱のため変色
1535	〃	— 高台径 6.9 高台高 1.0	断面U字形を呈し、「ハ」の字形に開く重厚な高台。底部は丸く延む。 見込みに乱方向のヘラミガキ。	灰白色～ 灰黒色	精良	良好	4区 高台付近炭素吸着不良
1536	〃	14.2 —	深い体部から強く外反する口縁部、端部丸く終る。 指頭圧成形後外面板状工具によるケズリ後ヘラミガキ。内面ナデ後ヘラミガキ。	灰黒色	精良	良好	7～8区
1537	〃	15.0 —	深い体部から、ヨコナデによってわずかに外反する口縁部に至る。端部は丸く終る。 指頭圧成形後ヘラミガキ、外面粗、内面密。外面には指頭圧痕残る。	灰黒色～ 灰白色	精良	良好	7区 炭素付着不良
1538	〃	15.6 —	形態・調整とも1537に似るが、口縁部は一旦器肉を減じた後、端部肥厚気味となる。 指頭圧成形後内外体部ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ。	灰黒色～ 乳白色	精良	良	7区 外面表皮磨耗
1539	〃	15.7 —	浅い体部から、器肉を減じて伸びる口縁部に至る。端部は丸く終る。 ヘラミガキは外面粗、内面密。	灰黒色	精良	良好	7区
1540	〃	17.6 —	浅い半球形の体部から器肉を減じて屈曲した後斜上方に伸びる口縁部。端部尖って終る。 指頭圧成形後内外体部粗いヘラミガキ、口縁部ヨコナデ。	黒灰色	良	良	3～4区
1541	〃	18.2 —	浅い半球形の体部からわずかに外反する口縁部。端部は上方へ尖り気味に終る。 指頭圧成形後外面雑なヘラミガキ、内面ヘラミガキ。	灰黒色	良好 白色砂粒を含む	良好	7～8区
1542	〃	13.2 —	半球形の体部から口縁部は外反する。端部尖り気味に終る。 指頭圧成形後内外粗いヘラミガキ、口縁部ヨコナデ。	灰黒色～ 灰色	精良	良	7～8区 内外表皮磨耗
1543	〃	14.7 —	形態・調整1542に似る。	灰黒色	精良 雲母含む	良好	6区
1544	〃	13.5 -	浅い半球形。口縁端部は外反気味となり、尖って終る。器肉薄い。 指頭圧成形後外面粗・内面密なヘラミガキ。外面体部には指頭圧痕顕著である。	灰黒色	精良	良好	7区
1545	〃	15.0 —	形態1544に似るが器肉厚い。 指頭圧成形後外面粗いヘラミガキ、内面密なヘラミガキ。	灰黒色～ 灰白色	精良 雲母・石粒を含む	良	6区 一部炭素吸着不良 油煙あり

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 広幅	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1546	瓦器椀		15.6	形態1545に似る。 指頭圧成形後外面粗いヘラミガキ、内面ナデの後密なヘラミガキ、見込みには平行の斜格子の暗文。	灰黒色 光沢あり	精良	良好	7区
1547	〃		15.7 —	形態1545に似るが、体部は若干直線的である。 指頭圧成形後外面粗いヘラミガキ、内面細く密なヘラミガキ。	灰黒色	精良	良好	6区
1548	〃		16.4 —	半球形の体部。口縁部ごくわずかに外反し、端部丸く終る。 指頭圧成形後内外体部粗いヘラミガキ、口縁部ヨコナデ。	灰黒色	精良	良好	7区
1549	〃		13.0	浅い半球形。口縁部ごくわずかに外反し、端部肥厚気味で丸く終る。 指頭圧成形後内外面ナデ、ヘラミガキは認められない。	灰黒色～ 灰白色	良	良好	1区 重ね焼？
1550	〃		15.0 -	やや直線的な体部、口縁部外反気味に伸びる。端部は丸く終る。 内外面粗いヘラミガキ。	黒褐色	良好 白色細砂粒を含む	良好	6区
1551	〃		14.8 —	浅い半球形。端部は尖り気味に丸く終る。 指頭圧成形後外面粗いヘラミガキ、内面板状工具によるナデの後ヘラミガキ。	灰黒色	精良	良好	7区
1552	〃		14.8 —	半球形を呈し、端部丸く終る。 指頭圧成形後外面分割を意識したヘラミガキ、内面円弧状ヘラミガキ。	灰黒色	良好 白色砂粒含む	良好	7～8区
1553	〃		15.2 —	半球形を呈し、外反気味の口縁部に至る。端部先太で丸く終る。 外面細く密なヘラミガキが残るが不明瞭。内面円弧状ヘラミガキ。	灰黒色～ 灰白色	精良	良好	7区 外面表皮層剥離
1554	〃		15.0 —	やや直線的に伸び、先太で終る端部に至る。 指頭圧成形後外面粗いヘラミガキ、内面円弧状ヘラミガキ。	灰黒色	精良	良好	7～8区
1555	〃		15.4 -	形態1554に似る。 外面ヘラケズリ後ヘラミガキ。内面円弧状ヘラミガキ。	灰黒色	精良 白色細砂粒を含む	良好	8区
1556	〃	高台径 5.7 高台高 0.9	—	平坦な底部から丸味を持って体部へ伸びる。高台は断面U字形で垂直に下る。 内外面ともヘラミガキ。	灰黒色～ 灰白色	精良	良好	7区 外面表皮層点状に剥離・内面表皮磨耗
1557	〃	高台径 6.4 高台高 0.8	—	平坦な底部から丸く屈曲し、体部に至る。高台は断面U字形で垂直に下る。 内外面ともヘラミガキ。	黒灰色 光沢あり	精良	良好	3～4区
1558	〃	高台径 5.8 高台高 0.7	—	中央がやや窪む底部。高台は断面逆三角形で垂直に下る。 見込みに乱方向のヘラミガキ。	灰黒色	精良	良好	7区 外面に酸化鉄付着
1559	〃	高台径 5.8 高台高 0.7	—	平坦な底部。高台は断面逆三角形で垂直に下る。高台内は、貼付の際の段が著しく窪む。 見込み密な平行状ヘラミガキの後不規則なヘラ痕あり。	灰黒色	精良	良好	5～6区
1560	〃	高台径 4.9 高台高 0.4	—	半球形の体部。高台は断面逆三角形で低く、垂直に付く。 指頭圧成形後外面粗いヘラミガキ、内面体部横方向密なヘラミガキ、見込み平行なヘラミガキ。	灰黒色	精良	良好	7区

遺物番号 図版番号	器種	(径) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1561	瓦器椀	高台径 高台高	— — 5.8 0.7	平坦な底部から直線的に立ち上がる。高台は1560に似る。 見込みに平行なヘラミガキ。	灰黒色	精良	良好	7区 表皮磨耗
1562	〃	高台径 高台高	— 6.8 0.9	平坦な底部。高台は断面U字形で、やや開き気味に付く。 見込みにナデの後ジグザグ状のヘラミガキ。	灰白色～灰黒色	精良	良好	6区 炭素吸着不良
1563	〃	高台径 高台高	— — 5.7 0.7	平坦な底部から直線的に伸びる体部に至る。高台は断面逆台形で「ハ」の字形に開く。 指頭圧成形後内外体部横方向ヘラミガキ、見込みは格子状ヘラミガキ。	灰色	精良	良好	5～6区
1564	〃	高台径 高台高	— — 5.8 0.6	平坦な底部。高台は断面U字形で垂直に付く。高台内に貼付の際の段を残す。 見込みに斜格子状ヘラミガキ。	灰黒色	精良	良好	7区
1565	〃	高台径 高台高	— — 6.0 0.6	断面逆三角形で垂直に下る高台。器肉薄く丁寧な作り。 高台の貼付は丁寧なナデ。	黒灰色	精良	良好	3～4区
1566	〃	高台径 高台高	— — 6.4 1.0	断面U字形で垂直近くに下る高台。底部は丸く強む。 見込みにヘラミガキ認められるが不明瞭。	灰黒色～乳橙色	精良	良好	4区 器表磨耗
1567	〃	高台径 高台高	— — 6.6 0.7	形態1566に似る。 見込みのヘラミガキは乱方向。	灰黒色～白色	精良	良好	4区
1568	〃		7.7 0.9	断面逆二角形で垂直に下る高台。 調整不明。	淡褐色	良	不良	3～4区 器表の磨耗著しい
1569	瓦器小皿		8.0	半球形を呈する。端部先細となって丸く終る。 指頭圧成形後内外面ヘラミガキ。	黒灰色	精良	良好	3～4区
1570	〃		9.0 2.3	半球形を呈する。口縁部はヨコナデによってわずかに外反気味となり、端部尖って終る。 指頭圧成形後内外面ヘラミガキ。	灰黒色	精良 雲母含む	良好	6区
1571	〃		8.8 1.5	丸味のある底部から、口縁部をつまみ出す。端部は外へ尖って終る。 外面にヨコナデ、内面にヘラミガキの痕跡あり。	灰黒色～灰白色	精良	良好	7～8区 表皮磨耗気味
1572	〃		9.6	浅い半球形を呈すると思われる。口縁部は直線的で、端部丸く終る。 指頭圧成形後外面ヨコナデ、内面ヨコナデ後ヘラミガキ。	黒灰色	精良	良好	7区
1573	〃		10.7	浅い半球形。端部丸く終る。 調整1572に似る。	灰黒色	良好 白色細砂粒を含む	良好	7区
1574	〃		10.8	形態1573に似る。 内外面ヘラミガキ。	灰黒色	精良	良好	6区
1575	〃		7.6 1.5	丸味のある底部から屈曲し、斜上方へ直線的に伸びる口縁部。端部尖り気味に終る。 指頭圧成形後外面口縁部ヨコナデ、内面口縁部横方向、見込み平行なヘラミガキ。	灰黒色～灰白色	精良	良好	7～8区 表皮磨耗気味

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1576	瓦器小皿	7.0 —	丸味のある底部から斜上方に伸びる口縁部。端部丸く終る。 口縁部右廻りヨコナデ。見込みヘラミガキ。	黒灰色～乳灰色	精良	良	7区 内面炭素吸着不良
1577	〃	8.4 2.0	形態1576に似るが、口縁部は外反気味に伸びる。 内外面ナデの後ヘラミガキ。	灰黒色	精良	良好	6区
1578	〃	9.4 —	丸味のある扁平な底部から外反して伸びる口縁部に至る。端部は尖り気味に丸く終る。 指頭圧成形後外面口縁部ヨコナデ、ヘラミガキ。内面ナデ後ヘラミガキ。	黒灰色	精良	良好	7区 内面表皮磨耗気味
1579	〃	9.4 —	丸味のある体部からわずかに外反する口縁部に至る。端部は外へ尖り気味に終る。 内面にヘラミガキが認められる。	灰灰色	良好 石英・雲母粒含む	良好	7区
1580	〃	8.5 1.5	平坦な底部から丸く屈曲し、斜上方に伸びる口縁部。端部尖り気味に丸く終る。 内外面ヘラミガキ、見込みは平行に施す。	灰黒色	精良	良好	6～7区
1581	〃	9.0 1.5	形態・調整とも1580に似るが、端部内へ丸く終る。	灰黒色	精良	良好	7区 表皮磨耗気味
1582	〃	9.6 2.1	形態1581に似るが底部やや丸く、口縁端部肥厚気味に丸く終る。 指頭圧成形後外面口縁部ヨコナデ、内面ナデの後粗いヘラミガキ。	灰黒色	精良	良好	6区
1583	〃	9.6 1.8	丸味のある底部から外に稜を持ち、外反する口縁部。端部はつまみ、内に沈線状の段を持つ。 ナデの後内外面ヘラミガキ。内面体部横方向。	灰黒色	精良 雲母含む	良好	6区
1584	〃	9.3 1.9	形態1583に似るが、端部上方へ面を持ち、外へ尖り気味に終る。 外面口縁部ヨコナデ後全面ヘラミガキ。見込みには格子状のヘラミガキが認められる。	灰黒色～灰白色	精良 雲母含む	良	5～6区 一部に炭素吸着不良
1585	〃	10.0	半球形の底部から外反し、斜上方へ直線的に伸びる口縁部。端部丸く終る。 外面底部板状工具によるナデ、口縁部ヨコナデ、内面口縁部と見込みを分化するヘラミガキ。	灰黒色	精良	良好	7～8区
1586 五〇	瓦器小型椀	7.5 3.4 高台径 3.4 高台高 0.4	底部から丸く立ち上がり、直線的に伸びて肥厚気味の端部に至る。高台は「ハ」の字形に開く。 内外とも体部粗いヘラミガキ。口縁部・高台の周囲ヨコナデ。	黒灰色～灰黒色	良	良	3～4区

須恵器　(第84図)

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1587	須恵器杯	12.2 受部径13.8	水平近くに伸びる短い受部。口縁部はわずかに内傾し、端部器肉を増して内傾する面を持つ。 内面～受部下0.7cmまで回転ナデ、以下回転ヘラケズリ。	青灰色 中様青紫色	良	良	3～4区
1588	〃	14.0 受部径15.3	扁平な体部から水平に伸びる受部。口縁部は外反気味に立ち、端部は内に段を持つ。 内面～受部下0.6cmまで回転ナデ、以下回転ヘラケズリ。	青灰色	やや粗	良	3～4区

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1589	須恵器杯	11.2 — 受部径13.8	体部から受部端まで連続した丸いカーブで伸びる。口縁部は内傾し、端部先細で丸く終る。 内面～受部上面回転ナデ、受部下以下は灰かぶり。	青灰色	良	良	3～4区
1590	〃	11.7 — 受部径14.0	半球形の体部から、つまみ上げ気味に伸びる受部。口縁部は短く内傾し、先細で丸く終る。 内面～受部下0.4cmまで回転ナデ、以下回転ヘラケズリ。	灰白色	良	良	1区
1591 五〇	須恵器高杯	— — 脚 径 9.8	斜下方へ外反気味に伸びる脚部。端部は一旦外へ屈曲した後垂直に下り、尖って終る。台形の透しが遺存するが、数は不明。 回転ナデ。	暗青灰色 中核暗紫色	精良 密	良	3～4区
1592	須恵器杯(蓋)	7.5 — 稜 径 9.4	半球形の体部。口縁部は断面三角形の凸帯状の突起が一周する。 内面～肩上0.6cm回転ナデ、以下回転ヘラケズリ。	灰白色	良	良	3～4区
1593	〃	20.8	平坦な蓋、口縁端部は下につまみ、垂直な側面を作る。 回転ナデ。	灰色	良	良	3～4区
1594	須恵器壺	17.6 —	外上方に外反して伸びる口縁部。外面に断面三角形の突帯が廻った後上下に肥厚する端部に至る。 回転ナデ。	緑灰色	精良 密	良好	3～4区 内面に自然釉不着
1595 五〇	〃	10.2 —	胴部から直立した後外反する口頸部。端部は内外へ肥厚し、外傾する面を作る。 外面体部平行タタキ、内面体部青海波あるいは同心円タタキ。内外口縁部ヨコナデ。	青灰色	やや粗	良好	3～4区
1596	〃	— — 最大径12.5	上方に最大径が位置する扁平な体部。 底部外面回転ヘラケズリ、底部内面静止ナデ、体部内外とも回転ナデ。	青灰色 中核は暗紫灰色	良好　密白色細砂粒をわずかに含む	良好堅緻	6区
1597 五〇	〃	4.4	上外方に伸びる口縁部、端部は下方に折り返し気味に終る。 回転ナデ。	緑灰色	精良	良好	3～4区 外面に自然釉付着
1598	〃	3.3 9.5 高台径 3.9 高台高 0.5	倒卵形の体部から直立し、外反する口縁部に至る。高台は断面逆台形で「ハ」の字形に開く。 外面体部下半回転ケズリの後内外面全体を回転ナデ。	灰色	精良緻密	良好	2～4区 ほぼ完形
1599	須恵器短頸壺	— — 高台径 高台高	体部から丸く屈曲し、直立する口縁部に至る。 回転ナデ。	青灰色 中核は暗紫灰色	精良緻密	良好堅緻	4区
1600	須恵器底部	— — 高台径 7.0 高台高 0.5	平坦な底部、高台は断面逆台形で「ハ」の字形に開く。 内面～高台外側回転ナデ、高台内静止ナデ。	灰色	精良 密		
1601	〃	— — 高台径 7.0 高台高 0.6	底部内面は大きく隆起する。高台は断面方形で「ハ」の字形に開く。 外面回転ナデ、内面不明。	青灰色	精良 密		
1602	〃	— 高台径 5.9 高台高 0.6	断面逆台形で垂直に下る高台、端部は内傾する面を持つ。 削り出し高台、内面は回転ナデ。	青灰色	良		
1603	〃	— 高台径 7.7 高台高 0.5	断面逆二角形の高台が垂直に付く。 マキアゲ・ミズヒキ成形後底部回転糸切り、その後高台を貼付する。	灰色			

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1604 五〇	須恵器不明	— 最大径 23.5	丸味のある底部から直立し、体部に至る。体部外側に断面三角形の突帯が2条廻る。 内外面静止ナデ、突帯の周囲は回転ナデ。	青灰色	精良	良好	3～4区

陶磁器・瓦等　（第85～88図）

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1605	白磁碗	14.6 —	直線的に伸び、外面に稜を作った後幅広で丸味のある玉縁状口縁部に至る。	淡緑灰色の釉 薄く光沢あり	緻密 白灰色	良好	3～4区
1606	〃	16.0 —	内湾気味に伸びた後、玉縁状の薄い口縁部に至る。	灰白色の釉 厚く光沢あり	密 雲母粒含む 白灰色	良好	5～6区
1607	〃	17.1 —	直線的に伸びた後、外反する口縁部に至る。 外面ハケ状工具による縦位の沈線、内面沈線および花の陰刻文。	淡緑灰色の釉 薄く光沢あり	緻密 白灰色	良好	3～4区
1608	緑釉陶器碗	— — 高台径 6.2 高台高 0.7	断面U字形で「ハ」の字形に開く削り出し高台。 内面渦巻状ヘラケズリ。 内面～外面畳付施釉。高台内は露胎。	外面黄灰色 ～緑黄色 内面深緑色 ～緑黄色	精良 密 淡灰色	良好	8区
1609	〃	— — 高台径 8.0 高台高 0.8	断面U字形で垂直に下る高台。 内外面全体釉。細かい貫入あり。	外面淡緑色 ～乳白色 内面深緑色 ～緑黄色	精良 密 白黄色	良好	8区 外面釉膜 一部剥離
1610	丸瓦	—	筒部凸面縦位のナデ後端部～玉縁端面横位のナデ、凹面全体9本／1cmの布目痕。筒部側面ケズリの後縦位のナデ。	淡褐色～ 灰褐色	良 チャート・ 石英粒含む	良好	8区 二次火熱を受ける
1611 五一	平瓦	— —	凹面に糸状工具による粘土板切り離し痕を残す。7本／1cmの布目痕。凸面縄目タタキの後縦横のナデ。狭端面幅0.5cmの面取り。	灰青色	精良	良好堅緻	3～4区
1612 五一	〃	— —	凹面4～7本／1cmの布目痕、凸面縄目タタキ、内外に板状工具によるナデの痕跡あり。広端面をナデ。	淡灰色	良 チャート・ 石英粒含む	良 やや硬質	8区
1613 五一	土錘	長径 6.5 短径 2.4 孔径 0.7	紡錘形の管状土錘。縦位の平坦面を持ち、紐ずれの部分と思われる。	淡褐色	精良	良好	3～4区 完形
1614	砥石	幅 2.6～3.5 厚さ 0.8	両端を欠損し、現状では台形を呈する石材。断面も台形で、三面に使用痕を持つ。	—		—	4区
1615 五一	鈴	幅 2.3 長さ 3.3 厚さ 1.7	下ぶくれのなすび形を呈するが、土圧のために歪みが著しい。内部に径5mm程度の玉が遺存しているが酸化のため、肘状をとどめていない。素材は銅に金メッキと考えられる。	—			5～6区

第9章　ま　と　め

第1節　志紀郡の条里遺制について

中河内地区の沖積地内における発掘調査では、生産遺構である水田遺構が各時期ごとにプライマリーな形で検出され、他の遺構とともに、調査対象として不可欠な遺構であるという認識が定着してきた。その中でも、比較的規則性を持って広がり、しかも条里に規制されたと推定される古代の水田遺構に関しては、旧郡ごとの条里制のあり方や、施行時期を示唆する資料の一端として注目されるようになってきた。

近年、当調査地周辺の川北遺跡[註1]・志紀遺跡[註2]・八尾南遺跡[註3]・長原遺跡[註4]等でも水田に関連する遺構が検出され、各地点の条里区割と土地利用の関係が、おぼろげながら看取されるようになってきた。ただ、条里区割に規制される水田遺構の検出には、当然ながら巨視的な観点からの調査が必要であり、総合的に把握するには、付帯条件として広範囲に及ぶ調査が必須である。そういった意味で今回の調査は、これらの条件にかなったものであり、志紀郡の条里遺制を知るうえでも重要な調査といえよう。

以下、当調査で知り得た知見から、志紀郡の条里遺制を考えてみたい。

1　志紀郡条里

当遺跡の所在する八尾市木の本地区一帯は、旧国郡が示すように、古事記の雄略記に記されている志紀県主が支配していた地域と推定される。国郡制の区分以降は、延喜式や倭名抄に記されているように、河内国志紀郡として郡名が定着し、以来後年一部で郡界の変化があったものの、明治22年（1889）の市制町村制が施行されるまで使用され続けてきた地名である。志紀郡の郡域に関しては、歴史地理学の先学の諸説を参考に現在の地名と照合すれば、東は大王寺屋・弓削・柏原市本郷を含み、概ね旧大和川の右岸を境としている。西は北木の本の北西部に位置する樟本神社から八尾空港内三角地の西をかすめて藤井寺市小山2丁目に至るライン、南は小山2丁目から藤井寺市東林・国府に至るライン、北は北木の本と老原を結ぶラインに区画される地域で、江戸時代に固定化した郡界としてその範囲が推定できる。

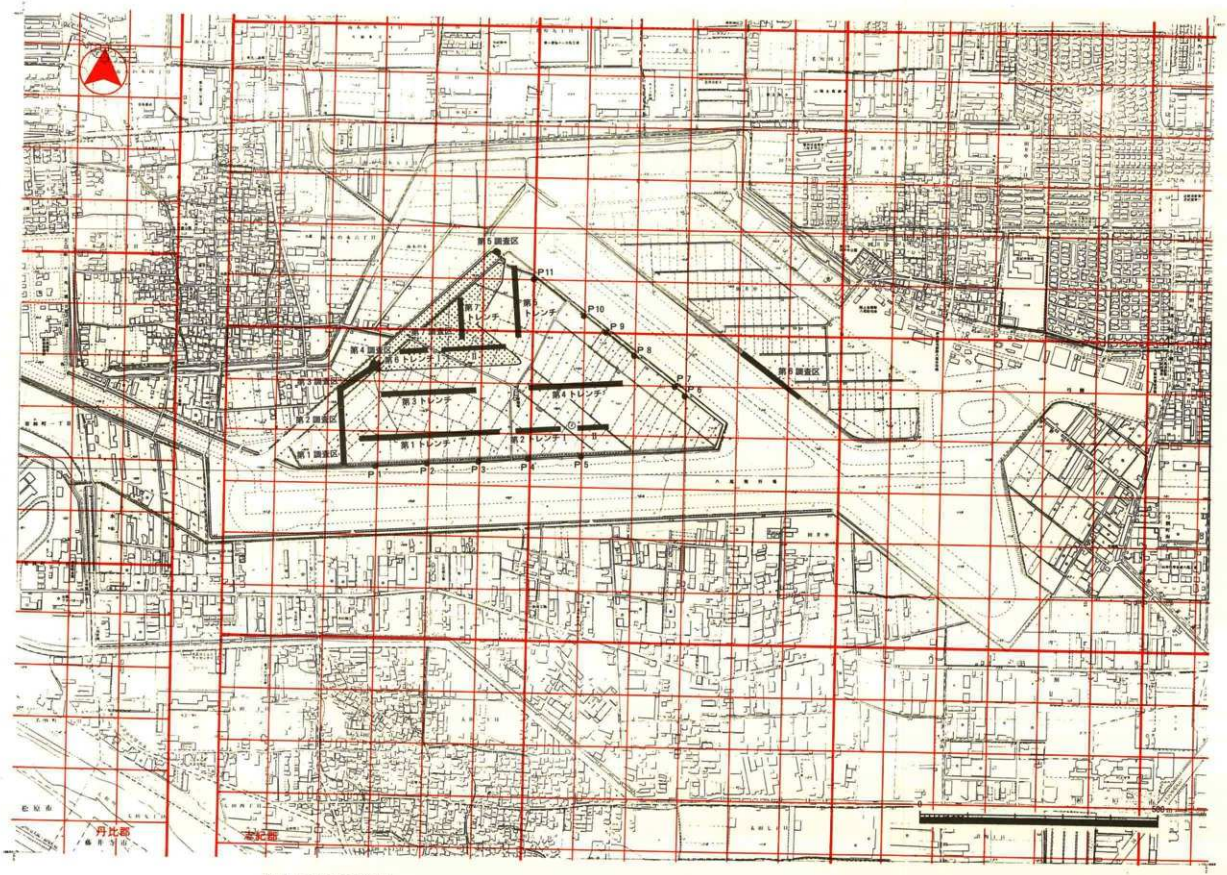
一方、古代の都市計画の一環として考えられる古道と条里制の関係を重視されている服部昌之氏は、難波京から南下する山陽道を中心に、東西に伸びる古道が各郡を区画している事実から、摂津・河内の郡が直線国境で界されていたと推定されている。この説については、条里の成立時期や各郡の条里との関係等から必ずしも全面的には首肯し難いが[註5]、その説を取れば、当郡も西接する丹北郡と同様、南の大津道と北の八尾街道の両道に挟まれた地域と考えられよう。

なお、近接する他の郡との位置関係は、東は大県郡、西は丹北郡（11世紀に丹比郡から分割）、南は古市郡、北は若江郡・渋川郡と接している。

志紀郡の条里は正方位系の区画で、近接する諸郡と同様である。ただ、江戸時代中期に付替えられた大和川が郡内を東西方向に横断しているため、一郡としての景観を復元し難くなっている。志紀郡条里のうち、条の呼び方を由井喜太郎氏の説[註6]に従えば、南北通りの東を起点として西へ移行するもので、近接する丹北郡とは呼進方向が逆である。また、丹北郡と志紀郡の郡界付近に南北方向の一町幅の空白部分が認められることは、近接する郡であっても独自の基準線に基づく条里区割が実施されていたものと推定される。条の位置を現在の地名から推定すると、一条は北条・船橋・惣社・国府（藤井寺市）、二条は弓削（八尾市）・大井・東林・林（藤井寺市）、三条は田井中・沼（八尾市）・沢田（藤井寺市）、四条は南老原（八尾市）・小山・岡（藤井寺市）、五条は太田・南木の本・北木の本（八尾市）・津堂・小山（藤井寺市）に比定できる。一方、里は南の古市郡との郡界から北へ数える方法を取ったようである。[註7]一里内の坪の呼称法は、南東隅から始まって西へ進み、六ノ坪で北へ折れて東へ進み、十二ノ坪で北へ移る。これを繰り返して北東隅が三十六ノ坪で終る方法を取るもので、河内の中では特異な方法を取っている。

なお、これらの条里呼称及び坪付名の他、平安時代末期の文献には、「志紀郡北条・南条」の記載がある。管見の及ぶ範囲では、「北条・南条」の初見は「石清水文書」の延久４年(1072)の太政官牒に認められ、現在でも弓削に西北条日・太田に南条田の小字名が遺存している。[註8]ただ、久寿２年（1155）の『醍醐雑事記』[註9]には「志紀南庄・北条」とあり、各寺領寺ごとで若干違った付称方法が取られたものと理解されようが、応永元年（1394）の「西琳寺文書」の西琳寺領田畠目録[註10]では「志紀南条」と記されていることから、「条」が一般的に使用されていたと解するのが妥当であろう。すなわち、上記の「石清水文書」・『醍醐雑事記』が記された平安時代後期から末期にかけては、前代の数詞単方式とは別に、このような区分が確立していたものと推定される。これらの事実は、庄園の発達が前代の条里制に基づく地域的な制約から解放されたことを、暗に示唆する事柄であろう。

なお、南条と北条の区別については、棚橋利光氏が「八尾の条里制」の中で、藤井寺市の旧北条村付近で南北に区別されていたのではないかと推定されている。[註11]一方、由井氏は『河内の条里の研究』の中で、倭名抄に記された志紀郷を藤井寺市大井付近と推定されていることから、[註12]両者ともに大概的な意味では共通している。しかしながら、北条の範囲と推定される八尾市太田には、小字「南条日」が遺存しており、現段階では明確に南北を区割する史料は見出せない。一方、藤井寺市林の黒田神社の建徳３年（1371）の石燈籠の銘文中には、「屋田里・樋爪里・駒口里・垂水里」の固有名詞化した里名が認められ、室町時代以降は特定支配者の衰弱・弱体化[註13]



第91図　調査地周辺条里復元図

から村落の発達段階において条里に対する観点も変化していったものと推定される。

2　近世条里遺構溝

今回の調査結果が示すように、古代条里遺構溝及び生産遺構は平安時代中期ごろ、洪水を起因とする土砂の堆積によって、完全にその機能を停止したことが判明した。この時期以降、当調査地内では、東部の第6調査区付近で集落が短期間営まれていたことが確認された程度で、居住地としては顧みられることがなかったようである。しかし、近世中期ごろには本文で近世条里遺構溝として取り上げた溝を阡陌に配して、整然と区画された水田地帯の景観を呈していたと推定される。これら一連の水田開発は、単に個人的な農業生産性の向上という内的要因のみで成し遂げ得るものとは性格を異にしている。それを裏付けるように、検出された近世条里遺構溝は形状・数値ともにそのほとんどが近似しており、開掘に当っては、規格性の追求を重視する管理者の下で計画的に実施されたものと理解される。さらに、調査において古代条里遺構溝と近世条里遺構溝が重複する形で検出されており、この事実も上記の事柄を首肯する資料のひとつになると考えられる。

一方、第1トレンチ・第4調査区・第7調査区で検出した河道跡は、文献に見る旧大乗川の流路であることが確認された。この河道は江戸時代中期ごろまでは、太田村の東部から北部をかすめて八尾空港内三角地の西部を通り、北流して亀井付近で了意川（平野川）と合流していた川で、現在その流跡を完全に復元することはできないが、当調査地の北西部にはL字形を呈する池が残存しており、一部にその痕跡をとどめている。さらに、この大乗川は、調査及び古地図によって、条里区割に規制されて流路が選定されていることが判明した。ただ、現時点では、この流路の選定と近世条里遺構溝の開掘が同時に実施されたことを示す文献は見当らないが、水田・畑地開発に伴う事業の一環として、治水関係の工事も同時に実施されたと考えるのが妥当であろう。

そこで、これらの開発がいつ実施されたのかが問題視される。この問題を解く資料として、調査地周辺の旧村々の村高表を掲載した（第8表）。

資料は、正保2年（1645）・寛延元年（1748）・明治3年（1870）の各村の明細帳から抽出したもので[註14]、特に正保2年と寛延元年の間の村高の増減に注目して比較してみた。この両年の間には、当地域の一大画期ともいえる宝永元年（1704）の大和川付替えの事実があり、第8表の中でも村高の数値の変動から、それを端的に読み取ることができる。すなわち、太田村（丹北）など石高が著しく減じた村は新大和川の河床になった地区を含み、その逆に石高が増した村は大和川付替えによって可耕地が増大した村と推定される。また、全く増減が認められない北木の本村は、大和川付替えによる外的な影響を受けることがなかった地域であったと推定される。

第8表　村高の推移（八尾市史から）

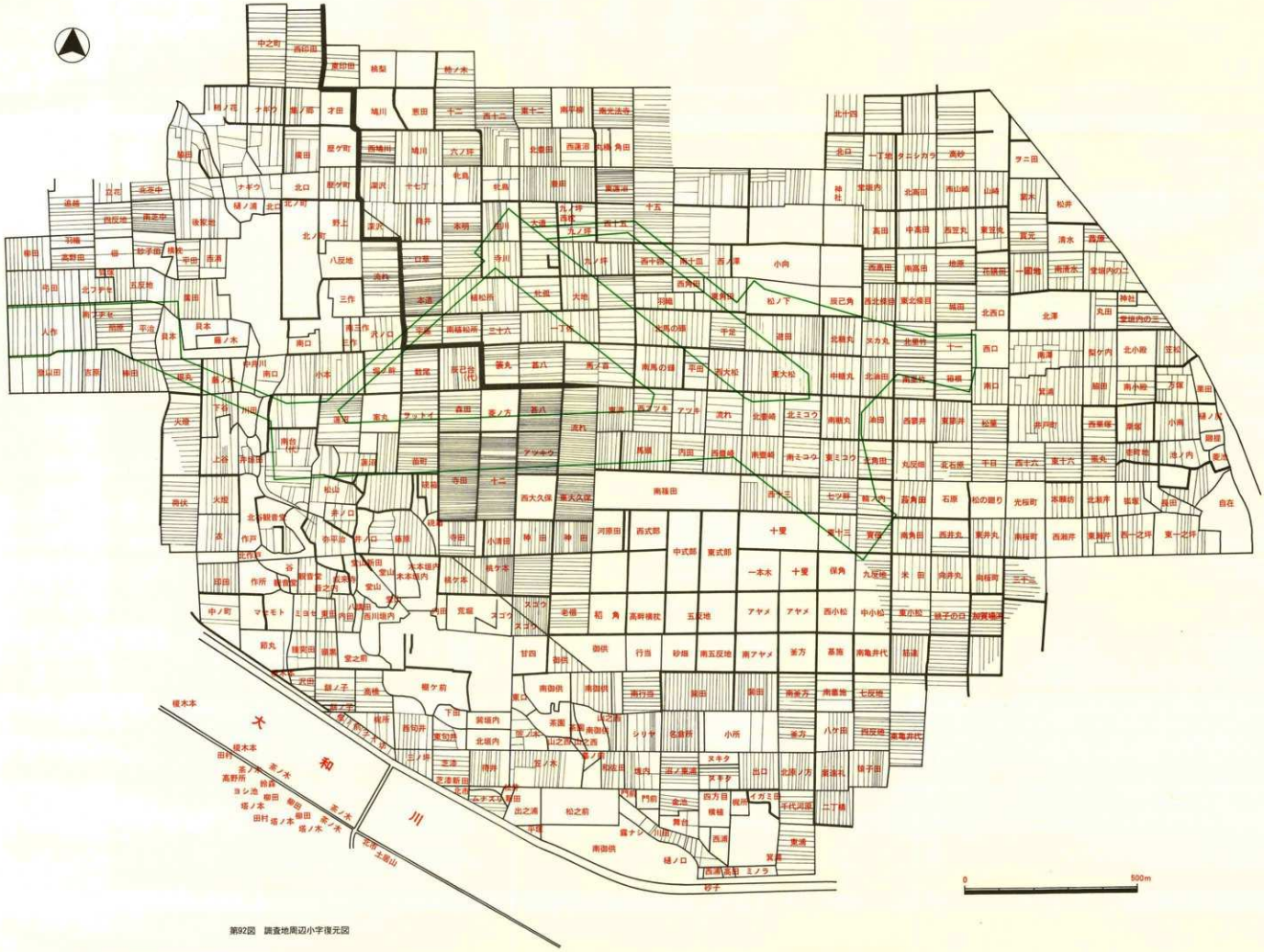
村名＼年号	正保2年（1645）	寛延元年（1748）	明治3年（1870）
沼　村	450,474（石）	435,228（石）	435,228（石）
太　田　村	1,610,860	1,642,327	1,648,456
南木本村	720,440	996,168	956,168
北木本村	266,300	266,300	266,300
木本村（刀北）	962,080	933,994	933,994
太田村（丹北）	321,370	150,628	155,350
田井中村	—	861,167	861,168
弓削村	1,399,782	1,358,517	1,361,252

一方、当調査地が帰属していた南木の本村では、この間に約276石が増加している。この村高の変化から、南木の本村の増加面積を推定することを試みた。現在その当時の石盛（地味・利便の点から1段当りの収穫率を決めたもの）を示す資料はないが、大和川付替え以降に開発された柏村新田の宝永5年（1708）の石盛（畑土1.2石）の例に照らし合わせてみた。それによると、南木の本村の面積は約230段増加した計算になる。これは、調査地である八尾空港内三角地の面積にほぼ匹敵するものといえる。

以上のことから、本文で近世条里遺構溝として捉えた小溝は、大和川付替え以降の新田開発に伴う耕地区画の溝として開掘されたものと考えるのが妥当であり、溝内から出土した伊万里焼系磁器の出現期とも符合している。[註15] また、旧大乗川の流路変化も、大和川付替え以降の水量低下で旧来の川幅が必要でなくなったことを考慮すれば、本来の機能からは逸脱して、幅2.0mを測り両岸に杭列を伴う灌漑用水路に変貌させるために実施されたものと理解できる。さらに推測が許されるならば、旧大乗川の流路変化は、新田開発と同時期かあるいは開発時からさほど時間が隔たらないうちに実施されたものと考えられる。

次に、調査地周辺（北木の本・南木の本・西木の本・木の本・太田・沼・弓削・志紀・田井中・老原―以上八尾市、本郷―柏原市）の小字名を掲載した（第92図）。この図は明治19年（1886）発行の地籍図をもとに復元されたもので、[註16] 大和川付替え以降から昭和9年（1934）の飯神飛行学校開設時まではこのような地割が保たれていたものと推定される。これによれば、中区割（坪）の基準である一町方格ないしは二町分ごとに小字名が付されており、全て長地型地割の耕地であったことが読み取れる。

さて、この中で志紀郡条里の坪並と符合する小字名が遺存しているものには、南木の本の三十六、太田の一二、老原の九ノ坪・北十四・十五、弓削の東十六、柏原市本郷の三十二がある。本文でも述べたように、南木の本の三十六は調査地内に唯一遺存するもので、しかも一里内の



第92図　調査地周辺小字復元図

北東隅を示す数詞坪名であることから、里界と坪界の施設の差異を知るうえで重要視できる。一方、老原の数詞坪名についてはその位置から、第6調査区で検出した遺構・遺物や、近接して存在したと考えられる田井庄を考えるうえで、重要な問題を内包しているものと推定される。また、他にも前記の坪並に関連する小字名や、坪並に全くそぐわない数詞坪名も認められる。しかし、これらの中には、後世の土地管理（荘園等）における内的変化や、条里制地名の概念とは別に、自然発生的な一般地名が混同されて認識されていることも、少からず考えられる。いずれにしても、これらの小字名が固有名詞化して成立する時期には、条里制自体の意義が完全に忘失されており、資料としての限界があることはいうまでもない。にも関わらず、調査結果でも明らかなように、近世条里遺構溝が古代条里遺構溝にほぼ重複しているのは、どのような意味を持っているのであろうか。調査結果を見る限りでは、両遺構構築面には約1.20ｍの差があり、しかも両遺構間には他の時期の遺構の存在が全く認められないのが事実である。これらは、重複する畦畔から各時期ごとの条里遺制を推定している他の遺跡とは、性格を異にしている。

それでは、近世に実施された条里遺構溝の設定に当っては、どこを基準点としたのであろうか。荻田昭次氏は『池島町の条里遺構』の中で、河内郡では「大石」と呼ばれる地点に「条里石」となるべき基準点が置かれていたのではないかと仮設をたてておられる。当郡の近世条里の再区割に関しても、当然ながら前記のような基準点の設置の下に実施されたことは疑う由もないが、現段階では同様の小字名が見出せず、ここからの復元は困難である。[註17]

次に、近世条里の設定は大和川付替え以降であるという仮設に従って、現在八尾空港で寸断されている2本の道路から、当調査地内の近世条里区画を推定してみた。まず、東側では田井中2丁目の空円寺東側道路と沼の府道八尾道明寺線、西側では老原9丁目の南北の道路と太田の願立寺東側道路、この2本の道路が条里の南北ラインに概ね符合するものとして捉えることができる。特に後者は、数詞坪名が遺存している関係からも、近世の再区画に際して基準にされたと考えても不思議ではなかろう。

以上、近世条里の基準線を推定してみたが、これはあくまでも地図上での操作によるもので、文献からの復元や実地踏査を実施した結果によるものではなく。推測の域を出ない。ただ、いずれにしても、基準点・基準線を設けて近世条里区割が実施されたことは、まぎれもない事実であろう。

3　河内平野特に志紀郡における条里制研究史

条里研究の方法論を要約すれば、文献史学的研究・地理学的研究・考古学的研究の3点がある。当調査地の属する中河内地区も、比較的良好な条里遺制を残していることも相俟って、先

学諸氏の論著の場を提供してきた。ここでは、志紀郡及び周辺各郡の条里制研究の業積を再検討することで、条里制の問題点を考えて行きたい。

まず、文献史学の立場では、難波京を中心とする条坊制と都市計画の一環として、条里制が取り扱われている。岸俊男氏は、難波京から南下して大津道・丹北道に交わる古道を起点として、条里区割が実施されたものと推定されている。[註18] 服部昌之氏は、これら直線に伸びる古道から、摂津・河内の国境が直線古道によって区割されたものと提唱されている。[註19] さらに秋山日出夫氏は、大和盆地における条里制と古代古道に注目する立場から、大和盆地と同様の事例として河内の古道三道を挙げ、条里制地割と古道及び郡域の関係を指摘されている。[註20] これらの研究方法は、河内三道を計画道路として認識したうえで、条里制施行の基準線と古道の関係から、条里制の問題の根底である施行時期を明確にしようとするものである。

一方、遺存する条里坪付地名を糸口として、各郡域ごとの条里遺制を復元する方法が、文献史学的研究の立場から実施されてきた。先駆的な文献としては、大正11年（1922）に発刊された井上正雄氏の『大阪府誌第4巻』がある。井上氏はこの中で、府下全域の坪付地名を網羅することで、各郡単位の条里区割を推定している。[註21] また、昭和31年(1956)、由井喜太郎氏は『河内国条里の研究』の中で、渋川・若江・志紀・丹北の4郡を、歴史地理学的な観点から大概的に述べられている。[註22] 志紀郡に関しては、倭名抄に見られる地名から郡域を推定したうえで、現地名に条里該当地を比定させて考えられている。ただ、遺存坪付名の記載でも明らかなように、志紀郡域の南部を中心としたものであり、その意味では郡内の条里遺制を充分考察されたとは言い難い。昭和29～30年（1954～1955)、大越勝秋氏は、摂河泉の遺存坪付名に関する史料を総合的に抽出し、検討することによって各市単位の遺存坪付名を闡明にされた。[註23] さらに、これらの成果に基づいて昭和51年（1976)、棚橋利光氏は、八尾市域の条里制を詳細に分析して旧郡単位ごとに論述された。[註24]

地理学的研究では、条里地割に直接影響した自然環境の変遷を、自然地理学の立場から論述することによって、条里遺構のあり方を推察しようとしている。昭和30年（1955)、藤岡謙三郎氏は『先史地域及び都市域の研究』の中で、自然地形の時期ごとの変遷に着目したうえで、古代遺跡の立地と条里遺構の分布に注意を払い、河内平野においては河川に挟まれた海抜2.5m以下の後背湿地にその分布が認められることを指摘されている。[註25] 当時としては、地理学と考古学を加味した論文として画期的であったと考えられるが、現在の集積された調査成果を考慮するとき、結論をやや急ぎすぎた感を免れ得ない。

考古学的実証研究としては、昭和47年(1972)に実施された東大阪市池島町の条里遺構の調査が挙げられる。[註26] この調査では、考古学の立場から条里区割（溝・道・水田・畦畔）を遺構として捉えることにより、各遺構ごとのミクロ的調査であっても、その成果を蓄積して各分野の研

究を比較検討することで、同郡内の条里制を巨視的に考えていく方法が重要であることを提唱した。この調査を境に、個々の発掘調査における遺構の検討の一端として、条里遺構の記載内容が漸増したのも事実であり、この調査が条里研究の前進に寄与するところが大きいことは言うまでもない。さらに、考古学的実証法を使用する最大の利点として、層位学上の比較から条里制施行時期を推定することも可能である点、他の研究法を凌駕するものと考えられる。

以上、各分野ごとの条里研究史を中心に概括した。これら一部の文献には、現存する条里区割を条里施行時のものと推定して記述したものも認められるが、最近の発掘調査結果では、重複して各時期の条里遺構が検出されており、現地表面での地図操作による条里区割の復元にはおのずと限界が感じられる。特に全域が市街化する今日にあっては、現在の景観から新知見を得る事は困難であり、今後は考古学的な実証方法に依存せざるを得ないのが現状であろう。

4　条里制下の水田遺構と埋没時期

今回の調査で確認した条里遺制に関する遺構には、阡陌で区割される溝遺構と水田遺構がある。前者は本文で古代条里遺構溝として捉えた遺構で、部分的に形状を異にする箇所を認めるものの、概ねＴＰ＋8.80ｍ前後を構築面として開掘されていることが判明した。一方、前者に規制されて開設されたものと考えられる水田遺構は、第２調査区～第５調査区で合計19筆を検出している。さらに、これらの水田遺構に付随して一筆耕地を区画する畦畔遺構は、形状・数値ともに近似しており、古代条里遺構溝の構築方向とも一致していることが確認された。その後、第４トレンチの南側で大阪府教育委員会が実施した調査[註27]でも、同様の水田遺構が検出されていることから、分布調査で確認し得なかった各トレンチの下層部分においても、水田遺構が広がっている可能性が充分考えられる。

一方、水田遺構の上面を被う粗砂が示すように、当調査地の水田は洪水を起因とする土砂の流入によって埋没したことが窺える。これら一連の事柄を想起させる資料に、第２調査区の自然河道２がある。自然河道２の検出レベルは、古代条里遺構溝及び水田の構築面に符合しており、これらの同時期の存在を示すだけではなく、灌漑施設と生産遺構との有機的な関係をも示唆している。その一方、幅12.0ｍ・深さ1.8ｍを測る自然河道２の内部が粗砂を中心とする土層で充填されている事実は、洪水時に河道の許容量を超えた水及びそれに伴う多量の土砂が条里遺構溝・水田遺構内に流入し、これらを埋没せしめたことが容易に推察できる。

では次に、これら両遺構の埋没時期が重要視される。古代条里遺構溝内の粗砂及び古代条里遺構溝を中心に広がる堆積土に含まれる遺物には、縄文時代晩期から平安時代中期に至る多種多岐に亘るものが混在しているが、量的な比率では平安時代のものが多く、厳密にいえばいわゆる和泉型瓦器椀出現期以前に限定することができる。ただ、出土した遺物はほとんどが細片[註28]

で、良好な資料は皆無に近いが、唯一時期を決定し得る資料として、高台内に「齋」または「會」の墨書のある黒色土器A類椀150が挙げられる。この黒色土器は第4トレンチの水田上面を被う青灰色シルト層から出土したもので、流出土層に伴う遺物であるため、一等資料としては限界があるが、埋没時期を決定し得る目安の一端として取り上げた。一方、この遺物の時期とほぼ同時期に存在したと考えられる集落が、当調査地の北西約800m（木の本1丁目）で確認されている。なお、この集落の南東100mには延喜式に記載されている樟本神社が鎮座していることから[註29]、この集落が当調査地周辺の平安時代の集落の中核をなすものとも考えられ、当調査地で検出した水田遺構はこの集落に帰属するものと考えられる。以上のことから推定すれば、上記の集落と同時期の遺物が出土した長原遺跡第26トレンチ土器溜の一括資料を指標とする時期、すなわち平安時代中期には当調査地周辺は完全に埋没し、生産遺構としての機能が失われたものと考えられる。

なお、当調査地周辺の条里の施行時期は明確にし難いが、古代条里遺構溝内の堆積状況や水田耕作土断面の波状痕跡が不明瞭である点を考慮すれば、施行時期から埋没時期までは、さほど時間的な隔たりはないものと推定される。さらに、このことから水田の開設時期は、近接する長原遺跡周辺の条里（丹比郡）の施行時期と推定されている平安時代前期に溯り得ないとする説に、ほぼ準拠するものと考えられよう。[註30]

第2節　水田遺構について

水田を主とする生産遺構は、第2調査区～第5調査区で検出している。これらの遺構は、分布調査で検出する古代条里遺構の構築面と同様、TP＋8.80m前後を中心に広がる茶褐色粘土を耕作土としている。ただ、全て限定された調査区内での検出であり、一筆耕地として田積を求め得たものはなく、検出位置も調査地内の西部・北部に限定されている。しかし、分布調査の後、大阪府教育委員会が実施した新空港庁舎建設に伴う発掘調査地東端（第4トレンチ南側）[註31]においても当調査区内の検出レベル高に符合して生産遺構を検出しており、これらの調査成果から推察すれば、少くとも調査地中央から北側一帯にかけて生産遺構が広がっているものと考えられる。このことは、分布調査の結果でも明らかなように、開発時の当地が地形的な制約を受けない平地であったことと、水田耕作に適した茶褐色粘土が全域に存在していたこと等が、開発条件にかなった土地であったことを暗示している。

一方、これらの生産遺構に必要不可欠である灌漑水利は、第2調査区で検出した自然河道2が給排水機能の主体と考えられ、さらに各水田へは古代条里遺構溝を利用することによって、生産遺構一連の系統図を形成していたものと推定できる。

以上、当調査地で検出した生産遺構及び生産関連遺構を概括した。次に、水田遺構の細部に

ついて若干記述し、当調査地の生産遺構の特徴を考えてみたい。

各水田の田積は、既述のように一筆耕地単位が不明であるため推測の域を超えないが、厳密な企画に基づいて水田を構築したと考えた場合、第3調査区の畦畔4・畦畔5・畦畔6で区画される水田Dの田積は約280㎡を測り、前代の水田遺構に比して広大でありことが窺える。また、各調査区で検出した水田遺構の構築レベル高は、水田Aの南側を最高点として、北及び北東方向へ15cm程度漸減している。この事実は、水田床面に限らず、畦畔上面のレベル高についても同様であり、各水田における給排水経路の方向性を示すものと推定できる。

一方、畦畔の方向は、古代条里遺構溝と同様にほぼ磁北を基準としており、水田遺構も条里区割に規制されて構築されたものと推定できる。畦畔の構築に際しては、全て水田耕作土である茶褐色粘土を盛り上げており、上面幅24～58cm・基底幅55～155cm・高さ8～23cmを測り、断面の形状は台形ないしは半円形を呈している。なお、西木の本4丁目で検出した同時期の畦畔と比較すれば、当遺跡の方が形状整美・大型であり、歩行も充分可能な畦畔であったと推定される。[註32]

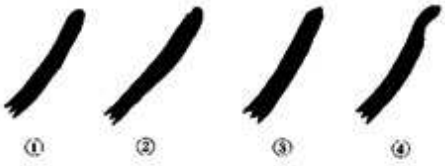
水口の施設は、一筆耕地単位の全容が不明であり、明確にし難い。しかし、畦畔1の東側や畦畔4の北端部がそれに該当する可能性を持つ程度で、全体の規則性は判然としない。

足跡（人・動物等）は、水田D・水田E・水田Iで検出している。全て内部がシルト及び粗砂で充填されており、水田床面でも若干低い地域、または水田Iのように水路状を呈する地域に集中して遺存している。ただ、このような条件で足跡が遺存するには、水稲耕作の1サイクル内のどの時点で水田としての機能を失ったかという時期的な問題と、湿田であるか乾田であるかという水田固有の性格も、少からず関与すると考えられる。前者については科学的な調査を待たねば決定し難いが、後者については他の例から見て半乾田あるいは乾田であったと推定される。

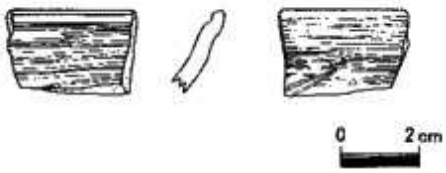
第3節　出土遺物について

今回の調査では、縄文時代晩期から近世に至る種々の遺物が出土したが、第6調査区で検出した平安時代の遺構から出土した遺物を除いては、良好な資料とは言い難い。ここでは、第6調査区ＳＥ－3の出土遺物、特に瓦器椀を中心に概括して出土遺物のまとめに代えたい。

第6調査区のＳＥ－3から出土した瓦器椀は、いわゆる和泉型に属する瓦器椀[註33]（以後和泉型瓦器椀と付称する）の中でも比較的古い時期に位置付けられるもので、出現期の和泉型瓦器椀の様相を知るうえで重要な要素を含んだものと考えられる。以下、ここではＳＥ－3の出土遺物と、それに併行する時期の和泉・河内地域の他遺跡の出土例とを比較することで、和泉型瓦器椀の出現時期の諸問題を考えてみたい。



第93図　ＳＥ－３出土瓦器椀口縁部形態別模式図



第94図　ＳＥ－３出土瓦器椀実測図

1　ＳＥ－３出土の瓦器椀

本文でも述べたように、ＳＥ－３の内部には他の同時期の遺構とともに、灰を含む粘土層が堆積しており、出土遺物にも火熱による変色・退色・表皮剥離等が顕著に認められる。今回出土遺物を整理するに当ってはこれらを考慮し、単に現状の色調や焼成の状態だけではなく、形態・調整をも含めて観察して土器の分類を行った。そのために、いわゆる土師器のように淡褐色で軟質のものであっても、瓦器椀に通有の形態・調整を備えていれば瓦器椀として取り扱った。

ＳＥ－３から出土した瓦器椀の総個体数は、小破片をも含めて160点を数える。[註34]そのうち挿図に掲載したものは48点である（第52図1064～第53図1111）。なお、掲載に当っては、口縁部の形態に着目し、以下の４種類に区別した。

①　口縁端部が丸く終るもの－1064～1073

②　口縁端部に沈線状の段を持つもの－1074～1085

③　口縁端部に内傾する面を持つもの－1086～1095

④　口縁部が外反するもの－1096～1104

なお、その他の特徴を持つものも１点見られるが、小破片のために参考資料として、ここに掲載するにとどめる（第94図）。[註35]

次にここでは、ＳＥ－３出土の瓦器椀のうち、完形または完形に近い資料に限って具体的な観察を行う。抽出した資料は９個体である（第52図1069・1070、第53図1084・1093・1095・1100・1103・1104）。

形態

これらの形態を概観すれば、出現期の和泉型瓦器椀に対して一般的に言われているように、深めの体部に大型で高い高台が付くもので、要約すれば「安定感のある椀」として捉えることができる。体部の形態は、ほとんどが半球形を呈しているが、まれに直線的に伸びるもの（第52図1070）もあり、別稿でも参考にする和泉市和気遺跡の形態分類[註36]にあてはめれば、前者は椀Ａ、後者は椀Ｂに当る。しかし、その差は漠然としており、明確に判別できるものではなく、製作段階における個々の技術の差によって生じる程度のものであろう。

成形・調整

外面：外面の口縁端部から１～２cm程度下位と、体部下半から高台内にかけて、粘土の接合

痕が顕著に認められる。その方向は、前者がほぼ水平ないし右上がり、後者は椀を伏せた状態で底部から口縁部へ向って右廻りである。それらの痕跡から、紐あるいは板状の粘土を巻き付けていることが窺える。なお、粘土の接合部付近には、2～3個1組の指頭圧痕が何組か認められる。これは、粘土の接合痕が判然としないものであっても同様の位置に認められることから、粘土を巻き付けた後、粘土間を指押えによって密着・接合させていることが窺える。さらに、器肉の厚さを均一にするため、ヘラケズリによって余分の粘土を削り取っている。ヘラケズリの方向は、上半では水平または右上り、下半は右上がりの斜方射状で、椀を伏せた状態で観察すれば、口縁部から底部へ向って右から左へカーブを描いて削り取っている。

ヘラケズリの後、ナデによって器表面をより平滑にする。次いで紐状粘土を底面に貼り付け、高台を成形・調整する。口縁部もこの時点で成形・調整されるが、この際ナデの方法や強弱によって、形態に若干の差が生じるのであろう。なお、ナデが施されている口縁部や高台脇にまで、次の工程であるヘラミガキが及んでいることから、この時点で口縁部・高台が仕上げられていることは、容易に推察できる。最終段階としてヘラミガキ調整を行い、器表面の光沢を出し、気密性を高める。ヘラミガキは、全てが3～5分割して施されているが、整然と分割されているわけではなく、特に5分割のものには、4分割のうちの1単位を2度に分けて施しているものも見られる。ヘラミガキを施す方向は左廻りのものも右廻りのものもあり一定しておらず、井桁状に施された可能性のあるものも認められる。

内面：内面の調整は外面に比して簡略であり、外面のような粘土の接合痕や指頭圧痕による凹凸は全く認められず、ナデによって器表面を平滑にした後、ヘラミガキ調整を行う。ヘラミガキは、体部に横方向のものを施した後、見込みに概ね一方向のものを施すが、体部と見込みとを意識して完全に分化したものは見出せない。また、体部には前述のヘラミガキの後、右廻りの螺旋状のヘラミガキを装飾的に施している例が認められる（第53図1084）。

2　和泉型瓦器椀（出現期）の製作技法

瓦器椀の製作技法については、従来より先学諸氏によって、諸説が挙げられている。まず、田中琢氏は「黒色土器・瓦器の成立は土師器製産の中における改良であった。」と捉えられ、その製作技法についても「黒色土器と瓦器の絶対多数を占める椀や皿は、土師器と同じように左手手法の左まわりまきあげ技法や、右まわりのよこなでで成形している。」[註37]と述べられ、その説が各研究者によって継承されてきた。その後、小笠原好彦氏は瓦器について「薄手で規格性が高くあるいは部分的ながら型作り法が関与したのではないかとさえ思われる。」[註38]と消極的ではあるが、これまでの説とは異質である「型作り押法」を示唆する意見を提唱された。さらに「型作り技法」の発展的な意見として、小川敏夫氏の「陶土製の型を用いる型抜き法」[註39]及び、

川越俊一氏・井上和人氏による「内型作り成形技法」が相次いで発表されている。[註40]

ここでは、上記の川越・井上両氏の「内型作り成形技法」を参考に、いわゆる大和型瓦器椀[註41]（以後大和型瓦器椀と付称する）の製作技法とＳＥ－３出土の瓦器椀[註42]の製作技法を比較・検討することで、和泉型瓦器椀の出自についての問題を考えてみたい。

前述したように、ＳＥ　３出土の瓦器椀の外面には、粘土の接合痕・指頭の圧痕が認められる。それらの痕跡は外面に凹凸となって残り、川越・井上両氏が「内型作り成形技法」の中で捉えておられる「形状的な特徴」の一つに挙げておられる「外器表面の凹凸の著しさ」と同様で、「外面の凹凸の著しさに対して、内面はきわめて平滑につくられている。」に合致している。ただし、ＳＥ－３出土の瓦器椀には指全体の圧痕・掌紋は見られず、指頭による圧着が認められるだけで、両氏の指摘されている点「外面に残された押圧痕は、指頭部分よりもむしろ指腹部全体や掌部分の場合が多く……」とは異っている。また、粘土の接合痕に関しても、両氏が挙げておられるように「特異な状況」ではなく、紐状・板状の粘土を螺旋状に巻き付けたことが窺える。この痕跡は、田中氏の説である「まき上げ技法」の可能性を含んでおり、川越・井上両氏が復元された「あらかじめ粘土紐を平坦に押し伸して作った数枚の細長い粘土帯」を内型に平行に貼り付けた状態は認められない。さらに、粘土の接合部と指頭圧痕の凹凸の位置について、両氏は「……接合痕跡と、前述した押えによる凹凸の位置とは一致しておらず……」とされているが、この点においても相違点がある。一方、底部は丸底のものが大半を占めており、両氏の「内型作り成形技法」を示唆する形態的な特徴に共通する。

以上、ＳＥ　３出土の瓦器椀について、大和型瓦器椀の「内型作り成形技法」と比較し、その特徴を挙げてみた。その結果、和泉型瓦器椀の出現期に比定されるＳＥ－３出土の瓦器椀において、「内型作り成形技法」を否定する資料は見出せなかったが、成形技法の一部については、相違点が認められた。この相違点が、観察者の見解の差から生じたものであるのか、地域的な特徴であるのかは判然としない。仮に後者であれば、出現期の和泉型瓦器椀の製作技法は、大和型瓦器椀の全面的に模倣したとは考え難くなる。これを発展的に考えれば、和泉・河内地域では、先進地域である大和の瓦器椀の影響を受け、独自の技法によって瓦器椀を製作したとも理解されよう。

3　和泉型瓦器椀出現期における土器の器種構成

和泉型瓦器椀の出現に関しては、先学諸氏が指摘されているように、先行する他地域の瓦器椀に影響されて成立したといえる。[註43]したがって、和泉型瓦器椀の出自は、土器製作の技術的な進歩から自発的に成立した他地域型とは異なり、内的な生活環境の変化が、瓦器椀を受容すべき必要性を結実させた結果新たに派生したものと考えられる。事実、出現期の和泉型瓦器椀は、

形態的には共通した特徴を示すものの、遺物個々の調整はバラエティに富んでおり、製作集団の模倣製作段階であるこの時期は、技術的な統一が不完全であったと考えられる。このことから、出現期の瓦器椀の型式変化だけから先後関係を把握することは、不条理と考えられる。

そこでここでは、和泉型瓦器椀の出現期に比定される他の遺跡の一括出土遺物を抽出し、瓦器椀と伴出している他の遺物との関係を明らかにしたうえで、この時期における土器の器種構成を考えてみたい。なお、器種構成の推移・変化を把握するために、瓦器椀出現期以前・瓦器椀出現期以降（中世移行期）に比定される資料もあわせて掲載し、比較資料とした。

まず、出現期以前の資料としたものは、長原遺跡第27トレンチＳＫ023出土遺物[註44]、出現期として取り上げたものは、長原遺跡第27トレンチＳＫ022[註45]・当調査地第６調査区ＳＥ－３[註46]・はさみ山遺跡３Ｆ－323－５区Ｌ７井戸[註47]・大園遺跡ＳＥ801第２層[註48]・和気遺跡寺門地区22工区土壙10[註49]の各出土遺物である。一方、出現期以降の資料としては、和気遺跡の報文中でⅢ期（12世紀後半）に位置付けられている寺門地区30工区井戸１[註50]の出土遺物を使用した。なお、各器種ごとの細分は、報文中に掲載されている資料に基づいて筆者が検討を加えたもので、一部の遺物については報文と異った器種名で記述したものもある。ただし、第９表土器の器種構成一覧表に掲載したも遺物は、筆者が全てを実見したわけでなく、報文中の実測図及び記述内容を参考にしたものである。

土師器杯：古代の食器の主流である杯の系譜を引く器種であるが、瓦器椀の出現を境として土師器杯Ａ－１・Ｂ－１は土師器小皿、土師器杯Ａ　２・Ｂ－２は土師器中皿に移行したものと推定される。土師器杯Ｃも瓦器椀の出現以降は瓦器椀にその機能が移行したものの推定され、出現期以降の存続は認められない。

土師器椀：長原遺跡ＳＫ023では杯として取り上げられているものであるが、外面体部に指頭圧痕を残さないことや、伴出した黒色土器Ａ類椀と形態・法量が近似しており、ここでは椀とした。瓦器椀の出現以降の瓦器椀の形態に近似してわずかに残存しており、瓦器椀とは使用目的を異にした可能性が考えられる。

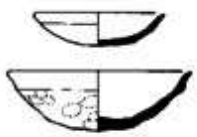
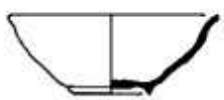
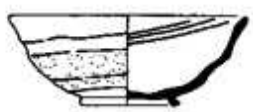
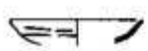
黒色土器椀：黒色土器Ａ類・Ｂ類ともに瓦器椀出現期に遺存していることが認められているが、出土量は少ない。当調査地ＳＥ－３における椀形の種別ごとの内訳を見ても、瓦器椀９割以上に対して黒色土器椀１割以下と少く、瓦器椀出現期に比定される他の遺跡と共通した特徴を示している。

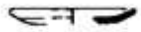
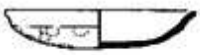
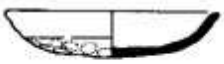
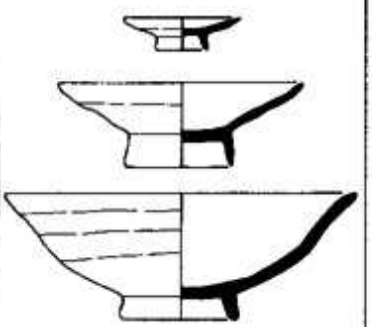
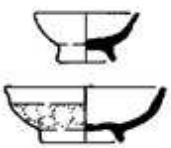
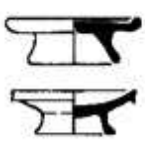
瓦器椀：瓦器椀の形態分類は、和気遺跡の報文に基づいた。ただ、この時期の瓦器椀に関しては、タイプごとの選別の困難なものが多く、個体差で捉え得る範疇のものと考えられる。

瓦器小皿：和気遺跡寺門地区22工区土壙10・当調査区第６調査区ＳＥ－３で存在が認められ、瓦器椀の出現と符合する。

第9表　和泉型瓦器椀出現前後の器種構成一覧表

（S＝⅙）

土師器杯	A-1 A-2		体部は底部から斜上方ないしは丸味を持って立ち上がる。 ＜A－1＞同時期に存在する土師器小皿とは、器高の差で区別した。 ＜A－2＞中皿に比して深みのある器種で、前代の杯の形態を残している。	長原 SK022 7 長原 SK023 9
	B-1 B-2		杯Aと同形態であるが、外面体部に指頭圧痕を顕著に残しており、全体に雑なつくりである。	長原 SK023 15 長原 SK023 17
	C		杯B－2に高台が付くタイプ。成形・調整ともに雑なつくりである。	長原 SK023 18
土師器椀	A		平坦な底部から斜上方へ直線的ないし丸味を持って伸び、体部へ至る。全体に丁寧なつくりで、外面体部に指頭圧痕を残さない点から杯Cと区別できる。	長原 SK023 13
瓦器椀	A		丸味をおびた底部からゆるやかなカーブを描いて内弯し、そのまま口縁部に至るもので、体部はほぼ半球形を呈する。	和気 土壙10 719
	B		平坦な底部で、高台付近で屈曲し、急角度で外上方に直線的に立ち上がり、口縁部に至る。	和気 土壙10 724
	C		高台径より広い平坦な底部を持ち、体部は底部から急角度で外上方に直線的に立ち上がり、そのまま口縁部に至る。	和気 土壙10 724
瓦器小皿	A		丸味を持つ底部から斜上方へ伸び、口縁部に至る。	木の本 SE－3 1061
	B		平坦な底部から屈曲して、斜上方へ伸びる。	木の本 SE－3 1062

土師器小皿	A-1 A-2		口縁部は折り返された後、端部が上方へつまみ上げられる。 <A－1>口径10cm前後で器壁薄い <A－2>口径9cm前後で器壁厚い	長原 SK023　1 木の本 SE--3 1018
	B		口縁端部は2段ヨコナデによって折り返されるため、小皿Aに比してつまみ上げは弱くなる。	木の本 SE－3 1019
	C		底部から斜上方へ立ち上がり、口縁部に至る。口縁部は強いヨコナデによって外反し、明瞭な段を持つ。	木の本 SE－3 1041
	D		底部から斜上方へ立ち上がり、口縁部に至る。	木の本 SE－3 1044
	E		底部から斜上方へ伸びた後、途中で角度を変え外反する口縁部に至る。	木の本 SE－3 1046
土師器中皿	A		底部から丸味を持って立ち上がり、口縁部に至る。端部は小皿A同様、折り返された後、つまみ上げられる。	長原 SK023 3
	B		底部から斜上方へ伸びた後、外反する口縁部に至る。	長原 SK022 4
	C		底部から斜上方へ伸び、わずかに外反する口縁部に至る。	木の本 SE－3 1052
土師器台付皿	A-1 A-2 A-3		体部は斜上方に立ち上がり、高台は「ハ」の字形で直線的に伸びる。 <A-1> 口径9cm前後、口縁端部は丸く終る。 <A-2> 口径19cm前後、口縁部付近でわずかに内弯する。 <A-3> 口径26cm前後、体部は深く、途中で角度をかえて外反し、口縁部に至る。	はさみ山 L7井戸 421 はさみ山 L7井戸 422 はさみ山 L7井戸 423
	B-1 B-2		体部は丸みのある椀形を呈する。 <B-1> 高台は丸味のある「ハ」の字形を呈する。 <B-2> 口径12cm前後、雑な作りで体部外面には指頭圧痕が見られる。	長原 SK022 21 長原 SK023 11
	C-1 C-2		体部は浅く、皿形を呈する。 <C-1> 平坦な底部から上方へ巻き込みぎみに立ち上がる。 <C-2> 直線的に伸び、上下に肥厚する口縁端部。	はさみ山 L7井戸 419 長原 SK022 20

土師器小皿：瓦器椀出現前後の形態変化の比較では、土師器小皿A－1からA－2への移行が顕著である。瓦器椀出現期には、土師器小皿A－2～Eの5種が認められるが、量的な比率では、土師器小皿Bが多い。さらに、瓦器椀出現期以降には土師器小皿Bの存在は認められず、土師器小皿C・D・Eの3種で構成されている。また、和気遺跡寺門地区22工区土壙10出土の小皿Dの中には、底部ヘラ起しによるものもあり、遺跡間で様相を異にする中世的な要素のひとつのしてて捉えることができよう。[註51]

土師器中皿：土師器小皿A－1と同様、口縁部を折り返した後上部へつまみ上げる土師器中皿Aは、瓦器椀出現期以前にのみ認められ、瓦器椀出現期には土師器中皿B・Cの2種が盛行している。

土師器台付皿：形態から土師器台付皿A・B・Cの3種に分類したが、土師器台付皿A－3のように大型で鉢形を呈するものがあるなど、各遺跡間で一様ではない。瓦器椀出現期以前にも存在は認められるが、盛行するのは瓦器椀出現期以降と考えられ、一部は前代の高杯の機能を果たしたものもあると考えられる。

土師器羽釜：報文の記述のみで実測図の掲載のないものもあり判然としないが、瓦器椀出現期には2種類の形態が存在していたようである。[註52]

土師器甕：瓦器椀出現期には存在が認められるが、資料不足のため詳細は不明瞭である。

土師器鉢：瓦器椀出現期以前には存在が認められるが、瓦器椀出現期には存続が認められず、後出の須恵質の鉢に移行した器種と考えられる。

4　和泉型瓦器椀出現期における土器の様相変化

次にここでは、和泉型瓦器椀の出現期に比定した5資料間の先後関係を、他の器種の形態変化から考えて行きたい。

第10表　和泉型瓦器椀出現前後の器種構成

遺構名 ＼ 器種		土師器						黒色土器		瓦器					土師器																			須恵器	中国磁器	石製品
		杯					椀	椀		椀			小皿		小皿						中皿			台付皿												
		A		B		C	A	A類	B類	A	B	C	A	B	A		B	C	D	E	A	B	C	A		B		C		羽釜	甕	鉢	埴	甕	白磁碗	石鍋
		1	2	1	2										1	2								1	2	3	1	2	1	2							
出現以前	長原　SK023	■	■	■	■	■	■	■							■						■	■					■				■	■				
出現期	長原　SK022	■	■						■	■						■	■	■				■	■				■		■	■					☒	
	木の本　SE－3			■			■	■	■	■	■		■	■		■	■	■	■	■			■						■		■					
	はさみ山　L－7井戸						■	■	■	■						■			■					■	■	■		■		■			■	■		
	大国　SE801第2層									■	■	■						■	■			■	■							☒						
	和気　土坑10								■	■	■	■		■			■		■											☒					☒	
出現以降	和気　井戸1									■				■				■	■	■										■				■		■

■ 遺物あり　☒ 報文の記載のみ　▣ 底部ヘラ起こし　□ 遺物なし

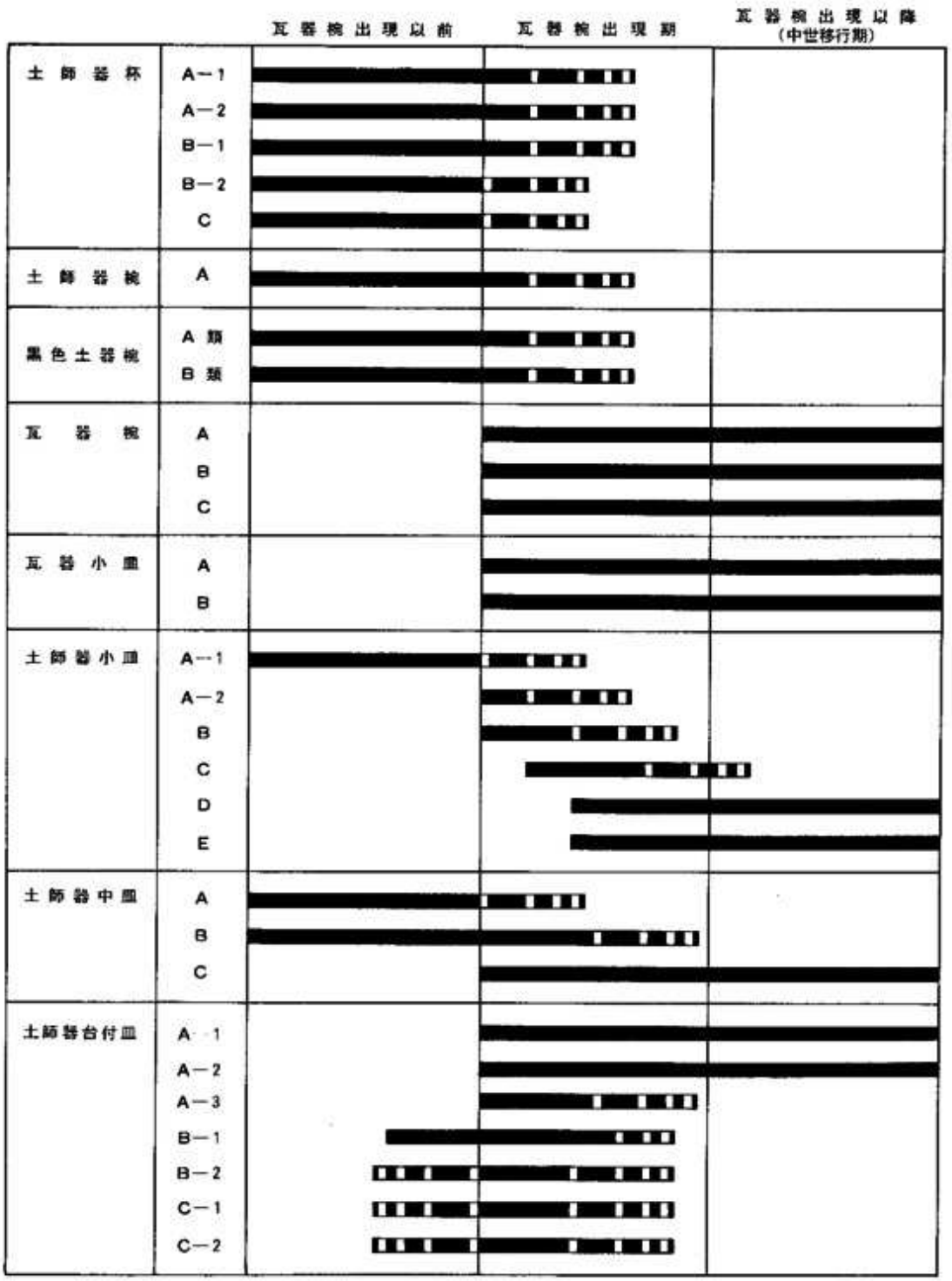
まず、土師器小皿の形態変化から推察すれば、土師器小皿A－1の系譜を引く土師器小皿A－2の出自が、瓦器椀の出現に符号しているものと考えられる。土師器小皿A－2が出土する遺構は、長原遺跡第27トレンチSK022・当調査地第6調査区SE－3・はさみ山遺跡3F－323－5区L7井戸で、和泉型瓦器椀が出土する地域の中でも、概ね中河内地区に集中している傾向を認める。なお、土師器小皿A－2を瓦器椀出現期に比定したが、形態的には従来の口縁部折り返し技法（土師器小皿A－1）の退化及び器形の小型化が顕著であり、後出のヨコナデ技法（土師器小皿B）へ移行する過渡期に当ると考えられる。事実、当調査地第6調査区SE－3では、土師器小皿Bが小皿A－2を凌ぐ関係が指摘できる。一方、はさみ山遺跡3F－323－5区L7井戸の資料も、土師器小皿A－2を伴出していることから、瓦器椀出現期のうちでも古い要素を持つ資料に含めたが、共伴している大和型瓦器椀は、大和地域の編年によれば[註53]12世紀前半に比定されるものであり、この中では後出に位置付けられよう。また、伴出遺物として明確なものはないが、大園遺跡SE801第3層の出土遺物も、上層の第2層の出土遺物との関係から、[註54]上記の3遺跡と同時期のものと考えられる。

次に、瓦器椀出現期の中でも新しい要素を持つ資料としては、大園遺跡SE801第2層と、和気遺跡寺門地区22工区土壙10の出土遺物が挙げられる。両資料ともに土師器小皿A－2が認められず、土師器小皿はB・C・Dの3種類から構成されている点で、後出に位置付けた。これらの瓦器椀には、体部と見込みとを完全に分化してヘラミガキが実施される点で、前述のグループとは区別できる。さらに、土師器杯・椀の衰退もこの時期に比定でき、これらの土師器の機能が、瓦器椀ないしは瓦器小皿に移行したものと推定できる。

以上のような観点から、和泉型瓦器椀の出現期の様相及び先後関係を推察してみた。ただ、出現期の瓦器椀自体の性格が判然としない現状にあっては、流通産物としての認定はし難く、またそれを証左すべき内容にも乏しいが、他地域の出土例が示すように、造瓦組織と濃密な関係があったことは、和泉型瓦器椀が出土する地域においても同様であったと考えられ、将来的な課題として残すべき問題であろう。

しかし、敢えて瓦器椀を地域的な流通産物として捉えた時、本章の記載内容は、単に瓦器椀を購入・使用した時期の差異として理解でき、強いて言えば瓦器椀出現期の遺跡間の社会経済の優劣が、瓦器椀の受得に関与した根本的な成因であったと考えられよう。

第11表　和泉型瓦器椀出現前後の器種推移概念表



註1　大阪府教育委員会『川北遺跡発掘調査概要・Ⅰ』1982
註2　大阪府教育委員会1983年調査
註3　八尾南遺跡調査会『八尾南遺跡』―大阪市高速電気軌道第2号線建設に伴なう発掘調査報告書―　1981
註4　a．(財) 大阪文化財センター　『長原』―近畿自動車道天理～吹田線建設に伴なう埋蔵文化財発掘調査概要報告書　1978　b．長原遺跡調査会　『長原遺跡発掘調査報告』―大阪市交通局地下鉄谷町線延長工事、第31・32工区の発掘調査―　1978　同改訂版　(財) 大阪市文化財協会　1982　c．(財) 大阪市文化財協会『長原遺跡発掘調査報告Ⅱ』―大阪市高速電気軌道第2号線延長工事に伴う発掘調査報告書　1982
註5　服部昌之　「古代の直線国境について」『歴史地理学紀要』17　1975
註6　由井喜太郎　「河内国条里の研究」―主として渋川・若江・志紀・丹北の四郡について―『ヒストリア』13　1956
註7　谷岡武雄　「はさみ山遺跡付近の古代条里制遺構」『挟山遺跡発掘調査概要・Ⅱ』　大阪府教育委員会　1975
註8　石清水文書『大日本古文書』家わけ文書4
註9　醍醐雑事記『群書類従』雑部一　25号
註10　西琳寺文書『続群書類従』27号下
註11　棚橋利光　「八尾の条里制」『八尾市紀要第6号』　八尾市教育委員会市史編纂室　1976
註12　前掲註6
註13　大越勝秋『河内国条里制史料集補遺（続二）』1963
註14　八尾市教育委員会市史編纂室　『八尾市史』　1958
註15　(財) 八尾市文化財調査研究会　「八尾市埋蔵文化財発掘調査概要昭和56・57年度」『(財) 八尾市文化財調査研究会報告3』　1983
註16　掲載した地図は、八尾市役所企画調整部参事藪内俊彦氏の御好意によって借用させていただいたもので、氏の2カ年に及ぶ調査研究の結実であり、ここに記して感謝する次第であります。
註17　東大阪市遺跡保護調査会　『池島町の条里遺構』　1973
註18　岸俊男「難波　大和古道略考」『小葉田淳教授退官記念国史論集』1970
註19　前掲註5
註20　秋山日出夫　「日本古代の道路と一歩の制」『橿原考古学研究所論集創立三十五周年記念』　橿原考古学研究所編　1975
註21　井上正雄『大阪府誌第4巻』1922
註22　前掲註6
註23　大越勝秋　『河内国条里遺制補遺3』　1954・1955
註24　前掲註11
註25　藤岡謙二郎　「先史時代文化の性格を規定した自然の問題」『先史地域及び都市域の研究』　1955
註26　前掲註17
註27　大阪府教育委員会が1983年9月～12月に調査
註28　高槻市教育委員会　「上牧遺跡発掘調査報告書」『高槻市文化財発掘調査』　1980
註29　(財) 八尾市文化財調査研究会　『昭和57年度における埋蔵文化財発掘調査』―その成果と概要―　1983
註30　前掲註4－b
註31　前掲註27
註32　(財) 八尾市文化財調査研究会　「八尾市埋蔵文化財発掘調査概報1980・1981年度」『(財) 八尾市文化財調査研究会報告2』　1983
註33　前掲註28

註34　総個体数は、口縁端部あるいは高台の遺存しているものを１個として数えた。

註35　この資料は、口縁部内側に幅２㎜程度の凹線状の窪みを持ち、ヘラミガキも細く密で胎土も極めて精良であることから、他地域で生産されたものと考えられるが、生産地は限定し難い。

註36　和気遺跡調査会　『和気遺跡発掘調査報告書』　1979

註37　田中琢　「古代中世における手工業の発達１窯業(4)畿内」『日本の考古学Ⅵ』　河出書房　1967

註38　小笠原好彦　「丹塗土師器と黒色土師器―土師器における二次的表面加工の問題について　―」『考古学研究』第18巻第２号・第３号　1971

註39　小川敏太　「西飯食町遺跡と瓦器椀作陶の一所見」『古代文化』第31巻第５号　1979

註40　川越俊一・井上和人　「瓦器椀製作技術の復元」『考古学雑誌』第67巻第２号　1981

註41　川越・井上両氏は瓦器椀の製作実験について、前掲註40の中で「試作は比較的古い段階の大型の製品をもとにして行なった」と述べられているため、出現期の和泉型瓦器椀の製作技法を考えるうえで参考にさせていただいた。

註42　前掲註28

註43　前掲註４－ａ

註44　この時期は、瓦器椀の内面ヘラミガキが体部と見込みで完全に分化して施されるもので、見込みのヘラミガキは格子状に施される。

註45　前掲註４－ａ

註46　前掲註４－ａ

註47　大阪府教育委員会　『狭山遺跡・軽里遺跡発掘調査概要』　1978

註48　大阪府教育委員会　『大園遺構発掘調査概要・Ⅵ』　第２阪和国道建設に伴う発掘調査－　1981

註49　前掲註36

註50　前掲註36

註51　前掲註36　P225に「成形技法が異なる特殊な小皿」として土壙10出土の小皿６個体が挙げられている。

註52　掲載資料が乏しく全容がわかるものは少いが、口縁部付近の形態から以下の２種が認められる。
・口縁部は体部から丸く屈曲し、口縁端部が丸く終るもの（はさみ山遺跡323－５区Ｌ７井戸）
・口縁部は体部から「く」の字形に屈折し、口縁端部に内傾する面を持つもの(長原遺跡ＳＫ022)

註53　川越俊一「大和地方出土の瓦器をめぐる二、三の問題」文化財論叢『奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集』1983

註54　前掲註48

第10章　花粉分析

安　田　喜　憲（広島大学助手）

1　試料の採取と層序

花粉分析の試料採取地点と層序は第95図に示す如くである。

2　花粉分析の方法

花粉分析の方法は、ＫＯＨ処理（10％水酸化カリウムにて15分間湯せん）―水洗―比重分離（70％塩化亜鉛溶液にて比重分離）―水洗―酢酸処理―アセトリシス処理（無水酢酸９：濃硫酸１の混合液にて３分間湯せん）―酢酸処理―水洗―マウント―顕鏡の順に行なった。

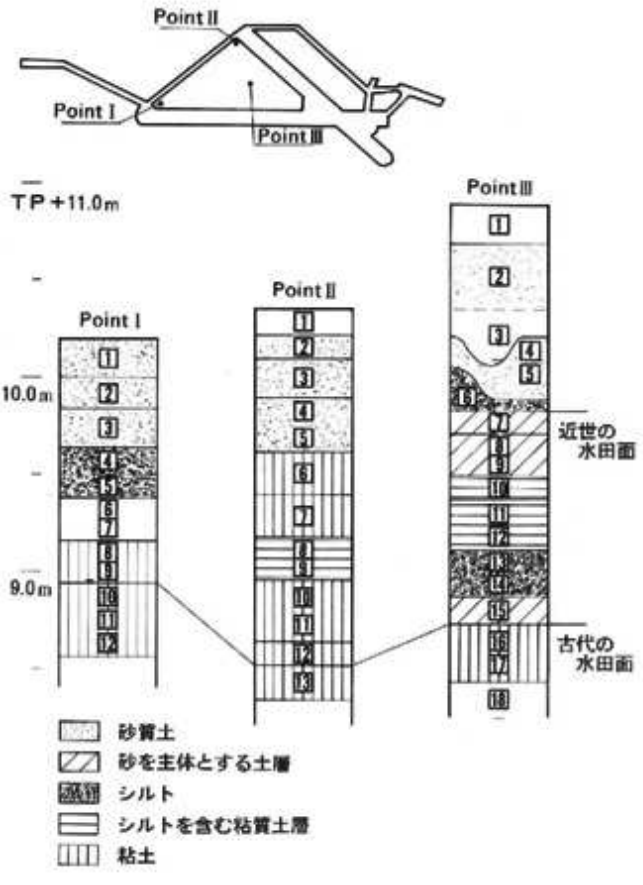
3　花粉分析の結果

花粉分析の結果は第12表～第14表に示す如くである。主要な遺体について花粉分析ダイアグラムを作成し、第98図～第100図に示した。

4　考察

（１）古代末期の水田について

古代末期の水田に比定される堆積物（例えば Point Ⅰ の試料№12、Point Ⅱの試料№13、あるいはPoint Ⅲの試料№16・17・18）からは、イネ属型の花粉が35％以上の高い出現率を示し、これとともに水田等の湿地に生育するミズアオイ属・オモダカ属・ミズワラビ属・サンショウモ科の花粉・胞子が多産する。Point Ⅰ やⅡでは、古代末期の水田耕土から出現する



第95図　花粉分析試料採取地点・層序略図

イネ属型花粉の出現率は、全層準中、現在の水田耕土についてで高い出現率を示す。木の本遺跡周辺においては、イネ属型花粉の出現率からみる限り、古代末期の水田利用は集約度が高く、中世から近世前半の土地利用の方が粗放的な傾向がうかがわれる。

（2）景観の復元について

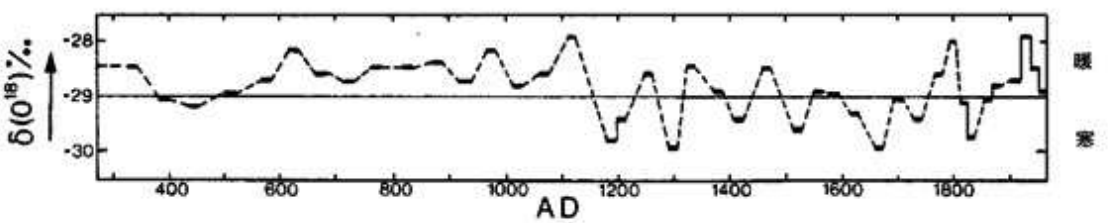
古代末期においては、アカガシ亜属が40%以上の高率を示し、これとともにシイノキ属・ヤマモモ属・コウヤマキ属・モミ属・ツガ属なども高い出現率を示す。一方二葉マツ亜属の出現率は20%以下にとどまっており、木の本遺跡周辺には、いまだ照葉樹林が古代末期の段階では広く残存していたことがわかる。古代末期以降、二葉マツ亜属は漸次的に増加するが、Point Ⅲの試料№11・12・13を除いて、全体としてアカガシ亜属・シイノキ属が花粉ダイアグラムの上部まで優占している。二葉マツ亜属とアカガシ亜属の出現率が逆転するのは、上部の粗砂層を境としてである。木の本遺跡に近い位置に立地する藤井寺市西大井遺跡では、第98図に示す如く、近世中頃以降を境として、二葉マツ亜属とアカガシ亜属の出現比率が逆転する。このことから、おそらく木の本遺跡の上部の粗砂層は近世中頃以降のものとみられる。

（3）遺跡内のローカルな地域差について

遺跡内の3地点（Point Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）の花粉分析の結果を比較してみると、層序の対比が正しいとすれば、Point Ⅲ地点が古代末期以降、人間のインパクトの影響を強く受けていると言える。一方、Point Ⅰ地点はイネ属型花粉・二葉マツ亜属の出現率が低く、アカガシ亜属が40%以上の高率を連続的に保持しており、カシ林のより多い環境が後年まで残った。

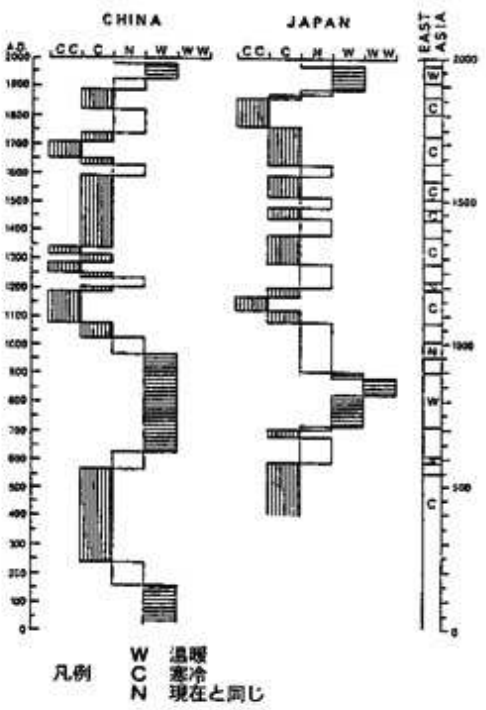
（4）歴史時代の気候変化について

さきに古代末期の水田のところで述べたように、古代末の水田利用の集約度は、イネ属型花粉の出現率からみるかぎり、それ以降の中世や近世前半よりも高いと判断された。この木の本遺跡の営まれた古代末期は、歴史時代の中で温暖期にあたっている。例えば第96図では、グリ



第96図　グリーンランド北西部の氷床の酸素同位体比の分析結果（Lamb 1977）

ーンランド北西部の氷床の酸素同位体比から推定される気温の変化は、7世紀から11世紀前後の温暖期と、それに続く12世紀頃からの気候の寒冷化を物語っている。また吉野正敏（1982）による中国と日本の気候変化の傾向中、7世紀から11世紀頃の温暖期の存在を明らかにしている（第97図）。こうした気候の温暖期が、木の木遺跡の古代末期の水田のイネ属型花粉の高い出現率を直接裏付ける証拠とは言えないが、なんらかのかかわりがあるのではないかと推定される。



第97図　中国と日本の歴史時代の気候変化（吉野1982）

文　献

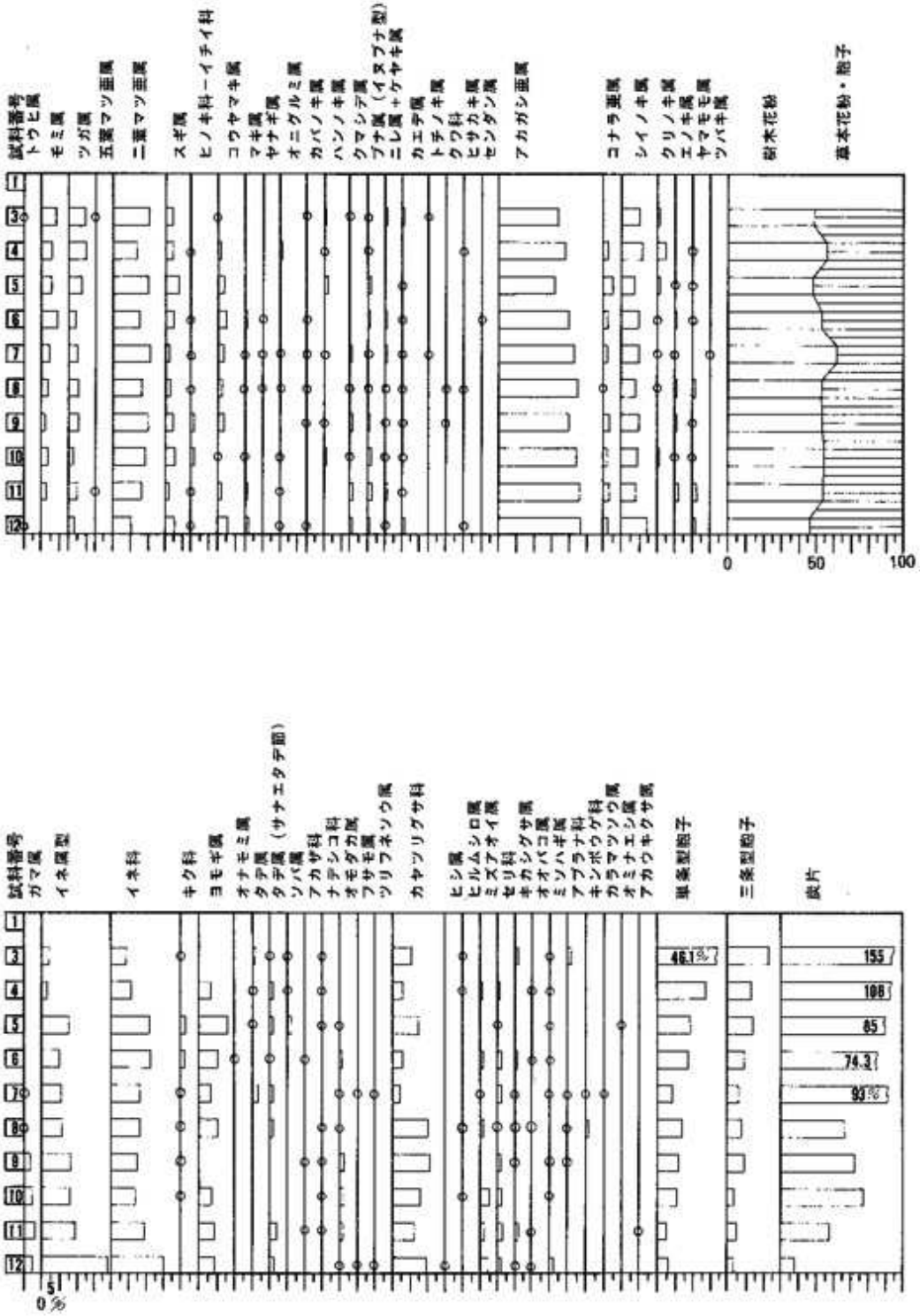
Lamb, H. H. (1977)　Climate・Present, Past and Future, Methuen, London.

安田喜憲（1983）「西大井遺跡の泥土の花粉分析」大阪府教育委員会　『西大井遺跡第3次発掘調査概要』

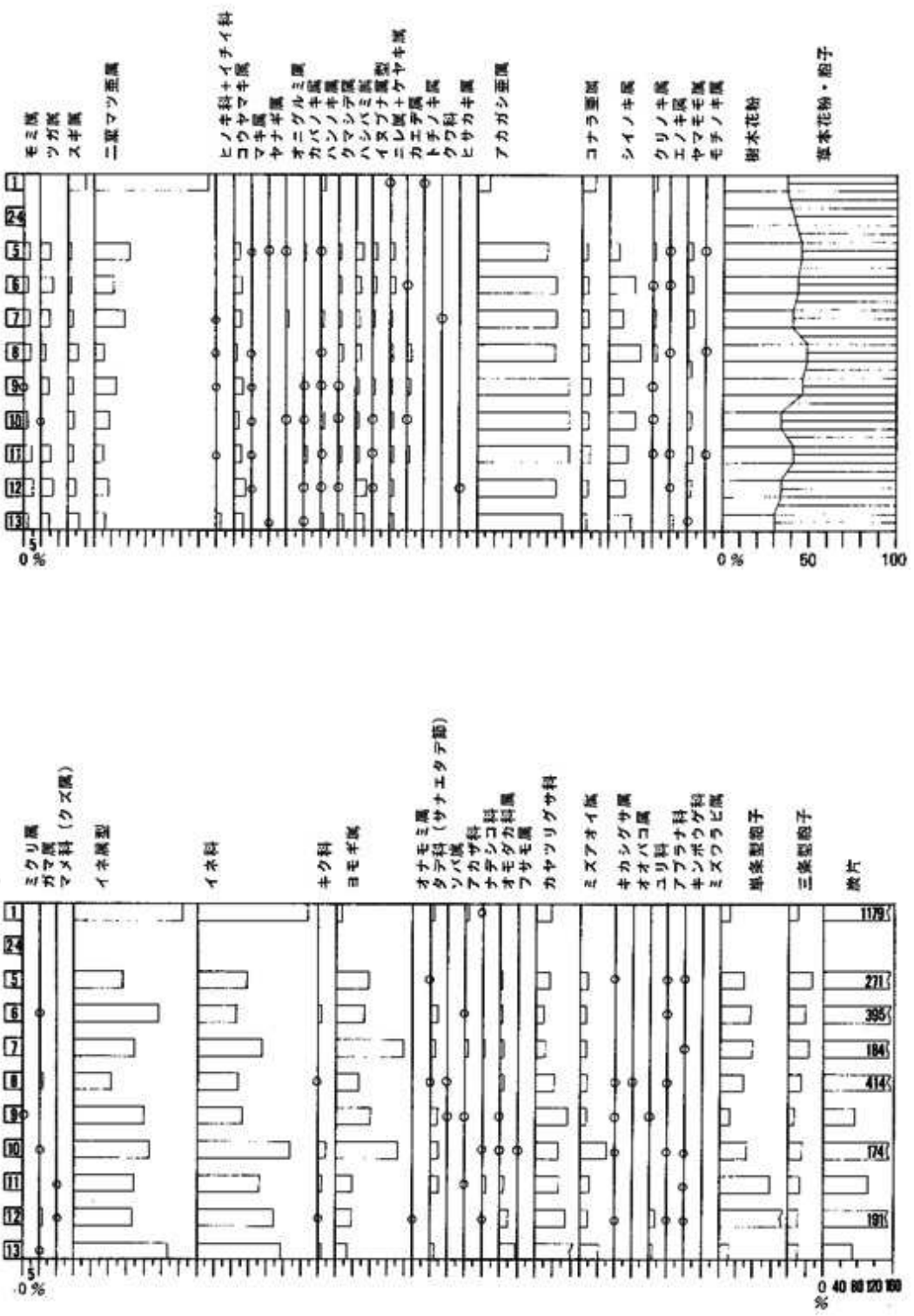
吉野正敏（1982）「風土の歴史性」『史境4』

参考文献

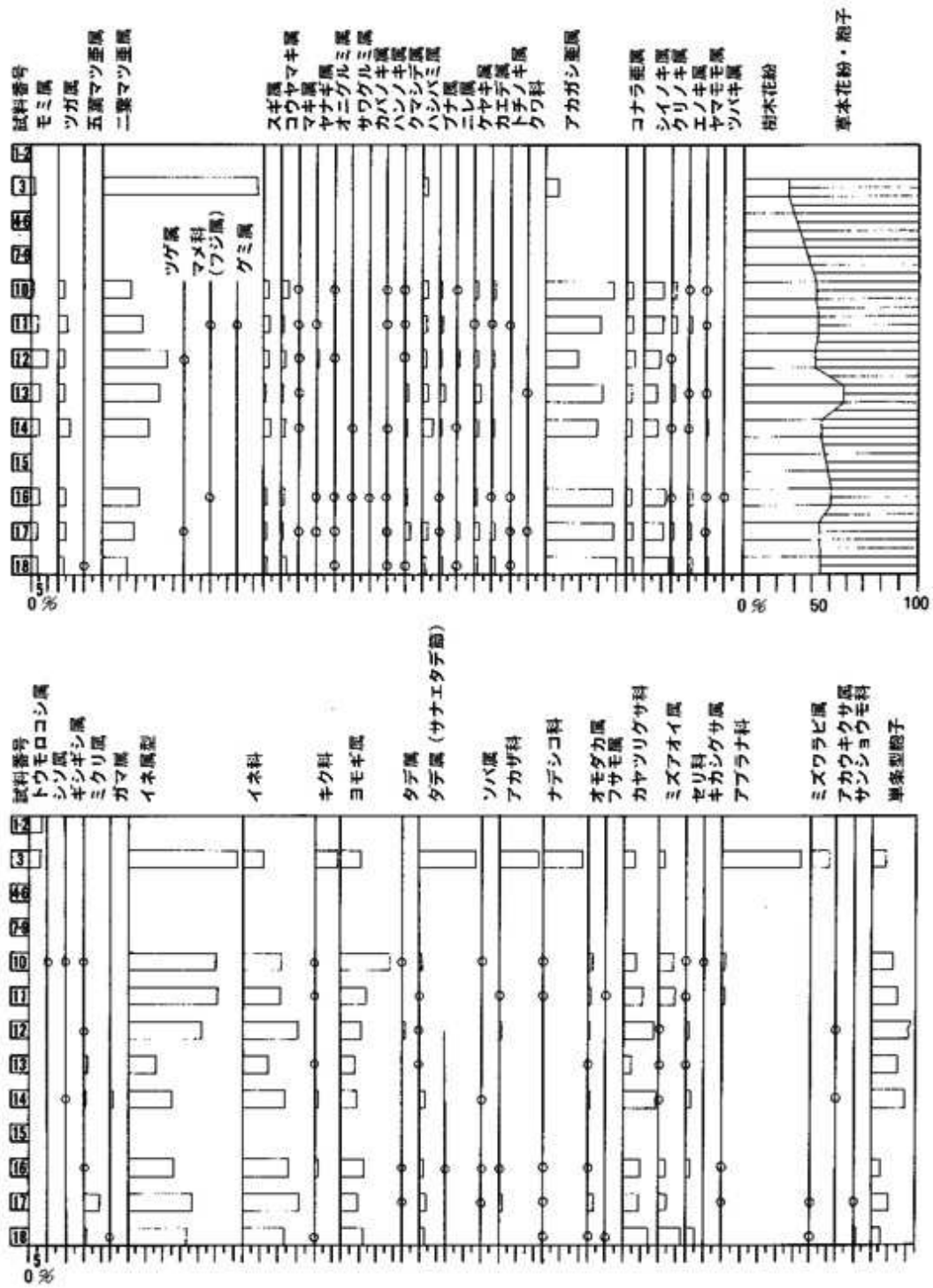
新井　夫・大塚忠道・北里洋・堀部純



第98図　木の本遺跡Point Ⅰの花粉ダイアグラム
（花粉ダイアグラムは樹木花粉の総数を基数とするパーセント）



第99図　木の本遺跡Point Ⅱの花粉ダイアグラム
用花粉ダイアグラムは樹木花粉の総数を基数とするパーセント）



第100図　木の本遺跡Point Ⅲの花粉ダイアグラム
（花粉ダイアグラムは樹木花粉の総数を基数とするパーセント）

第12表　木の本遺跡 Point I の花粉・胞子出現率表

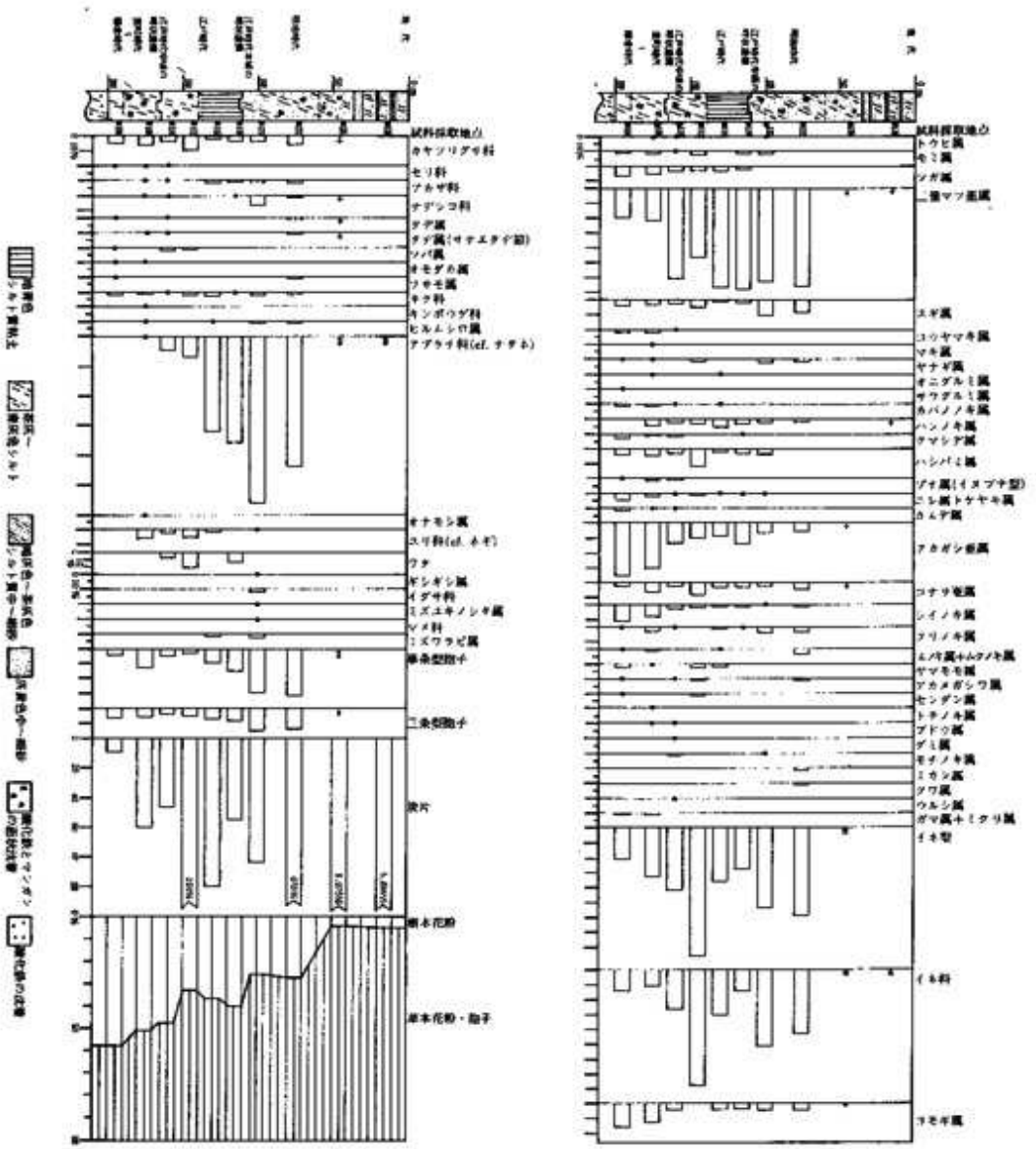
科・属	No. 12		No. 11		No. 10		No. 9		No. 8		No. 7		No. 6		No. 5		No. 4		No. 3		No. 2	No. 1
Picea (トウヒ属)	1	0.4																	1	0.6		
Abies (モミ属)	2	0.8	8	3.1	8	3.4	4	1.8	8	3.2	9	3.9	17	8.4	9	5.6	12	5.9	12	7.8		
Tsuga (ツガ属)	7	2.8	12	4.8	6	2.6	12	5.4	13	5.2	11	4.8	8	4.0	12	7.5	20	9.8	14	9.1		
Pinus(Haploxylon) (五葉マツ亜属)			1	0.4															1	0.6		
Pinus(Diploxylon) (二葉マツ亜属)	26	10.4	42	16.1	42	18.1	46	20.5	42	16.8	49	21.4	31	15.3	32	20.0	29	14.1	30	21.4		
Cryptomeria (スギ属)	13	5.2	5	1.9	13	5.6	10	4.5	7	2.8	5	2.2	9	4.5	12	7.5	9	4.4	7	4.5		
Cupressaceae (ヒノキ科)+ Taxaceae (イチイ科)	1	0.4	1	0.4	3	1.2	3	1.3	1	0.4	1	0.4	1	0.5			1	0.5				
Sciadopitys (コウヤマキ属)	13	5.2	5	1.9	2	0.9	8	3.6	6	2.4	7	3.1	10	5.0	6	3.1	3	1.5	1	0.6		
Podocarpus (マキ属)	6	2.0	3	1.1	1	0.4			1	0.4	1	0.4	3	1.5								
Salix (ヤナギ属)									2	0.8	1	0.4	1	0.5					1	0.6		
Juglans (オニグルミ属)	3	0.8	2	0.8	1	0.4			2	0.8	1	0.4					3	1.5				
Pterocarya (サワグルミ属)																						
Betula (カバノキ属)	2	0.8					2	0.9	1	0.4	1	0.4	1	0.5					1	0.6		
Alnus (ハンノキ属)					3	1.3	1	0.4			1	0.4			4	2.5	1	0.5	2	1.3		
Carpinus (クマシデ属)	4	1.6	3	1.1	2	0.9			3	1.2	1	0.4	2	1.0					1	0.6		
Corylus (ハシバミ属)	7	2.8	3	1.1	4	1.7	5	2.2	9	3.6	2	0.9	1	0.5	3	1.9	3	1.5	3	1.9		
Fagus japonica type (イヌブナ型)	8	3.2	6	2.3	5	2.2	3	1.3	2	0.8	1	0.4	2	1.0	3	1.9	1	0.5	1	0.6		
Ulmus (ニレ属)			3	1.1	3	1.3	4	1.8	1	0.4	1	0.4	1	0.5	1	0.6	1	0.5				
Zelkova (ケヤキ属)	1	0.4	3	1.1	1	0.4	1	0.4	2	0.8	3	1.3	2	1.0					2	1.3		
Acer (カエデ属)	3	1.2	1	0.4	2	0.9	1	0.4	2	0.8	2	0.9	1	0.5	1	0.6			3	1.3		
Aesculus (トチノキ属)											2	0.9					2	1.0				
Moraceae (クワ科)							1	0.4	3	1.2												
Eurya (ヒサカキ属)	1	0.5							1	0.4							1	0.5				
Metia (センダン属)													1	0.5								
Quercus (Cyclobalanopsis) (アカガシ亜属)	114	45.6	121	46.4	103	44.4	90	40.2	113	45.2	98	42.8	80	38.6	51	31.9	77	37.6	53	34.4		
Quercus(Lepidobalanus)(コナラ亜属)	6	2.4	7	2.7	3	1.3	7	3.1	1	0.4	4	1.7	5	2.5	9	5.6	5	2.4				
Castanopsis (シイノキ属)	35	14.0	20	7.7	21	9.1	21	9.4	20	8.0	23	10.0	20	9.9	12	7.5	25	12.2	16	10.4		
Castanea (クリ属)					3	1.3			1	0.4	1	0.4	1	0.5	2	1.3	11	5.4	3	1.9		
Celtis (エノキ属)			6	2.3	2	0.9	3	1.3	4	1.6	1	0.4	2	1.5	1	0.6						
Myrica (ヤマモモ属)	3	1.2	6	2.3	1	0.4	1	0.4	5	2.0			1	0.5	1	0.6	1	0.5				
Camellia (ツバキ属)											1	0.4										
Ligustrum (ネズミモチ属)																						
Zanthoxylum (サンショウ属)	1	0.4	1	0.4																		
Lonicera (スイカズラ属)			1	0.4																		
Symplocos (ハイノキ属)			1	0.4																		
Ilex (モチノキ属)					1	0.4	1	0.6							1	0.6						
Callicarpa (ムラサキシキブ属)					1	0.4																
Trachelospermum (テイカカズラ属)					1	0.4					1	0.4										
Prunus (サクラ属)											1	0.4	1	0.5								
Ericaceae (ツツジ科)															1	0.6						
Vitis (ブドウ属)																						
Total AP	250		261		222		224		250		229		202		160		205		164			
Typha (ガマ属)	11	4.4	15	5.7	8	3.4	6	2.7	2	0.8	1	0.4										
Oryza type (イネ属型)	94	37.6	49	18.8	36	15.1	36	16.1	29	11.6	25	10.9	20	9.9	24	15.0	6	2.9	6	3.9		
Gramineae (イネ科)	73	29.2	45	18.4	31	13.4	34	15.2	40	16.0	37	16.2	45	22.3	34	21.3	23	11.2	19	8.4		
Compositae (キク科)					2	0.9	2	0.9	1	0.4	2	0.9	4	2.0	4	2.5			1	0.6		
Artemisia (ヨモギ属)	20	8.0	22	8.4	14	6.0			26	10.4	15	6.6	20	9.9	25	15.6	13	6.3				
Xanthium (オナモミ属)													1	0.5								
Polygonum (タデ属)							6	2.7							1	0.6	1	0.5	2	1.3		
P. Persicaria (タデ属・サナエタデ節)	5	2.0	9	3.4					3	1.2	3	1.3	1	0.5	3	1.9	3	1.5	1	0.6		
Fagopyrum (ソバ属)															3	1.9	1	0.5	1	0.6		
Chenopodiaceae (アカザ科)			1	0.4			1	0.4					1	0.5								
Caryophyllaceae (ナデシコ科)			1	0.4	1	0.4	1	0.4	2	0.8					1	0.6	1	0.5	1	0.6		
Sagittaria (オモダカ属)	1	0.4	4	1.5	4	1.7	5	2.2	2	0.8	1	0.4	2	1.0	1	0.6						
Myriophyllum (フサモ属)	1	0.4									1	0.4										
Impatiens (ツリフネソウ属)	1	0.4									1	0.4										
Cyperaceae (カヤツリグサ科)	46	18.4	31	11.9	36	16.5	48	21.4	50	20.0	9	3.9	22	9.9	23	14.4	12	5.9	27	11.0		
Trapa (ヒシ属)	1	0.4																				
Potamogeton (ヒルムシロ属)							2	0.9			1	0.4					2	1.0	2	1.3		
Menyanthes (ミズアオイ属)	8	3.2	3	1.1	10	4.3			4	1.6	1	0.4	3	1.5			2	1.0				
Umbelliferae (セリ科)	3	1.2	6	2.3	3	1.3	3	1.3	1	0.4	5	2.2	4	2.0	1	0.6	2	1.0				
Rotala (キカシグサ属)	2	0.8	4	1.5			2	0.9	2	0.8	1	0.4	2	1.0					2	1.3		
Plantago (オオバコ属)	1	0.4	1	0.4					1	0.4			1	0.5			1	0.5				
Lythrum (ミソハギ属)			4	1.5			1	0.4	2	0.8			1	0.5	1	0.6	1	0.5	1	0.6		
Liliaceae (ユリ科)					12	5.2			2	0.8	1	0.4	2	1.0			3	1.5				
Cruciferae (アブラナ科)							1	0.4	2	0.8	1	0.4							3	1.8		
Ranunculaceae (キンポウゲ科)									3	1.2	1	0.4										
Thalictrum (カラマツソウ属)											1	0.4										
Potrinia (オミナエシ属)															1	0.6						
Osmunda (ゼンマイ属)																						
Azolla (アカウキクサ属)			1	0.4																		
Salviniaceae (サンショウモ科)																			1	0.6		
Monolete spore (単条型胞子)	14	5.6	13	5.0	24	11.2	27	12.1	36	14.0	19	8.3	36	17.8	31	19.4	66	32.2	71	43.1		
Trilete spore (三条型胞子)	6	2.4	13	5.0	8	3.4	20	8.9	20	8.0	15	6.6	20	9.9	24	15.0	28	13.7	37	24.0		
Arthogerma (ゼニゴケ属)					2	0.9											1	0.5	2	1.3		
Moss spore (蘚苔類胞子)																						
Other remains (他の未同定遺体)															1	0.6	1	0.5				
Total NAP	287	114.8	226	86.2	194	83.6	186	87.1	227	90.8	141	61.6	175	86.6	177	110.6	157	76.6	161	104.5		
Total AP + NAP	537		486		416		410		477		370		377		337		362		315			
AP/NAP	46.6/53.4		53.7/46.3		54.5/45.5		53.5/46.5		52.4/47.6		61.9/38.1		53.6/46.4		47.5/52.5		56.6/43.4		48.9/51.1			
Charcoal (炭片)	41	7.6	79	28.0	114	48.7	96	43.0	97	38.8	213	93.0	150	74.3	136	85.0	119	105.8	240	155.8		

第13表　木の本遺跡 Point Ⅱ の花粉・胞子出現率表

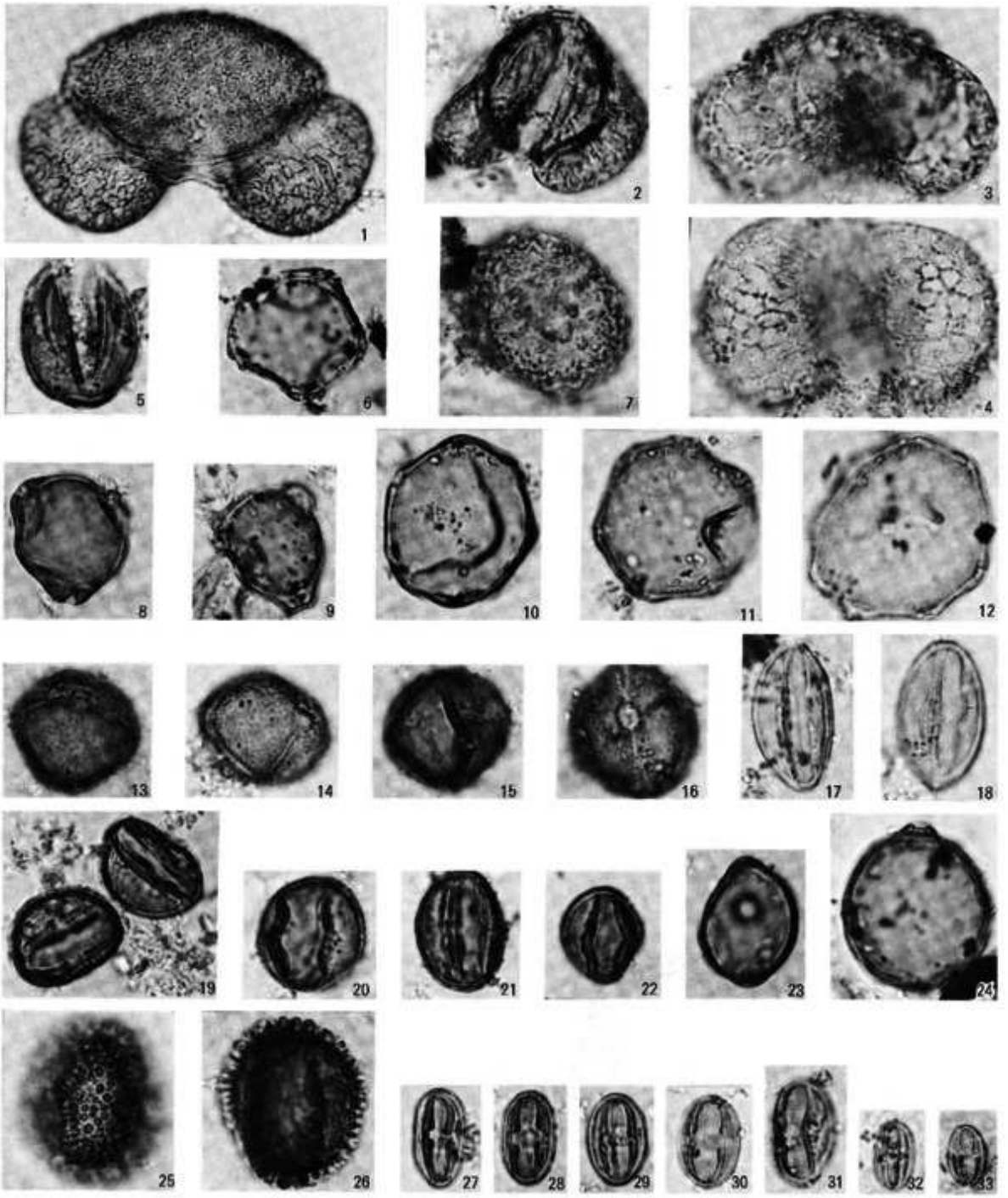
科・属　　　　　　　　試料№	№ 13		№ 12		№ 11		№ 10		№ 9		№ 8		№ 7		№ 6		№ 5		№ 4 ～ № 2		№ 1	
	個	%																				
Picea（トウヒ属）																						
Abies（モミ属）	3	1.6	11	4.8	10	4.3	3	1.3	1	0.5	7	3.1	4	2.2	4	1.9	9	3.0				
Tsuga（ツガ属）	7	3.8	14	6.1	12	5.2	2	0.9	7	3.8	4	1.8	9	4.8	14	6.7	16	5.3				
Pinus(Haploxylon)（五葉マツ亜属）									2	1.1												
Pinus(Diploxylon)（二葉マツ亜属）	11	5.9	19	8.3	11	4.8	20	8.5	23	12.4	12	5.3	32	17.2	24	11.5	60	20.1			77	65.8
Cryptomeria（スギ属）	12	6.5	9	3.9	7	3.0	8	3.4	5	2.7	13	5.8	5	2.7	4	1.9	5	1.6			12	10.3
Cupressaceae（ヒノキ科）+ Taxaceae（イチイ科）	4	2.2			1	0.4			1	0.5	1	0.4	1	0.5								
Sciadopitys（コウヤマキ属）	8	4.3	13	5.7	7	3.0	5	2.1	8	4.3	3	1.3	6	3.2	9	4.3	10	3.3				
Podocarpus（マキ属）			2	0.9	2	0.9	2	0.9	1	0.5	2	0.9					1	0.3			1	0.9
Salix（ヤナギ属）	1	0.5															1	0.3			1	0.9
Juglans（オニグルミ属）							2	0.9					2	1.1			2	0.7				
Pterocarya（サワグルミ属）															1	0.5						
Betula（カバノキ属）			2	0.9	1	0.4	3	1.3	1	0.5	1	0.4					3	1.0				
Alnus（ハンノキ属）	2	1.1	1	0.4	1	0.4	4	1.7	1	0.5	2	0.9	2	1.1			1	0.3			3	2.6
Carpinus（クマシデ属）	4	2.2	2	0.9	3	1.3	1	0.4	1	0.5	6	2.7	2	1.1	2	1.0	4	1.3				
Corylus（ハシバミ属）	8	4.3	14	6.1	3	1.3	4	1.7	3	1.6	7	3.1	4	2.2	7	3.3	13	4.3				
Fagus japonica type（イヌブナ型）			1	0.4	2	0.9	1	0.4	3	1.6			2	1.1	5	2.4	8	2.6				
Ulmus（ニレ属）			1	0.4			2	0.9	2	1.1	1	0.4	2	1.1	4	1.9	1	0.3			1	0.9
Zelkova（ケヤキ属）	3	1.6	3	1.3	3	1.3	4	1.7	2	1.1	3	1.3	2	1.1	6	2.9	8	2.6			1	0.9
Acer（カエデ属）					3	1.3	2	0.9	3	1.6	5	2.2			1	0.5						
Aesculus（トチノキ属）																	1	0.3				
Moraceae（クワ科）													1	0.5								
Eurya（ヒサカキ属）			1	0.4																		
Melia（センダン属）																						
Quercus (Cyclobalanopsis)（アカガシ亜属）	89	48.1	103	44.8	121	52.4	124	53.0	97	52.4	99	43.8	82	44.0	94	45.0	120	39.1			8	6.8
Quercus(Lepidobalanus)（コナラ亜属）	4	2.2	7	3.0	9	3.9	8	3.4	8	4.3	7	3.1	6	3.2	6	2.9	8	2.6			9	7.7
Castanopsis（シイノキ属）	24	13.0	20	8.7	25	10.8	34	14.5	14	7.6	41	18.1	15	8.1	31	14.8	18	5.9			1	0.9
Castanea（クリノキ属）					1	0.4	1	0.4	1	0.5	4	1.8	2	1.1	1	0.5	3	1.0			3	2.6
Celtis（エノキ属）	2	1.1	2	0.9	1	0.4					2	0.9			1	0.5	1	0.3				
Myrica（ヤマモモ属）	1	0.5	4	1.7	5	2.2	4	1.7			3	1.3	5	2.7	5	2.4	7	2.3				
Camellia（ツバキ属）																	1	0.3				
Ligustrum（ネズミモチ属）			1	0.4							1	0.4										
Zanthoxylum（サンショウ属）																						
Lonicera（スイカズラ属）																						
Symplocos（ハイノキ属）																						
Ilex（モチノキ属）					1	0.4					1	0.4					2	0.7				
Callicarpa（ムラサキシキブ属）																						
Trachelospermum（テイカカズラ属）																						
Prunus（サクラ属）																						
Ericaceae（ツツジ科）																						
Vitis（ブドウ属）																						
Araliaceae（ウコギ科）	2	1.1											1	0.5								
Elaeagnus（グミ属）					1	0.4			1	0.5							1	0.3				
Viscum（ヤドリギ属）					1	0.4																
Parthenocissus（ツタ属）											1	0.4										
Total AP	185		230		231		234		185		226		186		209		304				117	
Sparganium（ミクリ属）									1	0.5												
Leguminosae(Pueraria)（クズ属）			2	0.9	1	0.4																
Rumex（ギシギシ属）			1	0.4																		
Typha（ガマ属）	1	0.5	3	1.3			1	0.4			3	1.3			1	0.5						
Oryza type（イネ属型）	97	52.4	76	33.0	79	34.2	100	42.7	55	29.7	48	21.2	64	34.4	100	47.8	84	27.6			84	71.8
Gramineae（イネ科）	89	48.1	101	43.9	83	35.9	125	53.4	48	25.9	54	23.9	69	37.1	49	23.4	87	28.6			75	64.1
Compositae（キク科）	3	1.6	2	0.9	3	1.3	9	3.8			1	0.4			3	1.4					1	0.9
Artemisia（ヨモギ属）	12	6.5	21	9.1	20	8.7	84	35.9	37	20.0	30	13.3	55	29.6	35	16.7	57	18.7			4	3.4
Xanthium（オナモミ属）			1	0.4																		
Polygonum（タデ属）			6	2.6					1	0.5	5	2.2			1	0.5	4	1.3				
P. Persicaria（タデ属・サナエタデ節）	2	1.1			10	4.3	7	3.0	8	4.3	2	0.9	4	2.2	8	3.8	2	0.7			2	1.7
Fagopyrum（ソバ属）									1	0.5	1	0.4										
Chenopodiaceae（アカザ科）					1	0.4			1	0.5			2	1.1	1	0.5					2	1.7
Caryophyllaceae（ナデシコ科）			1	0.4	3	1.3	1	0.4					2	1.1							1	0.9
Sagittaria（オモダカ属）	15	8.1	9	3.9	3	1.3	2	0.9	1	0.5	3	1.3	3	1.6	2	1.0	3	1.0				
Myriophyllum（フサモ属）							1	0.4					1	0.5								
Impatiens（ツリフネソウ属）																						
Cyperaceae（カヤツリグサ科）	180	97.3	39	17.0	30	13.0	29	12.4	33	17.8	23	10.2	10	5.4	9	4.3	22	7.2			10	8.5
Trapa（ヒシ属）																						
Potamogeton（ヒルムシロ属）			1	0.4																		
Monochoria（ミズアオイ属）	20	10.8	10	4.3	12	3.6	35	15.0	6	3.2	9	4.0	7	3.8	7	3.3	14	4.6				
Umbelliferae（セリ科）			10	4.3	5	2.2	16	6.8	2	1.1	7	3.1	4	2.2			3	1.0			1	0.9
Rotala（キカシグサ属）			1	0.4			1	0.4	1	0.5	1	0.4					1	0.3				
Plantago（オオバコ属）											1	0.4										
Lythrum（ミソハギ属）																						
Liliaceae（ユリ科）	2	1.1	7	3.0					1	0.5												
Cruciferae（アブラナ科）			2	0.9			1	0.4			1	0.4			1	0.5	1	0.3			8	6.8
Ranunculaceae（キンポウゲ科）			1	0.4	1	0.4	2	0.9					1	0.5			3	1.0				
Thalictrum（カラマツソウ属）																						
Patrinia（オミナエシ属）																						
Ceratopteris（ミズワラビ属）																					1	0.9
Osmunda（ゼンマイ属）																						
Azolla（アカウキクサ属）																						
Salviniaceae（サンショウモ科）									2	1.1	1	0.4										
Monolete spore（単条溝胞子）	10	5.4	162	70.4	66	28.6	37	15.8	11	5.9	31	13.7	35	18.8	37	17.7	43	14.1			6	5.1
Trilete spore（三条溝胞子）	10	5.4	11	4.8	15	6.5	17	7.3	5	2.7	16	7.1	21	11.3	20	9.6	39	12.8			6	5.1
Anthoceros（ツノゴケ属）																						
Moss spore（蘚苔類胞子）																						
Other spore（他の未同定胞子）																						
Total NAP	441	238.4	467	203.0	333	144.2	468	200.0	214	115.7	237	104.9	278	149.5	273	130.6	363	119.4			201	171.8
Total AP+NAP	626		697		564		702		399		463		464		482		667				318	
AP/NAP	29.6/70.4		33.0/67.0		41.0/59.0		33.3/66.7		46.4/53.6		48.8/51.2		40.1/59.9		43.4/56.6		45.6/54.4				36.8/63.2	
Charcoal（炭片）	65		191		108		174		75		414		184		265		271				1179	

第14表　木の本遺跡 Point Ⅲ の花粉・胞子出現率表

科・属　　　　　試料No.	No. 18		No. 17		No. 16		No. 15		No. 14		No. 13		No. 12		No. 11		No. 10		No. 9 ～ No. 4		No. 3		No. 2・1	
Picea (トウヒ属)	*	*																						
Abies (モミ属)	8	3.5	9	3.5	15	5.1			9	4.6	10	5.4	19	9.5	8	3.2	4	1.6			1	2.1		
Tsuga (ツガ属)	9	3.6	13	5.1	14	4.8			14	7.1	7	3.8	8	4.0	14	5.7	10	4.0						
Pinus(Haploxylon) (五葉マツ亜属)	1	0.4																						
Pinus(Diploxylon) (二葉マツ亜属)	37	14.6	46	18.1	62	21.2			53	27.0	56	32.1	73	36.5	55	22.3	40	16.2			41	87.2		
Cryptomeria (スギ属)	6	2.4	6	2.4	7	2.4			7	3.6	3	1.6	6	3.0	9	3.6	7	2.8						
Cupressaceae (ヒノキ科) + Taxaceae (イチイ科)	6	2.4			5	1.7			1	0.5	2	1.1	7	3.5	13	5.3	15	6.1						
Sciadopitys (コウヤマキ属)	9	3.5	4	1.6	6	2.0			6	3.1	3	1.6	5	2.5	4	1.6	11	4.5						
Podocarpus (マキ属)			1	0.4					1	0.5	1	0.5	1	0.5	1	0.4	1	0.4						
Salix (ヤナギ属)			1	0.4	1	0.3							2	1.0	1	0.4								
Juglans (オニグルミ属)	1	0.4	1	0.4	1	0.3							1	0.5			1	0.4						
Pterocarya (サワグルミ属)					2	0.7			1	0.5														
Betula (カバノキ属)					1	0.3																		
Alnus (ハンノキ属)	2	0.8	1	0.4	1	0.3			1	0.5					1	0.4	1	0.4						
Carpinus (シデ属)	1	0.4	6	2.4	4	1.4			3	1.5	3	1.6	1	0.5	9	3.6	2	0.8			1	2.1		
Corylus (ハシバミ属)	5	2.0	8	3.1					12	6.1	5	2.7	4	2.0	6	2.4	7	2.8			1	2.1		
Fagus japonica type (イヌブナ型)	5	2.0	1	0.4	2	0.7			3	1.5	4	2.2	2	1.0	5	2.0	3	1.2						
Ulmus (ニレ属)	2	0.8	3	1.2					1	0.5			2	1.0			2	0.8						
Zelkova (ケヤキ属)	3	1.2	5	2.0	3	1.0			4	2.0	5	2.7	3	1.5	2	0.8	3	1.2						
Acer (カエデ属)	4	1.6	3	1.2	2	0.7			2	1.0			2	1.0	2	0.8	3	1.2						
Aesculus (トチノキ属)	2	0.8	2	0.8	2	0.7									2	0.8								
Moraceae (クワ科)			1	0.4							1	0.5												
Eurya (ヒサカキ属)																								
Melia (センダン属)																								
Quercus(Cyclobalanopsis) (アカガシ亜属)	100	39.4	96	37.8	109	37.2			56	28.6	59	31.8	36	18.0	76	30.8	92	37.2			3	6.4		
Quercus(Lepidobalanus) (コナラ亜属)	8	3.1	9	3.5	8	2.7			5	2.6	5	2.7	9	4.5	8	3.2	9	3.7						
Castanopsis (シイノキ属)	33	13.0	28	11.0	34	11.6			14	7.1	13	7.0	17	8.5	26	10.5	25	10.1						
Castanea (クリノキ属)	3	1.2	3	1.2	2	0.7			1	0.5	2	1.1	1	0.5	6	2.4	6	2.4						
Celtis (エノキ属)	5	2.0	4	1.6	7	2.4			1	0.5	1	0.5			3	1.2	2	0.8						
Myrica (ヤマモモ属)	3	1.2	2	0.8	1	0.3			2	1.0	1	0.5			1	0.4	2	0.8						
Camellia (ツバキ属)					1	0.3																		
Ligustrum (ネズミモチ属)																								
Zanthoxylum (サンショウ属)																								
Lonicera (スイカズラ属)																								
Symplocos (ハイノキ属)																								
Ilex (モチノキ属)																	7	2.8						
Callicarpa (ムラサキシキブ属)																								
Trachelospermum (テイカカズラ属)																								
Prunus (サクラ属)																								
Ericaceae (ツツジ科)																								
Vitis (ブドウ属)					2	0.7					1	0.5												
Buxus (ツゲ属)			1	0.4									1	0.5										
Leguminosae(Wisteria) (フジ属)					1	0.3									1	0.4								
Elaeagnus (グミ属)															1	0.4								
Total AP	254		254		293				196		186		200		247		247				47			
Zea (トウモロコシ属)																					3	6.4		
Labiatae (シソ科)																	1	0.4						
Rumex (ギシギシ属)									1	0.5														
Sparganium (ミクリ属)	4	1.6	24	9.4	1	0.3			2	1.0	3	1.6	1	0.5			1	0.4						
Typha (ガマ属)	2	0.8							3	1.5														
Oryza type (イネ属型)	83	32.7	92	36.2	76	25.9			48	24.5	30	16.3	84	42.0	125	50.6	122	49.4			29	61.7		
Gramineae (イネ科)	58	22.8	79	31.1	74	25.3			45	23.0	25	13.6	61	30.5	51	20.6	53	21.5			5	10.6		
Compositae (キク科)	1	0.4			5	1.7			4	2.0	1	0.5	2	1.0	1	0.4	1	0.4			6	12.8		
Artemisia (ヨモギ属)	30	11.8	23	9.1	36	12.3			12	6.2	14	7.6	22	11.0	33	13.4	67	27.1			5	10.6		
Xanthium (オナモミ属)																								
Polygonum (タデ属)			2	0.8	1	0.3							2	1.0			1	0.4						
P. Persicaria (タデ属-サナエタデ節)	7	2.8	11	4.3	5	1.7			6	3.1	1	0.5	1	0.5	3	1.2					25	30.9		
Fagopyrum (ソバ属)			1	0.4	1	0.3			1	0.5							2	0.8						
Chenopodiaceae (アカザ科)			4	1.6	1	0.3							2	1.0	2	0.8					11	23.4		
Caryophyllaceae (ナデシコ科)	2	0.8	1	0.4	1	0.3									1	0.4	2	0.8			10	21.3		
Sagittaria (オモダカ属)	1	0.4	7	2.8	2	0.7			2	1.0	1	0.5	2	1.0	3	1.2	6	2.4						
Myriophyllum (フサモ属)	1	0.4													1	0.4								
Impatiens (ツリフネソウ属)					1	0.3																		
Cyperaceae (カヤツリグサ科)	36	14.2	21	8.3	29	9.9			38	19.4	8	4.3	34	17.0	25	10.1	17	6.9			3	6.4		
Trapa (ヒシ属)																								
Potamogeton (ヒルムシロ属)															1	0.4								
Monochoria (ミズアオイ属)	31	12.2	9	3.5	11	3.8			1	0.5	1	0.5	1	0.5	22	8.9	20	8.1			1	2.1		
Umbelliferae (セリ科)	15	6.1			7	2.4			5	2.6	1	0.5	3	1.5	1	0.4	1	0.4						
Rotala (キカシグサ属)																	1	0.4						
Plantago (オオバコ属)																								
Lythrum (ミソハギ属)																								
Liliaceae (ユリ科)					1	0.3																		
Cruciferae (アブラナ科)			2	0.8	2	0.7									3	1.2	3	1.2			21	44.7		
Ranunculaceae (キンポウゲ科)	2	0.8	2	0.8	1	0.3					1	0.5	1	0.5										
Thalictrum (カラマツソウ属)																								
Patrinia (オミナエシ属)																								
Ceratopteris (ミズワラビ属)	1	0.4	1	0.4																	5	10.6		
Osmunda (ゼンマイ属)									1	0.5			1	0.5										
Azolla (アカウキクサ属)									1	0.5											1	2.1		
Salviniaceae (サンショウモ科)	3	1.2			1	0.3																		
Monolete spore (単条型胞子)	15	5.9	25	9.8	15	5.1			38	19.4	28	15.2	48	24.0	36	14.6	30	12.1			4	8.5		
Trilete spore (三条型胞子)	17	6.7	16	6.3	12	4.1			21	10.7	20	10.9	24	12.0	21	8.5	20	8.1			14	29.8		
Anthoceros (ツノゴケ属)													1	0.5										
Moss spore (蘚苔類胞子)	4	1.6	1	0.4					8	4.1	1	0.5												
Other spore (他の不明胞子)																								
Total NAP	311	122.4	321		283				240	122.4	135	73.4	290	145.0	329	133.2	348	140.9			133	283.0		
Total AP+NAP	565		575		576				436		319		490		576		595				180			
AP/NAP	45.0/55.0		44.0/56.0		50.9/49.1				45.0/55.0		57.7/42.3		40.8/59.2		42.9/57.1		41.5/58.5				26.1/73.9			
Charcoal (破片)	333		148		333				487		142		138		212		453				673			

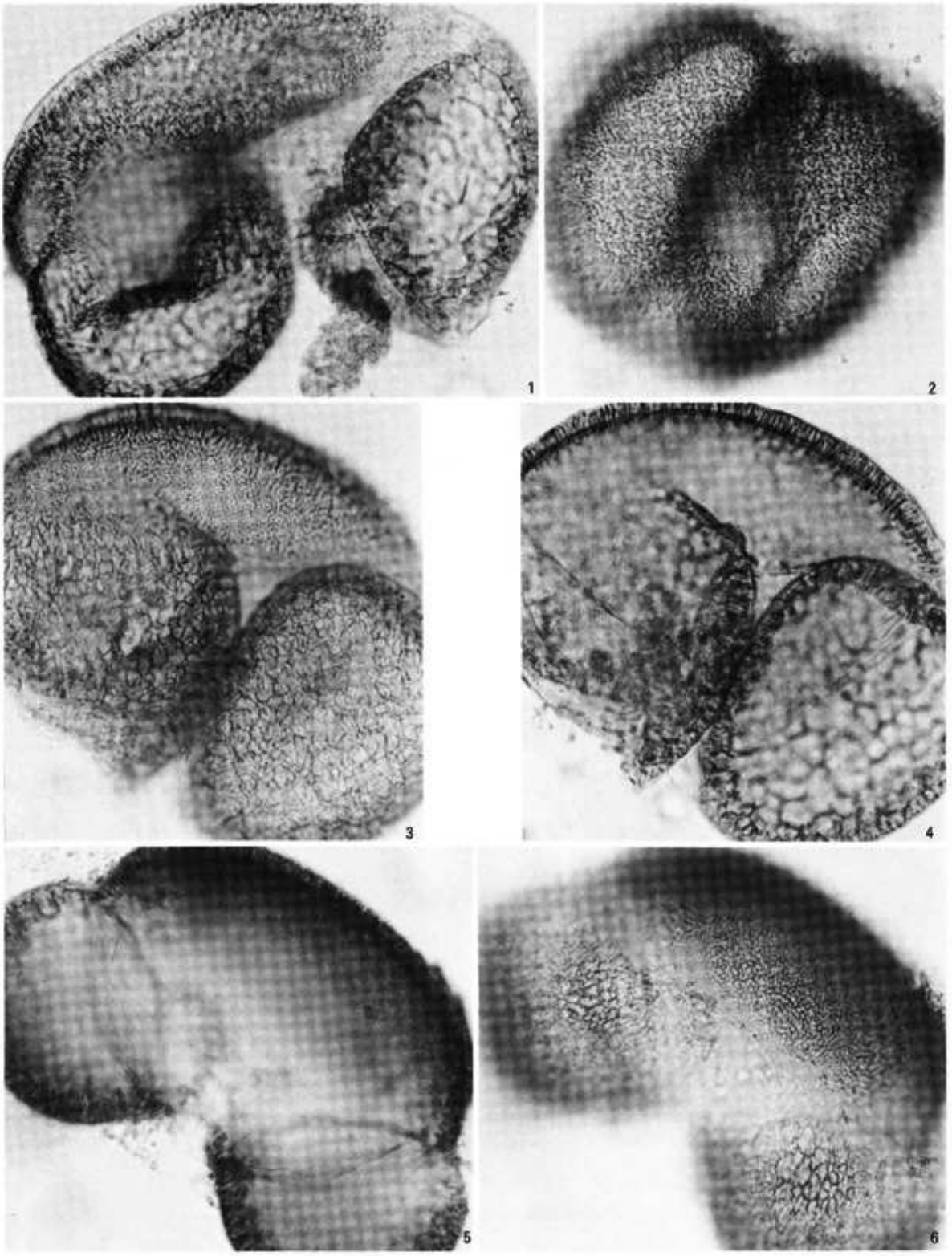


第101図　西大寺遺跡の花粉ダイアグラム（安田1982）



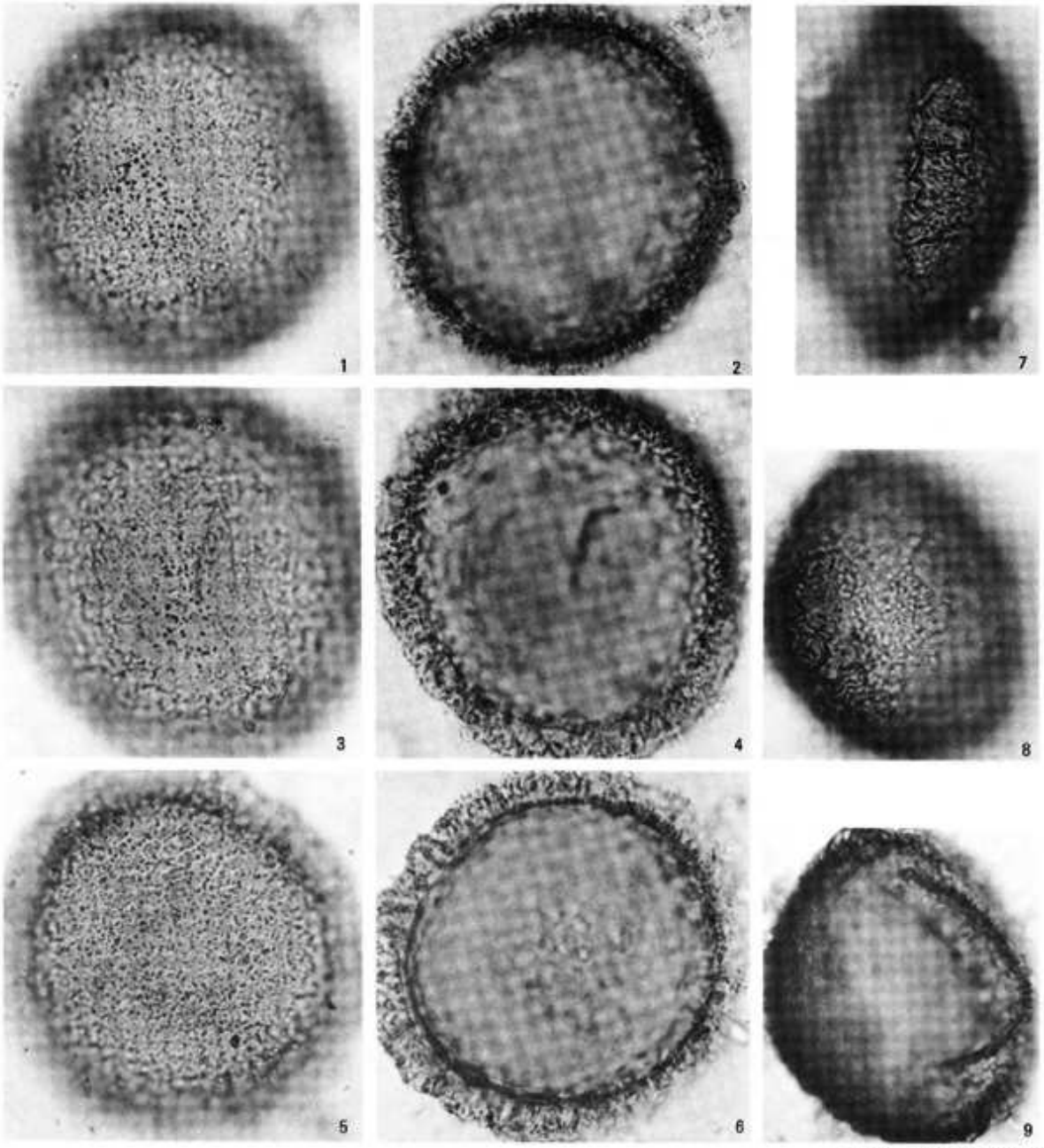
1　マツ属　2～4　マキ属　5　スギ属　6　ハンノキ属　7　コウヤマキ属
8　ヤマモモ属　9　カバノキ属　10～12　オニグルミ属　13～16　ブナ属（イヌブナ型）
17・18　カエデ属　19～22　アカガシ亜属　23　ハシバミ属　24　クマシデ属
25・26　モチノキ属　27～30　ミイノキ属　31　トチノキ属　32・33　クリノキ属（750倍）

第102図　花粉顕微鏡写真－1



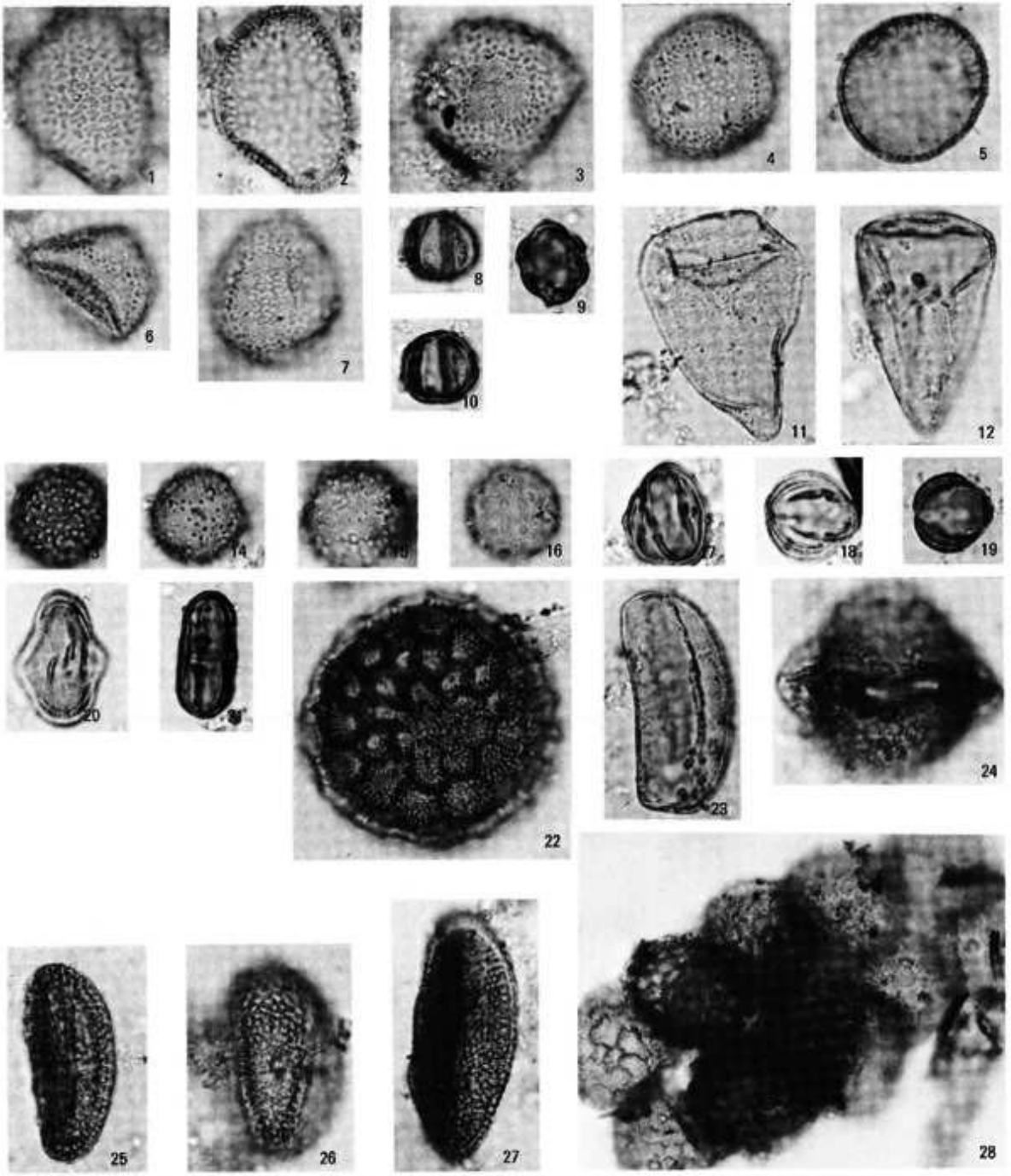
1～6　モミ属（750倍）

第103図　花粉顕微鏡写真－2



1～9　ツガ属（750倍）

第104図　花粉顕微鏡写真－3



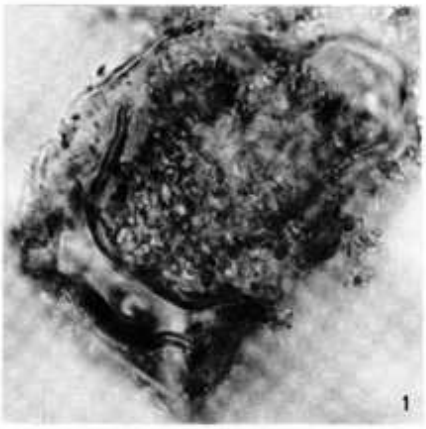
1～7　ミクリ属　　8～10　ミソハギ属　　11・12　カヤツリグサ科　　13～15　オモダカ属

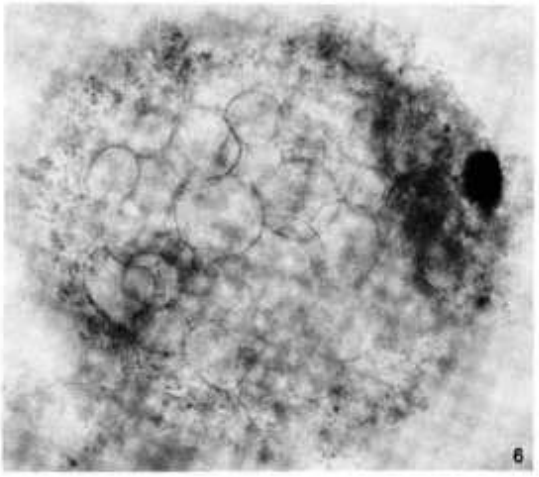
16　アカザ科　　17　キカシグサ属　　18～18　ヨモギ属　　20～11　セリ科

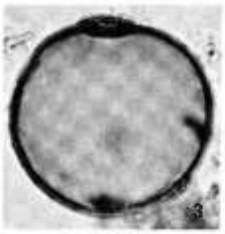
22　タデ属（サナエタデ節）　　23　ミズアオイ属　　24　ヒシ属　　25～27　ソバ属

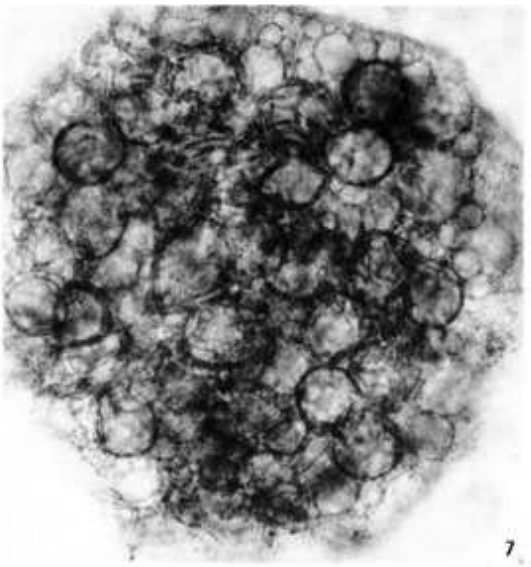
28　タデ属（サナエタデの未熟花粉）　　（750倍）

第105図　花粉顕微鏡写真－4









1　トウモロコシ属
2～5　イネ科
6　アカウキクサ属
7　サンショウモ科
8　炭片
（750倍）

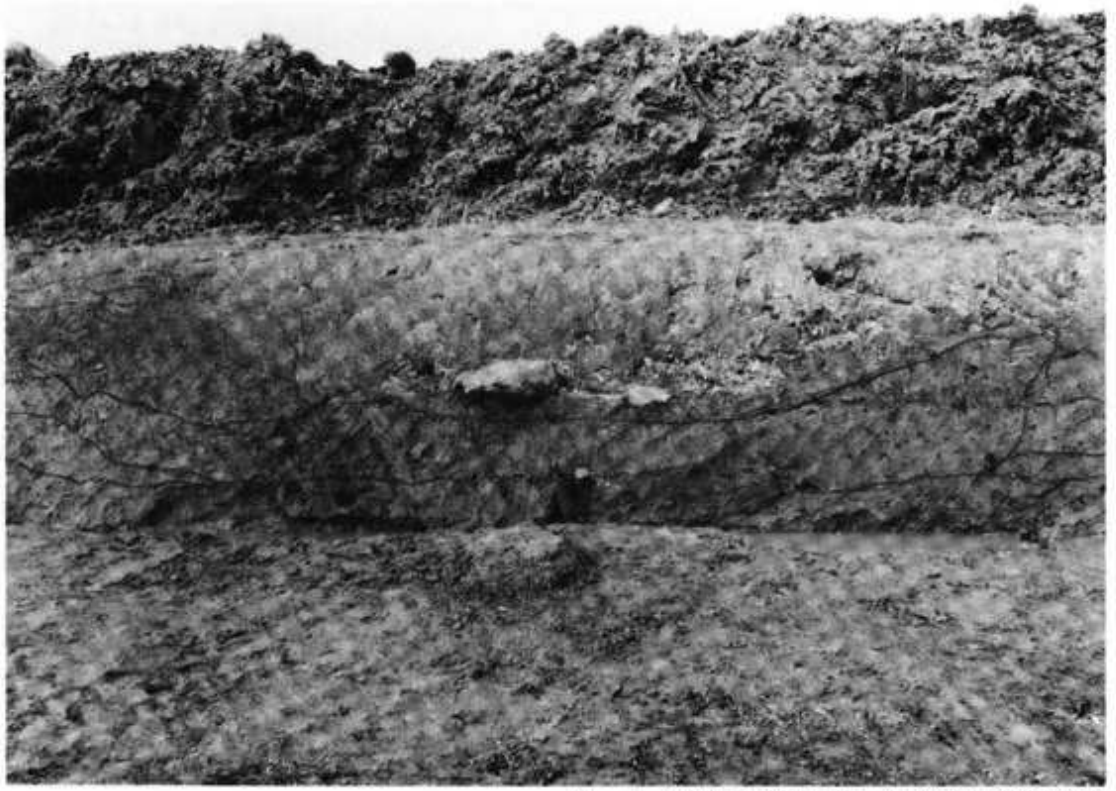
第106図　花粉・胞子・その他の遺体顕微鏡写真

図　　版

調査地全景（西から）

同　上　（東から）

第1トレンチ全景（東から）



同　上　近世条里遺構溝1T－3a（旧大乗川）断面